

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

日韓推量モダリティ形式の対照研究

—「だろう」「ようだ」「らしい」と対応する韓国語形式を中心に—

成 昊炫

2016 年度

目次

第1章 序論	1
1.1. 本論文の目的及び背景と研究範囲	1
1.2. 本論文の研究方法及び使用データ	3
1.2.1. 本論文の研究手法	3
1.2.2. 本論文で使用するデータ	4
1.3. 本論文における命題とモダリティの捉え方	5
1.4. 本論文の意義	7
1.5. 本論文の構成と各章の概要	8
第2章 先行研究の検討	12
2.1. 先行研究の概観	12
2.1.1. 両言語の伝統的国文法におけるモダリティの研究史	12
2.1.1.1. 日本語におけるモダリティの研究史	12
2.1.1.2. 韓国語におけるモダリティの研究史	15
2.1.2. 日本語形式の先行研究	17
2.1.2.1. 「だろう」の先行研究	17
2.1.2.2. 「ようだ」「らしい」の先行研究	20
2.1.3. 先行研究の残された課題	23
2.1.3.1. 「だろう」	23
2.1.3.2. 「ようだ」「らしい」	25
2.1.4. 韓国語形式の先行研究	28
2.1.4.1. 「-겠-」と「-을것이-」の先行研究	28
2.1.4.2. 「것같다」と「모양이다」の先行研究	31
2.1.5. 先行研究の残された課題	33
2.1.5.1. 「-겠-」と「-을것이-」	33
2.1.5.2. 「것같다」と「모양이다」	35
2.1.6. 日韓対照の先行研究	36
2.1.6.1. 羅聖榮(1996)	36
2.1.6.2. 金東郁(1999)	38
2.1.6.3. 尹相實(2003)	40
2.2. 従来の対照研究の残された課題と本論文の立場	41
2.2.1. 従来の対照研究の残された課題	41
2.2.2. 本論文の立場	43

第3章 推量モダリティ形式の基礎的論議	44
3.1. はじめに	44
3.2. 両言語における推量の捉え方と認識の違い	44
3.3. 両言語の先行研究と本論文における推量の捉え方	44
3.3.1. 日本語における推量の捉え方と形式の範囲	44
3.3.2. 韓国語における推量の捉え方と形式の範囲	46
3.3.3. 本論文における推量の捉え方	47
3.4. 事態の認識と言語間の違い	47
3.4.1. 実際の用法に見られる推量認識の違い	47
3.4.2. 両言語の推量認識の包括的違い	50
3.5. 両言語の推量形式の類型化とその基準	51
3.5.1. 日本語形式に対する先行研究の分類と位置づけ	51
3.5.2. 韓国語形式に対する先行研究の分類と位置づけ	52
3.6. 本論文における両言語の推量形式の類型化と基準	53
3.6.1. 真正推量と疑似推量	53
3.6.2. 真正と疑似推量形式の区分基準	53
3.6.2.1. 真正推量形式の判断基準	53
3.6.2.2. 真正推量と疑似推量の区分基準と適用	55
3.7. 本論文における主観性	56
3.7.1. 推量形式と主観性	57
3.7.2. 主観性程度を把握する基準	57
3.8. 真正推量と疑似推量形式の用法上の接点	60
3.8.1. 「だろう」と「ようだ」「らしい」の推量用法上の接点	61
3.8.2. 真正推量形式「だろう」の疑似推量形式への接近	63
3.8.3. 疑似推量形式「ようだ」「らしい」の「だろう」への接近	64
3.9. まとめ	68
第4章 日韓真正推量形式の意味と用法の対照分析	69
4.1. はじめに	69
4.2. 「だろう」の推量意味と用法	71
4.2.1. 先行研究	71
4.2.2. 「だろう」推量用法の特性	71
4.2.2.1. 「だろう」と推量	71
4.2.2.2. 「だろう」推量根拠の特性	72
4.2.2.3. 推量事態の非現場性	75
4.2.2.4. 対話忌避性	76
4.2.2.5. 仮想世界における推量	77
4.2.3. 諸用法間の関連性	77
4.3. 韓国語真正推量形式「-ㄹ-」と「-을것아-」の意味及び用法	78
4.3.1. 先行研究の残された課題	78
4.3.2. 「-ㄹ-」「-을것아-」の文法的性格	79
4.3.3. 推量モダリティ体系における「-ㄹ-」「-을것아-」の位置づけ	80
4.3.4. 「-ㄹ-」の推量意味と用法	81
4.3.4.1. 真正推量としての「-ㄹ-」の意味及び用法	81

4.3.4.2. 疑似推量形式に接近する「-ㄹ-」の用法	84
4.3.5. 「-을것이-」の推量意味と用法上の特性	88
4.3.5.1. 内在的根拠	89
4.3.5.2. 推量事態の非現場性	90
4.3.5.3. 仮想世界における推量	91
4.3.5.4. 事態の真偽に対する判断の焦点	91
4.3.5.5. 推量副詞「아마」との共起関係	92
4.3.5.6. 「-을것이-」の諸推量特性間の関連性	93
4.3.6. 「-ㄹ-」と「-을것이-」の推量用法の違い	94
4.4. 真正推量形式の日韓対照	100
4.4.1. 日韓対照の先行研究と残された課題	100
4.4.2. 「-ㄹ-」と「だろう」「-을것이-」の意味及び用法上の異同	101
4.4.2.1. 「-ㄹ-」と「だろう」「-을것이-」の意味及び用法上の類似点	101
4.4.2.2. 「-ㄹ-」と「だろう」「-을것이-」の推量用法上の相違点	103
4.4.3. 「だろう」と「-ㄹ-」「-을것이-」の推量用法上の違い	110
4.5. 「だろう」「-ㄹ-」「-을것이-」の用法上の違いと主観性程度	115
4.5.1. 真正推量の発話時認識と主観性	115
4.5.2. 推量用法上の特性と主観性程度の関連性	116
4.5.2.1. 間接的根拠と主観性	116
4.5.2.2. 事態把握の違いと主観性	117
4.5.2.3. 疑似推量への接近と主観性	119
4.5.2.4. 仮想世界における推量と主観性	120
4.5.2.5. 両言語の推量副詞との共起関係と主観性	120
4.5.2.6. 事態成立に対する確信度の違いと主観性	121
4.6. まとめ	122
 第5章 日韓疑似推量形式の意味と用法の対照分析	 126
5.1. はじめに	126
5.2. 「ようだ」「らしい」の推量意味と用法	128
5.2.1. 「ようだ」「らしい」の先行研究と本論文の立場	128
5.2.2. 「ようだ」の推量意味と用法	129
5.2.2.1. 「ようだ」の推量意味の背景	129
5.2.2.2. 「ようだ」の推量用法上の特性	130
5.2.2.3. 「ようだ」の推量用法間の関連性	133
5.2.3. 「らしい」の推量意味と用法	134
5.2.3.1. 「らしい」の推量意味	134
5.2.3.2. 「らしい」の推量意味と用法間の関連性	135
5.2.4. 「ようだ」「らしい」の推量意味及び用法上の異同	136
5.2.4.1. 「ようだ」「らしい」の相違点	136
5.2.4.2. 「ようだ」と「らしい」の類似点	139
5.3. 「것 같다」「모양이다」の推量意味と用法	140
5.3.1. 先行研究の残された課題	140

5.3.2. 「것같다」の推量意味と用法.....	140
5.3.2.1. 「것같다」の文法的性格.....	140
5.3.2.2. 「것같다」の推量意味.....	141
5.3.2.3. 「것같다」の推量用法.....	143
5.3.3. 「모양이다」の推量意味と用法.....	146
5.3.3.1. 「모양이다」の推量意味.....	146
5.3.3.2. 「모양이다」の文法的性格.....	147
5.3.3.3. 「모양이다」の原型的意味と推量用法の関連性.....	148
5.3.3.4. 「모양이다」の推量用法.....	149
5.3.4. 「것같다」「모양이다」の推量意味と用法上の違い.....	151
5.3.5. 「것같다」と「모양이다」の主観性程度の違い.....	153
5.4 疑似推量形式の日韓対照.....	155
5.4.1. 日韓対照の先行研究と残された課題.....	157
5.4.2. 対訳文献における両言語形式の対応様相.....	158
5.4.3. 本論文の立場.....	160
5.5. 両言語形式の推量意味及び用法の対照.....	160
5.5.1. 「ようだ」と「것같다」の対照.....	160
5.5.1.1. 「ようだ」と「것같다」の類似点.....	160
5.5.1.2. 「ようだ」と「것같다」の相違点.....	162
5.5.2. 「らしい」と「모양이다」の対照.....	164
5.5.2.1. 「らしい」と「모양이다」の類似点.....	164
5.5.2.2. 「らしい」と「모양이다」の相違点.....	165
5.6. 両言語の疑似推量形式間の互換性.....	168
5.7. 両言語及び個別形式の間に用法上の違いが生じる理由.....	169
5.8. 日韓疑似推量形式の推量用法と主観性程度の関連性.....	170
5.9. まとめ.....	172
 第6章 結論.....	 175
6.1. 本論文の結論.....	175
6.2. 今後の課題と展望.....	179
 参考文献.....	 184
資料一覧.....	190
各章と既発表論文との関係.....	193
アンケートの用紙.....	194

第1章 序論

1.1. 本論文の目的及び背景と研究範囲

本論文は日韓対照的観点から、日本語の真正推量形式「だろう」とこれに最も相応する韓国語の真正推量形式「-겠-(gess¹)」「-을것이-(eulgeosi)」の対照分析、そして、日本語の疑似推量形式「ようだ」「らしい」と相応する韓国語の疑似推量形式「것같다(geosgattda)」「모양이다(moyangida)」の対照分析を行い、両言語形式間の推量の意味及び用法²上の異同を明らかにすることを目的とする。

本論文は推量の意味を担っている多数の推量形式の中で、考察対象の範囲を両言語の意味及び用法上の特性において類似性を見せる以下の推量形式に限定した。

(1) 日本語: ①真正推量形式 : 「だろう」

②疑似推量形式 : 「ようだ」「らしい」

(2) 韓国語: ①真正推量形式: a. 単一形式 (先語末語尾): 「-겠(gess)-」

b. 複合形式: 「-을것이(eulgeosi)-³」

②疑似推量形式(複合形式⁴): 「-(은/는/을)것같다(geosgatda)」

「-(은/는/을)모양이다(moyangida)」

上記の形式を考察対象とする理由は主に以下の通りである。

一つ目は、当該形式が両言語の書き言葉及び話し言葉において、使用頻度が最も高い部分を占めている点である。その一方で、実際の使用面における形式間の使い分けの問題や多様な談話語用論的状况による置き換えの可否の問題など、形式間の対応関係が複雑な様相を見せる。そのため、各形式の推量特性及び両言語形式間の異同に対する包括的かつ綿密な研究がない限り、どの形式の意味及び用法も完全に究明できない特殊性があると考えられるから

¹ 本論文の韓国語のローマ字表記は「韓国文化観光部(第2000-8号)」に従う。

² 本論文の考察対象である推量モダリティ形式の場合、これらの形式が持つ「文法的機能」をその「意味」と言えるが、両者を合わせて、「意味機能」とも呼ぶ。結果的に、このような場合「機能」「意味」「意味機能」は類義語となり、互換性がある。本論文では主に「意味」という用語を用いることにする。文法形式の場合、その意味は主に談話上の実際用法に基づいているため、意味と用法が厳格に区別されない場合もある。本論文では形式の概念に焦点を置く場合には「意味」という用語を、そして、形式の実際の使用面に焦点を置く場合には「用法」という用語を用いることにする。

³ 未来連体形語尾「-을-」+依存名詞「-것-」+繫詞「-이-」という三つの形態素が結合した複合形式として推量の意味を担う形式である点から、未だに韓国語では「-겠-」のような典型的な推量叙法形式として認められていない。ところが、基本的に事態に対する発話時の話し手の認識しか表せないという真のモダリティの意味を充たしている点と推量の意味及び用法上の特性における「-겠-」と「だろう」との類似点を考慮し、本論文では真正推量形式として位置づける。真正推量形式としての認可基準の詳細については本論文の第3章で後述する。また、表記方法において、本来は「-으(ㄷ)것이-」が正しいが、便宜上「-을것이-」で表記する。「-으(ㄷ)-」は本来、用言の連体形語尾であり、語幹が閉音節なのか、それとも開音節なのかによって変わる異形態の表示である。

⁴ 日本語の「ようだ」「らしい」に類似する振る舞いを見せる韓国語の疑似推量形式は各々、「것(形式名詞)」+같다(形容詞)、「모양(形式名詞)+이다(繫辞)」の構造である複合形式として、文末に位置し推量の意味を担う形式である。

である。

二つ目は、多くの用例分析の結果、日韓両言語において、当該形式が推量の意味及び用法上の特性において、類似性を見せながらも、少なからず相違点が存在するからである。

三つ目は、当該形式は各言語の先行研究及び両言語の対照研究で多様な観点から活発に論議されてきたにも関わらず、未だに、残された課題が多く見られるからである。特に、従来の研究では納得できる対照研究の結果を得るために、必ず前提とされるべき両言語形式の推量の意味及び用法上の違いの究明とそういった違いが生じる背景などについては論じていないからである。

従来、両言語の当該推量形式を対照言語学的観点から分析を行った研究は多く見られる。ところが、従来の対照研究では、主に両言語形式を括る特定の意味的基準を設定することに主眼を置いて、両言語の対応関係を捉えてきた。そのため、両言語及び各形式の推量の意味と当該形式の推量判断に関わる多様な用法上の異同に対する綿密かつ包括的な対照分析には至っていないと見受けられる。特に、対応関係の設定において、両言語形式の推量の意味と多様な用法に見られる違いを考慮せずに、主に日本語の推量形式の下位分類に適用した意味的基準を韓国語形式にそのまま適用し、両言語の対応関係を捉えてきた。しかし、各々の形式及び両言語形式の推量判断と密接に関わっている多様な談話語用論的特性を精密に分析した結果、両言語形式の間には少なからず相違点が見られた。これはある特定の推量用法や意味的基準の適用だけでは両言語の対照分析を綿密かつ包括的に捉えることができないことを示唆するものであると考えられる。当該推量形式を対照言語学的観点から考察を行った従来の研究では未だに以下のような未解決の課題が残されていると考えられる。

一つ目は、両言語の推量モダリティ形式に対する従来の代表的対照研究である羅聖榮(1996)、金東郁(1999)などの研究ではある特定の推量用法や特性において、日本語に類似性を見せる韓国語形式を選定し、両言語形式を括る意味的基準を設定することに注力してきた。

対照研究において、異なる言語形式を括る共通の意味的基準を設定することは何よりも重要な点ではあるが、意味的基準を設定することにだけ注力すると、個々の形式及び両言語形式の推量の意味及び用法上の異同に対する綿密な分析が欠ける場合も多い。また、両言語を括る意味的基準の設定においても、個別形式及び両言語形式の意味及び用法上の違いを考慮せず、日本語形式の下位類型化に適用されてきた意味的範疇をそのまま韓国語の推量形式に反映させて、両言語の対応関係を捉えてきた。しかし、このような分析方法だけでは体系的な対照研究の結果を得るには限界があると見受けられる。

二つ目は、両言語の体系的かつ納得できる対照分析の結果を得るために、必ず前提とされるべき韓国語諸形式の推量特性に対する分析が十分に論じられて来なかった点である。

三つ目は、当該形式の推量判断に関わる語用論的特性を十分に考慮せず、主に脱文脈の短文や少数の例文に基づいて分析を行ったため、論議の実証性が確保されない場合が多かった。

四つ目は、本論文の考察対象である韓国語形式の推量特性と文法的性格及び推量モダリティ体系の中での位置づけの問題について明確な立場を示していない点である。例えば、従来、「だろう」に対応する形式であるとした「-을것이-」や日本語の「ようだ」「らしい」と最も類似性を見せる韓国語形式「것 같다」「모양이다」などの文法的性格を何よりも先に究明しなければならない。日本語の「だろう」と「ようだ」「らしい」の場合、「真正モダリティ」及び「疑似モダリティ」「推量助動詞」などのように、その文法的機能が規定されている。一方、韓国語形式は推量の意味を担っているという点は言及されてきたものの、推量モダリティ体系での位置づけ及び当該形式の文法的性格などについては論議されないまま、推量の意味的側面に注目し、日本語形式と対応関係を見せるという点に注目してきた。

以上の背景を踏まえ、本論文では当該推量形式について、従来の対照研究では十分に論じられて来なかった以下(3)～(7)のような課題を解明することに主眼を置いて論議を進める。

(3) 両言語の真正及び疑似推量形式の間に見られる推量の意味及び用法上の異同を究明す

ることに注目する。特に、従来の対照研究で十分に論じられてこなかった両言語の個別形式の推量の意味と用法上の違いを明らかにする。両言語において真正推量形式と規定できる「だろう」「-겠-」「-을것이다-」の対照分析と関連し、これまでの先行研究で検討されていない三形式の間に見られる推量特性の違いを明らかにする。

- (4) 両言語の疑似推量形式の対照分析と関連し、これまでの先行研究で論じていない「ようだ」「らしい」とそれに相応する「것같다(geosgattda)」「모양이다(moyangida)」の推量の意味の派生背景について論じる。
- (5) 両言語の疑似推量形式の対照分析において、各形式の推量用法上の特性と形式自体の構成要素の原型の意味(root meaning)との関連性について論じる。
- (6) 各々の推量形式が持っている多様な推量用法間の相関性を究明する。
- (7) 特に、本論文では従来の対照研究であまり論じられて来なかった各々の形式及び両言語形式の主観性程度の問題に注目する。すなわち、当該形式の間に見られる推量の意味または用法上の違いが生じる背景には両言語及び個別推量形式の主観性程度の差異が深く関わっている点を明らかにする。

また、本論文は基本的に両言語の当該推量形式をすべて文法範疇の中に位置づけて論議を進める。従来の対照研究は当該の推量形式の対照分析を意味範疇の側面に重点を置いて論議を進めてきた。それに対し、本論文は当該の推量モダリティ形式を文法範疇として捉えて、両言語形式の対照分析を行う。したがって、本論文が対象とする両言語の推量モダリティ形式は基本的に文法要素であるという前提で論議を行う。例えば、推量モダリティを意味範疇の側面だけを考慮すると、従来の対照研究である金東郁(1999)で「だろう」に対応する韓国語形式の一つとして規定した「겠지(gessci)」も推量モダリティ形式として規定できる。

ところが、本論文では「겠지(gessci)」を文法要素として規定しない、これまでの韓国語研究の一般的な認識を受容し、真正推量の文法形式に該当しない形式として捉える。このような認識は「겠지」が推量の文法形式「-겠-」と文の終結語尾として、独自のモダリティ意味を担っている形式「지(ci)」の複合形式であるという事実に基づいている。そのため、本論文では「겠지」を一つの文法形式、すなわち、一つの推量モダリティ形式として受容しない立場を取る。

また、従来の対照研究では、本論文の考察対象である韓国語の疑似推量形式「것같다」「모양이다」を推量モダリティ体系の中で位置づけているが、一般的に韓国語研究ではこれらの形式を一つの文法要素として受容しない。したがって、これらの形式を対照研究の考察対象とする場合、これに対する基本的な立場を明確にする必要があるが、このような問題について従来の対照研究では論じていない。本論文でこれらの形式も推量モダリティという文法範疇に属する文法要素であるという点を明らかにし、両言語の対照分析を行うことにする。

1.2. 本論文の研究手法と使用データ

1.2.1. 本論文の研究手法

本論文は両言語の対照分析の基本的な方法と関連し、従来の研究とは少し異なる観点から分析を行う。前述した通り、従来の対照研究では、両言語の推量形式を括る意味的基準を設定することに主眼を置いてきた。すなわち、ある特定の推量の意味または用法において、日本語形式に類似する韓国語形式を選定し、両言語形式を括る意味的基準を設定することに注力してきた。また、意味的基準の設定においても、両言語の違いを考慮せず、日本語形式に適用した意味的基準を韓国語にも同様に適用し、両言語の対応関係を捉える研究方法を取ってきた。このような研究方法は文法範疇としての推量形式を考慮するよりは意味範疇として

の推量形式の対照分析をより考慮したものであると思われる。それに対し、本論文は文法要素であるという前提がない限り、推量モダリティ形式から除外した。例えば、前述した通り、従来の対照研究で韓国語形式「겠지」「것 같다」「모양이다」などを日本語形式に対応させたのは文法範疇の側面よりは意味範疇の側面からアプローチしたからであると考えられる。文法範疇の側面からアプローチするためには、これらの形式の文法要素としての認定可否に対する論議が優先されるべきである。その理由はこれらの形式は韓国語研究では文法形式として受容されない普遍的見解が存在するからである。

この問題と関連し、まず、本論文は韓国語の文法研究において、一般的に推量モダリティ形式として受容されない上記の形式を文法要素として受容する理由を明らかにする。

また、本論文は両言語における真正推量及び疑似推量形式を設定し、これらの形式の間に見られる推量の意味と用法上の異同を究明することに焦点を置いて、論議を進めた。したがって、本論文ではこれまでの対照研究で綿密に論じられて来なかった韓国語の真正及び疑似推量形式自体の論議に注目する。

本論文は両言語の推量形式の対照分析において、諸形式の推量の意味及び多様な推量用法上の異同を明らかにすることに主眼を置く。そこで、本論文はできる限り、各々の形式が用いられる多様な談話語用論的特性を総合的に検討し、各形式の推量の意味と用法上の特性及び両言語形式の異同を綿密に分析する方法を取る。これは前述した従来の多くの研究に見られる研究方法上の問題に対する改善及び補完を試みたものである。本論文で談話語用論的状况を重視するというのは、ある文が成立できる非常に特殊な文脈を重視するのではなく、特定の文の成立可否や多様な用法が文脈依存的であるにも関わらず、このような点が十分に考慮されてこなかったという点を意味する。そこで、本論文は両言語の推量形式の意味及び用法上の異同を究明する研究方法として、次の二点を重視した。

一つ目は、当該形式の推量判断に関わる多様な談話語用論的特性を綿密に分析し、各々の特性に見られる形式間の異同を綿密に分析することに主眼を置いた。ただ、当該形式が用いられた特定の文や発話と関わる談話語用論的状况は多様であるため、当該形式の推量判断に関わるすべての状況や文脈を考慮するのは現実的に難しい。そのため、本論文は各形式及び両言語形式間の異同を分析する際に、多くの場合、厳格に区別される形式間の弁別的推量特性の内実の究明を追求するよりは一つの主な傾向に基づいた分析を重視した場合が多かった。

二つ目は、論議の実証性または客観性を確保する点に力を注いだ。諸形式の推量の意味と用法上の異同及び両言語の体系的な対照分析をするために、できる限り、作例に基づいた分析は避けようとした。その代わり、当該形式が使用された多様な文脈や状況を考慮した実例に基づいた分析及び各形式の使用上の傾向分析などに基づいた実証的分析を試みようとした。

1.2.2. 本論文で使用するデータ

本節では、本論文で用いた主な言語資料及び採集方法と用い方と関連して、考慮した事項について述べる。

本論文に用いた主なデータは筆者自身の内省や主観的要素の介入を排除するために、主に①「両言語の小説やシナリオなどの文学作品」②「日韓対訳文献」③「両言語の書き言葉のコーパス」などから採集した実例を対象とした。本論文で使用した両言語の対象資料の類型⁵は主に以下の(8)～(9)の通りである。

(8) 日本語の対象資料

⁵ 本論文で使用した両言語の対象資料の一覧は本論文の結章の後ろに示したので、ここでは個別文献の例示は省略する。

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』(1995)及び小説などの文学作品類
日韓対訳文献(日本語の作品)
国立国語研究所『少納言 KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」』

(9) 韓国語の対象資料

小説やシナリオなどの文学作品類
日韓対訳文献
国立国語院(2011)『21세기 세종계획 말뭉치(21世紀世宗計画コーパス)』

まず、本論文で使用した主な日本語の用例は上記の『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』(1995)と다락원(ダラグォン)から出版された日韓対訳文献(日本語作品)などの小説及び文学作品から抽出したデータを用いた。上記の資料を主なデータとして利用した理由は本論文の研究対象である推量形式が話し手の事態に対する不確かな認識や主観を表す場合に使用されるため、このような話者の主観的認識が反映されやすい上記のような資料を対象資料とした。さらに、このような資料は特性上「地の文」と「会話文」の両方の資料を集めることができる点も考慮した。また、日本語の用例を集める際には、従来の研究で主に用いた脱文脈の短文ではなく、できる限り、当該形式が用いられた前後の文脈や状況を考慮してデータを引いた。

韓国語のデータの場合も日本語と同様に、上記のような点を考慮し、主に小説やシナリオなどの文学作品から収集した用例を使用した。 実例を集める際には、従来の研究で主に用いた脱文脈の短文ではなく、できる限り、当該形式が用いられた前後の文脈や状況を考慮してデータを引いた。

また、本論文では日韓対訳文献も対象資料とした。日韓対訳文献を利用した理由は実際の言語資料に見られる両言語の対応様相を見ることによって、両言語の対応形式の設定において、客観的な妥当性を得ることができるためである。また、従来の対照研究においては、両言語の違いを考慮せず、一律的な対応関係の存在を前提とするものが多く、主に少数の例文や研究者の直観に依存したものが多くからである。

また、本論文では、必要に応じて、両言語及び各形式に見られる推量用法上の傾向を分析する際に、比較的多くの用例を集めることができる両言語の書き言葉のコーパスも利用した。 まず、日本語の書き言葉のコーパスは 国立国語研究所『少納言 KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」』を利用した。 また、韓国語の書き言葉のコーパスは문화체육 관광부(文化体育観光部)の国立国語院(2011)で構築した『21세기 세종계획 말뭉치(21世紀世宗計画コーパス)』を利用した。

両言語の書き言葉のコーパスを利用した理由は当該形式の推量特性の全般的な傾向を把握する際に有効であると同時に、多くの用例を集めることができるからである。本論文では特に、両言語の真正推量形式の「推量副詞との共起傾向」や「判断根拠の特性」などの推量特性に見られる形式間の全般的な使用上の傾向の違いを分析する際に、コーパスを利用した。

その他に、部分的には作例を用いたが、その例文の文法性判断については両言語の多数の母語話者から検証を得た例文を用いた。

1.3. 本論文における命題とモダリティの捉え方

伝統的に、文の構造を把握する文法論は概ね統語的構成を中心に、主語部と述語部に区分して、文の構造を捉える方法が普遍的であったが、現代言語学では文の意味を中心に、文の構造を捉えようとする考察が進められている。文の意味は大きく客観的な部分と主観的な部分に区分されるという捉え方は、古くから言語普遍的に認められている。例えば、日本語の研究においては、時枝(1950)の「詞」と「辞」、金田一(1953)の「客観的」「主観的」、

渡辺(1971)の「素材」と「陳述」、寺村(1984)の「こと」と「ムード」などのように、文の意味は大きく二分されると捉えられてきた。

モダリティという用語はそもそも様相論理学で法性(modality)の基本概念を可能性(possibility)と必然性(necessity)という二つの論理的な概念を指すものとして使用された。しかし、この用語が西欧の言語学者によって受容され始め、言語学でモダリティという用語は概ね話し手の客観的な事態や事柄に対する心理的・精神的態度という意味として通用することになった。すなわち、上述した様相論理的なモダリティの概念が英語を中心とする西欧言語学に影響を与えたといえる。

一般的に英語などを中心とする西欧言語学では「will/shall」、「must」「may」「can」などのいわゆる法助動詞(modal auxiliary verb)が表す意味をモダリティとして規定してきた。このような英語の法助動詞が表す意味が日本語や韓国語のように、話し手の心理的態度を表すものが主に文末形式である場合にも同じく適用されてきた。

日本語における「モダリティ」の概念規定は未だに統一的な見解が存在しない。例えば「モダリティ」「ムード」「叙法性」などの様々な用語が用いられている。命題の規定についても「こと」「事態」「言表事態」などの用語が使われていることから分かるように、研究者によって概念規定や捉え方に相違点が見られる。ここで、これまでの日本語の研究で最も普遍的に受け入れられている命題とモダリティの規定を紹介する。例えば、益岡(1991)、宮崎(2002)などは「命題」と「モダリティ」について概ね以下のように捉えている。

(10) 文は、客観的な事柄内容である「命題」と話し手の発話時現在の心的態度(命題に対する捉え方や伝達態度)である「モダリティ」からなり、モダリティが命題を包み込むような形で階層構造化されている。(宮崎他 2002:2)

(11) 「命題」と「モダリティ」は、文を構成する二大要素であり、それぞれ、客観的な事柄を表す要素、主観的な判断・態度を表す要素、と規定される。(益岡 1991:6)

上の規定に従うと、文の構造は以下の例(12)のように、「明日は雨が降る」という命題部分と「きっと」「だろう」「ね」というモダリティから構成されると分析できる。このように、モダリティを命題と区分する概念として話者の心的態度と捉える代表的な立場として、中右(1979、1994)、仁田(1989、2000)、益岡(1991)、宮崎(2002)などが挙げられる。

(12) きっと、明日は雨が降るだろうね。

上記した益岡(1991)と宮崎(2002)の捉え方は、命題とモダリティを意味の面で対立するものとして把握している点では共通性を見せるものの、以下に述べる中右(1979)の見方は益岡(1991)や仁田(1989、2000)とは少し異なる立場を見せている。すなわち、中右(1979)は話し手の心的態度が「発話時点＝瞬間的現在時」のものでなければならない点を強調する。中右は形式と文法的意味の対応関係としてモダリティを見るというよりは、意味論的な指向性の強いモダリティ論と捉えられる。それに対し、仁田(1989、2000)や益岡(1991)のモダリティ論は、中右(1979)とほぼ同様に意味的规定を行なっているが、下位類化・階層化の方法について異なりを見せる。すなわち、特定の表現形式や文類型という文法的意味としてモダリティを組織化している点で相違点が見られる。以下の(13)と(14)は命題とモダリティに対する中右(1979)と仁田(2000)の捉え方である。

(13) 命題とは、話者が切り取った現実世界の状況を叙述するものであり、モダリティとは、発話の時点において、その状況に対し話者が示す心理的反応を表現したものである。要するに、命題は話者の外側にある、客体化された世界の叙述であるのに対し、モダリティは、話者の内側にある主観的態度の叙述である。(中右 1979:223)

(14) 命題は、おおよそ、話し手が外界や内面世界との関係において描き取った、客体的・対象的な事柄を表わした部分である。それに対し、モダリティとは、おおよそ、言表事態をめぐっての話し手の捉え方、及び、それらについての話し手の発話・伝達の態度のあり方を表わした部分である。(仁田 2000:81)

このような流れで、今までもっとも一般的に使用されているモダリティの概念は文の構造を把握する形式的な側面より文の意味を重視する方法として、客観的な世界を表す部分が命題(proposition)であって、その客観的な世界や事態に対する話者の主観的な態度を表す部分をモダリティ(modality)として捉えられてきた。モダリティの概念規定や捉え方または範囲設定については、未だに統一的な見解の一致が見られないため、結局、現段階でのモダリティの規定は暫定的な規定にしかならないと思われる。

本論文は、命題とモダリティの概念について上記した先行研究の捉え方を受け入れる。上記したようなモダリティの定義や捉え方については研究者によって多様な規定が存在するが、「モダリティ」は事態に対する話し手の主観的態度が反映された表現であるという点は共通認識⁶が見える。本論文では、命題とモダリティの捉え方について上記した先行研究に見られる共通の認識を参考とし、本論文では命題とモダリティを以下のように定義する。

命題とは、文が伝える対象的または事柄的な内容を表す部分であり、モダリティは、このような命題に対する話し手の捉え方及び発話状況や聞き手に対する伝え方といった文の述べ方を決定する働きをするものであると捉える。

1. 4. 本論文の意義

本論文では基本的に従来の対照研究の成果を踏まえながらも、従来の対照研究ではあまり注目されて来なかった以下のような点を究明したところにその意義があると思われる。主な内容をまとめると以下の通りである。

一つ目は、従来の対照研究が両言語形式を括る意味的基準を設定することに注力して、両言語の対応関係を捉えてきたのに対し、本論文は従来の研究で十分に論じられて来なかった各形式及び両言語の推量の意味及び多様な用法上の異同をより綿密かつ包括的に分析することができた点である。特に、従来の研究で十分に論じられて来なかった両言語形式の推量の意味及び用法上の違いを究明すると同時に、そういった違いが生じる背景について探ってみることができた。このような研究は両言語形式を括るある特定の一つの意味的基準の設定によって対応関係を捉えた従来の対照研究とは対比される。本論文でこのような対照分析の方法を取った理由は各々の形式及び両言語形式の推量判断に関わる多様な談話語用論的特性を分析してみた結果、両言語の間には少なからず相違点が存在したからである。これはある特定の一つの基準によっては両言語の対応関係を体系的に捉えることができない点を示唆するものである。本論文は当該形式の推量判断に関わる多様な談話語用論的特性を総合的に考察し、諸特性に見られる両言語の推量形式の意味及び用法上の異同をより綿密かつ包括的に分析した記述的研究として位置づけられる。

二つ目は、従来の対照研究では、当該推量形式の論議において、意味範疇と文法範疇に対する明確な立場を示さず、概ね意味範疇の観点から当該形式を論議したのに対し、本論文は当該推量形式を文法範疇と見なす観点で分析を行った。すなわち、本論文は当該の推量モダリティ形式をすべて文法要素と規定し、両言語の推量形式の対照分析を行った。特に、従来

⁶ 上記した中右(1989)及び益岡(1991)や仁田(1989, 2000)などで言及した客観と主観的という二分法的なモダリティ論と対立する見方として、尾上(2001)のモダリティ論が挙げられる。尾上(2001)はモダリティを「現実世界(reality)」と「非現実世界(irreality)」を表し分けるカテゴリーとして捉えている。

の対照研究及び韓国語研究で明確な立場を示していない韓国語諸形式の文法的性格を明らかにし、諸形式の推量モダリティ体系の中での位置づけを明らかにした。

三つ目は、各形式の間に見られる多様な意味または用法上の違いが各形式及び両言語形式間の主観性程度の差異と深く関わっていることを明らかにした点である。両言語の推量形式間の意味及び用法上の違いが生じる背景を主観性程度の観点から捉えた見解は管見の限り見当たらない。

四つ目は、個別形式及び両言語形式の意味及び用法上の異同の分析において、論議の実証性を確保するために、筆者の主観が反映されやすい作例を排除し、多様な文献資料から採集した多くの実例や各形式の使用上の傾向などに基づいた実証的な分析を試みた。特に、本論文は当該推量形式の推量特性と形式間の意味及び用法の異同を綿密に分析するために、各形式の推量判断に関わる多様な談話語用論的特性を考慮した。このような分析は従来の多くの研究のように、ある特定の一つの意味的基準や恣意的に作った作例または脱文脈の短文に依存しすぎることに起因する問題をある程度は改善することができた点で意義がある。

1.5. 本論文の構成と各章の概要

本論文は以下のように構成されている。

第1章 序章

本論文の研究目的と研究方法及び意義などについて述べる。

第2章 先行研究の検討

本章では、従来の先行研究を以下の二つの観点に分けて概観する。まず、伝統的国文法におけるモダリティ及び形式の捉え方に対する両言語の研究史を概観する。その後、本論文の考察対象である両言語の個別推量形式の意味について、従来、どのような観点から捉えられてきたかについて検討する。具体的に、本論文の考察対象である当該推量形式に対する両言語の代表的先行研究について、日本語形式の場合は、寺村(1984)、早津(1988)、田野村(1991)、菊池(2000)、仁田(2000)、益岡(2000)、澤田(2007)、三宅(1995, 2006)、宮崎(1993, 2002)などを中心に概観する。また、韓国語形式の場合は서정수(1978)、이기용(1978)、成耆徹(1979)、안명철(1983)、張京姬(1985)、이기중(2001)などの見解を中心に概観する。

また、本論文と同様に両言語の推量モダリティ形式の対照を研究課題として取り上げた代表的な対照研究である羅聖榮(1996)、金東郁(1999)、尹相實(2003)などを中心に概観した後、これらの対照研究において、未だに解明されていない残された課題を検討する。その後、対照研究に対する本論文の基本的な立場を述べる。

第3章 推量モダリティの基礎的論議

第3章では本論文全体の論議に関わる重要な前提になる基礎的問題に注目した。特に、本論文の論議全体の中心になる第4章と第5章の論議に先立って、基礎かつ補助になる関連現象について述べる。また、本論文の論議を展開するに当たって、基礎的論議になる主な問題だけでなく、論文全体の論議に関わっている分析の枠組みや用語及び概念の整理などに言及した。具体的に以下のような点を述べる。

①両言語の推量モダリティ形式の体系を真正推量と疑似推量に下位区分し、「だろう」と韓国語形式「-ㄹ-」「-을것이-」を「真正推量形式」、そして、日本語の「ようだ」「らしい」とこれに最も相応する韓国語形式「것 같다」「모양이다」を「疑似推量形式」として位置づけた。

②両言語における推量の捉え方及び認識の違いについて考えてみた。すなわち、事態に対す

る話し手の不確かな認識を表すものが推量であるという普遍的認識は同様であっても、実際の使用や適用面において、差異を見せる背景にはその根底に両言語の推量に対する認識の違いが作用しているという点を述べる。本論文ではこのような問題を把握するために、両言語において真の推量として規定される「だろう」「-ㄹ-」「-을것이-」を対象に、実際の推量用法に反映されている両言語の推量に対する認識の違いを考察した。推量の本質は「事態に対する不確かな判断」である。「不確かさ」「未確認」という前提がないと推量は成立しない。このような「不確かさ」と関連し、両言語の間に次のような2点が考慮される。一つは、事態の不確かさに対する認識可否の問題であり、もう一つは、客観的に認識される不確かさと関連する表現または言語化の問題である。言い換えれば、事態に対する不確かさに対する話し手の判断方式の問題である。上記のような二つの側面において、両言語は違いを見せるという点を述べた。考察の結果、推量の認識に対する両言語の主な違いは全般的に韓国語が広義的に推量を捉えているため、推量に対する認識や形式の使用範囲が広い。それに対し、日本語は相対的に推量を狭義的に捉えているため、推量に対する認識や形式の使用範囲が狭いという点が明らかになった。

③従来の対照研究では本論文の考察対象である「だろう」とこれに相応する韓国語形式、そして、「ようだ」「らしい」とこれに相応する韓国語形式を区分し、認識的モダリティの下位類型の中で、それぞれ「推量」と「証拠性判断⁷」という異なる意味類型に位置づけられてきた。ところが、本論文では当該形式をすべて推量モダリティ体系の中に位置づけた。ただ、両類型の基本的な推量意味と属性の違いを考慮し、当該形式をそれぞれ「真正推量」と「疑似推量」に二分し、当該形式をすべて推量モダリティ体系の中に位置づけた。

④本論文で「真正推量形式」と「疑似推量形式」に位置づけた諸形式が推量用法上の特性において、常に厳格に区分されるのではなく、意味または用法上の接点が存在する場合があるという点を明らかにした。従来の研究では、「推量」と「証拠性判断」に属する「だろう」と「ようだ」「らしい」は推量意味と用法上の特性において、厳格に区分されるものとして把握されてきた。しかし、本論文では両類型の弁別特性を前提としながらも、実際の用法上の特性から見ると、両類型は常に両極性の性質を持つものとして区分されない点を明らかにした。換言すれば、意味または用法上の特性において両類型がお互いの領域に接近していると把握できる現象が見られるという点を明らかにした。結果的に、両類型が常に区分されるものとして存在するのではなく、意味または用法上の接点によって、両類型の間に連続的な関係が存在する場合が見られるという点を述べた。

⑤基本的に本論文で述べる「主観性」は表現形式に反映される主観性の言語間の差異を前提とする。本論文は両言語の推量形式の間に見られる意味及び用法上の違いが判断に対する話し手の主観介入の程度と深く関連性を持っていると把握した。そこで、本論文における「主観性」の捉え方及び推量形式間の主観性程度を測る一連の基準や特性などについて述べた。

第4章 日韓真正推量形式の意味及び用法の対照分析

まず、「だろう」「-ㄹ-」「-을것이-」は発話時現在の話し手の認識しか表せないという真のモダリティ概念を充たしている点と話し手自身の内在的根拠に基づいた主観的判断に中心があるという推量用法上の特性に基づいて、三つの形式は両言語の推量モダリティ体系の中で、真正推量形式として位置づけられる点を述べた。特に、従来の韓国語研究で概ね推量形式として認定されて来なかった「-을것이-」を「-ㄹ-」と共に、推量モダリティ体系の中で真正推量形式として位置づけられる点を明らかにした。

また、従来の研究で緻密に分析されていない韓国語形式「-을것이-」と「-ㄹ-」の推量用

⁷ 本論文で述べる「ようだ」「らしい」のような疑似推量形式は言語的環境によって、「比況」「例示」「婉曲」「様態」「属性表示」などのような多義的な意味の広がりを見せるが、本論文は、基本的に話し手の事態に対する不確かな認識を表す推量の意味に限定して論議を行う。

法上の異同を明らかにした。その後、韓国語の両形式と日本語の「だろう」の対照分析を通して、両言語の真正推量形式の間に見られる意味及び用法上の異同を明らかにした。

特に、両言語の対照分析と関連し、従来の対照研究で論じていない両言語の真正推量形式の間に見られる推量の意味及び用法上の違いを明らかにした。また、両言語の推量の意味の違いが実際の用法や使用状況にどのように反映されているかという問題を検討し、各形式の多様な意味及び用法間の関連性を述べた。

また、本論文では従来の対照研究で論じていない両言語形式の主観性程度の問題について考えてみた。すなわち、両言語の真正推量形式の間に見られる推量の意味または用法上の違いが各々の形式の主観性程度の違いと関わっている点を述べた。両言語の真正推量形式の異同に対する主な内容を要約すると以下の通りである。

一つ目は、「だろう」「-을것아-」「-ㄹ-」が真正推量の本質的な意味を共有しているが、三形式の中で「-ㄹ-」は両形式とは違い、部分的に疑似推量形式の属性もあわせ持っている点で区別される点を明らかにした。すなわち、「-ㄹ-」は「様態性機能」「外在的根拠の依存度」「目前の事態または証拠自体の焦点付与」「発話現場性」などのような特性をあわせ持っている点から、疑似推量または証拠性判断へ接近する属性を持っていると捉えた。本論文ではこのような諸特性を考慮し、「-ㄹ-」を「疑似性真正推量形式」と規定した。つまり、「-ㄹ-」の本質的な意味は「真正推量」であるが、「だろう」「-을것아-」と違って、部分的に疑似推量形式の属性をあわせ持っているという点である。

二つ目は、「-을것아-」は推量意味と用法上の特性から「だろう」に最も対応する形式である点を述べた。すなわち、もう一つの真正推量形式「-ㄹ-」より「-을것아-」が「だろう」に最も類似する振る舞いを見せる形式であることを明らかにした。

三つ目は、両言語の真正推量形式に見られる特徴的な違いは会話文と非会話文という談話類型と関連し、使用上の傾向に違いを見せる点を言及した。基本的に「-을것아-」は談話類型に関わらず、使用可能であるが、「だろう」は会話状況であり用いられない点で違いが見られた。三形式の中で、「-ㄹ-」は発話現場性を前提とする会話状況において高い頻度で用いられるのに対し、論説文などではあまり用いられない傾向を見せるという点で「だろう」「-을것아-」と弁別される点を述べた。談話類型によって「だろう」は対命題モダリティとしての「推量用法」と対聞き手モダリティとしての意味の役割分担が明確に区分されるのに対し、韓国語の真正推量形式はそういった点が見られないという点を明らかにした。

「だろう」は会話状況では主に「でしょう」や「と思う」などを用いて、推量の意味を表す場合が多かった。使用上の傾向から見ても、会話場面では「推量」という対命題モダリティの意味よりは「確認」や「同意要求」「婉曲的質問用法」「相手へのpoliteness」のような対聞き手モダリティへの意味への移行が見られる場合が多かった。

基本的に「だろう」と違って、韓国語形式「-ㄹ-」「-을것아-」は文体的違いや談話状況に制約を受けず単独でも自然に用いることができる。これは根本的に両言語の推量に対する認識や適用範囲の違いを反映するものであり、両言語の意味と用法上の違いと関わっていることを述べた。

四つ目は、本章では従来の対照研究で論じられてこなかった主観性程度の観点から両言語推量形式の対照分析を行った。両言語の推量意味と用法上の特性が両言語の真正推量形式の主観性程度と深く関わっている点を述べた。考察の結果、「だろう」が韓国語の真正推量形式より主観性程度が高いという点を述べた。主な内容を要約すると以下の通りである。

- ①「-ㄹ-」と「-을것아-」は少数の例ではあるが、「だろう」と違い、韓国語の過去時制素「-았-(eoss)」が後接し、発話時以前の事態に対する話者の認識を表せる場合が存在する点を言及した。
- ②推量の意味や用法上の特性において、「だろう」と最も類似性を見せる「-을것아-」は「だろう」よりは主観性程度が低いという点を述べた。その手がかりとして、「間接的根拠に基づいた判断の成立可否」と「談話現場における使用の制約程度」などの語用論的特

性を考慮し、両形式の間に見られる主観性程度の違いを説明した。

- ③「-ㄴㄹ-」は両言語の三つの真正推量形式の中で、最も主観性程度が低い形式である点を述べた。その背景には、「-ㄴㄹ-」は基本的に真正推量の意味を表す形式であるが、語用論的環境によって「様態性」「発話現場性」「目前の事態認識の焦点付与」などの「疑似推量形式」または「証拠性判断」の属性をあわせ持っている点を考慮した。その他にも、「推量副詞との共起関係」「反事実仮想条件文との共起関係」などにおいても、「だろう」や「-을것이-」とは異なる振る舞いを見せる点から、三形式の中で、判断に対する話し手の主観介入の程度が最も低いことを述べた。

第5章 日韓疑似推量形式の意味及び用法の対照分析

本章では両言語の疑似推量形式と関連し、従来の韓国語研究と対照研究で論じられてこなかった課題の解明に注目した。主な内容を簡単に要約すると、以下の通りである。

まず、韓国語の疑似推量形式の概念と判断基準及び適用範囲を明確にした。また、両言語の各形式の構成要素の原型的意味と推量用法上の特性を考慮し、両言語形式の違いとそういった違いが生じる背景について探ってみた。

まず、「ようだ」の場合、形式自体の構成要素「様(よう)」の語彙的意味または原型的意味(root meaning)と推量用法上の特性と使用上の傾向に基づいて、この形式の推量特性を「類似性推量」と規定した。また、「らしい」の推量意味は「根拠に基づいた推定」を表す場合に多く用いられる実際の推量用法上の特性を反映し、「推論性推量」と規定した。

一方、「ようだ」「らしい」と最も類似する振る舞いを見せる韓国語の代表的な対応形式「것 같다」「모양이다」の基本的推量意味も形式自体の原形的意味及び推量用法上の特性に基づいて、それぞれ「同一性推量」「外見性推量」と規定できる点を述べた。具体的に両言語の対照と関連し、以下の現象について探ってみた。

一つ目は、従来の韓国語及び対照研究で述べていない韓国語諸形式の文法的性格及び推量モダリティ体系の中での位置づけの問題について言及した。

二つ目は、先行研究で述べられたように両言語は常に一律的な対応関係を見せるのではなく、推量判断に関わる多様な談話語用論的特性によって用法上の違いを見せることを究明した。

三つ目は、推量の使用範囲においても全般的に韓国語の疑似推量形式が日本語より制約を受けず、広い範囲で用いられる点を明らかにした。また、従来の研究で「ようだ」に対応する形式であると規定した韓国語の「것 같다」は推量用法において全く制約を受けず、その他の日韓疑似推量形式の用法をすべて包括するという点を明らかにした。

四つ目は、従来、「らしい」と対応関係を見せるとされた韓国語の「모양이다」も常に一律的な対応関係を見せるのではなく、「らしい」が持っている用法をすべて包括するという点に言及した。また、上記のような現象は両形式の基本的推量意味の違いと深く関わっている点を論じた。

五つ目は、従来の対照研究で論じていない両言語の疑似推量形式の主観性程度の問題について考えてみた。すなわち、両言語の疑似推量形式に見られる推量の意味と用法上の違いが主観性程度と深く関わっている点を明確にした。具体的に、推量形式の主観性程度と深く関連する「判断根拠の明示性程度」「仮想世界の認識可否」「モダリティ副詞との共起関係」などの多様な用法に見られる両言語形式の違いから、両言語形式の主観性程度の違いを分析した。分析の結果、全般的に韓国語の疑似推量形式が相応する日本語の疑似推量形式より相対的に主観性程度が高いという点が明らかになった。

第6章 結論

第6章では本論文全体の内容をまとめ、今後の課題について述べる。

第2章 先行研究の検討

2.1 先行研究の概観

本章では、従来の先行研究を以下のような三つの観点に分けて概観する。

一つ目は、従来の伝統的国文法におけるモダリティの捉え方及び研究史に対する両言語の先行研究を概観する。

二つ目は、本論文の考察対象である当該推量形式の意味について、従来、どのような分析観点から捉えられてきたかについて検討する。

三つ目は、本論文で最も注目する従来の両言語の推量モダリティ形式の対照研究がどのように分析されてきたのかを概観する。

以上の先行研究を概観した後、当該形式に対する各言語の先行研究及び従来の対照研究で十分に検討されて来なかった残された課題について検討する。

特に、本論文の考察対象に対する両言語の代表的先行研究は次のような研究を概観する。

具体的に、日本語の場合は、寺村(1984)、早津(1988)、益岡(1991)、三宅(1995, 2006)、菊池(2000)、仁田(2000)、宮崎(2002)、澤田(2007)などの研究を概観し、これらの諸研究で、日本語の当該形式がどのような観点から分析されてきたのかを検討する。

また、韓国語の当該推量形式の先行研究は、서정수(1978)、이기용(1978)、成耆徹(1979)、안명철(1983)、張京姫(1985)、김규철(1988)、이기중(2001)などを中心に概観する。

最後に、本論文で最も注目する両言語の推量モダリティ形式の対照研究は羅(1996)、金(1999)、尹(2003)などを概観する。その後、従来の対照研究で解明されていない残された課題について検討し、対照研究における本論文の基本的な立場を述べる。

2.1.1. 両言語の伝統的国文法におけるモダリティの研究史

2.1.1.1. 日本語におけるモダリティの研究史

本節では今までのいわゆる伝統的な日本語モダリティの研究でどういう観点と方向性でモダリティを捉えてきたのかについて概観する。

日本語のモダリティ研究が盛んになったのは中右実(1979)の「モダリティと命題」が英語学のモダリティ概念をそのまま日本語に受け入れることによって、本格的に始まったと言える。その後、1980年代から現在に至るまで様々な観点から日本語のモダリティ研究がなされてきた。ところが、実際に、中右(1979)が英語学のモダリティの概念を受け入れる前に、いわゆる日本語固有の独自のモダリティ研究も見られた。日本語のモダリティ研究の開始は山田や時枝を始まりとする1930年代から50年代の伝統的な国語学であって、山田(1936)が提唱したいわゆる「陳述論争」からであろう。

山田(1936)は基本的に一つの文を統一させる力というものを陳述の概念として捉えた。山田(1936)は主語や賓語などの多様な観念や意味を統一する機能(これを山田は統覚作用と呼んだ)を持つものは述語にあり、その複雑な表現と関連するのがいわゆる助動詞(山田は複語尾と呼んだ)であるという見解である。その後の研究として注目する必要があるのは時枝(1950)である。時枝(1950)は山田(1936)が既に言及したように、文に統一性を付与することを「陳述」と捉えたので、文末以外のものを修飾的陳述と認めた。時枝(1950)は客体的な対象を概念化して表す「詞」を主体的な意味である「辞」が含み統一して表現が成立すると言

及した。すなわち、文末辞の性質によって文全体の意味が決まるという見解である。山田や時枝で言及している陳述は文の完結性や統一性の概念であり、日本語では主に文末に来るモダリティ形式によって話し手の主観的な態度が文の完結性を担っているので、結果的に山田(1936)で言及した伝統的な陳述概念は現在に通用しているモダリティの概念と重なっていると言える。文末辞の概念こそが、「話し手の主観が助動詞という形で文全体を含んで、文が成立する」という見方である。結局、上述した山田や時枝の主張は助動詞や終助詞などの文末辞が陳述の部分を統合させることによって、一つの完結性のある文が成立するという意味である。その後の研究として芳賀(1954)が挙げられる。芳賀(1954)は意味そのものを文成立の力として把握し、時枝(1950)の見解を継承する。芳賀(1954)は陳述に対し、「内容をめぐる話し手の態度表明：述定」と「聞き手をめぐる話し手の態度表明：伝達」に二分した。

また、金田一(1958)は時枝(1950)が「辞」とする助動詞のほとんどは客観的なものであるが、正式に主観的な態度表明を表すのは「う、まい、だろう」などの不変化助動詞と呼べる少数の形式に限定した。金田一によると、同じ「辞」の中にも、主観的または客観的な意味があるというのを認めることになる。この見方は従来の山田や時枝の議論とは反対であろう。さらに、その後、渡辺(1971)は「叙述機能」と「陳述機能」の結合で文は成立すると主張した。上述した内容は、伝統的な日本語という個別言語におけるモダリティ研究である。

ところが、1970年代後半から、上記のような見方は日本語固有のアプローチであるため、言語学的普遍性を追求することは難しいという見解が出はじめることになった。そこで、登場した論議がいわゆる「ポスト陳述論争」である。ここでいう「ポスト陳述論」とは伝統的国語学での陳述論の後の論議を意味する。

ポスト陳述論の流れの中で、先頭的な役割をした研究は中右(1979)である。中右(1979)によって、現代日本語のモダリティ研究が活性化してきたといっても過言ではない。こういう流れの中で、従来の伝統国語学の陳述論争はだんだんと現代日本語モダリティ研究に吸収され始めた。現代日本語モダリティ研究の活性化をもたらした中右(1979)はモダリティの捉え方として次のような二点を強調している。すなわち、話し手の事態に対する心的態度が発話時(話し手の瞬間的現在時)でなければならないという点に言及し、どのような文法形式や語彙的要素がこの規定に適合するかという問題について徹底的に分析した。

中右(1979)は上述した日本語のモダリティ概念に属する要素として、「終助詞や助動詞」「形容詞や形容動詞」「動詞」以外にも「とりたて詞」などの様々な語彙範疇や文法範疇に該当する表現や形式を日本語のモダリティの意味要素として捉えた。中右(1979)が設定した日本語のモダリティ体系の中心的内容は形式と文法的な意味を分けた対応関係としてモダリティの体系化を模索したというよりは、文の意味の一つの側面としてモダリティを捉えようとしたものである。すなわち、中右(1979)のモダリティの捉え方は意味論的な志向性に比重を置くモダリティを主張したと言える。その後、中右(1994)では既存の中右(1979)で設定したモダリティの意味を担う要素の範囲を新たに分類した。中右(1994)では「副詞」「副詞句」まで、モダリティの意味を表す要素として捉えた。中右(1994)は主観的な意味を表すほとんどの一般的な語彙的意味要素までもモダリティとして捉えた。

中右(1979)の他に、日本語モダリティ研究において、注目すべき研究として仁田(1989、1991)、益岡(1991)などが挙げられる。

仁田(1989、1991)はモダリティの意味を担う形式要素として、中右(1979)が文末形式と非文末形式両方をすべてモダリティの要素として把握したこととは異なる立場を取っている。仁田(1989、1991)は文末形式だけをモダリティの意味を担う要素として限定した。すなわち、文末形式と主観性を表す実質語(感情形容詞)などをモダリティ要素として捉えている。また、モダリティを言表事態モダリティ(対命題モダリティ)・発話・伝達モダリティに2分して両者を区別している。さらに、文の構造の原型として[[[言表事態(=命題)] + 言表事態モダリティ] + 発話・伝達のモダリティ(対聞き手モダリティ)]というような階層的モダリティ論を提唱した。すなわち、仁田の階層的なモダリティ論によると、文というのは、中心にあ

る客観的な事態内容を様々なレベルの主観的な意味が重層的に包み込んで成立するものとして捉えている。その他、仁田のモダリティ論はモダリティ事態の意味規定においては中右や益岡(1991)と同じ立場であるが、モダリティの意味要素の下位類型や階層化の方法においては中右(1979)とは異なる立場を取っている。仁田(1989、1991)はある程度制限された文法形式によって、語彙的要素と文法的意味が区分できる部分を下位類型化した。中右のモダリティ論は純粋に意味論的特性を中心に体系化したモダリティ論である。一方、仁田のモダリティ論は文法範疇的特性をもっと反映したモダリティ論、すなわち、比較的文法化が進んでいる形式を中心にモダリティの要素として捉えている。

日本語モダリティ研究において、仁田に匹敵するもう一つの注目すべき研究として、益岡(1991)が挙げられる。益岡(1991)も基本的にモダリティの概念規定においては仁田や中右とほぼ同じ見解を取っている。益岡(1991)は文の構造把握において、命題とモダリティが文を構成する二つの要素として捉え、客観的な事態や事柄を表す部分を「命題」とし、その命題に対する話し手の主観的態度を表すものを「モダリティ」として捉え、文の意味を二極構造として階層的に捉えている。さらに、次のようにモダリティの下位類型の分類をしている。すなわち、益岡(1991)はモダリティという意味範疇を「表現(態度)係モダリティ」と「判断係モダリティ」に二分してモダリティを捉えている。さらに「判断係モダリティ」を「真偽判断モダリティ」と「価値判断モダリティ」に大別して判断係モダリティを細分化している。特に、本論文の考察対象でもある「真偽判断モダリティ⁸」に関わる要素を次のように区分している。話し手の発話時(瞬間的現在時)の事態に対する主観的態度を表すモダリティを「一次的モダリティ」と規定しながら、このモダリティに属する形式として「だろう」を位置づけている。一方、発話時という条件が必ず要求されなくても良い、あるいは客観的な事態の場合も表すことができるものを「二次的モダリティ」として規定し、この範疇に属する形式要素として「ようだ」「らしい」「かもしれない」「にちがいない」などを位置づけている。このような益岡(1991)の判断係モダリティ体系の下位分類は仁田(1989、1991)の分類の仕方と根本的に同じである。仁田も判断モダリティ体系を真正モダリティと疑似モダリティに二分して、それに相当する形式は益岡(1991)の一次的・二次的モダリティに属する形式と同じ形式要素を認めている。

ところが、益岡(1991)は日本語モダリティ要素として認定する範囲について、自身の研究でだんだん変容していく。例えば、益岡(1991)では「アスペクト」表現までを命題要素として認めた。しかし、益岡(2000)では命題とモダリティの境界はある程度認めながらも、その境界は両者を絶対的な形態要素としては区分できないという柔軟な見方を取った。ともあれ、上述した仁田と益岡はモダリティが話し手の事態に対する心的態度などの感情的な要素から客観的な判断という知的認識の段階にまでわたって、幅広く把握しているという点で共通点があると考えられる。

以上では、日本語モダリティ研究の始まりともいえる山田(1936)や時枝(195)を中心として展開されてきた伝統国語学の「陳述論争」から中右(1979)、仁田(1989、1991)、益岡(1991)などの「ポスト陳述論」とも命名することができる現代日本語のモダリティ研究までの流れを概観した。従来の日本語モダリティ研究は、「事態に対する話し手の心的態度」という意味論的捉え方が、統語的には命題を包み込むという階層的構造観⁹と結びついて発展してきたところに、その特異性があったと言える。

⁸ 益岡(1991)は文の真偽性に関わる表現者の判断を表すことをモダリティとして規定している。本論文の対象である推量モダリティも基本的に文や叙述内容の真偽に対する発話者の判断として捉えられるので、用語上の違いはあるものの、益岡の真偽判断モダリティと本論文の推量モダリティは同一線上で考えても問題ないと思われる。

⁹ 本論文で紹介した仁田(1989、1991)や益岡(1991)の主観表言論的(階層的)モダリティ論と異なるモダリティの捉え方として、Lyons(1977)や尾上(2001)の主張する「非現実事態陳述のモダリティ論」が挙げられる。たとえば、尾上(2001:442)によると、「モダリティ形式とは非現実の領域に位置する事態を語るときのみ用いられる専用の述正形式である」と言及している。これは話し手の言表事態や主観性という定義に基づく説は正統な意味でのモダリティ論ではないとする見方である。詳しいことは尾上(2001)を参照されたい。

2. 1. 1. 2. 韓国語におけるモダリティの研究史

前述した日本語に比べると、韓国語研究における叙法またはモダリティの研究は制限的に行なわれてきた。叙法またはモダリティ研究の歴史も短いだけでなく、事態に対する話し手の主観的態度というモダリティ自体の意味的側面よりは文法形式、例えば、韓国語の「先語末語尾(prefinal ending)」や「語末語尾(final ending)」などで実現されるものに注力する形式的な側面を重視してきたためである。このような一般的認識のため、これまでの韓国語の文法研究で注目されてきた推量叙法の文法形式は主に「-ㄹ-」であると言っても過言ではない。韓国語で叙法(mood)という用語は李崇寧(1961)で使われ始め、一般的に、叙法は話し手の叙述態度によって、異なる捉え方が表現されるものを指す概念として捉えられてきた。このような捉え方は高永根(1965)で論議された以後、現在に至るまで活発に行われている。しかし、韓国語の文法研究では日本語のようにモダリティという用語はあまり使用されてこなかった。その代わりに、モダリティとほぼ同様の概念として「叙法」「様態」「様相」という用語が使用されてきた。しかし、前述した日本語と同様に、韓国語研究においても、未だにこれらの用語の概念に対する統一的な見解が見られないのが現状である。

韓国語研究において、叙法の論議は上記した李崇寧(1961)で「ムード(mood)」の概念として「叙法」が論議された際から、「ムード」と「モダリティ」の概念、さらに、叙法と時制の概念が厳格に区分されていなかった。これにより、「叙述法」「疑問法」「命令法」などのような文の終結法と「推量」「意図」「当為」のようなモダリティ要素、そして、現在・過去・未来などのような時制も叙法の枠組みの中で、厳格な区分がないまま扱われてきた。

このような叙法の基本的な観点は서웅(1987)や高永根(1965, 1989, 2004)にも受け継がれてきた。例えば、高永根(2004)では「-ㄹ-」が時制よりは「ムード」の範疇に所属するとし、形態的には時制範疇として把握している。このように、「ムード」または「モダリティ」と「時制」が厳格に区分されないことについて、민현식(1999:158)では「テンス」と「叙法」を包括する「時制包括的叙法論」と捉えている。例えば、時制概念である「現在」「過去」「未来」を「現実法」「完結法」「未定法」などのように捉えた点もその一例である。

韓国語の叙法と関連して議論されてきた主な問題は叙法の範疇と関わるものである。まず、叙法を文法範疇として捉えるのか、それとも、意味範疇として捉えるのかという問題である。文法範疇として理解する場合は動詞や形容詞などの活用語尾を中心とする特定の文法形式が叙法の意味を具現する場合であり、意味範疇として捉える場合は文法形式だけではなく、その他の語彙的形式、例えば、名詞や様態副詞なども叙法の中で扱うことができる。

ところが、これまでの韓国語研究では叙法を文法形式である用言の語尾で実現する文法範疇として把握する普遍的認識¹⁰があったので、意味範疇の側面からの体系的な研究は十分に論じられて来なかったと考えられる。高(1986, 2004)では「モダリティ」を意味範疇として規定しながらも、対命題叙法を文法範疇としては「叙法」という用語で、そして、意味範疇として「様態」という用語で分けて使用している。命題に対する話し手の心理的態度を表すという「叙法」の概念については概ね共通の認識を見せているが、具体的な適用の面においては相違点が見られる。以下では叙法に関するいくつかの代表的見解を紹介する。

韓国語文法において、叙法に対する概念や捉え方はいくつかの異なる見解に類型化されている。叙法と関連し、比較的明らかな立場を見せたのは張京姫(1985)である。張(1985:11)では「モダリティ」に該当する用語を「様態」と呼び、「様態」の概念を話し手の精神的な態度を表現する文法範疇であると把握し、このような概念を充たす推量叙法の「-ㄹ-」を含む一部の先語末語尾と語末語尾を提示している。また、終結語尾によって、区分される「叙述法」「疑問法」「命令法」などの下位範疇、すなわち、文の終結法を「叙法」とし、様態と厳格に区分している。主にいわゆる対命題叙法を「様態」とし、対聞き手叙法を「叙法」と位置づけながら、両者を異なる用語として区分した。

¹⁰ 高永根(2004: 29)、서정수(1996: 301)を参照されたい。

高永根(2004:29)は基本的に文法範疇と意味範疇を区分している。叙法(mood)と様態性(modality)を区分し、叙法は話し手の命題に対する心理的態度が動詞の活用形で具現される文法範疇であるのに対し、様態性は活用形をはじめ、名詞や副詞などを含んだより広い範囲に関わる意味論的範疇であるとした。高(2004)で述べられている文法範疇としての叙法は上記した張(1985)の様態と同様であり、文の終結語尾として表される張(1985)の叙法については「文体法」と把握し、叙法と区別している。

上記の見解とは違って、従来、多く知られている叙法の捉え方は「対命題叙法」と「対聞き手叙法」に下位区分される広い意味の叙法であり、意味論的範疇ではない文法範疇としての叙法である。上述した민현식(1999)で叙法を「文末叙法」と「様態叙法」の二つに下位区分した点もその典型的な例である。

ここで、もう一点、考えるべき問題がある。韓国語において、推量モダリティを含め、文法範疇を述べる際には、関連形式が語彙範疇ではない文法形式を指すという点である。これは意味範疇が語彙的要素まで含まれるという点と対照的である(張(1985:11)、高(2004:121)、서(2006:307)など)。韓国語推量叙法の論議と関連し、主な関心の対象になった点は推量叙法にどのような形式が所属するのかという問題である。この問題に関する論議がまったくなされて来なかったわけではないが、未だに推量形式全般に対する体系的な論議は見られない。

ただ、従来の日韓対照研究で、日本語の推量モダリティの枠組みに依存した韓国語推量形式の体系化が模索されてきたただけである。ただ、従来の対照研究で、たとえ、日本語の推量形式に適用した枠組みを韓国語形式にそのまま適用してきたとしても、このような研究は韓国語の推量叙法の研究に新たな方向性を提示したと言える。ところが、韓国語形式自体に対する全般的な研究においては、未だに未解決の課題も多くあると考えられる。

前述した韓国語研究における推量モダリティ及びモダリティ一般の研究に関わる主な見解を要約すると、概ね、以下の通りである。

A. 叙法の類型

(1) 広義の概念として捉える見解

基本的にこれは Fillmore(1968)が文の構造を「命題+モダリティ」として捉えた立場に従うものである。このような Fillmore(1968)のモダリティの概念に従い、命題に後接する一体の文法要素が表す文法範疇—時制、尊敬、回想、推量、当為などの要素が該当する。このように、「叙法」を捉える見解として、김일웅(1993)、한동완(1996)、신창순(1997)이선웅(2001)などが挙げられる。

(2) 対命題及び対聞き手叙法をすべて「叙法」として認める見解

「対命題叙法」は「-ㄴ-」のような「先語末語尾」によって実現する非文末叙法であり、「対聞き手叙法」は文の終結語尾で表される文末叙法である。この両類型をすべて「叙法」として規定する立場である。(민현식(1999)、서정수¹¹(1996)等)

(3) 対命題と対聞き手叙法の中で、一つだけを「叙法」と規定する見解

a. 張京姬(1985)－「様態」：先語末語尾として表現されるもの。

「叙法」：文の終結法で実現するもの。

b. 고영근(2004)－「叙法」：先語末語尾として表現されるもの。

「文体法」：文の終結法で実現するもの

張京姬(1985:5)では終結形として実現するものだけを叙法とし、命題関連の叙法は「様態」

¹¹ 서정수(1996:301)では叙法を話し手が文章の内容に対して持つ精神的な態度を表す範疇として規定し、叙法を命題的叙法と行為的叙法に区分した。서(1996)での行為的叙法は対聞き手の叙法を意味する。

という用語を使用し、両者を区分した。張(1985)¹²は「様態」という概念に対して、「様態」というのは事態に対する話し手の精神的な態度を表すものとして規定している。一方、高(2004: 29)では対命題叙法だけが「叙法」であり、文の終結語尾によって表される叙法は「文体法」という別の文法範疇として規定した。要約すると、対命題的なものを「叙法」、また、対聞き手的なものを「文体法」とし、両者を区分する高(2004)では叙法を厳格な文法範疇として規定したのに対し、「様態(modality)」は文法範疇ではない意味論的範疇として捉えて、両者を区分した。このような区分は様態と叙法をすべて文法範疇として捉えた張(1985)とは異なる立場であり、両研究における叙法の捉え方は全く異なる。

上記した韓国語研究におけるモダリティの捉え方や研究の流れを簡単に要約すると、概ね次のような点に注目してきたことが分かる。すなわち、対命題モダリティを「叙法」または「様態」という異なる用語を用いている点や「様態」の捉え方も上記の(1)のような「広義の様態」と(3)のような「狭義の様態」などで使用していることが分かる。

以上から見ると、従来の韓国語研究では「叙法」や「様態」の捉え方や概念及び適用面において、統一的な見解が見られないことが分かる。次節では本論文の考察対象である両言語の推量モダリティ形式と関連するこれまでの主な研究を紹介する。

2.1.2. 日本語形式の先行研究

2.1.2.1. 「だろう」の先行研究

今までの日本語研究において「だろう」が表す最も基本的意味は「推量¹³」であるという普遍的な認識が広く受け入れられている。例えば、三宅(1995、2006)、仁田(2000)、宮崎(2002)、日本語記述文法研究会(2003)などの研究では事態に対する話者の認識的態度を表す認識モダリティの下位類型の中で、「だろう」の基本的意味を「推量」として位置づけている。例えば、三宅(1995、2006)は以下の(4)のように、「だろう」を認識モダリティの下位類型の一つである「推量」に位置づけながら、この意味に最も相応する形式が「だろう」であると述べた。

(4) 認識的モダリティの下位類型

- ①推量：話し手の想像の中で命題を真であると認識する。
この意味に相当する形式として「だろう」「まい」が挙げられる。
- ②証拠性・実証的判断：話し手が観察したことや証拠に基づく推定を表す形式群を指す。
この意味に相当する形式として「ようだ」「らしい」「しそうだ」などが挙げられる。
- ③可能性判断：命題が真である可能性があるとして認識する。
これに相当する形式として「かもしれない」がある。
- ④必然性判断：命題が真であると確信する。
これに相当する形式として「にちがいない」がある。

¹² 張京姫(1998)でも対命題的な話し手の態度を「様態」、対聞き手的な話し手の態度を「叙法」として捉えている。高永根(2004)を参照されたい。

¹³ 「だろう」の本質的意味を「推量」ではないと捉えた研究として益岡(1991)や森山(1992)が挙げられる。例えば、益岡(1991)では、「ダロウ」の本質を「断定保留」と位置づけており、次のような基本的意味を持つと言及している。「ダロウ」は、当該の真偽判断が表現者個人の判断であるという限定をつけることに特徴が有る。言うならば、「私的な判断」であることを明示して、断定的な表現になることを避けるわけである。また、益岡(2007: 144)によれば、「断定保留」とは「真であるとの確信が持てなかったり聞き手との関係で断定を差し控えたりといった事情で断定を保留するものである。」と述べている。また、森山(1992)は、「ダロウ」の推量用法は派生的なものであり、「ダロウ」が有する基本的意味は「判断形成過程にある」と捉えている。つまり、「ダロウ」の意味は、まだ未決定・考え中であって、現実としての結論を出さない述べ方であるとしている。「ダロウ」が示す特異な振る舞いである、いわゆる「だろう」の「疑問文の問題」や「だろう」の「確認用法の問題」も「判断形成過程」の概念で説明できると述べている。

その他に、仁田(2000)、宮崎(2002)、日本語記述文法研究会(2003)などの研究でも、「だろう」を認識的モダリティの下位類型の一つである「推量」に位置づける一方、「ようだ」「らしい」「かもしれない」などのようなその他の形式は別の意味範疇に属させている。

上記したように、従来の日本語研究では「だろう」の基本的意味が「推量」であるという普遍的認識に基づいて、「ようだ」「らしい」などの「証拠性判断」との対比を通して、多様な観点から分析が行われてきた。以下では「だろう」の推量意味または用法上の特性に対する従来の主な先行研究の見解を概観する。

阪田・倉持(1980)

阪田・倉持(1980:128)によると、以下の例文(5a)(5b)のような同一の推量構文における「だろう」「ようだ」「らしい」の意味に違いがあることを次のように説明している。以下の例(5)において、「ようだ」「らしい」文は、灰皿がおいてあるとか、煙草を吸っている人がいるとか、他の場所に見られたような「禁煙」の標示がないなど、煙草を吸うことが許されることを積極的に裏付ける状況が認められなければならない。それに対し、「だろう」の推量文は、必ずしも、上のような根拠が備わっていなくても、話者自身が煙草を吸っても特にとがめられることはあるまいとか、「煙草を吸っても特に危険はないようだ」という判断を下せる状況であればよいと述べている。

- (5) a. ここなら煙草を吸ってもいいだろう。
- (5) b. ここなら煙草を吸ってもいいようだ/らしい。

寺村(1984)

寺村(1984)は、概言のムードの中で、「ダロウ」を話し手自身の発話時の心の状態の直接的表現であると位置づけている。「ダロウ」は推量を表すというものの、主観的で自分の考えをかなり強く押し出すものであるとした。また、「ダロウ」が、文末でいろいろなイントネーションに助けられて、概言的表現ということからさらに離れた聞き手への働き掛け、すなわち対人的ムードに使われるのも、「ダロウ」がこのように主観性が強く、また情意の表現という色合いを持っているためであると述べている。言い換えると、概言のムードは普通話し手自身がこうだと考えることについて、自分自身は当然何かの拠りどころを持っているのが普通だが、「ダロウ」は、そのことを相手に知らせる意識がない時に出てくる表現であると指摘している。これは、「ラシイ」や「ヨウダ」のような、根拠があることを相手にほのめかす類の表現と比べると、「ダロウ」は最も主観的ということができていることを意味していると述べた。また、「ダロウ」推量の根拠は、普通は自分のこれまでの経験、知識の総合であるとしている。つまり、「自分はこうだと考える」という感じが一番強いと論じている。

三宅(1995)

三宅(1995)では「だろう」を認識的モダリティの体系の中で、「推量」に位置づけながら、認識的モダリティの他の下位類型である「実証的判断」「可能性判断」「確信的判断」と対比している。例えば、三宅(1995)では「だろう」の推量特性を明確にするために、「ようだ」「らしい」のような「証拠性判断」と対比している。三宅(1995)は以下のような例文を挙げながら、「証拠の存在の有・無標性」と「認識の対象となる事態の現在性有無」という二つの基準によって、「だろう」の推量特性を捉えている。

- (6) 部屋の明かりがついている。彼はまだ勉強している?ダロウ/ヨウダ/ラシイ。
- (7) a. 明日は雨が降るダロウ。
- (7) b. 明日は雨が降るラシイ/ヨウダ。

三宅(1995)では証拠の存在の有標性を表す「実証的判断」と違って、証拠の存在の無標性を表す推量の「だろう」は証拠の存在を有標的には示さないと言及している。そのため、上の例文(6)において、「実証的判断」に属する「ようだ」「らしい」は生起可能であるのに対し、「だろう」は生起不可能であると捉えている。また、上の例文(7b)を挙げながら、実証的判断は、証拠の存在を認識するという特性から、未来の事態に対する認識にはなり得ず、あくまで現在の事態に対する認識になると言及した。一方、「だろう」を用いた(7a)は「明日は雨が降る」という見らの事態に対する認識が表されるとした。用語上の違いはあるものの、三宅(1995)とほぼ同様の見解を提示した見解として、宮崎(1993)、金(1999)、杉浦(2009)などが挙げられる。

宮崎(1993、2002)

宮崎(1993)によると、「だろう」は以下の例文(8)～(9)のように、確たる根拠のない思い付き的な判断に用いられると述べた。つまり、「だろう」は「一証拠性」であることを、以下の例文を通して説明している。

(8)彼のことから、何とうまくやるだろう/*ようだ/*らしい/*かもしれない。

(9)今月の小遣いは 一万円で足りるかな。まあ、なんとかなる だろう/*らしい/*ようだ。

「だろう」は上の例文のような、根拠の希薄な漠然とした判断に用いることができる。最も、この場合も「彼」に関する経験や知識に基づいた判断だと言えないこともないが、話者の直感の領域を超えないと述べている。また、宮崎(2002)は「だろう」の不確かさを話者の認識面で捉える立場を取っている。「だろう」は、話者がその出来事を、想像や思考という間接的な認識によって捉えていることを表す。想像や思考の中で捉えたことにすぎず、経験的な事実として確認されているわけではないという、認識面での不確かさを表すのが「だろう」であると論じた。宮崎(2002:132-135)では「だろう」の使用状況を以下のようにまとめた。

- ①「だろう」は想像や思考の中で捉えた出来事を描き出すので、仮定条件の帰結として使用されることが少なくない。
- ②「だろう」の文は、特に根拠なく直感的に思ったことを述べる場合もあれば、そのように考えられる根拠が文脈の中に明示される場合もある。
- ③話者の存在しない時空間に存在する出来事を思い描きながら述べる場合に用いられる
- ④「だろう」は、様々な種類の確信度を表す副詞と共に起しうる。これらは、「だろう」によって示される断定の強さをコントロールする働きをしているのである。

宮崎(2002)の観点は「だろう」の本質的意味が推量であると把握した点はその他の研究と同様であるが、推量の「だろう」が用いられる状況を具体的に記述している点は 阪田・倉持(1980)や寺村(1984)の研究とは異なりを見せる。

仁田(2000)

仁田(2000:116)によると、「推量とは、命題内容である事態の成立・存在を不確かなものとして、想像・思考や推論の中に捉えるものである」と言及している。また、認識的モデル体系の中で、上記のような「推量」の捉え方に最も相応しい形式として「だろう」を位置づけながら、「ようだ」「らしい」などのような形式群と区別している。「ダロウ」が事態成立の存在を確かさに欠けるものとして捉えたものであることは、以下の例文(10)に見られる、「はっきりわからないが」という、把握内容の不確かさに言及した表現が、そのことを明示的に示していると捉えている。

(10) 新聞社もまた手も足も出ない格好で、系列電波関係をもつ所が辛うじて活動が続いている。しかし、何をおいても、学術関係ほど深刻な打撃を受けた所はないだろう。
世界中の…状況ははっきりわからないが、日本と同じようなものだろう。

また、仁田(2000:118)によると、「推量は、記憶の呼び起こしによる事態の把握ではなく、想像・思考や推論の中に事態の成立を捉えるにあたっては、何らかの根拠が必要になる。推量とは、根拠を通して、想像・思考や推論の中に事態の成立を捉えることである。」と言及している。仁田(2000)の捉え方は基本的に上述した宮崎(2002)と同様であると思われる。

澤田(2007)

澤田(2007)では「だろう」の推量特性を上記した根拠の観点とは異なる推論の方向性に関わる因果性観点を適用し、「ようだ」「らしい」と比較分析を通して、「だろう」の推量特性を「結果推量」と捉えた。

- (11) 彼には才能がある。(原因) → 彼は成功するだろう。(結果)
(12) 朝から雨が降り続いている。このままだと大井川は増水するだろう/?ようだ/?らしい。
(13) 彼は成功した(結果) → 彼には才能があるらしい/ようだ/?だろう。(原因)
(14) デーパトの中で子供が一人で泣いている。迷子になったようだ/らしい/?だろう。

澤田(2007)によると、「だろう」は上の例文(11)～(12)のように、「ようだ」類とは違って、ある原因を根拠とし、その結果事態を推量する「結果推量」には自然に用いられると述べた。それに対し、ある結果を根拠とし、その原因を推量する上の例文(13)～(14)のような原因推量には「だろう」は不自然である点から「だろう」推量の特性を「結果推量」と捉えた。

上記の分析からも分かるように、従来「だろう」の推量特性は主に「ようだ」「らしい」との比較を通して主に「根拠の性格」という観点から特徴づける分析が最も多いことが分かる。主に以下の例文(15)に基づいて、「だろう」の推量特性を「主観的根拠(阪田・倉持(1980、1993))」、「実在的根拠の不在または根拠の無標性」「根拠非前提型」「一証拠性」(宮崎(1993)、三宅(1995、2006) 金(1999)、杉村(2009) など)」などのように、「だろう」の推量特性を捉えてきた。

- (15) 彼のことだから、何とうまくやるだろう/*ようだ/*らしい。(宮崎 1993)

「根拠の性格」という観点からの分析が最も多い理由は上記した認識的モダリティの下位類型の区分と深く関わっている。すなわち、「推量」の「だろう」と「ようだ」「らしい」などの「証拠性判断」との区別を明確にするために、「だろう」の推量特性を「根拠の無標性」「根拠非前提型」「一証拠性」のように捉えてきたと考えられる。以上で述べた先行研究における「だろう」の推量特性を簡単に要約すると以下の通りである。

- ①根拠の主観性： 阪田・倉持(1980)
- ②「実在的根拠の不在」「根拠非前提型」「一証拠性」「証拠不足」： 宮崎(1993)、三宅(1995)、 金(1999)、仁田(2000)、杉村(2009)
- ③因果性観点からの分析： 澤田(2007)、木下(1998)
「だろう」：結果推量 「ようだ」「らしい」：原因推量

2.1.2.2. 「ようだ」「らしい」の先行研究

本節では両形式の違いについて論じられてきた従来の代表的先行研究を中心に概観する。

推量形式「ようだ」「らしい」はある事態の成立可能性について、話し手が推量判断を行う場合に、実在的根拠を前提にするという点、また、推量用法における両形式の類似性のため、関心の対象になってきた。しかし、未だに、両形式の使い分けや違いについて、一般化できる統一的な見解の一致は見られないのが現状である。

本節では、従来の研究で、命題の真偽に対する話し手の認識的判断を表す意味成分である認識的モダリティの下位類型の一つである「証拠性判断」という範疇に分類されてきた推量形式「ようだ」「らしい」がどういう観点から議論されてきたのかについて概観する。従来、多くの研究では推量用法上の特性において類似性を見せる「ようだ」「らしい」の違いについて多様な観点から分析が行われてきた。両形式は推量意味の他に、いわゆる非推量用法あるいは周辺の意味として捉えられる「比況」「例示」「属性表示」などの多義的な意味の広がりを見せるが、本論文では主に両形式の推量用法に限定して、考察を行う。

寺村(1984)

寺村(1984: 250)では、以下の例文を挙げながら「ようだ」「らしい」の差異を「他情報」「本人観察」の含有率によって説明している。すなわち、「ようだ」は本人観察が他情報より優勢であるが、「らしい」はその逆であると述べている。つまり、「らしい」が「ようだ」より、他から間接的に得た情報をもとに推量判断する場合に自然に用いられるという意味である。次は「ようだ」「らしい」について寺村(1984:250)で述べている部分の引用である。「らしい」は、その話し手の推量が、自らの主観的な判断よりも他から得た情報に基づくものである可能性の方が高いという印象を受けるのに対し、「ヨウダ」とは逆に、自らの観察・主観を前面に出す傾きがある」と述べている。例えば、寺村(1984: 250)では、以下の例文(16)～(17)を挙げながら「ようだ」「らしい」の差異を「他情報」と「本人観察」によって説明している。すなわち、「ようだ」は本人観察が他情報より優勢であるが、「らしい」はその逆であると述べている。

(16) 店内をひととおり見てきたがこの店の品物はどれも近くの店より一割ぐらい安いようだ。

(17) 甲子園での巨人戦を取材してきた同僚の話では、阪神ファンの熱狂ぶりはききし勝るものであるらしい。

早津(1988)

早津(1988)は以下のような例文を挙げながら、両形式の違いを話者の持つ心理的距離の違い¹⁴によって説明している。早津(1988)によると、事態と話者の心理的距離が近い場合は「ようだ」を用い、事態と話者の心理的距離が遠い場合は「らしい」が用いられると述べている。例えば、同じ判断の対象となる事態に対して、以下の例文(18)では、話し手が事態を自分に身近なもの、つまり、自分に近い立場のものとして捉えているのに対し、以下の例文(19)では、話し手が事態を自分に離れているもの、すなわち自分に遠いものとして捉えているという違いが見られると述べている。

(18) 新聞で見ましたがこの間の地震によるメキシコの被害はたいへんなもののようですね。

(19) 新聞で見ましたがこの間の地震によるメキシコの被害はたいへんなものらしいですね。

上の例文(18)～(19)からもわかるように、早津(1988)は判断情報の直・間接性は両形式の

¹⁴ 早津(1988)と同様に、述べられる事態や事柄と話し手の心理的距離の遠近によって、両形式の差異を論じた研究として柴田(1982)が挙げられる。

差異を説明できないと述べながら、心理的距離の違いが両形式の相違点を明確に規定できると述べている。

田野村(1991)

田野村(1991)によると、「ようだ」は話し手が自身の感覚として観察対象の外見・様子を述べる表現であり、「らしい」は外部に何らかの判断根拠となる事柄や事態があつて、それに基づいて行われる推量形式であると言及している。田野村(1991)は両形式の基本的意味の違いを次のように捉えている。「ようだ」は「～という外見・様子である。～である印象を受ける」表現であり、「らしい」は「ある根拠から、事実は～であると推定される」ことに中心がある表現であるとした。このような見解を説明するため、以下のような例文(20)～(21)を挙げている。

(20) 洞窟の奥をすかしてみると、ずっと傾斜面が続いているようだ。とても行けそうにない。

(21) やおら男たちが数種類の太鼓を持って現れる。動物の角でできた笛がブアオーとほら貝のような音を上げた。いよいよ祭りが始まるらしい。

田野村(1991)では、例えば、上の例文(20)のように、話し手が自ら視覚などを通して得られた外見・印象を表現する場合には「ようだ」を用い、上の例文(21)のように、話し手がある根拠に基づいて推量判断を行う場合には「らしい」が自然に用いられると述べている。

益岡(2000)

益岡(2000)は確信度に基づいて、両形式の差異を捉えている。つまり、「ようだ」は確信度が高い推量形態、「らしい」は確信度が低い推量形態として規定している。この主張を証明するため、以下のような程度副詞との呼応関係をテストした。例えば、以下の例文(22)～(23)の場合には「ようだ」「らしい」両方が自然に用いられる。

(22) 隣の部屋に誰かいるようだ。

(23) 隣の部屋に誰かいるらしい。

(24) 間違いなく、隣の部屋に誰かいるようだ。

(25) ? 間違いなく、隣の部屋に誰かいるらしい。

ところが、益岡(2000)は上の例文(24)～(25)のように、「間違いなく」のような確信度の高い副詞を添えてみると許容度に差が生じると述べている。益岡(2000a)は判断情報の直・間接性とは関係がなく、確信度の違いによって、両形式が弁別されると言及している。

菊池(2000a)

菊池(2000a)は観察対象と判断内容の距離の遠近による推論過程の有無という基準によって両形式の使い分けを説明しようとした分析である。結論から先にいえば、観察対象と判断内容の距離が近い場合には「ようだ」を用い、観察対象と判断内容の距離が遠い場合には「らしい」が用いられるという見解である。菊池(2000a)によると、両形態すべて直接観察・経験に根拠を置いて、話し手の推論過程の有無を基準にして、両形式の使い分けを捉えた。すなわち、以下の例文(26)のように、推論過程がない直接判断には「ようだ」であり、「らしい」は用いられないと述べた。

(26) (古くなった食べ物を嗅ぎながら) 食べないほうがいいようだ/*らしいな。

菊地(2000a)は上の例文(26)のように、話し手が直接体験し、推論を加える余地なく、観察あるいは体験に密着した一体のもととして観察対象の様子を捉える場合、「ようだ」を使い、「らしい」は用いられないと述べている。すなわち、観察対象と判断内容の距離が近い場合には「ようだ」を用い、観察対象と判断内容の距離が遠い場合には「らしい」が用いられるという見解である。一方、以下の例文(27)～(28)のように「らしい」は話し手の直接観察に密着して対象の様子を述べるのではなく、推論を伴ったり伝聞に基づいたりして判断内容を述べる場合、「らしい」を使い、「ようだ」は用いられないと述べた。

(27)我々のようなものには想像もつかないが、人間の身体は 60 兆個の細胞からできているらしい/*ようだ。

(28)あの秘書は愚鈍なように見えるが、あのやり手の社長が手をはなさないのだから、あれでなかなか有能な?ようだ/らしい。

これまでの推量形式「ようだ」「らしい」の使い分けの基準に対する従来の先行研究の様々な分析観点について代表的な先行研究を中心に詳細に考察してみたところ、両形式を区別する基準はその表現の仕方には若干違いは見られるが、概ね、以下のようにまとめられる。

①推量根拠になる話し手の体験観察の直・間接性- 寺村(1984)、森田(1983)

「ようだ」- 直接的根拠 「らしい」- 間接的根拠

②推量根拠の主・客観性-阪田・倉持(1980、1993)

「ようだ」-主観的根拠「らしい」-客観的根拠

③事態に対する話し手の心理的な距離-柴田(1982)、早津(1988)

心理的距離の近さ:「ようだ」 心理的距離の遠さ:「らしい」

④事態に対する確信度の違い-益岡(2000)

「高い確信度」:「ようだ」「低い確信度」:「らしい」

⑤対象と判断内容の距離による推論過程の有無-菊地(2000a)

推論過程無し-「ようだ」 推論過程有り-「らしい」

⑥基本的意味の違いに基づいた分析-中畠(1990)、田野村(1991)

「ようだ」:「～という外見・様子である。～である印象を受ける。」

「らしい」:「ある根拠から、事実は～であると推定される。」

上記した先行研究の中で、本論文の考察対象である「ようだ」「らしい」の推量意味及び用法上の違いに関わる分析は主に①②のように「根拠特性の違い」に基づいた分析と③のような「事態に対する話者の心理的態度」に基づいた分析が最も一般的に認められてきた。その他にも、④のような確信度の違いによる分析、⑤のような推論過程の有無による分析、⑥のように、「ようだ」「らしい」形式自体の基本的意味に基づいた分析などのように、多様な観点から分析が行われてきた。

2.1.3. 先行研究の残された課題

2.1.3.1. 「だろう」

前述した通り、多くの先行研究では「だろう」の推量特性について、「ようだ」「らしい」のような「証拠性判断」との弁別を明確にするために、その推量特性を「根拠の無標性」「根拠非前提」「一証拠性」「実在的根拠の不在」などのように捉えた研究が多かった。例えば、以下の例文(29)～(30)のように、文面上または表面上の根拠不在を「根拠非前提」または「根拠の無標性」と捉えている点である。従来の先行研究では表面的に文面上や発話現

場に判断情報となる根拠が顕在しないと、「根拠非前提」と把握してきた。

(29) 彼のことだから、何とかうまくやるだろう/*ようだ/*らしい。(宮崎1993)

(30) やがて 僕たちは海へ出る。永いこと待ちこがれていた海へでる。そのまま
私たちの 自転車を 海の中へ乗り入れるよ。しばらく君の白いねまきが帆になって、
風を孕んで、 自転車は月に照らされた 海の上をはしるだろう。(熱帯樹)

また、宮崎(1993)、三宅(1995)、日本語記述文法研究会(2003)などでも、主に上の例文(29)～(30)のような類型の例文を対象に、推量「だろう」は判断根拠または証拠の存在を有標的に示さないから、証拠が有標的に示されている以下の例文(31)～(32)の場合は不自然になるのに対し、「ヨウダ」「ラシイ」などの「証拠性判断」形式は証拠の存在を有標的に示す形式であるため許容可能であるとした。

(31) 部屋の明かりがついている。彼女はまだ勉強している*だろう/ようだ/らしい。

(例文(5) 再掲)

(32) パソコンの電源が入らない。壊れてしまったようだ/らしい。

(日本語記述文法研究会2003)

その他に、杉村(2009:71)でも、「だろう」は根拠不足のため、当該の認識や推量が確定できないことを表す表現であるとした。

ところが、「だろう」の推量特性に対する上述した先行研究の分析は以下の点において、再考の余地があると思われる。

基本的にすべての推量判断は「根拠-推論-結果」という一連の情報処理過程を経て最終的判断に至ると考えられる。すなわち、「根拠非前提」「根拠の無標性」というのは、あくまで根拠が潜在しているだけであり、文面上の根拠不在や発話現場の根拠不在を「だろう」の推量特性の分析に適用させた点は再考の余地がある。

また、上述した宮崎(1993)や三宅(1995)の観点からは以下の例文(33)～(37)において、「だろう」が許容可能な理由を説明することができない。確かに、上記の例文(31)～(32)のように、「だろう」の使用が不適切な場面がある。しかし、推量の「だろう」が不自然な理由を「証拠の有標性・実在的根拠の存在」から捉えると、以下のような現象を説明することができない。以下の例文はすべて「証拠性判断」の本質的特性として言及されてきた「証拠の有標性」「実在的根拠の存在」「事態の現在性」などを充たしていると思われる。

(33) (古くなった食べ物を嗅ぎながら) これ、食べないほうがいいだろう。(菊池2000)

(34) 人々が濡れた傘を持って地下道を歩いている。外は雨が降っているだろう。(真実)

(35) 木村は銭を数える手を止めて、耳をすませた。人の気配はない。あたりはしんと静かである。この村の役所には、今の時間には誰もいないだろう。(行人)

(36) 空がどんより曇ってきた。もうじき雨が降るだろう。

(37) (道である人の風体を見て) あの人、100キロはあるだろう。

上記した先行研究の観点に従うと、上の例文(33)～(37)において、「だろう」は許容されないはずであるが、「だろう」も問題なく許容可能である。例えば、上記の例文(33)～(37)に用いられた「だろう」はすべて発話時に話し手自身の視覚や嗅覚などのような五感に基づいて、外在世界から入手した実在的根拠に基づいた判断に用いられている。

そのため、単に、証拠性形式との違いを考慮し、「だろう」の推量特性を「証拠存在の無標性」や「実在的根拠の不在」「根拠非前提型」「根拠の主観性」などのように特徴づけるのは再考の余地があると思われる。

以上で述べた従来の研究で十分に検討されていない点を要約すると、以下の通りである。

一つ目は、「だろう」が「推量」であるという共通的認識はあるものの、推量の「だろう」が用いられる多様な談話語用論的状况に対する詳細な分析はなされて来なかった。換言すると、認識的モダリティまたは判断系モダリティ体系の中における「だろう」の位置づけ及び「ようだ」「らしい」などのその他の意味範疇に属する形式との違いを解明することに注力しすぎて、「だろう」の推量特性に関わる綿密な分析はなされていないと見受けられる。

「だろう」の推量特性を正確に把握するためには、推量の「だろう」が用いられる多様な談話語用論的特性を考慮し、「だろう」の推量意味や用法に対する包括的な分析を行う必要がある。本論文でこのような分析方法を取る理由は「だろう」の本質的意味が「推量」であることを実証的に検証するためである。

二つ目は、「だろう」の推量特性を究明する研究方法と関わる問題である。

推量と関わる「だろう」の例文を多く見ると、必ずしも「だろう」の推量特性が上述したような単一基準の適用だけでは正確に特徴付けられないと思われる。上述した通り、「ようだ」「らしい」のような「証拠性判断型」との区別を明確にするために、「だろう」の推量特性を主に上述した単一基準によって捉えてきた点は再考の余地があると思われる。また、従来の見解は多くの用例分析に基づいたものではなく、研究者が恣意的に作った例文や直観に基づいた見解が多かったため、実証的な分析にはなっていない。

本論文は推量の根拠問題と関連し、真正推量と疑似推量形式が従来のような推量根拠の有・無標性よりは根拠自体の性質において、相違を見せると考える。

三つ目は、先行研究では推量の「だろう」と「ようだ」「らしい」は基本的に「推量」と「証拠性判断」という異なる意味類型に属するものとして捉えてきたため、両類型の間に見られる特徴的な違いにだけ注目してきた。しかし、「だろう」と「ようだ」「らしい」の間に見られる推量用法上の接点または連続性については論じていない。

四つ目は、推量特性と関わる多様な用法間の関連性については論じていない点である。

2.1.3.2. 「ようだ」「らしい」

以下では両形式の違いに対する上述した多様な先行研究の見解を概観した後、各々の見解において、より検討すべきと考えられる問題について検討する。

①判断根拠の主観・客観性 — 阪田・倉持(1980、1993)

阪田・倉持(1980、1993)では「ようだ」「らしい」の違いを話し手が事態成立の可否について判断を行う際に要する根拠の違いによって説明している。例えば、阪田・倉持(1993)によると、両形式すべて何らかの根拠に基づいて、不確実ながらもそうと捉えていい状況・事態であるという話し手の判断を表す点は共通するが、「らしい」が根拠の客観性に依存するのに対し、「ようだ」は話し手自身の主観的根拠に依存する判断に使用されるという違いがあると述べた。

ところが、両者の違いを根拠の主観・客観性で説明することには限界があり、さらに、根拠自体の主観・客観性を区分する基準を設定することも容易ではない。すなわち、以下の例(38)～(39)のように、発話時において、同一状況を根拠とする事態の真偽可否について、話し手が判断を行う際に、両形式は置き換えられる場合が多いが、このような場合において、根拠自体の主観・客観性を判定できる客観的な基準を設けることが容易ではないと思われる。

(38)頭がぼーっとしてきた。どうやら酔ったようだ/らしい。

(39)太郎が顔をしかめている。どこか痛いようだ/らしい。

②推量根拠になる話し手の体験・観察の直・間接性—寺村(1984)

推量根拠の直・間接性によって、両形式の違いを捉えた研究として、寺村(1984)が挙げら

れる。つまり、話し手が推量判断に必要な何らかの根拠を話者自身の直接的体験や観察による判断には「ようだ」であり、外部や他者から得たいわゆる間接的根拠に基づく判断の場合には「らしい」が用いられるという見解である。しかし、以下の例文(40)～(43)からも確認できるように、判断根拠の直接・間接性という基準では両者の違いを究明することができない。以下の例文はすべて、話し手が発話時に現場で入手した直・間接根拠に基づいた判断であり、両者すべて置き換えが可能であることを示す現象であり、両形式の互換性が見られる。そのため、判断根拠の直・間接性だけで、両形式の本質的な違いを究明するには限界があると思われる。

(40) 母はいるはずだが答えないところを見ると外出しているようだ/らしい。

(41) (人気を感じて)隣の部屋に誰かいるようだ/らしい。

(42) しばらく見ていると、どうも彼女らの話しているのは日本語ではないようだ/らしい。

(43) 専門家の判断によると、景気は徐々に回復していくようだ/らしい。

③事態に対する話し手の心理的な距離の遠近ー 早津(1988)

早津(1988)では前述した寺村(1984)のような根拠の直接・間接性だけでは両者の違いは規定できず、事態に対する話し手の心理的距離の遠近という観点を加えて両者の相違を捉えようとしている。すなわち、話し手の事柄に対する心理的距離の違いによって、両形式の弁別性を捉えようとした。早津(1988)は事態と話者の心理的距離が近い場合は「ようだ」を用い、事態と話者の心理的距離が遠い場合は「らしい」が用いられると述べている。例えば、同じ判断の対象となる事態に対して、以下の例文(44)では、話し手が事態を自分に身近なもの、つまり、自分に近い立場のものとして捉えているが、例文(45)では、話し手が事態を自分に離れているものであり、話し手自身に遠い立場のものとして捉えているという違いがあると述べている。

(44) 新聞で見たが、この間の地震によるメキシコの被害はたいへんなもののようですね。
(例文(18) 再掲)

(45) 新聞で見たが、この間の地震によるメキシコの被害はたいへんなものらしいですね
(例文(19) 再掲)

確かに、早津の指摘の通り、両者の違いは寺村(1984)が述べたような根拠や体験の直接・間接性では規定できない。早津の見方には以下のような疑問点が生じる。

一つ目は、ある事柄に対する話し手の心理的距離の遠近を客観的に証明できる方法や基準について述べていない。

二つ目は、もし、両形式の弁別性が話し手の心理的な変化によって、規定できるのであれば、ある事態成立の真偽判断に対する話し手の捉え方によって、両形式は常に置き換えが可能になる場合も想定できる。しかし、実際の例文を検討すると、ある一方しか許容できない場合もあるので、心理的距離の遠近という見方は再検討する必要があると思われる。

④推定の確信度の違いー 益岡(2000)

益岡(2000)は確信度に基づいて、両形式の差異を捉えている。つまり、「ようだ」は確信度が高い推量形式、「らしい」は確信度が低い推量形式として規定している。この主張を証明するため、以下のような程度副詞との呼応関係をテストした。例えば、以下の例文(46)～(49)の場合には「ようだ」「らしい」両方が自然に用いられる。

(46) 隣の部屋に誰かいるようだ。(例文(22) 再掲)

(47) 隣の部屋に誰かいるらしい。(例文(23) 再掲)

(48) 間違いなく、隣の部屋に誰かいるようだ。(例文(24) 再掲)

(49)? 間違いなく、隣の部屋に誰かいるらしい。(例文(25) 再掲)

ところが、益岡(2000)は上の例文(48)～(49)のように、「間違いなく」のような確信度の高い副詞を添えてみると許容度に差が生じると述べている。益岡(2000)は判断情報の直・間接性や根拠の主・客観性とは関係がなく、確信度により、両形式が使い分けられると述べた。さらに、外部情報に基づく推量判断を表す場合には話し手は事態の真偽性判断に関与することになると言及しながら、以下のような例文(50)～(51)を挙げている。

(50)*医者の話ではどうやら胃に問題があるようだが、本当にそんなことがあるだろうか。

(51)? 医者の話ではどうやら胃に問題があるらしいが、本当にそんなことがあるだろうか。

益岡(2000)は上の例文(50)の方が例文(51)より許容度が低いことは、「ようだ」が「らしい」より推量された判断に対する確信度が高いということを証明してくれると述べている。したがって、その事態の真偽性に対して疑念を表すことは矛盾を引き起こすことになる」と述べている。また、この場合、その矛盾の程度は「ようだ」が「らしい」よりも高いという点が注目されると言及している。確かに、益岡が挙げた例を見ると、両者は確信度の差異があるように思われるので、上記したその他の観点よりは説得力があると考えられる。しかし、確信度の問題と関連して、再検討しなければならない点もあると思われる。

⑤推論過程の有無－ 菊池(2000)

菊池(2000)によると、両形式すべて直接観察に基づいて判断することが可能であるが、話し手の推論過程の有無という観点から見ると、両形式の違いが明確に捉えることができると述べている。すなわち、推論過程がない直接判断には「ようだ」、推論過程を伴う判断には「らしい」が用いられると述べた。

(52) (古くなった食べ物を嗅ぎながら) 食べないほうがいいようだ/*らしい。

(例(26) 再掲)

(53) (料理をしながら) あと五分ぐらい煮たほうがいいようだ/*らしい。

菊池(2000)は上の例文(52)～(53)のように、話し手が直接体験し、推論を加える余地なく、観察あるいは体験に密着した一体のものとして観察対象の様子を捉える場合、「ようだ」を使い、「らしい」は用いられないと述べている。一方、前掲した以下の例文(54)～(55)のように「らしい」は話し手の直接観察に密着して対象の様子を述べるものではなく、推論を伴ったり伝聞に基づいたりして判断内容を述べる場合、「ようだ」は用いられないと言及した。

(54) 我々のようなものには想像もつかないが、人間の身体は 60 兆個の細胞からできているらしい/*ようだ。(例文(27) 再掲)

(55) あの秘書は愚鈍なように見えるが、あのやり手の社長が手をはなさないのだから、あれでなかなか有能? なようだ/らしい。(例文(28) 再掲)

上記した見解に基づいて、菊池(2000)は「ようだ」「らしい」両者の相違の要点を次のように主張した。つまり、観察対象に密着して判断内容や対象の様子が述べられる場合、すなわち、話し手の推論過程を想定できない場合は「ようだ」、観察から距離をおいて、推論を介在させ、あるいはそもそも情報の入手が伝聞に基づいて行われる場合は「らしい」が用いられると捉えている。ところが両者の違いを観察対象への密着性による推論過程の有無で捉えた点には疑問が生じる。両形式は以下の例文(57)～(58)からも分かるように、判断に

おける話し手の推論過程を想定できる場合にも自然に用いられる。基本的に推量判断というのは何らかの根拠に基づいて、推論過程を経て最終的な判断に至ると考えられる。また、以下の例文(56)～(57)も話し手が捉えた根拠に基づいて、推論過程を経て判断に至っていると捉えることができる。基本的にすべての推量判断は「事態認識→推論→最終的判断」という一連の認知過程を経ると考えられる。

(56) パソコンの電源が入らない。壊れてしまったようだ/らしい。

(57) デパートの中で子供が一人で泣いている。迷子になったようだ/らしい。

以上で述べたような先行研究からも確認できるように、「ようだ」「らしい」の推量意味の違いに関する分析は多様な観点から分析がなされてきた。その中でも、「根拠性格の違い」「事態に対する話者の心理的態度」「事態に対する確信度の違い」などの基準が両者を区分する一般的な見解として受けられてきた。このような従来の見方は基本的に「ようだ」「らしい」はいずれもある根拠に基づいた推量を表すという共通の意味を持っていることを前提としながらも、その上で両者を区別するための意味特性を見出そうとする方向である。勿論、従来の見解のように、根拠の性格または心理的態度という異なる視点の導入によって新たな知見が得られる可能性はあるが、「ようだ」「らしい」が表す推量意味の本質を探る場合に従来のような単一基準や特性による分析では両形式の間に見られる本質の違いを説明することができない現象が見られる点を看過している。また、研究方法上においても、多くの用例分析に基づいた帰納的分析ではなく、研究者が直観に頼って作った少数の例文に頼った分析が多かった点が挙げられる。

2.1.4. 韓国語形式の先行研究

2.1.4.1. 「-ㄹ-」と「-을것이-」の先行研究

従来の韓国語文法において、「-ㄹ-」と「-을것이-」の両形式に対する研究は多様な観点から活発に論議されてきた。ここには次のような背景または理由がある。

一つ目は、これらの形式の文法範疇を巡る論議である。すなわち、これらの形式は「時制形式」なのか、それとも「推量の叙法形式」なのかという点である。

二つ目は、これらの形式の意味を文法範疇として捉えるか、それとも、意味範疇として位置づけるのかという問題である。特に、「-을것이-」は連体形語尾「을」＋形式名詞「것」＋指定詞「이」という三つの形態素の複合形式であるが、この形式の文法性はどのように規定すべきなのかという問題と関わっている。

三つ目は、韓国語における推量モダリティ形式の認定範囲と関わる問題である。

四つ目は、両形式の文法範疇を巡る論議とは別に、両形式の推量意味及び用法上の違いをどういう基準または観点で捉えるかという点である。

上記のような諸問題について、これまで多様な観点から分析がなされてきたが、未だに統一的な見解の一致が見られない。以下ではこれらの諸問題と関連し、従来の韓国語研究で論じられてきた主な見解を概観する。まず、先語末語尾であり、典型的な文法形式としての推量叙法形式である「-ㄹ-」の先行研究を概観する。

韓国語研究において、「-ㄹ-」は概ね二つの観点から分析されてきた。一つは、基本的に未来時制(テンス)の側面で推量叙法形式とみる立場であり、もう一つは、推量叙法形式でありながら、未来時制にも用いられると把握する見方である。これは「-ㄹ-」の文法的範疇をめぐる議論である。前者の場合は韓国語の文法研究の初期から論議された現象である。고영

근・남기심(1990:307)¹⁵では「-겠-」を未来時制の形態と規定し、副次的な意味で推量の意味を考慮した。一方、張京姬(1985)や서정수(1996、2006)などをはじめ、最近の韓国語研究では主に「-겠-」の本質を未来時制ではなく、推量叙法として規定し、未来事態に対する推定的方式で未来時制を表すとした。

一方、「-을것이-」が韓国語モダリティ研究の中で、一つの大きな研究対象として取り扱われてきたのは「-겠-」との違いが関心の対象となった1970年代以降であった。「-을것이-」は、主に「-겠-」のように、単一の文法形態素で推量叙法の意味を担う形式ではなく、上記のような複合形式で推量の意味を表すものである。そのため、1970年代後半以前までは韓国語の文法研究であまり注目されて来なかった。このような背景には従来の韓国語文法研究において、叙法(ムードまたはモダリティ)を捉える普遍的な認識と深く関わっている。すなわち、叙法に関する共通的な認識は叙法を文法形式である用言の語尾で実現する文法範疇として規定してきた点と深く関わっている。¹⁶ そのため、発話時における話し手の心理的な態度という叙法の意味を重視するよりは文法形式で表現されるべきであるという形式的な側面が優先されてきた。そのため、現在の韓国語の叙法研究においても文法形式としての推量叙法を表す形式は「-겠(gess)-」のような非常に制限的な語尾要素に限られてきた。このような背景で、本論文の考察対象でもある「-을것이-」「-은/는/을 것 같다」「-은/는/을 모양이다」のように、複合形式の形で推量意味を表す形式は韓国語の叙法研究ではあまり関心の対象にならなかった。

従来、韓国語研究において、「-겠-」の分析は推量用法上の特性において、類似性を見せる「-을것이-」との違いを究明する研究が主流であった。その理由は両者の推量意味や用法の面で最も類似性が見られると同時に、両者の間には特徴的な推量用法上の相違も見られるため、その弁別的意味を究明することが簡単ではないからである。これまで「-겠-」と「-을것이-」の推量意味については主に「判断根拠の性格」「確実性の強弱」「結果推量」という観点から分析されてきた。本論文では上記のような観点に基づいて、両形式の違いを捉えてきた代表的先行研究である서정수(1978)、이기용(1978)、成耆徹(1979)、안명철(1983)、張京姬(1985)、김규철(1988)、이기중(2001)、이미혜(2005)などを中心に概観する。

まず、서정수(1978)と이기용(1978)では両形式の違いを「推量根拠の主・客観性」及び「確実性の程度」という観点から論議してきた。서정수(1978)では「-을것이-」が「-겠-」より確実性が高い推量を表すと捉えたのに対し、이기용(1978)は「-겠-」が「-을것이-」より確実性が高い形式であるという相反する見解を示している。

また、両形式の推量意味の違いを究明するために、従来の韓国語の先行研究で最も活発に論議されてきた観点は判断根拠の性格の違いによって、両形式の違いを究明しようとした観点である。このような観点から両形式の違いを究明しようとした代表的な研究には成耆徹(1979)、안명철(1983)、김규철(1988)、이미혜(2005)などが挙げられる。これらの研究に見られる両形式の違いに対する共通的な認識は「-겠-」は現場または現在経験情報に基づいた推量判断に用いられるのに対し、「-을것이-」は過去または発話時以前の経験情報に基づいた推量判断に用いられるものだという認識である。例えば、成(1979)では以下の例文(58)を挙げながら、両形式の推量意味の違いを根拠獲得の時間性の違いによって区別した。

(58) a. (구름낀 하늘의 모양을 보며) 이제 곧 비가 오겠다. (gess) (成(1979))

(曇った空の様子を見て)もうすぐ、雨が降る+gess。

(58) b. 비가 올거야(eulgeosi)もうすぐ、雨が降る+eulgeosi。(成(1979))

成(1979)では、現在の天気が晴れているが、昨日、天気予報では今日雨が降るという既得

¹⁵ 고영근・남기심(1990)では未来時制を表す形式として「-겠-」を挙げながら、未来時制の「-겠-」が現在の事件や過去の事態を推測する場合にも使えると主張している。

¹⁶ 高永根(2004:29)、서정수(1996:301)を参照されたい。

知識を持っている場合は、上の例文(58b)のように、「-을것이-」が用いられるのに対し、天気予報などの既得情報と関係なく、現在の空の様子だけを根拠とする判断には、上の例文(58a)の「-겠-」が用いられると述べている。成(1979)の研究とほぼ同様の見解を指摘した研究として、안명철(1983)、김규철(1988)、이미혜(2005)などが挙げられる。例えば、안(1983)は成(1979)と同様に、「-겠-」の意味を「判断根拠の現場性」から抽出し、「-을것이-」との違いを区分した。안(1983)では以下の例文(59)を挙げながら、「-겠-」は時空間的に近い現場根拠に基づいた判断に用いるのに対し、「-을것이-」は現場根拠と関係なく、推定の対象になる事態自体に関心を置いた推量として両者の違いを捉えた。

(59) a. 열차는 오후 2시에 출발할 것이다(eulgeosi). (안(1983))

(電車は午後2時に出発するだろう。)

(59) b. 열차는 오후 2시에 출발하겠다.(gess) (안(1983))

(電車は午後2時に出発するだろう。)

また、用語上の違いはあるが、김규철(1988)は知覚心理学で述べる「모습」「바탕」という理論に基づいて、「-겠-」は新情報に基づいた推定を表すのに対し、「-을것이-」は旧情報または既に持っている情報に基づいた推定を表す場合に用いられると言及した。その他に、이미혜(2005)も両形式の違いを「現場の知覚情報」と「過去の経験的情報」という観点から両形式の違いを捉え、基本的に、成(1979)と안(1983) 김(1988)の見解を受け入れていると考えられる。一方、張京姬(1985)、이기중(2001)では判断の根拠が原因になり、推定される事実が結果になる場合は「-겠-」が用いられるため、「-겠-」は結果推量を表すのに対し、「-을것이-」は「不確実性」の意味を表すと述べた。これまでの韓国語研究で両形式の違いに関する主な観点をまとめると、以下の表1のようである。

表1 「-겠-(gess)」と「-을것이(eulgeosi)」の違いに関する従来の研究成果

先行研究	-겠-	-을 것이-
신창순(1975)	客観的な根拠が要求される	客観的根拠が要らない
이기용(1978)	事態に対する高い確信度と主観的根拠に基づいた判断	事態に対する低い確信度と客観的根拠に基づいた判断
서정수(1978)	客観的根拠が要らない 事態に対する低い確信度	客観的根拠が要る。 事態に対する高い確信度
成耆徹(1979)	発話時の現在経験情報	過去経験情報
김차균(1981)	発話時の状況判断	発話時以前の状況判断
안명철(1983)	現在の状況を根拠とする	推定事態に注目する
張京姬(1985)	結果推量に用いる	不確実性
김규철(1988)	新情報に基づいた推定	旧情報に基づいた推定
이기중(2001)	結果推量	不確実性
이미혜(2005)	現場の知覚情報に基づいた主観的推測	過去の直接・間接経験を根拠とした背景知識に基づいた判断

上記した表1からも分かるように、両者の違いに関するこれまで主な観点は概ね「判断根拠の主・客観性」「事態成立に対する確信度の高低」「根拠獲得の時間性」「結果推量」などのような観点から分析がなされてきた。上記した両形式の研究成果を観点によって要約すると以下の通りである。

①判断根拠の主・客観性- 신창순(1975) 서정수(1978)

서정수(1978): 主観的-「-겠-」 客観的-「-을것이-」

신창순(1975): 客観的-「-겠-」 主観的-「-을것이-」

- ②事態成立に対する確実性の高低 : 이기용(1978) 서정수(1978)
 이(1978): 高い確信度-「-겠-」 低い確信度-「-을것이-」
 서(1978b): 高い確信度-「-을것이-」 低い確信度-「-겠-」
- ③根拠獲得の時間性-成者徹(1979) 안명철(1983) 김차균(1981) 김규철(1988)
 이미혜(2005) : 現在情報「-겠-」 既得情報:「-을것이-」
- ④推量と因果性観点: 장경희(1985) 이기중(2001)
 結果推量-「-겠-」 不確実性-「-을것이-」

2.1.4.2. 「것 같다」 と 「모양이다」 の先行研究

前述したように、これまでの韓国語の叙法研究が文法範疇という徹底的な形式優先の研究に集中してきたため、複合形式としての推量意味を担う「것 같다」「모양이다」などの補助用言形式の研究は韓国語の叙法研究であり関心の対象にならなかった。そのため、前述した「-겠-」に比べて、上記のような形式に対する研究はあまり検討されて来なかった。しかし、近年になってこれらの形式は概ね二つの観点から論議されてきた。

一つは、外国語としての韓国語教育の現場において、教育の便宜や効果を考慮し、これらの形式を推量モダリティ形式として位置づけた場合である。このような観点からの代表的な研究として 李美惠 (2005)が挙げられる。もう一つは、上記した徹底的な文法形式ではなく、話し手の事態に対する不確かな態度という「推量」の意味的側面を重視したものである。近年になっては、 차현실(1986)、엄정호(1990) 이기중(2001)、이혜용(2003)などの研究では上記のような二つの観点からの分析が増えている。

以下では後述するこれまでの対照研究で日本語の「ようだ」「らしい」に最も相応する形式として規定されてきた韓国語の疑似推量形式「것 같다」と「모양이다」の意味と用法に対する主な先行研究を概観する。従来の研究における「것 같다」と「모양이다」の推量特性の観点からの分析は主に、判断根拠の性格を通して、当該形式の意味を分析した研究がほとんどである。まず、両形式に関する主な代表的な先行研究である 차(1986)、이기중(2001)を概観し、「것 같다」「모양이다」の推量特性がどのような観点から分析されてきたのかを検討する。차(1986)では「것 같다」の推量意味を把握するために、「같다(同じだ)」の意味を分析した。차(1986)では「같다(同じだ)」の意味を話し手の内的直観と外的状況がすべて作用する「±自発的」な根拠特性に基いて、「것 같다」は命題内容に対する話し手の主観的判断を表す際に用いる形式であるとした。例えば、 차(1986)では以下の例文(60)～(61)を挙げて、「것 같다」は判断根拠が直感などの内的根拠と外的根拠の場合にすべて制限を受けず、使用できるとした。結局、차(1986)の研究は判断根拠の制限を受けないという点から「것 같다」の推量特性を分析した。

(60) 내 직관에 이 열차가 막차인 것 같다. (geosgatttda) (차현실 1986)

(私の直観では、この電車が終電である+geosgatttda)

(61) (옆에 사람들이 하는 이야기를 듣고) 이 열차가 막차인 것 같다. (geosgatttda)

(隣の人達の話を聞いて) この電車が終電である+geosgatttda。)

また、강정희(1992)は「것 같다」構文の多義的意味や用法を視野に入れて、諸用法の関連性について述べている。すなわち、「것 같다」が持っている多様な意味である「推量」「比況」「仮定」などの意味には基本的に「類似性に基づいた比較」という意味が共通的に内在されているという点を述べた。강정희(1992)は一般的に「같다」の意味を以下の例文(62)を挙げて、「同一」「一つ」「同じ」であると解釈する傾向があると言う点を述べて、以下のような例文を挙げた。

(62) a. A는 B와 같다. (AとBは同じだ。)

(62) b. 같이 가는 사람. (一緒に行く人)

(62) c. 원숭이와 침팬지는 같은(同じ) 부류에 속한다.

その他に、이기중(2001)も基本的に강정희(1992)と同様に、「것같다」構文が持っている多義的意味の認識論的関連性を重視し、「것같다」の意味を分析した。이기중(2001)では「것같다」が表すモダリティの意味及び用法について、事実ではないが、事実に近い認識状態を表す「疑似判断」であると述べた。また、上記した이(2001)は차(1986)と同様に、「것같다」は推量判断の根拠において制約を受けない、根拠の主・客観において無標的であると述べた。さらに「것같다」は話し手の対象位置に対する視点や根拠の特性から、最も主観性が高い形式であるとした。そのため、「것같다」は基本的にすべての発話状況に用いられるとともに、語用論的状況によって、婉曲用法や聞き手への配慮などにも生産的に用いられると述べている。

一方、「모양이다」の構成要素「모양(模様)」は実質名詞と形式名詞という二つの用法を持っているが、推量モダリティの意味は「모양」+「이다」の形式として表れる。すなわち、「모양이다」は連体形語尾「-는/을」+実質名詞「모양」+指定詞「이다」という三つの形態素の結合によって構成された複合形式として推量モダリティの意味を担う。従来の研究、例えば、김정혜(1997)や이기중(2000)では「은/을 모양이다」の推量意味は実質名詞「모양(模様)」の意味と関わっている。ただ、「모양이다」が推量の意味を表す際には実質名詞「모양(模様)」の意味が後退し、形式名詞として機能することになると解釈している。

従来、推量モダリティ形式としての「모양이다¹⁷」に関する研究は主に김정혜(1997)、이기중(2001)、이미혜(2005)などで言及されてきた。これらの先行研究の共通の見解を簡単に述べると、「모양이다」構文は主に現場の知覚情報に基づいた判断を表す際に用いられる客観的推測であると言う点である。そのため、話し手の内的情報や経験に基づいた判断には使用できないと捉えている。その他に、金東郁(2000)は後述する日本語の「ようだ」「らしい」に適用させた「私が思うには」という語句との共起テストを韓国語形式にも適用し、「것같다」は命題内容に対する話者の主体的態度を表す「主体推量」であり、「모양이다」は命題内容に対する第3者的態度を表す「客体推量」として規定している。

以上で述べた韓国語の疑似推量形式「것같다」と「모양이다」の意味と形式間の違いに対する従来の主な見解の要点をまとめると、以下の①～③通りである。

①命題内容に対する話者の主観的判断-차현실(1986)

차현실(1986)では「것같다」の意味を話者の内的直観や外的根拠の両方を判断根拠とするという点から、命題内容に対する話者の主観的判断を表す形式として捉えている。このような見方は「것같다」が根拠の主・客観性において無標的であるという点を立証すると述べた。

②判断根拠の特性-이미혜(2005)、이기중(2001)、차현실(1986)

これらの研究では「것같다」は推量判断の根拠に制約を受けないと述べた。また、「모양이다」は現場の知覚情報に基づいた推量判断に用いる形式であるとした。

③命題内容に対する話し手の叙述態度-金東郁(2000)

「것같다」：主体推量 「모양이다」：客体推量

韓国語の「것같다」「모양이다」の先行研究の分析も基本的に主に、「根拠の性格」「事

¹⁷ 「모양이다」と推量意味及び用法上の特性において、最も類似する振る舞いを見せる形式として「-나/가보다」がある。従来の対照研究ではこの形式を「모양이다」と共に、「らしい」に対応する形式であるとした。「-나/가보다」の構成方式は「모양이다」とは異なるが、ほぼ同様の振る舞いを見せる理由は両形式の構成要素「모양」と「보다」の語彙的意味から派生する特性が似ているためである。김정혜(1997)は「모양(様)」と「보다(見る)」の語彙的意味はすべて「視覚を通して事態や事物を知覚するものである」という意味を共有していると述べた。このような語彙的意味の類似性は両形式の推量意味及び用法上の類似性と深く関わっている。

態に対する話者の叙述態度」などの基準によって個別形式の推量意味を分析する方法を取ってきたという点で、前述した日本語形式の場合と類似するところが多い。

2.1.5. 先行研究の残された課題

2.1.5.1. 「-ㄹ-」と「-을것이-」

以上のように、韓国語推量形式「-ㄹ-」「-을것이-」は多様な観点から分析がなされてきたが、これらの研究に見られる共通の問題は次の二点にまとめられる。以下では先行研究の主な分析を概観し、未解決の課題について考えてみる。

一つ目は、韓国語研究において分析されてきた見解はほとんど研究者が作った少数の作例に基づいた直感的な分析が主であるため、多くの用例検討に基づいた実証的な分析にはなっていない点である。

二つ目は、両形式の意味を上記のような制限された小数の例文に基づいて、主に「根拠性格の違い」「確信度の高低」「叙述態度の違い」などのようなある特定の単一基準で把握した点である。以下では先行研究の主な分析を概観し、未解決の課題について考えてみる。

まず、両形式の違いを区別する基準として最も多く言及されてきた推量根拠と関わる問題について、各々の見解の内容とその問題点を考えてみる。

上記した研究の中で、이기용(1978)と서정수(1978)は両形式の違いを根拠の主・客観性によって捉えている。つまり、이기용(1978)では「-ㄹ-」は客観的根拠を必要とする確信度の高い推量判断に用いられるのに対し、서정수(1978)では「-을것이-」が「-ㄹ-」より客観的根拠に基づいた確信度の高い推量判断に用いられるという反対の立場を提示した。しかし、根拠の客観・主観性の捉え方や区別基準に対する説明がなく、恣意的に作った例文を用いて、直感的に現象を捉えている点で限界が見られる。例えば、以下の例文(63)～(65)のように、同一状況や場面を根拠とする判断に両者が共に用いられる場合、どのような基準で根拠の主・客観性や確信度の高低を捉えることができるのかという点については疑問が生じる。すなわち、これまでの韓国語研究に見られる共通的な問題点は上記の見方に対する客観的な基準や検証をしていない点である。

(63) a. 서현이는 키가 커서 불편하ㄹ다(gess).

(ソヒョンは背が高く不便+gessda.)

(63) b. 서현이는 키가 커서 불편할 것이다(eulgeosi).

(ソヒョンは背が高く不便+gessda.)

(64) (처마밑에 고드름이 걸려있는 것을 보고) 밖은 춥다(gess).

을것이다(eulgeosi).

(軒下にツララが垂れ下がっているのを見て) 外は寒い+gessda/eulgeosida.)

(65) 지금쯤 이 답답한 친구가 어떻게 하고 있을까? 틀림없이 뒷골목 어느 술집에 앉아서 소주잔을 기울이고 있다(gess) 지/을것이다(eulgeosi)다.

(今頃、むさ苦しい友人はどうしているのだろう。きっと裏通りのバーに座って、焼酎の杯を傾けている+gess/eulgeosi.)

また、両形式の違いを根拠獲得の時間性という観点から分析した点も多く見られる。例えば、成耆徹(1979)、김차균(1981)、안명철(1983)、이미혜(2005)などの見方に従うと、「-ㄹ-」は現場または現在経験情報に基づいた推量判断に用いられるのに対し、「-을것이-」は過去または発話時以前の経験情報に基づいた推量判断に用いられるものである。たしかに、上記した成(1979)や김(1981)などの見解は部分的には「-을것이-」より「-ㄹ-」が現在経験または現在情報に基づいた判断に自然に用いられるという韓国語話者の直感と合う側面がある。しかし、これらの研究も研究者が作った少数の例文に基づいた分析であるため、「-

ㄹ-」の推量意味と用法上の特性を正確に捉えているとは限らない。例えば、張京姫(1985)でも述べられた通り、以下の例文(66)のように、過去情報に基づいた推量判断に「-ㄹ-」が用いられる場合もあるため、情報獲得の時間性という単一基準の適用から両形式の根本的な違いを解明したとは言えないと考えられる。例えば、以下の例文(66)において、根拠となる経験情報の内容は「나도 어제 가서 그 방을 보았다(私も昨日行って、その部屋を見た)」という明らかな過去情報(既得情報)であるにも関わらず、「-ㄹ-」を用いることができる。この現象が意味するのは、結局、情報獲得の時間性という観点からは両形式の違いを完全に説明することができない点を示すものである。

(66) 나도 어제 가서 봤는데, 그 방은 서클 룸으로 너무 작ㄹ어.

(私も昨日行って見たが、その部屋はサークルルームとしてはあまりにも小さい+gess)

また、「-ㄹ-」の推量意味に対し、注目すべき研究として 張京姫(1985)と 이기중(2001)が挙げられる。張(1985)と 이(2001)は両形式の違いについて、「-ㄹ-」は「結果推量」を表すのに対し、「-을것아-」は「不確実性」を表すと述べた。

張(1985)は「-ㄹ-」の意味について、判断根拠とその根拠から導かれる帰結が因果関係でありながら、推量根拠が原因になり、そこから導かれる帰結が結果になる状況である「結果事態の推量」に用いられる形式であると捉えた。それに対し、「-을것아-」は「不確実性」を表すとした。張(1985)によると、以下の例文(67)のように、話者であるBが相手の発話から得た新しい事実を根拠に推量判断を行う場合には「-ㄹ-」が用いられると述べた。

(67) A: 아버지 화 나ㄹ어. (お父さん、怒った。)

B: 또, 혈압 오ㄹ시ㄹ다(gess). (また、血圧、上がる+gess)

一方、「-ㄹ-」は以下の例文(68)のように、「結果推量」の意味から「結果」の意味素性を失い、「推量」の意味だけを表すと述べた。すなわち、「-ㄹ-」の意味を「結果推量」と「推量」の二つを認めている。一方、「-을것아-」は事態に対する話者の不確実性を表す形式であると述べた。ところが、張京姫(1985)の見解には以下のような問題点が見られる。

一つ目は、方法論的問題が挙げられる。前述したその他の研究と同様に、直感的に作った少数の例文に基づいて議論を展開しているため、主張に対する妥当性を得ることができない。

二つ目は、以下の例文(68)の「-ㄹ-」は、上の例文(67)の「結果推量」の反対になる「原因推量」として捉えることができる。

(68) A: 순이는 오늘 지각했어요. (スンニが今日遅刻しました)

B: 기차가 연착했ㄹ지. (列車が遅れた+gess。)

上の例文(68)は「スンニが今日遅刻した」という結果事態から、その原因として「列車が遅れた」を推量判断していると捉えることができる。張(1985)の研究では、このような「原因推量」における「-ㄹ-」の用法を認めていない理由は述べていない。

三つ目は、「-ㄹ-」の意味を「結果推量」と「推量」に区分すると、両意味に共通する「-ㄹ-」の中心的意味は「推量」と把握することができる。しかし、このような捉え方は問題がある。推量の意味を上記のように捉えると、「-ㄹ-」だけではなく、「-을것아-」を含め、多くの形式に「推量」の意味を適用することができる。韓国語の場合、「推量」という意味はある特定の形式のみが持つ固有の意味ではなく、基本的に推量モダリティとしての意味を担っている多数の形式が共有する意味であるため、張(1985)の見解は再考の余地がある。

四つ目は、「-ㄹ-」「-을것아-」との違いを「結果推量」と「不確かさ」とであると捉えた点も再考の余地がある。以下の例文(69)～(71)からも分かるように、「-ㄹ-」だけではな

く、「-을것이-」もこれから起こる「結果事態の推量」に問題なく用いられる。例えば、以下の例文(69)は「昨日聞いた天気予報」から、「明日雨が降る」という発生可能な結果事態を推量判断している場合であり、「-을것이-」は自然に用いられる。また、前述した通り、「不確かさ」というのはすべての推量形式が共有している意味なので、「-을것이-」だけの推量特性と捉えるのは再考の余地がある。さらに、この両形式の違いを規定できる基準についても論じていない。

(69) 나, 어제 일기예보를 들었다. 내일 분명히 비가 올거야(eulgeosi)/겠다(gess).

(私、昨日、天気予報を聞いた。明日、必ず雨が降る+eulgeosi/gess.)

(70) 딸이 3월로 만6세가 되니까, 내년 초등학교에 들어가겠다(gess)/을것이다.

(eulgeosi)

(娘はこの3月で満6歳になるから、来年、小学校へ上がる+gess/eulgeosi.)

(71) 개구리가 우는 것을 보니, 또 비가 오겠다(gess)/을것이다. (eulgeosi)

(蛙が鳴いているところを見ると、また、雨が降る+gess/eulgeosi.)

また、以下の例文(72)のような場合は、両形式は「結果推量」だけではなく、「原因推量」に使われていると捉えることができる。例えば、以下の例文(72)は「地元の方で話す人たちの中に一人だけ標準語の人を見つけた」という結果事態から、その原因は「あの人は地元の人ではない」ためであると推量判断している場合であるが、「-겠-」が使われている。「-겠-」の推量特性において、「結果推量」の性格だけを認め、原因推量に用いられる「-겠-」の例文は単なる「推量」として捉えた点は説得力がないと思われる。

(72) (지방 사투리로 말하고 있는 사람들 중에, 한 사람만 표준어를 쓰는 사람을 보고)

저 사람은 지방 사람이 아니겠다(gess)/아닐 것이다. (eulgeosi)

(地元の方で話す人たちの中に一人だけ標準語の人を見つけて) あの人は地元の人ではない+gess/eulgeosi.)

その他にも、後述するが、両形式は使用される談話語用論的状况においても、多様な違いを見せるが、このような点については述べていない。特に、「-겠-」「-을것이-」が表面的に同一状況で共に使われる状況における両形式の違いをどう捉えるべきなのかという点などは論じていない。また、「-을것이-」の文法的性格及び推量モダリティ体系の中での位置づけなどについても考慮されていない。

以上のように、これまでの韓国語研究に見られる共通的問題は研究者の直感や少数の例文に基づいた直観的な分析が主流であったため、当該形式の意味及び用法上の異同を綿密に分析していない点である。勿論、研究者の少数の作例に依存した上記した諸研究の見解は直感的に妥当性が認められる部分もあるが、このような研究方法だけでは各々の形式基本的な推量意味と用法上の特性及び両形式の異同を実証的に究明することができないと思われる。

2.1.5.2. 「것같다」と「모양이다」

前述した通り、従来の先行研究では「것같다」と「모양이다」の推量意味の違いを「判断根拠の特性」「叙述態度」などの単一基準の適用によって捉えてきた。

ところが、本論文の立場は当該形式の推量意味と用法上の違い及び形式間の異同を体系的に捉えるためには、特定の単一基準の適用だけでは把握できないと考える。また、各々の形式の推量判断に関わる多様な語用論的特性を精密に検討せずに、研究者の直観に基づいて恣意的に作った少数の例文だけで、諸形式の意味と用法及び形式間の異同を把握することは限界があると思われる。両形式に対する韓国語先行研究の残された課題は概ね以下の①～③にまとめられる。

①両形式の推量意味と用法上の異同に対する精密な分析

従来の韓国語研究において、「것 같다」「모양이다」の両形式の推量意味と用法上の異同に対する綿密な分析には至っていない。

②両形式の推量用法上のズレが生じる理由の究明

韓国語形式「것 같다」「모양이다」などの個別形式間の推量意味の違いを主に「根拠範囲や性格」「叙述態度」などのような単一観点で直感的に分析した点も再考の余地がある。また、これまでの研究で看過されてきた点は「것 같다」と「모양이다」が担っている推量意味と用法上の違いに対する緻密な分析である。例えば、両形式の推量用法上のズレが生じる重要な理由と個別形式の構成要素である「모양」「같다」などの原形的意味(root meaning)との関連性について、注目されて来なかった点もその一例となり得る。

③両形式の文法的性格と推量モダリティ体系の中での位置づけ

従来の研究では「것 같다」「모양이다」などが推量の意味を表す形式である点は述べているものの、これらの形式が推量モダリティ体系の中で、どのように位置づけられるかという問題については明確な立場を示していない。これは事態に対する話し手の主観的態度というモダリティ自体の意味的側面よりは、先語末語尾「-겠-」のような文法的な形式で推量叙法を表す形式的な側面の研究が優先されてきた韓国語研究の普遍的認識と深く関わっている。そのため、「것 같다」「모양이다」のような複合形式として推量の意味機能を担っている形式は関心の対象にならなかったと見受けられる。例えば、日本語の「ようだ」「らしい」の場合は「疑似推量モダリティ」として位置づけられている点からも分かるように、日本語文法では推量助動詞としてその文法的機能が規定されている。それに対し、韓国語の両形式はいくつかの形態素の結合による複合形式として推量の意味を表しているという点は言及されてきたものの、当該形式のモダリティ体系での位置づけ及び文法的性格などについては論じていない。そのため、両形式は日本語の「ようだ」「らしい」のように、推量助動詞または推量モダリティ形式として規定できるのかという問題について明確にする必要がある。

2.1.6. 日韓対照の先行研究

本節では本論文の中心的課題である日韓両言語の推量モダリティ形式の対照を目的とした代表的な先行研究である羅(1996)、金(1999)、尹(2003)を概観する。

2.1.6.1. 羅聖榮(1996)

羅(1996)は基本的に認識的モダリティ形式「だろう」と「ようだ」「らしい」を異なる範疇として捉えている。羅(1996)は「だろう」と「ようだ」「らしい」を「純粹判断型」と「根拠依存型」に二分して位置づけた。羅(1996)は「純粹判断型」を「推測」と「推量」の二つに下位分類し、「だろう」を「推量」という範疇に位置づけている。一方「根拠依存判断型」を「推定」と「様態」に二分し、「ようだ」「らしい」を「推定」という下位範疇に位置づけている。羅(1996)は本論文の考察形式の対応関係を以下の表2のように捉えている。

表 2

言語		日本語	韓国語
分類基準			
純粹判断型 ¹⁸ の「推量」		「だろう」	「겠다」「을 것이다」
根拠依存判断型	直接的根拠	「ようだ」	「것 같다」「듯하다」
	間接的根拠	「らしい」	「모양이다」「가보다」

¹⁸ 羅(1996)は「だろう」を純粹判断型に属する推量形式に位置づけ、判断の根拠を特に文面上に表面化する意識がなく、単に話し手の想像世界による推量判断に用いる形式として捉えている。

まず、羅(1996)では「だろう」と韓国語形式の対応関係について以下の点を述べた。羅(1996: 344)によると、「推量形」というのは、ある命題内容の真に対する話し手の確信度が高く、判断の根拠があってもそれを特に表面化する意識がなく、それはあくまでも話し手の推量判断であることを表すモダリティとして規定している。このような見解は基本的に前述した寺村(1984)や三宅(1994、1995)などのような日本語研究の立場を受け入れているものである。羅はこのような「推量」の意味に相応しい日本語のモダリティ形式は「だろう」であり、これに対応する韓国語の推量形式は「겠다」と「을것이다」であると捉えた。

(73) 明日は雨が降るだろう。(내일은 비가 을것이다(eulgeosi) / 오겠다. (gess))

(74) 彼はもうパリに到着しただろう。

(그는 이제 파리에 도착했을 것이다(eulgeosi)/ 도착했겠다. (gess))

羅(1996)では上の例文(74)の場合は、日本語の「だろう」に対応する韓国語の推量形式は「을것이다」「겠다」であると述べた。羅(1996)によると、日本語の場合は上の例文(73)～(74)のように、推量を表す場合、判断根拠の性質に関係なく、「だろう」は許容可能であるのに対し、韓国語の「겠다」「을것이다」両形式は「内的根拠の主・客観性」によって区分されると述べた。すなわち、話し手が何らかの内的根拠に基づいて推量判断を行う場合、その内的根拠が客観的な場合には「을것이다」であり、内的根拠が主観的な場合は「-겠다」が用いられるという点で韓国語の両形式は微妙な差異があると述べている。したがって、上の例文(73)～(74)のように、文面に根拠が表面化されない場合は両者すべて成立するが、以下の例文(75)のように、内的根拠が客観的な場合は「-을것이-」だけが成立すると論じた。

(75) いくら説明しても、信仰のない彼には納得ができないだろう。

(아무리 설명해도, 신앙심이 없는 그는 납득 못할거야. (eulgeosi))

?납득 못하겠다. (gessda))

羅(1996)は上の例文(76)において、「겠다」の許容度が落ちる理由は「彼は納得できない」という話者の推量判断が「彼には信仰心がない」という客観的な根拠に基づくためであると言及した。すなわち、羅(1996)によれば、「을것이다」は内的根拠が客観性のある場合に使えるため、「겠다」より強い確信度を表すと述べた。そのため、「을것이다」は陳述温和的な性質がよく表れる婉曲のような表現にはあまり調和しないと述べている。また、羅(1996)では韓国語の「을것이다」は推量を表すのが主な意味であり、命題の主語の人称や述語にはあまり制約を受けず、用いられると述べた。一方、「겠다」の場合は推量の意味機能が表れる場合は一般的に命題の主語が一人称以外の場合であると述べた。命題の主語が一人称の場合「겠다」は話し手の意志を表す機能が優先するからであると述べている。羅(1996)で「だろう」に対応する韓国語の形式として規定した「겠다」「을것이다」の推量意味を要約すると以下の通りになる。

- ・ 「겠다」: ①内的根拠が主観的な場合に用いられる。
②陳述温和的な用法に使用される。
③命題の主語が一人称の場合には話し手の意志表現が優先される。
- ・ 「을것이다」: ①内的根拠が客観的な場合に用いられる。
②陳述温和的な用法には使用されない。

次に羅(1996)で「ようだ」「らしい」と類似する韓国語の両形式をどういう基準で、対応していると把握したのかについて検討する。羅(1996)では上記した表 2 でも確認した通り、「ようだ」「らしい」両形式と対応する韓国語形式をすべて「根拠依存判断型」という意味

範疇に位置づけている。韓国語の両形式に適用した「根拠依存判断型」という意味範疇の設定は基本的に Aoki(1986)、仁田(2000)、三宅(1995)などの研究で日本語形式「ようだ」「らしい」に適用した「証拠性判断」または「徴候性判断」という範疇を受容したものである。また、上記した表2からも分かるように、羅(1996)は「ようだ」「らしい」と対応する韓国語の形式を判断根拠の直接性・間接性という基準を適用し、両言語の対応関係を捉えている。これも基本的に寺村(1984)で「ようだ」「らしい」の使い分けの基準として述べた「判断根拠の直接・間接性」を受け入れたものである。羅(1996)は、この分類基準の妥当性を証明するため、以下の例文(76)～(77)を挙げている。例文(76)の場合は直接的根拠に基づいた判断であり、例文(77)は判断根拠の間接性に関連する例文である。

(76) この間、一度行ったことがあるけど、入り口は向こうのようだ。 羅(1996)

(일전에, 한번 가본적이 있는데 입구는 저쪽인 것 같다(geosgattda)/듯하다.

(77) A: みんな傘を畳んで歩いているよ。(모두 우산을 접고 다니고 있는데요)

B: (直接に確かめないで相手の話を聞いて)

雨が止んだらしい。비가 그친 모양이다. (moyangida)/가보다(gaboda).

2.1.6.2. 金東郁(1999)

金(1999)では「だろう」と「ようだ」「らしい」を推量モダリティ体系の中に位置づけるが、形式間の本質的属性の違いを反映し、「だろう」と「ようだ」「らしい」を「根拠非前提型¹⁹」と「根拠前提型」という異なる範疇に位置づけた。さらに、このような意味範疇に属する韓国語形式を選定し、両言語の対応関係を以下の表3のように捉えている。

表3 金(1999)

言語 分類基準		日本語	韓国語
根拠非前提型		「だろう」	「겠지」「을 것이다」
根拠前提型	主体推量 ²⁰	「ようだ」	「것 같다」「듯하다」
	客体推量 ²¹	「らしい」	「가보다」「모양이다」

まず、金(1999)は「だろう」と韓国語形式の対応関係について以下のように捉えている。金(1999)は上の表3のように、「だろう」と対応する韓国語の両形式を同じく「根拠非前提型」に位置づけて、両言語の対応関係を捉えている。金(1999)で述べる「根拠非前提型」に属する日本語の「だろう」と対応する韓国語の両形式は判断の手がかりとなる実際的な根拠を必ずしも前提にしない形式と捉えた。このような主張を裏付けるために以下の例文(78)を挙げている。

(78) a. (ただ漠然とした希望を述べるかのように)

いずれは彼女も私の気持ちを分かってくれるだろう。

(78) b. 언젠가는 그녀도 내 마음을 알아 줄 것이다. (eulgeosida) / 주겠지. (gessci)

金(1999)は「だろう」と韓国語形式に対する上記したような捉え方を裏付けるために、

¹⁹ 金(1999)で述べる「根拠非前提型」とは判断の根拠になる実際的な根拠があることを必ずしも前提としないということを意味する。

²⁰ 金(1999)によると、主体推量とは話し手が自分の判断及び判断が示す命題内容に対して主体的な叙述態度、すなわち、判断の持ち主としての態度をとる推量と定義づけている。

²¹ 客体推量とは、話し手が自分の判断及び判断が示す命題内容に対して客体的な叙述態度、すなわち、第三者的な態度をとる推量と定義づけている。

(79) a. 彼は移民してからもう 10 年も消息を絶っているが、まあ…元気だろう。
 (79) b. 그 사람은 이민 간 후 10 년째 소식도 모르지만, 뭐 건강할 것이다.
 건강하겠지.

(80) a. ?彼は移民してから、10 年も消息を絶っているが、まあ、元気のようだ/らしい。
 (80) b. 그 사람 이민 간 후 10 년째 소식도 모르지만, 뭐 건강할?것 같다.
 건강할 ?듯하다.
 건강할 ?모양이다.
 건강할 ?가보다.

(81) ?? 天気予報を見たが、明日は雨になるだろう。
 ?? 일기 예보를 봤는데, 내일은 비가 올것이다. (eulgeosida)/ 오겠지. (gessci)

次は金(1999)で根拠前提型に位置づけた「ようだ」「らしい」と韓国語の対応形式をどう
いう基準に基づいて対応関係を捉えてきたのかについて概観する。

(82) a. 私が思うには、あの人が犯人のようだ。
 (82) b. 내가 생각하기에는, 저 사람이 범인인 것 같다/듯 하다.
 (83) a. ?私が思うには、あの人が犯人らしい。
 (83) b. ?내가 생각하기에는, 저 사람이 범인인 모양이다/가보다.

- (84) a. 私が思うには、やはり私の判断が間違っていたようだ。
 (84) b. 내가 생각하기에는, 역시 내 판단이 틀린 것 같다/듯 하다.
 (85) a. ?私が思うには、やはり私の判断が間違っていたらしい。
 (85) b. ?내가 생각하기에는, 역시 내 판단이 틀린 모양이다/가 보다.

すなわち、「私が思うには」のような話者の主体的な立場を明確に表す語句に「ようだ」と韓国語の「것 같다」「듯 하다」は自然に呼応するのに対し、「らしい」と韓国語の「모양이다」「가보다」は主体的な立場を表す語句とはあまり許容しない点を挙げて、「ようだ」と「것 같다」「듯 하다」は主体推量の意味を、「らしい」と「가보다」「모양이다」は客体推量の意味を表す形式として分類した。

2.1.6.3. 尹相實(2003)

尹(2003)では前述した羅(1995)と金(1999)などの研究で提案したような両言語の一对二のような固定的な対応関係の設定については再考の余地があると捉えている。尹(2003)は本論文と同様に、考察対象と範囲を日本語の推量形式「だろう」「ようだ」「らしい」とこれに対応する韓国語形式に限定して、分析を行った。尹(2003)は両言語の対応関係を以下の表 5 のように捉えている。

表 4 日韓推量形式の対応関係

	準拠推量形		無準拠推量形
	内在準拠推量形	外在準拠推量形	
日本語	「ようだ」	「らしい」	「だろう」
韓国語	「듯 하다」	「모양이다」「가보다」	「을 것이다」
	「것 같다」		
	中立準拠推量形		

上の表 4 から分かるように、尹(2003)は「ようだ」「らしい」の区分基準において、基本的に城田(1998)の分類と用語を取り入れて、「ようだ」「らしい」を準拠推量形に位置づけた。さらに、両者を内在準拠推量形と外在準拠推量形に 2 分しているのに対し、これに対応する韓国語の場合は 3 分法の形式を持っている点で差別化されると述べた。

また、尹(2003)では「だろう」に対応する韓国語形式は「을 것이다」であって、両形式すべて無準拠推量形に属する形式として位置づけている。このような両言語の形式間の分類基準や方法の相違はそれぞれの形式が担う範囲と意味が異なるからであると述べた。また、以下の例文(86b)のように、韓国語の場合、話し手の視覚情報に依存する判断根拠が文脈の中に提示された場合、「ようだ」「らしい」は許容可能であるのに対し、韓国語の「모양이다」は共起しにくいという点から、日本語の「らしい」に比べて外在準拠推量の意味合いが強く表れると述べた。

- (86) a. しかし、しばらく見ていると、どうも彼女らの話しているのは日本語ではないらしい/ようだ。
 (86) b. 그러나 잠시 옆에서 보고 있자니 아무래도 그 여자들이 이야기하고 있는 말은 일본어가 아닌 것같다. (geosgattda) /?모양이다(moyangida).

尹(2003)は両言語すべて上記の表 4 のように、同じ意味類型に属する形式として位置けているが、実際に例文を見ると、そうではない場合もあるので、その理由を明らかにする必要があると述べた。すなわち、両言語形式は常に一律的な対応関係を見せるのではなく、形式間の交差対応する場合も見られるという点を指摘した。

2.2. 従来の対照研究の残された課題と本論文の立場

2.2.1. 従来の対照研究の残された課題

この節では、上述した各々の対照研究で論じられてきた見解において、再考の余地がある課題または問題点について考えてみる。

羅聖榮(1996)

まず、羅(1996)の研究は両言語の対応関係の設定において、上述した日本語の先行研究である三宅(1995)で論じた意味的基準を受容している。前述した通り、当該形式を認識的モダリティの体系に位置づけながら、「だろう」と「ようだ」「らしい」を「推量」と「根拠依存型」という意味範疇に属させて、両類型を区別している。また、このような意味的基準に当てはまる韓国語形式を選定し、両言語の対応関係を捉えている。しかし、両言語の具体的な対応様相に対する論議において、以下のような点に疑問点が生じる。

一つ目は、羅(1996)はそれぞれ「推量」と「様態」の意味を持つ「ㄹ다」を区分し、同音異義語として捉えている点である。ところが、「-ㄹ-」を多義語として把握する一般的な見方とどのような違いがあるのかに対し、明確な立場を示していない。特に、これまでの韓国語研究において、「-ㄹ-」を同音異義語の両形式として認識する見解はなかったため、同音異義語の設定に対する妥当な論議と根拠の提示がなければならない。

二つ目は、羅(1996)の研究も三宅の見解を受容している。羅は当該形式を「推量」と「根拠依存型」という異なる意味類型に位置づけ、両類型を区別している。これは三宅(1995)で論じた「実在的根拠の有・無標性」「事態の現在性」を受容した捉え方である。また、羅(1996)は韓国語にも同様に上記の意味的基準を適用させて、両言語の対応関係を捉えている。

しかし、上記のような意味的基準だけでは、以下の例文のように、三形式が発話時に現実世界で話し手が入手した実在的根拠に基づいた判断に用いられた現象を説明できない。

(87) a. (花火大会が始まるという案内放送を聴いて) もうすぐ、始まるだろう

(87) b. (불꽃놀이가 시작한다는 안내방송을 듣고) 이제 곧 시작하ㄹ다/할 것이다.

gessda/eulgeosida

三つ目は、両言語の疑似推量形式の対照と関連し、以下のような疑問点が生じる。

羅は「ようだ」「らしい」と韓国語の対応形式を根拠の直・間接性によって捉えている。これは基本的に寺村(1984)の見解を受容しているものである。しかし、以下の例文(88)～(89)からも分かるように、両言語共に根拠の直・間接性では説明できない現象が多く見られる。

(88) a. 母はいるはずだが答えないところを見ると、外出しているようだ/らしい。

(88) b. 엄마가 있을텐데, 대답이 없는 걸 보면, 외출한 것같다/모양이다.

geosgattda/moyangida

(89) a. 専門家の判断によると、景気は徐々に回復していくようだ/らしい。

(89) b. 전문가의 판단에 의하면, 경기는 점차로 회복해 갈 것같다/모양이다.

geosgattda/moyangida

金東郁(1999)

金(1999)は仁田(1989, 1991)や三宅(1995)などで「推量」の「だろう」と「証拠性判断」または「徴候性判断」の「ようだ」「らしい」を区別する最も重要な基準として挙げた「実在的根拠の有・無標性」を受容していると見受けられる。

しかし、以下の例文(90)のように、推量の「だろう」と対応する韓国語形式は発話時に捉えた実在的根拠に基づいた推量にも自然に用いられる。

- (90) a. (久しぶりに会った友人が指輪をしている様子を見て)
指輪をしているところからすると、彼は結婚しているだろう。
(90) b. (오랜만에 만난 친구가 반지를 끼고 있는 모습을 보고)
반지를 끼고 있는 걸 보니, 그는 결혼했겠다(gess)/을것이다(eulgeosi).

また、金(1999)は以下のような点において、疑問が生じる。まず、「だろう」に最も相応する韓国語形式を「겠지」「을것이다」であると言及し、「-겠-」を排除させた点である。「겠지」を対応形式として捉えた点は、両言語の対応関係を把握する際に、文法的側面よりは推量の意味的側面を重視したからであると思われる。しかし、「-겠-」を排除させた点はこの形式を典型的な「推量叙法」や「未来時制」として規定してきたこれまでの韓国語研究の一般的な認識とは異なる。しかし、なぜ、「-겠-」を排除したのかに対する明確な立場や根拠を示していない。また、以上の例文(90)のように、「だろう」「-겠-」「-을것이-」すべて実在的根拠の有・無標性に関わらず、用いることができる。

また、金(1999)は「ようだ」「らしい」を区分する基準として適用した「主体推量」と「客体推量」の意味特性を韓国語の形式にも同様に適用させて、両言語の対応関係を捉えている。しかし、以下のような疑問点が生じる。

一つ目は、金(1999)で述べた上記の基準の適用が対応する韓国語形式にもそのまま適用可能であるとは言えない。後述するが、従来の対照研究は「ようだ」「らしい」と「것 같다」「모양이다」が様々な推量特性において、相違を見せるという点を看過している。

二つ目は、「主体推量」と「客体推量」の意味及び適用可能性が限定的である。まず、判断に対する主体的または客体的態度を取るということが具体的に何なのかが明確ではない。また、「主体・客体推量」という概念の適用可能性が限定的であるという点である。

上記した「主体推量」「客体推量」が「ようだ」「らしい」の本質的推量意味なのか、それともあくまで両形式の比較分析にだけ有効な意味特性であるのかという問題については更なる考察が必要である。例えば、金(1999)で述べたように、「ようだ」が「私が思うには」という語句と共に共起するから、「主体推量」の意味を表すとするならば、「らしい」を除外したその他の推量形式も「私が思うには」と共起可能であるため、「主体推量」の意味を表すと捉えることができるからである。

三つ目は、前述した早津(1988)などの見方とどのように差別されるかもはっきりしない点である。すなわち、早津の指摘通り、話し手がある事柄について心理的に近い態度を取るとするのは、事態判断に対して、主体的な立場に立って捉えることが可能であるため、当然ながら、強い責任感を感じることが可能である。一方、話し手がある事態に対し、心理的に遠い態度を取るとするのは、話者が事態について客体的立場または第3者的な態度を取りやすくなるため、当然、責任を回避するような姿勢で判断に介入するようになると思われる。

尹相實(2003)

尹(2003)の見方も金(1999)とほぼ同様に、「準拠推量形」「無準拠推量形」などのように、「根拠の有無」という単一観点で両言語形式の意味類型及び対応関係を区分することに注力したため、両言語間の推量意味及び用法上の違いの分析や対照には注目していない。

また、金(1999)と同様に、尹(2003)は「だろう」に対応する韓国語の推量形式「을것이다」を「無準拠推量形式」に位置づけた点も再検討の余地があると思う。例えば、上記の例文(91)からも確認できるように、両形式は発話時に話し手が捉えた実在的根拠に基づいた推量にも使える。また、尹(2003)では「だろう」に類似する韓国語形式の中で、「-겠-」を除外しているが、その理由については述べていない。また、疑似推量形式の対照と関連し、上記の羅や金の分析と違い、韓国語形式の「것 같다」が「ようだ」「らしい」の用法を包括していると把握した点は正しいが、両言語形式の推量意味及び用法上の違いの分析には注目していない。

以上、従来の個別対照研究の分析に見られる疑問点及び課題について整理した。上述した従来の対照研究で十分に論じられていない共通的な課題は以下の通りである。

一つ目は、日本語形式を対象とした形式の分類または意味的基準をそのまま韓国語形式に適用していたため、両言語推量形式の多様な推量特性に見られる相違を看過してきた。

二つ目は、当該形式の対照分析において、あまりにも両言語形式を括る意味的基準を設定することに注力したため、当該形式の推量特性を主に「実在的根拠の有・無標性」という特定基準の適用によって把握してきた点である。

三つ目は、使用したデータの提示及び分析において、研究者の直観や主観に頼る場合が多かった点である。特に、脱文脈の制限されている短文や作例では該当形式の推量意味や用法上の特性を正確に捉えるには限界があるという点を看過している。

2.2.2. 本論文の立場

本節では上述した対照研究に見られる課題または問題点を踏まえ、対照研究における本論文の立場を述べる。主な内容は以下の通りである。

一つ目は、従来の対照研究が両言語形式を括る意味的基準を設定することに注力してきたのに対し、本論文は各形式及び両言語形式の推量意味または多様な用法において、少なくとも相違が存在するという立場を取る。そこで、本論文は当該形式に関わる多様な推量特性及び用法上の異同を究明する包括的な対照研究を目指す。

二つ目は、本論文は考察対象である両言語の推量モダリティ形式を意味論的観点よりは文法論的観点からアプローチする。これにより、日本語の推量助動詞に対応する韓国語形式が文法形式であるという立場を取る。これは韓国語文法研究において、未だに文法要素として見なしていない一般的な見解とは異なる立場であり、これらの形式の文法的性格に対する明確な立場を提示していない従来の対照研究とも区別される点である。

三つ目は、従来の対照研究で使用したデータの提示や分析が研究者の直観や少数の作例に依存した場合が多かった。本論文は上記のような問題を補完するために、できる限り、文脈や状況を考慮した実例の使用及び用法上の傾向を重視する実証的分析を試みた。

四つ目は、各々の推量形式に見られる多様な特性がお互いに深く関わっている点を論じる。特に、両言語の疑似推量形式である「ようだ」「것 같다」「모양이다」などはその意味や用法が形式自体の核心的な構成要素である「様(よう)」「같다(同じだ)」「모양(模様)」などの原型的意味(root meaning)と深く関わっていることを明らかにする。

五つ目は、本論文は各形式または両言語形式に見られる多様な推量特性が両言語形式間の主観介入の程度差と深く関わっていると捉える。言語形式間の主観性程度の問題は個別言語の研究で特定の形式を対象とした断片的な論議は見られるものの、両言語の推量形式間の異同が生じる背景を主観性程度の観点から比較分析したのは管見の限り、見当たらない。

第3章 推量モダリティ形式の基礎的論議

3.1. はじめに

本章では両言語の推量モダリティ形式の体系的な対照分析を行うために、従来の対照研究で十分に論じられて来なかった以下の(1)～(4)のようないくつかの基礎的論議に注目する。これらの問題は特定の推量形式にだけ関わっているのではなく、本論文の論議全体に関わる重要な前提になる事項である。前述した通り、従来の対照研究では日本語の推量形式を主に意味範疇として見なし、これを韓国語形式にそのまま適用させて、両言語の対応関係を捉えてきたと見受けられる。

ところが、以下に挙げる事項は両言語の推量モダリティ形式の体系的な対照研究のためにも、優先的に考慮すべき基本的な課題であると考えられる。ただ、以下に挙げた(4)と関わる推量形式の主観性介入の程度問題は本論文で特に注目する現象であり、特定の形式にだけ関わっているものではないため、本章ではこれと関連する基礎的な問題を論議する。

- (1) 両言語における推量の捉え方及び認識の違い
- (2) 当該形式の推量モダリティ体系の中での位置づけ
 - a. 両言語の真正推量形式と疑似推量形式の区分及び基準
 - b. 推量モダリティ体系の中での個別推量形式の位置づけ
- (3) 真正推量形式と疑似推量形式(証拠性判断型)の意味用法上の接点
- (4) 両言語の推量形式間の主観性程度の違いとその判断基準

3.2 両言語における推量の捉え方と認識の違い

本節ではまず、従来、両言語の先行研究において、推量概念とこれに対する実際の認識と関わる問題について、どのように捉えられてきたのかについて概観した後、本論文における推量概念と形式の認定範囲について述べる。また、従来の対照研究では検討されて来なかった両言語の間に見られる推量の捉え方と認識の違いについて述べる。

本論文では推量の捉え方と認識の違いは基本的に事態に対する不確かさに対する認識の違いと関わっていると把握し、両言語の推量に対する認識の違いが実際の言語形式や用法にどのように反映されているのかという点について検討する。

このような問題に注目する理由は従来の対照研究では両言語形式の間に見られる推量意味や用法上の特性にだけ注目し、実際の用法に両言語の推量に対する認識の違いがどのように反映されているのかという問題については論じていないからである。

3.3 両言語の先行研究と本論文における推量の捉え方

3.3.1. 日本語における推量の捉え方と形式の範囲

本節では日本語モダリティ研究の中で、普遍的に認識的モダリティの下位類型の一つとして規定されてきた「推量」の概念や捉え方に対する代表的な先行研究を再検討しながら、従来の推量の位置づけや適用問題に対する主な見解を検討する。その後、本論文の推量の捉え方と適用に対する立場を述べる。

従来、日本語における推量の捉え方や形式の認定範囲について述べた代表的な研究として、奥田(1985)、森山(1992a)、三宅(1995)、仁田(2000)などが挙げられる。

まず、奥田(1985)によると、推量とは、事態を現実的なものではなく想像上のものとして把握・判断して述べるものであるとした。

奥田(1985)は「推し量り」を、具体的な事実を根拠として想像または判断する場合に用いられる表現として規定している。つまり、奥田は「推し量り」の文というのは話し手の想像による判断であって、推し量りの文によって表現されている推量は話し手の主観による間接的な認識によって、事柄の不確かさを表すものとして捉えている。奥田(1985)は上記のような推量の捉え方に相応しい形式を「だろう」であると捉えている。

奥田(1985)によると、推し量りの文の「だろう」は単に話し手の想像による判断なので、最も事態の成立に対する話し手の認識の不確かさが高いと言及した。

奥田とほぼ同様の捉え方を示している見解として三宅(1995)が挙げられる。三宅(1995)は「推量」の概念と適用可能な形式を次のように捉えている。

「推量」：話し手の想像の中で命題を真であると認識するものである。

「推量が表される形式」：ダロウ、マイ(否定推量)

三宅(1995)は「推量」を認識的モダリティの下位類型の一つとして位置づけながら、「推量」とは基本的に現実世界ではなく、話し手が想像世界の中で命題を真であると認識するものであると述べている。命題を真であると認識しているといってもそれはあくまで話し手の想像世界での認識なので、結果としてその命題の真偽は不確かであると捉えている。

また、三宅(1995)も奥田(1985)と同様に、事態の真偽判断に関わる多数の形式の中で、上のような「推量」を本質的意味とする形式は「だろう」であると捉えている。

推量に該当する形式を「だろう」に限定した理由として三宅(1995)が挙げた点は判断情報になる「実在的根拠の有・無標性」である。すなわち、推量の「だろう」はあくまで話し手の想像の中で命題を真であると認識するため、証拠の存在を有標的に示さない。それに対し、「ヨウダ」「ラシイ」などの「証拠性判断」に属する形式群は証拠の存在を有標的に示すという点から、推量の「だろう」とは基本的に異なる振る舞いを見せる形式であるとした。

その他に、仁田(2000:116-118)によると、「推量」は「命題内容である事態の成立・存在について、不確かさを有するものとして、想像や推論の中に捉えるものである。」と述べた。単なる記憶の呼び起こしの中ではなく、想像・思考や推論の中に事態の成立を捉えるにあたっては、何らかの根拠が必要になる。推量とは、根拠を通して、想像・思考や推論の中に事態の成立を捉えることであるとした。

また、「推量」の捉え方や形式の適用において、宮崎(2002)、現代日本語記述文法研究会(2003)、益岡(2007)なども同様の見解を述べている。例えば、宮崎(2002)は三宅(1995)と同様に、推量を表すものは「だろう」であり、「ようだ」「らしい」は真の推量ではなく、証拠に基づいた事態の認識を表す「証拠性判断」という異なる意味範疇に位置づけている。また、日本語記述文法研究会(2003:143)でも事態を想像や思考によって間接的に認識していることが「推量」であり、このような概念に相応しい形式が「だろう」であるとした。

一方、森山卓郎(1992a)は推量の定義について上記した研究とは少し異なる立場を示している。森山(1992a)は以下のように「推量」を定義している。

「推量」：推量の表現とは、ある内容を述べると共に、それに矛盾対立する内容も成立す

る可能性があることを暗示する。

森山(1992a)の見解に従い、推量を捉えると、「推量」とは一つの内容を真の事態として取り上げつつも、そうでないことの可能性も想定できるということも存在する余地があることを表すものが推量である。また、寺村(1984)も「推量」という用語は使っていないが、話者の不確かな判断を表す際に用いる形式をすべて「概言形式²²」であると把握した。

推量の概念に対する捉え方は異なっても、森山(1992a)も上述した三宅(1995)や宮崎(2002)などと同様に、「だろう」をその形式的または意味的な側面から「ようだ」「らしい」などの形式群とは異なるレベルの推量形式として認めている。その他に、仁田(1989, 1991)、益岡(1991)²³などでも判断モダリティ体系の中で、「だろう」を「真正モダリティ」「一次的なモダリティ」と規定したのに対し、「ようだ」「らしい」などは「疑似モダリティ」「二次的モダリティ」に位置づけて区別している点も「だろう」の特殊性を認めている立場として理解できる。

3.3.2. 韓国語における推量の捉え方と形式の範囲

前述した通り、日本語の先行研究では認識的モダリティの下位類型である「推量」の「だろう」と「証拠性判断」に属する「ようだ」「らしい」、また、「可能性判断」「確信的判断」という意味範疇に属する「かもしれない」「にちがいない」などのように、各々の形式が属する意味範疇を明確に区分してきた。

一方、これまでの韓国語研究においては、「-ㄹ-」と「-을것이-」を含め、本論文の考察対象である当該形式が推量意味と用法上の特性を持っている点是指摘されてきたが、これらの形式が推量モダリティ体系の中でどのように位置づけられるのかという問題については論じていない。従来への対照研究では主に日本語形式に適用させた上記のような意味範疇に相応しい韓国語形式を選定し、両言語の対応関係を模索する研究が主流であった。

ところが、後述する韓国語の諸形式の推量意味及び用法上の特性を綿密に分析すると、韓国語は日本語ほど各々の形式間の厳格な意味範疇の区分が見られない。

従来の韓国語研究は発話時における話し手の心理的な態度というモダリティ自体の意味的側面よりは韓国語の先語末語尾「-ㄹ-」のような純粋な文法形式で表現されるものにだけ重点を置く形式中心の研究が優先されてきた。そのため、本論文の考察対象である「(은/는/을) 것 같다」「(은/는/을) 모양이다」などのように、構成要素の語彙的意味または原型的意味が残存している形式や複合形式として推量意味を担うこれらの形式群は韓国語の叙法研究ではあまり注目されて来なかった。このような背景で、一般的に、純粋な推量叙法として認定されている形式は先語末語尾「-ㄹ-」だけであった。

ところが、近年になって、推量形式の適用範囲と関連して이기중(2001)、이혜용(2003)、이미혜(2005)などのような推量の意味的側面を重視する研究も増え、これらを推量形式として受容する見解も見られはじめた。例えば、이기중(2001)、고영근(2004)では推測形式として「-ㄹ-」「-을것이-」「-는/을 것 같다」「-는/을 모양이다」などを認めているが、박재연(2006)では先語末語尾「-ㄹ-」「-리-」だけを認めている。韓国語研究では「-ㄹ-」「-을것이-」について、主に以下のような点において未だに統一的な見解の一致が見られない。まず、「-을것이-」を「-ㄹ-」のような純粋な文法形式として位置づけられるのかに対

²² 寺村(1984:223-225)では推量意味を担っている一連の形式を「概言のムード」に位置づけながら、これらに属する形式として、ダロウ、(シ)ソウダ、ヨウダ、ラシイ、カモシレナイ、ニチガイナイ、(スル)ソウダなどの形式を挙げている。

²³ 益岡(1991:108-123)では推量意味を担っている形式を「真偽判断のモダリティ」体系の中に位置づけながら、真偽判断のモダリティを「一次的モダリティ」と「二次的モダリティ」に分けている。一次的モダリティに属する形式として「ダロウ」を挙げている。また、二次的モダリティを①事態が成り立つ蓋然性を表すものと②判断に至る様式を表すものである「ヨウダ」「(シ)ソウダ」「ラシイ」「ハズダ」などを属させている。

する異見であり、もう一つは、これらの形式の文法範疇をめぐる異見である。これまでの韓国語研究においては、「-ㄹ-」の文法範疇をめぐる、大きく「未来時制説」「推量叙法説」の二つの立場に分かれているが、未だに統一的な見解が見られない。

3.3.3. 本論文における推量の捉え方

前節では両言語における推量の捉え方と形式の範囲をどのように理解して来たのかについて検討した。本論文は「推量」の捉え方について基本的に前述した寺村(1984)や森山(1992)などの見解を受け入れて、「だろう」だけではなく、「ようだ」「らしい」「しそうだ」などの形式も同じく「推量」という上位概念で括る立場を取って、次のように推量を捉える。

「推量」とは「事態成立に対する話し手の不確かな認識を表すものである」と定義し、形式の範囲も「だろう」だけではなく、「ようだ」「らしい」などの形式も推量の枠組みの中で位置づける。このように捉える理由は「ようだ」であれ、「だろう」であれ、話し手の命題の真偽に対する不確かな認識を表すという共通意味を持っているから、推量の枠組みの中で捉えることができると考えられる。ただ、「ようだ」「らしい」類と「だろう」が持っている推量の属性は異なっている点を重視し、推量の類型を次のような二つに区分する。

つまり、事態の真偽に対する話者の判断に中心がある「だろう」を「真正推量」、目前の事態または証拠自体の認識に中心がある「ようだ」「らしい」類を「疑似推量」と規定する。

また、本論文の考察対象である韓国語形式も日本語形式と同様に、「推量」の意味を共有している点を考慮し、推量モダリティ体系の中に位置づける一方、「だろう」に最も類似性を見せる「-ㄹ-」「-을것이-」を「真正推量」、「ようだ」「らしい」に類似する「것 같다」「모양이다」などを「疑似推量」と規定する。

本論文は基本的に既述した仁田(1989, 1991)で言及された「真正」と「疑似」の用語及び概念や区分基準を援用する。

3.4. 事態の認識と言語間の違い

同一事態や状況に対する認識において、言語及び文化の間に異同が見られる。異なる言語または文化において、同一事態に対する認識方法において違いが見られるのは予測可能な現象である。認知言語学で用いられる重要な概念の一つに「事態把握」がある。

例えば、池上(2006:51)によると、「事態把握」とは話者が事態を言語で表そうとする際に事態に含まれる何を表現し、何を表現しないかによって、同一の事態であっても話者の捉え方によって、その表現の仕方は異なったものになることを指す」と述べている。池上(2006)の見方は基本的に Langacker(1985)の見解に沿ったものである。

本論文は客観的に同じ事柄を表すのに用いられる両言語の推量形式にも上記のような事態把握または事態の認識の違いが反映されていると捉える。言い換えれば、本論文は基本的に両言語の推量に対する認識が異なるという立場を取る。このような言語間の認識上の違いを考慮せずに、異なる言語を対照分析することは問題があると考えられる。

この問題と関連し、両言語間の推量認識の違いを探ってみて、このような違いが実際の言語現象や用法にどのように反映されているのかという点に注目する。

また、これまでの両言語の研究において、「推量」をどのように捉えてきたのかという問題について、代表的な先行研究を中心に概観し、本論文における推量の捉え方を述べる。

3.4.1. 実際の用法に見られる推量認識の違い

両言語の推量の捉え方に対する認識が同様ではないにも関わらず、これまでの対照研究では日本語の推量概念及び適用範囲と韓国語のものを同様に捉えてきた。しかし、表面的に同一状況を基に判断を行う場合、韓国語の真正推量形式「-겠-」「-을것이-」は使用できるのに対し、日本語の真正推量形式「だろう」は使用できない場合、次のような問題を考慮しなければならない。すなわち、この現象が「だろう」形式自体の意味と関わっている問題なのか、それとも両言語の推量に対する認識の違いから生じる現象なのかという点である。

本論文は基本的に各々の推量形式に見られる多様な意味や用法が話し手の推量に対する認識、より包括的には事態に対する話者の捉え方や認識の違いと深く関わっていると捉える。

本節では両言語の研究において真の推量として認定できる三つの真正推量形式を考察対象とし、両言語の間に見られる推量に対する認識の違いが実際の言語現象にどのように反映されているのかについて考えてみる。

①既知情報に基づいた判断に対する推量認識の違い

例えば、韓国語は既得情報や経験的情報などの語用論的要因によって、事態の成立について確信または断定的態度を表せることができる場合でも、事態の真偽可否が確認済みの状態ではないと、文体的違いなどの状況に関わらず、推量形式を用いる。しかし、このような場合、日本語ではたとえ上記したような韓国語の認識が正しいものであるとしても、実際の内容上には推量の余地がほぼないと認識される場合が多いと思われる。

- (1) a. A: パソコンの調子が悪いんだけど、どうすればいいかな？

B: (パソコンの専門家である友人が状態を見て)

ちょっと見せて。ああ、このボタンを押すと直るよ。

- (1) b. A: 컴퓨터의 상태가 안 좋은데, 어떻게 하면 좋지?

B: (컴퓨터 전문가인 친구가 컴퓨터를 살펴보고)

잠깐 볼까, 아, 이 버튼을 누르면 괜찮아질 거야. (eulgeosi)/겠다. (gessda)

- (2) a. 6시 정각에 종로에 있는 보신각 뒤로 나와라. 뒷골목에 목마라는 다방이 하나 있을 것이다. (eulgeosi) 거기서 만나는 거다. (悲恋)

- (2) b. (6時ちょうどに鍾路にある普信閣の裏へ来い。裏通りに木馬という喫茶店が一軒ある。そこで会うんだ。)

- (3) a. (식탁에 놓여진 빵을 먹어본 화자가 먹어보지 못한 친구에게 말한다)

이 빵 맛있을 거야. (eulgeosi)

- (3) b. (食卓においてあるパンを食べた経験がある話者が食べたことがない友人に話す)

このパン、おいしいよ。

- (4) a. ザウエルという犬がいるよ。僕が行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうっと町の角までついてくる。もっとついてくることもあるよ。今夜はみんなでからすうりの灯を川へ流しにいくんだって。きっと犬もついてゆくよ。 (銀河)

- (4) b. 장엘이라는 개가 있어. 내가 가면 쿵쿵대면서 따라와. 계속해서 골목 끝까지 따라와. 더 많이 따라올 때도 있고, 오늘밤은 모두가 하늘타리 등불을 강물로 띄우러 간대. 틀림없이 그 개도 따라 갈 거야. (eulgeoya)

- (5) a. (근처의 잡화점에서) 가게주인: 훈이 앞에 겨울 내의를 꺼내 놓는다.

이거면 잘 맞을 겁니다. (eulgeosi)

- (5) b. (近くの雑貨店で) 店の主人: フンの前に冬の下着を取り出して置く。

これならぴったりです。

上の例文(1)～(5)に用いられた韓国語の真正推量形式は既得知識や経験的情報または確信的態度を持っている話し手が自身の見解を聞き手に表明する談話状況である。命題の真偽可

否はまだ確認済みの状態ではないが、話し手はこれまでの経験的情報や既得知識などに基づいて確信的判断を下すことができる状況である。このような場面において、韓国語も「断定形」を用いることもできるが、真正推量「-을것아-」が自然に用いられているのに対し、日本語は真正推量形式「だろう」ではなく、「断定形」を用いる場合が多い。このような現象は「不確かさ」を本質とする推量に対する両言語の認識の違いが反映されているものとして把握できると思われる。例えば、上の例文(2)の場合、話し手は既得情報によって、「裏通りに木馬という喫茶店が一軒」あるという確実な既得知識を持っている場合でも、発話時事態の真偽については、未確認の状態であるため、推量表現を用いている。このような場合韓国語も推量ではない断言形を用いることも可能である。上の例文(2)のような状況において、日本語は「不確かさ」を本質とする推量という心的行為が発生する余地がないと捉えるため、「断定形」が使われていると思われる。それに対し、韓国語は真正推量形式「-을것아-」が用いられている。この現象は両言語の推量に対する認識の違いと関わっていると思われる。また、上の例文(3)も、食卓においてあるパンを食べた経験がある話者が自身の見解を表明する場合であるが、推量「-을것아-」が用いられている。それに対し、日本語は既得知識を持っている場合であるため、推量の余地がないと捉え、「断定形」を用いて事態に対する話し手の認識を表している。

両言語の間に見られる推量に対する認識の違いは推量根拠に対する認識にも反映されている。例えば、以下の例文(6)～(7)のように推量の根拠が伝聞情報のような典型的な間接的な根拠に基づいた判断において、両言語の推量に対する認識の違いが見られる。

(6)b. 신문정보에 의하면, 우리 나라의 경제는 조금씩 회복해 갈것이다(eulgeosi).
가겠어. (gess)

(7)b. 일기예보에 의하면, 내일은 비가 오겠(gess)어/을 거야(eulgeosi).

韓国語の場合、第3者から入手した客観的な根拠である伝聞情報も真正推量の根拠として把握する。すなわち、間接情報としての伝聞情報も真正推量の根拠として認識される。それに対し、日本語の場合、伝聞情報は真正推量「だろう」の根拠にはならないと認識するため、上の例文において、許容度が落ちると考えられる。

結局、上記のような伝聞情報のような間接的情報に基づいた判断に対する両言語の真正推量形式の間に見られる許容度の差異は推量に対する両言語の認識の違いと深く関わっていると思われる。

両言語は以下の例文(8)～(9)のように、目の前の現場事態や事物に対する外見や様子または話し手自身の印象を述べることに中心を置く場合において推量の認識に違いが見られる。

あ、この料理、おいしい*だろう。

(8) b. (식탁에 놓여있는 처음 보는 요리의 겉모양을 보고 직감적으로 말한다)

- 어, 이 요리 맛있겠다. (gess)
- (9) a. (ガラスコップがテーブルの端に向かって転がっているのを見て)
あつ、あのコップ、落ちる*だろう。
- (9) b. (유리컵이 테이블의 끝단을 향해 굴러가고 있는 걸 보며)
저기 컵, 떨어지겠다(gess).

例えば、上の例文(8)は「目の料理」自体の様子や印象を述べることにだけ焦点が置かれると把握されるため、日本語の真正推量形式「だろう」は用いられない。このような場面において、典型的な推量ではない証拠性判断や疑似モダリティと規定されてきた「しそうだ」が用いられる。それに対し、同一状況において、韓国語の真正推量形式「-ㄹ-」は自然に使える。上の例文(8)に用いられた「-ㄹ-」は確かに事態の真偽に対する判断に中心があるよりは、目の料理の外見や様子を述べることに焦点が置かれている。しかし、まだ、美味しさの真偽は確認済みの状態ではないため、表面的には事態自体に不確かさが存在すると把握できる。このような場合は瞬間的な印象に頼る判断であるため、何らかの根拠から思考過程を経て判断に至る推量判断とは言えない。ただ、前述したような事態自体に存在する不確かさの存在に基づいて、韓国語の推量は成立する。ところが、日本語において、推量が成立しないのは、表面的には不確かさが存在するにも関わらず、日本語は推量として認識されないため、真の推量を表す「だろう」の使用は忌避されると思われる。

これと類似する現象として、日本語では主に「直前事態または寸前事態」という場合がある。例えば、上の例文(9)のように、目で今にも起こりそうな事態に対する推量の認識可否に関わる場合である。このような場合、韓国語の真正推量形式「-ㄹ-」は自然に使えるのに対し、日本語の真正推量「だろう」は用いられない。例文(9)の場合、「ガラスコップが落ちる」という事態自体は発生直前の状態であり、この事態が実現するのはほぼ決まっていると言える。それにも関わらず、韓国語の真正推量「-ㄹ-」が用いられる理由は、まだ発生直前の段階であり、「ガラスコップが落ちる」事態自体が実現していない段階であるため、推量の余地があると把握するためである。それに対し、日本語は推量の余地がない確実な事態であると把握するため、真の推量形式である「だろう」は用いられないと思われる。

以上のような現象も日本語は「不確かさ」を本質とする推量という心的行為が発生する余地がないと把握されるため、推量形式を使用しないと思われる。

3.4.2. 両言語の推量認識の包括的違い

前節では 両言語の間に見られる推量に対する認識の違いが実際の用法にどのように反映されているのかについて考察してみた。本論文では以上で述べた現象を踏まえ、両言語の推量に対する認識を以下のように捉える。

①韓国語：広義的推量

全般的に推量の捉え方と形式使用の範囲において、韓国語の方が日本語より広く推量を捉えていると考えられる。基本的に、韓国語は日本語に比べて、話し手の不確かな認識を表す形式が多いという点から、それだけ推量の使用範囲が広い。このような事実は実際の言語現象にも見られる。一般的に、韓国語は事柄に対する不確かな認識があつて、推量形式が用いられる発話状況であれば、対話状況または非対話状況などの文体的違いや聞き手の存在有無、聞き手への働きかけ性などの条件に影響を受けず、推量の実現する。また、既得知識や経験的情報などに基づいて、話し手が事態の成立を断定できる確信を持っている場合であっても、事態自体に不確かさが存在する場合や確認済みの事態ではない限り、基本的に推量形式を使用する場合が多いという「広義的推量」として規定できる。

このような点からすると、韓国語は不確かさの表現という推量の本質を相対的により重視する性格を見せると捉えられる。

②日本語：狭義的推量

基本的に日本語は韓国語に比べて、推量表現の使用領域が狭いことが確認できた。まず、韓国語は二つの真正推量形式が存在するのに対し、日本語は真の推量と認識される形式が「だろう」一つしかないため、韓国語に比べて、真正推量の使用領域が狭いという点が予測できるが、このような事実は実際用法からも確認できる。

基本的に二つの形式によって表現される韓国語の真正推量に比べて、「だろう」一つの形式によって表される日本語推量の使用範囲が狭い。さらに、概ね韓国語形式に比べて日本語形式の用法上の制約が相対的に多いから使用領域が狭い。また、一般的に韓国語では推量として認識し、推量形式を用いる場合、日本語は推量形式ではない「断定形」のようなその他の形式として実現する場合が多い。

また、「不確かさ」に対する認識も日本語が韓国語に比べて相対的に厳格性が落ちる。日本語は「不確かさ」を本質とする推量という心的行為が発生する余地がない状況では推量表現ではなく「断言形」で実現される場合が多い。例えば、日本語は話し手が既得情報などによって、事態の真偽に対し断定できる確信を持っている場合には事態自体の不確かさがあるにも関わらず、推量形式の使用が忌避され、「断言形」で実現する場合が多い。このような点を考慮すると、日本語の推量に対する認識は不確かさという推量概念上の本質に忠実だというよりは事態自体に対する話者の実際認識を重視して、推量としての認識可否が決定される場合が多いと言える。

結局、どんな談話語用論的状況であっても、表面的に事態自体の不確かさが存在する場合、これをそのまま認識して言語に反映する傾向が多いのが韓国語の推量である。それに対し、日本語は客観的には事態自体の不確かさが存在する場合であっても、このような表面的な不確かさをそのまま推量として受け入れない。すなわち、話し手の主観的判断や語用論的状況などによって、推量の余地がないと判断される場合は「断定形」や推量表現ではないその他の表現を用いる場合が多い。

3.5. 両言語の推量形式の類型化とその基準

3.5.1. 日本語形式に対する先行研究の分類と位置づけ

本論文の考察対象である当該形式の分類や位置づけの問題については、多くの研究で指摘されてきた。これらの形式は話し手の事態に対する不確かな認識態度を表す際に用いられるという点で共通性を見せるが、その本質的な意味や用法上の違いを考慮し、モダリティ体系の下位類型においては異なる意味範疇に位置づけた研究が多い。主に、認識的モダリティの下位類型に属するものとして、「だろう」を「推量」に、「ようだ」「らしい」を「証拠性判断」という異なる範疇に位置づけている研究が多い。例えば、三宅(1995, 2006)、仁田(2000)、宮崎(2002)、現代日本語文法(2003)などの研究では、推量モダリティ形式の範囲と下位分類の設定において、概ね、各形式の意味的特徴に基づいて当該形式を以下 A~C のように分類している。

A. 認識的モダリティの下位類型 (三宅(1995, 2006)、仁田(2000)、宮崎(2002)など)

①推量：話し手の想像や思考によって、その事態が成立すると判断を下すことである。

この意味に相当する形式として「だろう」を位置づけている。

②実証的判断・証拠性判断：話し手が観察した証拠に基づく推量を表す形式群を指す。

この意味に相当する形式として「ようだ」「らしい」「しそうだ」を位置づけている。
③蓋然性判断: 事態を可能性や必然性があることとして把握する認識的意味である。
可能性の認識を表す形式には「かもしれない」、必然性認識には「にちがいない」を位置づけている。

B. 判断系モダリティの下位分類 (仁田(1989, 1991)、益岡(1991))

益岡(1991)や仁田(1989)では推量意味を表す形式群を判断系モダリティの一つの類型として事態の真偽に関わる話し手の態度を表す真偽判断モダリティとして位置づけている。このような意味を担う主な形式群が事態に対する断定保留を表す推量形式として捉え、以下のように分類した。益岡と仁田のこの分類は用語上の違いはあるものの、基本的に同じ立場を取っている。

①真正モダリティ(一次的モダリティ)

益岡(1991)や仁田(1989, 1991)によると「一次的モダリティ」「真正モダリティ」とは純粋に発話時現在の判断を表し、形式自体がテンス(時制)の分化を許さない。さらに、統語的にも連体節内の生起が不自然であるという点を考慮し、推量の「だろう」をここに属する形式として位置づけている。

②疑似モダリティ(二次的モダリティ)

益岡(1991)と仁田(1989, 1991)によると、「二次的モダリティ」または「疑似モダリティ」とは発話時以外の判断を表せると共に、形式自体が過去時制になり得る。さらに、統語的に連体節内に収まる特性を見せる「だろう」以外の推量形式「ようだ」「らしい」「かもしれない」「にちがいない」などを位置づけている。また、仁田と益岡は同じ疑似モダリティ形式に属する形式であっても、「ようだ」「らしい」などを「徴候性判断」に属する形式として位置づけ、「かもしれない」「にちがいない」のような「確からしさを表す形式」とは性質を異にする点を論じた。

C. モダリティ形式の分類 (工藤(2000))

- ①基本叙法: モダリティ形式には、常に、発話時における話し手の心的態度を表すものがあり、これを基本叙法とする。工藤(2000)は叙法性の最も基本的なものは、その関係づけが発話時のもの、話し手のものという二つの特徴を挙げている。
- ②副次叙法: 基本叙法と違って、発話時ではないもの、あるいは話し手以外の文主体の態度を表すもの。

工藤(2000)で述べる「基本叙法」と「副次叙法」は、基本的に上述した仁田(1989)の「真性・疑似モダリティ(形式)」「一次的・二次的モダリティ」などと同様である。

以上のように、従来の研究では本論文の考察対象である当該形式を認識的モダリティの下位類型として「推量」と「証拠性判断」に区分する研究や判断モダリティ体系の下位類型として「真正モダリティ」と「疑似モダリティ」またはモダリティ形式の下位類型を「基本叙法」「副次叙法」などに位置づけてきた。用語上の違いはあるものの、基本的に上記の諸観点はすべて「だろう」と「ようだ」「らしい」は意味及び形態的に異なる振る舞いを見せる形式として把握し、推量の「だろう」と「証拠性判断」または「疑似推量」の「ようだ」「らしい」を異なる範疇に属するものとして把握した点で同様である。

3.5.2. 韓国語形式に対する先行研究の分類と位置づけ

前章でも述べた通り、従来の韓国語研究では推量意味を表す諸形式に対する位置づけや下

位類型化の問題については体系的な研究がなされていない。このような背景で、従来の対照研究では韓国語形式の推量モダリティ体系の中での位置づけや下位類型化の問題は基本的に日本語の枠組みをそのまま韓国語に適用させてきたと見受けられる。例えば、羅(1996)は「だろう」に対応する「-겠-」「-을것이-」を「推量」に位置づける一方、「ようだ」「らしい」に最も相応する韓国語形式「것 같다」「모양이다」は「根拠依存型」に位置づけている。また、金(1999)のように、「だろう」と「겠지」「을것이다」を「根拠非前提型」、「것 같다」「모양이다」を「根拠前提型」に位置づけて、両言語の対応関係を捉えてきた。これは基本的「推量」と「証拠性判断」という日本語の枠組みを受容したものである。

3.6. 本論文における両言語の推量形式の類型化と基準

本節では本論文の考察対象である当該の推量形式を推量モダリティ体系の中での位置づけを試みる。本論文は両言語の推量モダリティ形式の体系を真正推量と疑似推量に下位区分し、「だろう」と韓国語形式「-겠-」「-을것이-」を「真正推量形式」、そして、日本語の「ようだ」「らしい」とこれに最も相応する韓国語形式「것 같다」「모양이다」を「疑似推量形式」として位置づける。

3.6.1. 真正推量と疑似推量

本論文の考察対象である日本語の諸形式を前述した多くの先行研究では認識的モダリティの下位類型として、「推量」と「証拠性判断」または「判断系モダリティ」の下位類型としての「真正モダリティ」「疑似モダリティ」という異なる意味範疇に位置づけてきた。しかし、本論文は推量モダリティ体系の中での位置づけを試みるため、当該形式をすべて推量モダリティ体系の中に位置づける。つまり、「だろう」と対応する韓国語形式だけではなく、両言語の疑似推量形式も話し手の事柄に対する不確かな認識を表すという本質的な推量意味を共有している点を重視し、これらの形式も推量モダリティ体系の中に位置づける。ただ、「だろう」と「ようだ」「らしい」の本質的な意味と用法上の違いを反映して、推量モダリティの体系を「真正推量」「疑似推量」という二つの推量類型を設定して区分する。

3.6.2. 真正と疑似推量形式の区分基準

本論文は両言語の真正推量と疑似推量の捉え方及び区分基準については基本的に日本語の先行研究で指摘されてきた以下のような点を受容する。

3.6.2.1. 真正推量形式の判断基準

①真のモダリティ概念の適合性

基本的に「だろう」と「-겠-」「-을것이-」はすべて発話時現在における話し手の認識しか表せないという点で類似性を見せる。真のモダリティとは発話時の話し手の認識を表すと定義されてきた。これは、当該形式が発話時を離れた認識を表示できないことを意味する。発話時の認識可否と関連する「過去形の可否」という形態的特性は真正モダリティ²⁴の「だろう」と「ようだ」「らしい」などのような疑似モダリティ形式を区別する重要な基

²⁴ その他に、工藤(2000)でも、叙法性(モダリティ)の最も基本的なものは、「発話時のもの」、「話し手のもの」という二つの特徴を充たしているものを「基本叙法」と捉えている。

準として受容されてきた。本論文は「だろう」と同様に、韓国語の「-ㄹ-」「-을것이-」も上記のような点を充たしている点を考慮し、両形式を真正推量形式として位置づける。

②連体修飾節内の生起不可

従来の先行研究(益岡(1991, 1999)、仁田(1989, 1991)、森山(1992)、木下(2013)など)では「だろう」が真正推量形式であること把握する特性として「連体修飾節内の生起不可」という点を挙げている。例えば、益岡(1999)などでも言及した通り、「だろう」は以下の例文(10)のように、「～こと」のような客観的な表現の内部要素として用いることができない特徴が見られる。それに対し、「だろう」以外に「らしい」や「にちがいない」等のいわゆる疑似モダリティ形式は「～こと」の内部要素として用いられると述べた。益岡(1999)は形式名詞「こと²⁵」を被修飾部とする連体修飾節の要素に置かれた場合に対し、モダリティ性と関連させて説明した。真偽判断に関わる形式群はモダリティ性を表す形式であるが、「～こと」の内部に出現する場合は、モダリティ性をうしなって命題内要素として機能すると述べている。以下の例(10)～(11)からも分かるように、韓国語の両形式も「だろう」と同様に、「～こと」のような客観的な表現の内部要素として生起できない点から、常に「モダリティ性」を保持していると把握できるため、真正推量形式の特性を持っていると思われる。

(10)a. ??太郎も送別会に参加するだろうことが分かった。 (益岡 1991: 115)

(10)b. 타로도 송별회에 참가하*겠다/*을것이+것(こと)

(11)a. *私たちが修理するだろう家

(11)b. *우리들이 수리하겠(gess)/을것이(eulgeosi)+집

韓国語の両形式も「だろう」と同様に、上記のような点を充たしている点とこれらの特性において、「것 같다」「모양이다」などの疑似推量形式と区別されるという点を考慮し、本論文では両形式を韓国語の推量モダリティの体系の中で真正推量形式として規定する。

③事態成立の疑問化・否定化の可否

「だろう」が推量の意味を表す多数の形式の中で、最も判断性が強い形式であることは以下のようなテストからも傍証することができる。このような現象について、従来の先行研究では「事態成立の否定化・疑問化可否」という点を挙げて、「だろう」が真正推量形式である点を論じている(益岡(1991)、森山(1992)、仁田(2000)、木下(2013)など)。例えば、仁田(2000)では事態成立の否定化の可否は、発話時の話者の認識を表すという制約を受ける程度の反映であるとした。自ら認識を提示し、同時に否定するのは矛盾であるから、発話時の話者の認識(主観性)を表すならば、否定形にはならないとした。

上記のような話し手が下した判断をすぐさま否定する「事態成立の否定化可否」の問題は次の「事態成立の疑問化可否」ともほぼ同様の特性である。話し手が発話時に判断した内容をすぐさま否定できないことと同様に、自分が下した判断について、すぐさま疑問を呈する場面には話者の判断性が強い真正推量形式は不適切である。

「だろう」と同様に、韓国語の真正推量形式「-ㄹ-」「-을것이-」も以下の例文(12)～(13)のように、話し手自身が下した事態成立の判断をすぐさま疑問化することは不適切である。

²⁵ 益岡(1999)では命題とモダリティの境界を確定するために、「～こと」の内部要素になり得るか否かという基準を設けるのが有効であると指摘している。「こと」という名詞を内容補充する連体修飾部に入り得る要素が命題内要素であり、入らない要素が命題外要素(モダリティ性)である。命題とは、話し手から独立した客観的な事態を表す部分である。客観的事態に含まれるのはどの範囲の要素なのであろうか。この問題を解決するためには「客観的事態を表す形式を日本語の中で求める必要があると述べ、これにふさわしいのが「こと」である。関連する見解として、寺村は「こと」の対象は命題で表されるような内容や、動詞、形容詞で表される動作、作用、変化、状態などを一般的に概念として表したものであると指摘している。また、三上(1959)は命題に相当するものを「こと」と名づけている。

この現象について、仁田(2000)では「証拠性判断型」に属する「ようだ」「らしい」と推量の「だろう」は「事態成立の疑問化可否のテスト」において違いが見られるとした。仁田(2000)によると、徴候性判断では、すぐさま事態成立を疑問化しても逸脱性は生じないが、推量「だろう」は逸脱性が発生するとした。このテストは「だろう」が事態の真偽可否に対し、話し手の判断に最も焦点が置かれる形式であることを証明する重要な手がかりとなる。つまり、「だろう」が「ようだ」「らしい」のような疑似推量形式より、話し手自身の判断性が強いいため、判断と同時に事態の成立を疑問化するのは逸脱性が生じると考えられる。このような現象は韓国語の真正と疑似推量形式にも同様に適用可能である。

- (12)a. あの飛行機、飛び立つだろうが、本当に飛び立つかな？ (仁田2000)
 (12)b. 저 비행기, 날아오르*겠(geoss)지만/*을것이지(eulgeosi)지만, 정말로 날아오를까?
 (13)a. あの飛行機、飛び立つようだが、本当に飛び立つかな？
 (13)b. 저 비행기, 날아 오를 것 같은데(geosgattda), 정말로 날아오를까?

3.6.2.2. 真正推量と疑似推量の区分基準と適用

前述した通り、仁田(1989, 1991)や益岡(1991)などの先行研究では「専ら発話時における話し手の心的態度の表明を表す」という真のモダリティの概念を充たす形式を「真正モダリティ」とであると捉えた。一方、この要件から外れた特性を持っている心的態度、つまり、話し手の発話時以外の心的態度も表せる形式群でありながら、「テンスの分化」や「連体節内の内部要素としての生起」「否定化」のような形態的・統語的特性などにおいて「真正モダリティ」と区別される形式群を「疑似モダリティ」と捉えた。

本論文も基本的に上記した 仁田(1989, 1991)や益岡(1991)の基準を受容し、「だろう」と「ようだ」「らしい」及びそれに対応する韓国語形式を真正及び疑似推量形式として区分する。その理由は本論文の考察対象である韓国語形式にも基本的に以上のような基準によって、推量の類型化ができるからである。ただ、本論文は真正と疑似推量の区分基準について従来の研究で考慮されていない以下のような事項を加えて、当該形式の推量モダリティ体系の位置づけを明確にする。

一つ目は、形式自体の構成要素の語彙性意味の有無である。

「真正推量」の「だろう」は形式自体が純粋に推量モダリティという文法的機能のみを担う形式である。すなわち、「だろう」が推量用法として用いられた多くの例文を分析すると、この形式自体から推量意味の以外の語彙的意味²⁶が残存していると捉えられる場合は存在せず、もっぱら純粋な推量意味だけが表される。それに対し、「ようだ」「らしい」などのような疑似推量形式は「様子」「らしさ」という形式自体の構成要素が本来持っている原型的意味(root meaning)が残存していると把握できる事例が多い。後述するが、両言語の疑似推量形式が用いられた多くの用例を分析して見ると、多くの場合、上記のような原型的意味が反映されていることを確認できる。

また、先行研究でも言及したように、真正推量は推量の意味を中心とする「だろう」によって直接的に表現されるが、「疑似推量」に属する「ようだ」「らしい」などの形式は本質

²⁶ これらの形式は本来推量助動詞ではなく、最初は語彙性意味を持っていたものであり、時間の経過と共に、徐々に文法化して推量の意味機能を持つことになったと考えられる。実際に、「ようだ」「しそうだ」「らしい」の語源性意味について以下のように記述されている。

A. 「ようだ」

①形式名詞「やう」に断定の助動詞「なり」が付いてできた。 日本語文法大辞典(2001:805)「やうなり」の項)

②名詞「よう(様)」に助動詞「だ」の付いた語。(日本語文法大辞典(2001:824)「ようだ」の項)

B. 「らしい」

現代語の「らしい」は江戸時代に古語の接尾語「らし」が転じてできた語でものもであり、この接尾語は主に名詞に後接し、その名詞の属性を表示するものとして理解されてきた。(日本語文法大辞典(2001:839))

的意味が「だろう」のような事柄の真偽に対する純粹な推量判断に重点があるというよりは、目前の事態や証拠に対する認識や表現に中心がある点で異なりを見せる。また、対応する韓国語形式の場合も真正推量形式「-겠-」「-을것이-」と疑似推量形式の間に日本語と同様の現象が見られる。

二つ目は、事態または場面解釈における話者の焦点付与の違いが挙げられる。この問題は後述するが、基本的には本論文で述べる「真正推量」の「だろう」と「疑似推量形式」である「ようだ」「らしい」の区分基準と関わっている従来の「±証拠性」という見方に対する代案である。すなわち、当該事態を捉える話者の焦点付与の違いによって、真正推量の「だろう」と「ようだ」「らしい」のような疑似推量形式の選択が異なってくるという見方である。本論文でこのように捉える理由は証拠に基づいた事態認識が「だろう」にも適用可能であるからである。本論文は基本的に真正推量形式「だろう」は 何らかの根拠に基づいて、当該事態の真偽に対する話し手自身の推量判断に焦点が置かれやすいと捉える。一方、疑似推量形式「ようだ」「らしい」は事態に対する真偽判断よりは主に発話時の目前の事態や証拠自体の認識や表現に焦点が置かれやすいと捉える。

三つ目は、真正と疑似推量の概念上の違いと関わる問題である。真正推量は何らかの根拠に基づいて、これから起こる事態の真偽に対する話し手の判断に焦点が置かれやすい。それに対し、疑似推量は根本的に外部世界または現実世界から入手した実在的根拠または証拠自体に対する認識を表現することに焦点が置かれる。

四つ目は、判断根拠の特性においても、真正推量と疑似推量の違いが見られる。

すなわち、真正推量形式は主に話し手の心中にある内在的根拠に基づいた推量であるのに対し、疑似推量は現実世界に存在する実在的根拠に基づいた推量に用いられる点である。すなわち、両類型の推量が用いられた多くの用例を分析すると、真正推量と疑似推量の根拠特性は概ね内在的根拠と実在的根拠に区別されるという点である。

以上のような点を踏まえて、本論文は「だろう」と「ようだ」「らしい」とこれに対応する韓国語形式を区分する枠組みを認識的モダリティの下位類型ではなく、推量モダリティ体系の中での推量属性の違いを反映して区分する。すなわち、「だろう」とそれに相応する韓国語形式「-겠-」「-을것이-」を「真正推量形式」に位置づける一方、「ようだ」「らしい」とこれに対応する韓国語形式「것 같다」「모양이다」を「疑似推量形式」に位置づける。

3.7. 本論文における主観性

主観性という言葉は多義に使われるが、本論文で述べる主観性は事態に対する話し手の捉え方を表すモダリティと関わっているものである。主観性の捉え方をモダリティに限った場合、「主観性」とは、事柄に対する発話時の話し手の心的態度が表出されているものであり、「客観性」とは必ずしも上記したようなものが表出されていないものである。勿論、両者はいつも厳格に区別されるのではなく、程度性を特性とする。

モダリティの論議における主観性はある事態に対する話者の主観²⁷がどれだけ反映されるかという問題である。本論文の考察対象は話し手の事柄に対する不確かな認識を表す際に用いる推量モダリティ形式なので、基本的にモダリティの論議における主観性と深く関わっている。主観性の捉え方について、次のような指摘がある。

Lyons(1982:102)は「主観性」について、自然言語が、その構造と働き方の中に言語行為者による自らの態度や信念の表出に備えている様と定義している。また、Lyons(1982:102)は「自然言語がその使用者にその主観性を押し付ける程度は言語によって異なる」と述べている。本論文は上記のLyons(1982)で述べたように、主観性に関して言語間に違いが見られ

²⁷ Palmer(1986)の分析に従うと、事態の把握を「話し手自身」の観点から見るほどより主観的であり、自分の観点よりは他人または外部的情報に頼るほど、より客観的であると言える。

るという立場を受け入れる。すなわち、本論文で述べる「主観性」は表現形式に反映される主観性の言語間差異を前提とする。言語表現によって主観性表出の差異が見られるという点を受容し、両言語の推量形式の間にも事態に対する話者の主観の介入程度の違いが存在することを前提とする。

3.7.1. 推量形式と主観性

前述した通り、基本的に本論文で述べる「主観性」は表現形式に反映される主観性の言語間差異を前提とする。本論文は両言語において主観性表出の差異が見られる事象の一つとして、推量モダリティ形式を取り上げて、考察を進める。

まず、本論文は両言語諸形式に関わる主観性程度を事態に対する話者の主観介入の程度を指す概念として捉える。

従来の研究では一部の推量形式に限って、断片的に主観性程度の問題を論じてきた。また、両言語の推量形式の対照分析に主観性程度の問題を取り上げた研究は管見の限り見当たらない。本論文では各々の推量形式及び両言語形式に作用する話し手の判断に対する主観的態度の介入程度を分析し、両言語形式の対照分析に適用してみる。主観性の言語間の差異を把握するためには、言語形式の主観性程度の違いをどのように捉えるべきなのかについて考えなければならない。以下では言語表現の主観性程度と関わる主な見解を紹介する。

Palmer(1986)によると、「主観的表現」とは事柄に対する話者の意見や態度の表明であり、「客観的な表現」とは、話者を排除した間接情報や引用などの外部的根拠に基づいた判断のようなものを表すと述べた。また、事態の把握を「話し手自身」の観点から見るほどより主観的であり、自分の観点よりは他人または外部的情報に頼るほど、より客観的であると言える述べた。日本語においても、工藤(1982、2000)は、主観性を前提とするモダリティの最も基本的なものは、「発話時のもの」「話し手のもの」という二つの特徴を満たしているものであるとした。例えば、工藤(1982:50-51)は「叙法性(modality)」を「話し手の立場から文の叙述内容と現実及び聞き手との関係付けの文法的表現と定義し、一次的な基本叙法と二次的な疑似叙法があると述べた。例えば、「だろう」のような一次的な基本叙法は上記したような「発話時のもの」「話し手のもの」という二つの特徴を常に満たしながら、判断作用が話し手中心である。それに対し、「するようだ・らしい・しそうだ」などの形式は、過去形を持ち、連体形・条件形などの文中の位置に立つ語形または機能を持ちながらも、判断作用の主が必ずしも話し手ではないという性格を持つ形式群であるとし、これらを二次的叙法あるいは疑似叙法と呼んだ。

本論文は推量形式間の主観性程度の差異を捉える基本的な前提として、モダリティにおける主観性と関わる上記した Palmer(1986, 2001)及び工藤(1982、2000)の見解を受け入れて論議を進める。

3.7.2. 主観性程度を把握する基準

本論文では両言語の真正推量形式「だろう」と「-ㄹㄹ-」「-을것이-」及び疑似推量形式「ようだ」「らしい」と「것같다」「모양이다」の推量意味及び用法上の違いが両言語形式の主観性程度と深く関わっている点を述べる。そのためには、主観性程度の違いを測る客観的基準が必要である。そこで、本論文では以下に述べる A～C の「真のモダリティの意味」「推量意味及び用法上の特性」「形態・統語的特性」などを基準に、個別形式及び両言語の間に見られる主観性の程度を測る。以下で述べる諸特性は前述した多くの先行研究で主に「真正モダリティ」と「疑似モダリティ」または「推量」と「証拠性判断」に属する「だろう」と「ようだ」「らしい」などを区別する意味及び用法上の特性として論じてきたものである。本論文は以下のような諸特性を両言語形式の主観性程度の違いを立証する基準として受容して論議を進める。

A. 真のモダリティ意味と関わる主観性：「話し手の発話時の認識可否」

日本語研究において、真正モダリティ「だろう」とその他の疑似モダリティ形式の主観性の度合いを測る基準として、普遍的に認められている見解はモダリティ自体の概念である「話し手の発話時の認識（工藤(1982)、仁田(1989, 1991)、益岡(1991)など）」という基準である。「だろう」は発話時における話者の認識のみを表すことができるという点から最も主観的形式であるとした。過去の事態は既に客体化された事態であるから、発話時の事態よりは話者の主観が反映されにくいと把握できるためである。後述するが、韓国語の真正推量形式「-ㄹ-」「-을것아-」は稀ではあるが、「だろう」と違い、韓国語の過去時制素「-었-(eoss)」が後接し、発話時以前の事態に対する話者の認識を表す場合にも用いる場合がある。上記のような現象は両形式が真性推量という点では同じであるが、真正推量としての主観性程度に違いがあることを裏付ける根拠として考えられる。

B. 推量用法上の特性と主観性

本論文は上記したモダリティ自体の概念と以下に述べる①～⑦の推量用法上の特性に見られる両言語形式の違いは主観性程度の違いを反映する手がかりになると思われる。

本論文は 各々の形式の推量判断に関わる多様な談話語用論的特性は判断に対する話し手の主観性程度と深く関わっていると考える。推量判断に関わる以下のような多様な特性は本論文の考察対象である両言語の「真正推量形式」と「疑似推量形式」の意味及び用法と関わっているものであり、これらの諸用法は両言語及び形式間の主観性程度を測る基準になると考えられる。以下では各々の特性と表現形式の主観性との関連性について簡単に述べる。

①間接的根拠と主観性

他人や外部世界から得られた間接的根拠に基づいた判断における使用可否は推量形式の主観性程度と深く関わっている。間接的根拠の中でも、当該の判断が最も典型的な間接的情報源に基づいているものが「伝聞情報に基づいた判断」である。伝聞情報に基づいた判断とは基本的に話し手の主観的態度の反映が最少化されるため、それだけに判断が客観性を持つ。伝聞に対する解釈は寺村(1984)の「ある事態について、自分は直接知らないが、他からこう伝え聞いたということを相手に伝える言い方である」とした。また、仁田(2000)によると、伝聞は、描き取られている命題が第3者からの情報によったものであるという命題内容の仕入れ方に関わっているだけであるとした。すなわち、伝聞というのは何らかの話者の判断作用を経ていないことになり、これは「話し手の判断介入の最少化」を意味する。後述するが、伝聞のような間接的情報に基づいた判断において、両言語の真正推量形式は許容度の違いを見せるため、このような間接的情報の可否を両言語形式の主観性程度を測る基準として受け入れる。

②事態把握における焦点の違いと主観性

目前の同一状況を根拠とした場合、両形式の間に許容度の差が生じる理由は同一事態を把握する際に、話者がどこにより焦点を置くのかという点において相違が見られるためである。

すなわち、客観的に同一状況であっても、話し手が証拠に基づいた目前の事態や場面自体の認識に焦点を置くのか、それとも、根拠に基づいた事態の真偽可否や蓋然性判断に焦点を置くのかによって、話し手の主観介入の程度は異なる。前述した通り、判断に焦点が置かれるほど、主観性が高いのに対し、目前の事態自体や証拠自体に焦点を置くほど、主観性程度は落ちる。本論文はこのような事態把握の違いは後述する両言語の真正推量形式の間に事態把握における焦点付与の違いと関わっているため、主観性程度を測る基準として受け入れる。

③疑似推量への接近と主観性

本論文における「疑似推量形式への接近」と主観性程度の関わりは、基本的に両言語の真

正推量形式に適用可能なものであると思われる。疑似推量への接近が意味するのは、真正推量形式が従来の証拠性判断または疑似モダリティ形式として規定されてきた「ようだ」「らしい」「しそうだ」などの意味または用法に類似する振る舞いを見せるという点である。本論文で真正推量形式として位置づけた三つの推量形式「だろう」「-을것아-」「-ㄹ-」は真正推量の意味用法を共有する点で類似する。その一方で、「-ㄹ-」は「-을것아-」「だろう」と違い、「様態性用法」「発話現場性及び現場性根拠の依存度」などのような疑似推量形式の属性をあわせ持っている。つまり、疑似推量形式または証拠性判断の属性を持っている形式が相対的に主観性程度も落ちると捉えることができる。

このような疑似推量形式への接近は三形式の主観性程度の違いと深く関わっていると思われるため、本論文ではこれを主観性程度を測る基準として受容する。

④ 仮想世界における推量(反事実仮想条件文との共起傾向)と主観性

澤田(2007)は話し手が事態を認識する際には基本的にその認識が現実世界に基く認識なのか、話し手自身の仮想や想像世界に基く認識であるのかに区分できると述べた。仮想世界の認識は専ら話し手自身の内的思考に基いて事態を認識することである。例えば、澤田(2011)は法助動詞が表している話し手の心的態度を正確にするためには「仮想性」あるいは「現実性」というムード的意味を考慮しなければならないと述べている。仮想世界に基づいた認識は判断に対する話し手の主観介入の余地が現実世界に基づいた認識より多いと言える。

反事実仮想というのは話し手が仮に作った前提状況から想定可能な事態の帰結を予測するため、事態の判断に対する話し手の主観が強く反映される。これに対し、疑似推量形式は基本的に話し手の仮想世界に基づいた認識にはあまり用いられないため、判断に対する話し手の主観介入の程度が真正推量形式に比べて低いと言える。後述する反事実仮想条件文における使用上の頻度や傾向において、両言語の真正推量形式の間に相違点が見られるため、「仮想世界の認識」を両言語形式の主観性程度を測る基準として受容する。

⑤ 推量副詞との共起関係と主観性

本論文は後述する両言語の真正推量形式「だろう」「-ㄹ-」「-을것아-」の間に見られる主観性程度の違いを測る一つの手がかりとして、三形式の「推量副詞との共起関係」を受容する。前述した通り、基本的に三形式は真のモダリティ意味を満たしている点で真正推量形式という類似性を見せながらも、推量副詞との共起関係において、相違点が見られる。

すなわち、両言語の代表的な推量副詞、「たぶん」「おそらく」「きっと」や「아마(ama)」「틀림없이(teullimeobsi)」との共起関係において、三形式は異なる振る舞いを見せるという点である。ある副詞と特定の文末推量形式が共起関係を見せる場合、その副詞とモダリティ形式の意味は矛盾しないと思われる。すなわち、ある副詞とモダリティ形式が共起しやすい傾向を見せる場合、その副詞とモダリティ形式は似通った意味を持っていると捉えることができる。そのため、これらの推量副詞との共起関係の傾向を見せる形式がそうでない形式より主観性程度が高いと捉えることができると思われる。後述するが、両言語の三つの真正推量形式は上記のような推量副詞との共起関係において差異が見られる。以上を踏まえ、本論文では「推量副詞との共起関係」を両言語の三つの真正推量形式の主観性程度を測る手がかりとして受容する。

⑥ 事態成立の疑問化可否と主観性

事態成立の疑問化可否は基本的に従来の「推量」と「証拠性判断」または本論文の「真正推量」と「疑似推量」の間に見られる主観性程度の違いを測る一つの手がかりになるものである。例えば、仁田(2000)は話し手の主観的判断よりは証拠や事態の認識に焦点が置かれる疑似推量形式である「ようだ」「らしい」は、すぐさま事態成立を疑問化しても逸脱性は生じない。それに対し、事態成立に対する話し手の主観的判断に焦点が置かれる推量の

「だろう」は逸脱性が生じるとした。日本語形式と同様に、韓国語の諸形式にも上記のような基準が適用可能であるため、本論文では「事態成立の疑問化可否」を両言語の真正推量形式と疑似推量形式の間に見られる主観性程度の違いを測る基準として受容する。

⑦判断根拠の明示性と主観性

本論文は判断根拠の明示性程度と関わる両言語の疑似推量形式の間に見られる許容度の違いは言語間の主観性程度の違いと関わっていると考え。これは前述した Palmer(1986)の見解とも関連性がある。Palmer(1986)は事態の把握を「話し手自身」の観点から見るほどより主観的であり、話し手自身の観点よりは他人または外部的情報に頼るほど、より客観的であると言える述べた。つまり、Palmer(1986)の観点に従うと、当該の判断が実在的根拠に依存する形式がそうでない形式より話し手の主観介入の程度が低いと言える。明示的かつ実在的根拠に依存した判断ほど、その推量には話し手の主観介入の余地が低くなるからである。本論文は後述する両言語の疑似推量形式の間に「判断根拠の明示性有無」と関連して許容度の違いを見せるため、主観性程度を測る一つの手がかりとして受容する。

C. 形態・統語及び談話的特性と主観性：「過去化可否」「事態成立の否定化可否」

否定形・過去形に関する振る舞いという観点から、「だろう」以外の認識的モダリティ形式も含め、主観性について考察を行った。例えば、森山(1992)、木下りか(2013)、仁田(2000)などによると、否定形・過去形の可否は、発話時の話者の認識を表すという制約を受ける程度の反映であると述べている。本論文も上記した先行研究で述べたような「否定化可否」「過去化可否」の問題が当該形式の主観性と深く関わっていると捉える。

まず、形態的に、「過去化の成立可否」は表現形式の主観性程度と深く関わっている。先行研究でも述べられた通り、基本的に真のモダリティが発話時の話し手の認識という限定がつけられているものであるためである。例えば、「だろう」は形式自体が過去形にならず発話時の認識しか表せないという点で疑似推量形式と対立する。発話時を離れた過去事態は既に客体化された事態であるため、相対的に話し手の主観的態度の介入が落ちると言えるからである。それに対し、疑似推量形式は発話時を離れた過去事態の認識を表すことができることから、相対的に主観性程度が低いと言える。

また、統語または談話的な側面において、「否定化可否」も推量とその他の形式の主観性程度と関わっている。すなわち、話し手の主観的判断が大きく反映される真正推量は自らの認識を提示し、同時に否定するのは矛盾であるから、発話時の話者の事態認識を表すならば、否定形にはならないはずである。それに対し、疑似推量形式は証拠または事態自体の認識に焦点が置かれるため、真正推量形式に比べて、判断に対する話し手の主観介入の余地が少ない。そのため、話し手自らの判断を提示しながらも、同時に否定しても矛盾が生じない。

3.8. 真正推量と疑似推量形式の用法上の接点

本論文は二つの種類の推量形式または意味範疇の間に見られる用法上の連続性または接点に注目する。この連続性とは両意味範疇の間に見られる意味または用法上の特性が重なる現象を意味するものである。

本論文がこのような両意味範疇の連続性に注目する理由は、意味範疇または多様な特性間の境界の不確かさを強調する認知言語学の基本的認識に基づくものであり、従来の「±証拠性」のような二分法的な捉え方に対する疑問と代案を模索するためである。

本論文は以上のような研究背景を踏まえて以下の点の解明に注目しながら、論議を行う。

上記の問題を明らかにするために、本論文では主に日本文学作品や小説などから入手した実例を中心に、先行研究で「推量」と「証拠性判断」という概念で区別されてきた「だろう」

と「ようだ」「らしい」の推量意味と用法上の連続的側面に注目し、そのような連続性が見られる状況や条件について述べる。具体的に両範疇が完全に弁別される非連続的な側面を考慮しながらも、「だろう」が「証拠性判断」へ接近する現象、逆に証拠性判断の「ようだ」「らしい」などが「推量」の「だろう」に接近し、両範疇の意味用法上の連続性が生じる状況を観察する。また、どういう状況で、どういう要因のため、典型的な推量または事態認識の意味が実現されるのかについて考えてみる。先行研究では、単に「ようだ」「らしい」が証拠性意味があるとか「だろう」が純粋推量の意味があるという事実や現象の提示に留まった。そのため、「だろう」と「ようだ」「らしい」がどういう条件において、純粋な推量意味または証拠性判断の性格が強く反映されるかなどの問題については論じていない。

本論文は出来る限りの範囲で、このような問題についても観察を行うことにする。すなわち、上記の現象を基に、当該形式が「事態自体（証拠）の認識」と「事態判断中心（主観性）」の意味において、形式間に程度差が見られることを明確にする。特に、推量用法上の連続性から、同一範疇に属する「ようだ」「らしい」の間に事態認識（証拠認識）の焦点付与の程度に差異が見られるという点を指摘する。

また、上記の観察から得られた現象に基づいて、当該形式の判断モダリティ体系の中での位置づけの問題についても考えてみる。これは従来の「±証拠性」という意味素性を基に、当該形式を「推量」と「証拠性判断」と区分した捉え方に再考の余地が見られたからである。

本論文は多くの先行研究で、認識的モダリティの下位類型の中で、「推量」と「証拠性判断」という異なる意味範疇に属させてきた当該形式が厳格に区別される立場は取らない。

ただ、両類型間または各々の形式間には用法上の接点が存在するため、両類型の形式は常に区分されるのではなく、意味用法上の連続性が見られる点を述べる。

3.8.1. 「だろう」と「ようだ」「らしい」の推量用法上の接点

「だろう」と「ようだ」「らしい」は個々の形式の本質的意味及び用法上の違いを反映すると、「推量」と「証拠性」や「真正」と「疑似」という異なる意味範疇に属することは確かであり、本論文も基本的に先行研究の見方は妥当であると考ええる。

ただ、本論文は「だろう」と「ようだ」「らしい」は従来の「推量」と「証拠性判断」²⁸に該当する諸形式が推量の意味用法上の特性において完全に二分されるのではなく、諸形式が使用される文脈的状况によって意味用法上の接点が見られるという点を述べる。

本論文は従来、日本語の認識的モダリティの下位類型において、各々「推量」と「証拠性(evidential)」²⁹という異なる意味範疇のものとして規定されてきた「だろう」と「ようだ」「らしい」の間に見られる意味用法上の連続的側面が見られる現象とそのように把握でき

²⁸ 本論文で述べる「ようだ」「らしい」「しそうだ」のような証拠性モダリティ形式は言語的環境によって、「比況」「例示」「婉曲」「属性表示」「様態」などのような多義的な意味の広がりを見せるが、本論文は、基本的に話し手の事態に対する不確かな認識を表す推量意味に注目する。

²⁹ 日本語における「証拠性」の定義と該当形式に対する主な見解を整理すると、以下のように捉えられている。鈴木(1996)は、証拠性(Evidentiality)とは、一般的には情報が何に基づいているか—すなわち伝聞に基づくのか、外的状況に基づくのか、運動の結果や痕跡に基づくのか、それともそうしたのではなく話し手が既に持っている知識に基づくのかということを示し、その情報の真実性を保証する文法的カテゴリーであると考えられている。鈴木(1996b)によると日本語における「証拠性判断」の捉え方は主に「話者が観察したことや証拠に基づく推定を表す形式群」を指す。その他にも、多くの日本語研究、例えば、三宅(1995) 仁田(2000)、益岡・田窪(1992)、宮崎(2002)、日本語記述文法研究会(2003)などでは「ようだ」「らしい」「しそうだ」「(する)そうだ」などのいわゆる推定や伝聞を表すとされる形式類の認識的な意味を証拠性と捉えている。これらは、その情報が何に基づくのかということの表示である「証拠性(evidentiality)」であると述べている。上記の先行研究は用語上の違いはあるものの、三宅(1995)の「実証的判断」、仁田(2000)の「徴候性判断」、宮崎(2002)の「証拠性判断」の捉え方と該当形式の範囲については基本的に同様の立場を取っている。

る条件について考察を行う。

前述した先行研究でも確認した通り、多くの先行研究で「証拠性判断」という意味範疇や判断モダリティ体系の下位類型の一つである「疑似モダリティ」に位置づけられてきた「ようだ」「らしい」などの個別形式の意味分析や形式間の使い分けの問題について多様な観点から分析がなされてきた。また、「証拠性判断」とは区別される「推量」の「だろう」の意味用法について多様な観点から分析が行われてきた。しかし、推量「だろう」と「証拠性判断」と規定されてきた三形式の意味及び用法上の連続的な関係及び相互関連性については考察されてこなかった。その背景には、多くの先行研究において、「推量」の「だろう」と「ようだ」「らしい」などのような「証拠性判断」は基本的な意味及び典型的な用法の相違から、完全に区分される意味範疇に属する形式であるという普遍的認識があるからである。両意味範疇を区別する最も重要な特性について、三宅(1995, 2006)、仁田(2000)、宮崎(1993, 2002)、益岡(2007)などの研究では以下の例文(14)～(15)における許容度の差に基づいて、「推量」と「証拠性判断」の本質的な違いを説明している。つまり、例文(15)のように、「だろう」は現実世界に存在する実在的な根拠に基づいた判断には使えず、例文(14)のように、現存する顕在的根拠ではなく、話し手自身の仮想や想像世界に基づいた判断に用いられるとした。このような現象を基に、上記の先行研究では「推量」の「だろう」の特性を「ようだ」「らしい」と区分して、「－証拠性」または「根拠の無標性」と捉えている。一方、「ようだ」「らしい」などの「証拠性判断」は主に発話時に話者が捉えた直接根拠または外在的根拠に基づいた話者の認識を表す場合に用いられるという点を重視し、「＋証拠性判断」と規定できると捉えている。実際、多くの実例を検討すると、上記のような傾向が見られるという事実は否定できない。

(14) 彼のことから、何とうまくやるだろう/*ようだ/*らしい。

(15) パソコンの電源が入らない。壊れてしまったようだ/らしい/*だろう。

本論文も基本的に上の例(14)～(15)のような類型の構文に、推量の「だろう」と「証拠性判断」に属する「ようだ」「らしい」が使い分けられるという傾向は否定しない。だが、当該形式が用いられた多くの実例を検討すると、両意味範疇の違いが先行研究で指摘した「±証拠性」という基準によって説明できない現象も見られる。例えば、三宅(1995, 2006)などでは上記の例文(14)～(15)のように、話し手の仮想世界と外の現実世界の不確かな認識によって区別される「推量」と「証拠性判断」が明確にコントラストできる特徴的な現象だけに注目し、「推量」と「証拠性」の意味を各々の形式の中心的意味と規定したのが理由であると思われる。例えば、以下の例文(16)～(19)は下線を引いた部分からも確認できるように、「だろう」も発話時に話者が現場で捉えた顕在的根拠に基づく判断に用いられていると解釈できる。また、例文(19)のように、表面的には「証拠性判断」の「ようだ」も発話時に話者が現場で入手した実在的根拠ではなく、心中にある内在的根拠に基づく判断に用いると把握できる場合がある。さらに、以下の例文(16)～(19)のように、同じ外的・内的状況に基づいた判断において、「推量」の「だろう」と「証拠性判断」形式とされてきた「ようだ」「らしい」の置き換えも可能である。以下のような現象は従来の研究のように、「証拠性」の「ようだ」「らしい」と「推量」の「だろう」の違いを外部世界に存在する証拠に基づく認識の有無では両形式の違いを説明しきれないことを示す現象であると思われる。

(16) (古くなった食べ物を嗅ぎながら) 食べないほうがいいだろう/ようだ。

(17) 木村は、銭を数える手を止めて、耳をすませた。人の気配はない。あたりはしんと静かである。この村の役所には今の時間には誰もいないだろう/ようだ/らしい。(行人)

(18) 人々が濡れた傘を持って地下道を歩いている。外は雨が降っているだろう/ようだ
らしい。

(19) 坊の夫は、たぶん自分の家族の中心はあくまで自分でなくてはならぬと思っていたようだ/だろう。

勿論、基本的に形式が違うと、その意味も異なるため、上記の例文のような同じ外的または内的状況に基づいた判断における「だろう」と「証拠性判断」に属する「ようだ」「らしい」の互換性が形式間の意味的同一性を保障するものではない。ただ、上記のような現象は、あくまで先行研究で述べられたように、「だろう」と「ようだ」「らしい」が「±証拠性」または「実在的根拠の有無」などの基準によって、完全に区分される意味範疇に属する形式ではなく、談話語用論的状况によって両範疇の間に推量用法上の接点が見られるということを示す現象として把握することはできる。言い換えれば、「推量」から「証拠性判断」への接近及び「証拠性判断」から「推量」への接近というような意味用法上の接点または連続性が存在するということである。

3.8.2. 真正推量形式「だろう」の疑似推量形式への接近

本節ではこれまでの先行研究でお互いの意味及び用法上の弁別的特性にだけ注目してきた「だろう」と「ようだ」の間に見られる意味または用法上の連続的な関係に注目し、真正推量の「だろう」が「証拠性判断」または「疑似推量形式」の「ようだ」に接近していると把握できる現象について検討する。この現象を把握できる基準については、従来の研究で異なる意味範疇に位置づけられてきた両類型の形式を区別する特性として意味または用法上の特性を考慮する。

①推量事態の現場性

前述した通り、「だろう」の本質的意味は「真正推量」である。しかし、「だろう」は以下の例文(20)～(21)のように、三宅(2006)や宮崎(1992)などで「証拠性判断」の属性の一つとして述べた「事態の現場性」の属性を見せている。

(20) 何だか水晶の玉を香水で暖めて。掌へ握ってみたような心持がした。年期の方が背は低い。しかし顔はよく似ているから、親子だろう。(坊ちゃん)

(21) やがて一人の男がやってきて、カウンター席に座った。連れはいない。派手すぎず、地味すぎない。年齢は五十前後だろう。(IQ84)

上の例文(20)～(21)の「だろう」は話し手の想像や仮想世界に基づいた非現場的事態を推量する場合に用いられる「だろう」ではなく、話し手が発話時に外部世界から入手した実在的証拠に基づいた事態の認識を表している。このような用法は典型的な証拠性判断に見られる用法である。さらに、上の例文は真正推量形式の「だろう」が「ようだ」の用法に接近していると把握できる。このような推量用法上の接点は基本的に異なる性質を持つ両形式が常に厳格に区分されるのではなく、場合によっては、連続的な関係を見せることもあることを示している。

②実在的根拠に基づいた判断

以下のような例文(22)～(23)はすべて、話し手が発話時に外部世界から入手した実在的根拠に基づいて推量判断を表す。例えば、例文(22)は「人の気配はない。あたりは静かである」という現場の状況を根拠に「この村の役所には、今の時間には誰もいない」という事態成立の可能性を推量判断している。

- (22) 木村は、銭を数える手を止めて、耳をすませた。人の気配はない。あたりはしんと静かである。この村の役所には、今の時間には誰もいないだろう。
- (23) ええ、足は山歩きで慣れていますから、自信があるんですけど、あとを考えて坂道は大事に歩くんです。この女は娘の珠江よりも年上だろう。しかし、まだ三十には間のある年頃だと信江は判断した。（食卓）

「だろう」が疑似推量形式「ようだ」に接近するという現象は、「ようだ」「らしい」のような疑似推量形式が持っている「事態や証拠自体の認識」という意味特性に類似する振る舞いを見せることを示す。例えば、上の例文(22)～(23)の場合、「だろう」はすべて発話時に話者が現場で捉えた実在的根拠に基づいて、事柄の真偽可否について判断を行っているといえることができる。さらに、上のような例文において「ようだ」は自然に用いられる。これは従来の諸研究で普遍的に認められてきた「だろう」の「根拠非前提型」「非実在的根拠」などの見解とは一致しない現象である。このような現象は「目前の事態または証拠自体の認識」という「ようだ」の特性と「だろう」の「推量」の特性の両方の性質をあわせ持っているといえる。

③ 目前の結果事態に対する原因推量

「だろう」は以下の例文(24)～(25)のように、結果事態を根拠とし、その原因を推量する場合に用いられる場合もある。これは澤田(2007)や木下(2013)などで述べられた見解と一致しない現象である。これらの研究において、「だろう」は「原因推量」には用いられないのに対し、「結果推量」には自然に用いられるとした。逆に「証拠性判断」の「ようだ」「らしい」は「結果推量」には抵抗を見せると述べた。

- (24) (地元の方で話す人たちの中に一人だけ標準語を喋る人を見つけて)
あの人は地元の人ではないだろう。
- (25) (車での接触事故の直後に) あの音から察するに、側面もひどく擦っただろう。

ところが、上の例文の「だろう」は原因推量の解釈が可能である。例えば、例文(24)の場合、「標準語で話す人を見つけた」という結果としての現場を根拠に、「地元の人ではない」という原因を推量していると把握できる。また、例文(25)も「車の接触事故の音を聞いた」という結果事態を根拠に、その原因を推量していると判断することができる。これは「だろう」が結果事態の推量に多く用いられるという特性を否定するのではなく、原因推量の場合にも用いることができるため、部分的には真正推量の「だろう」が原因推量に多く用いられる「ようだ」の用法に接近していると捉えられる。結果的に、このような用法においても、真正推量の「だろう」と疑似推量の「ようだ」の間に用法上の接点または連続性が存在することを認めることができる。

3.8.3. 疑似推量形式「ようだ」「らしい」の「だろう」への接近

本節では「証拠性判断型」または「疑似モダリティ」の代表的形式と規定されてきた「ようだ」が「証拠性判断」の意味より「真正推量」の「だろう」に接近していると把握できる現象を考えてみる。従来「証拠性判断」として規定されてきた「ようだ」「らしい」が推量の「だろう」へ接近していると判断できる基準について、以下の①～⑥の特性を用いる。これらの特性は従来の先行研究で述べられた「推量」の「だろう」が持っている典型的な用法である。本論文は以下に挙げる①～⑥の諸用法に「ようだ」「らしい」が使われている場合、これらの形式が推量の「だろう」に接近している現象として把握する。

- ①「非実在的根拠」②「推量事態の非現場性」③「思考内容化」④「推量副詞との共起」
⑤私の思いでは/私の感情をいえば」との共起 ⑥「結果事態の推量」

以下では上記した①～⑥のそれぞれの用法上の特性に基づいて、「ようだ」が推量の「だろう」に接近する現象を考察する。

①非実在的根拠に基づいた推量

「ようだ」が用いられた用例を分析すると、以下の例文(26)～(27)のように、推量判断の根拠が表面的に顕在化していない場合が見られる。例えば、以下の例文(26)も話し手自身の内在的根拠に基づいて「第三者である彼の感情のたかぶりの状態」について、主観的に判断を行っている。また、例文(27)も話し手の内在的根拠に基づいた話し手の主観的判断を表していると言える。すなわち、話し手自身の内的根拠に基づいて、「仕事に戻るためにはもう少し休憩が必要である」と判断している。

(26) 事実、彼の感情のたかぶりは、単に女の愚かさにかいた腹立ちというような単純なものではなかったようだ。(砂の女)

(27) 歩道を歩いていたときよりは良くなっているが、仕事に戻るためにはもう少しの休憩が必要なようだ。(少年)

このような用法は前述した先行研究で述べられたような典型的な証拠性判断の「ようだ」ではなく、真正推量の「だろう」の用法に接近していると思われる。

②推量事態の非現場性

上記の例文(26)～(27)を含め、以下の例文(28)～(29)のように、「ようだ」が非現場的事態を推量する場合には典型的な証拠性判断の性格が表れないと思われる。すなわち、話し手が発話時に外部世界から入手した証拠に基づいた事態の認識はなく、話し手の内在的根拠に基づいた主観的判断の性格が表れるためである。このような場合も証拠性判断の「ようだ」が真正推量の「だろう」に接近する現象として把握できる。

(28) 親が子をかばおうとする愛情だけは、生活環境とは無関係な本能的なもの…。その思いが、頭の中のどこかに留まっている何事かを刺激しているようだ。(最後)

(29) 服を着替える際、財布をポケットに入れるのを忘れたのかもしれない。

今は何も思い出さないな。ああ、この川が私の記憶力をすべて持っているようだ。

③話し手自身の思考内容の構成可否

話者自身の主観的態度の表明を表す思考動詞「～と思う」の補文節内での生起は真正推量「だろう」の重要な特性であり、「ようだ」「らしい」などの疑似推量形式と区別される特性である。しかし、「ようだ」が用いられた多くの例文を分析した結果、少数ではあるが、以下の例文(30)～(31)のように、話し手自身の思考内容化の構成を表す「～と思う」の補文節内に生起する場合が見られた。

(30) 少しでも身動きすれば針をさしこまれるような激痛がした。ギプスも申し訳にしているようだと思う。どちらにしても不自由な身体になってしまった。(石垣)

(31) 目覚めていようとする彼の善意も疲れには打ち勝てないようだと思う。マリアはにっこりと微笑み、一輪の薔薇の花に止まった蝶ほどにも音を立てずに座った。(福音)

例えば、上の例文(31)のような推量は話し手の内在的根拠に基づいた判断であるため、典

型的な証拠性判断の特性から離れている現象であると思われる。言い換えれば、発話時に話者が外部世界から入手した実在的根拠ではなく、話者自身の内在的根拠に基づいて、思考過程を経て判断に至っているから典型的な証拠性判断の性格から離れていると思われる。さらに、「推量」の「だろう」と置き換えも可能である。結果的に、上記のような現象は「推量」の「だろう」が持っている典型的な特性に「ようだ」が接近している現象として把握できる。

④推量副詞「たぶん」「おそらく」との共起

張(2004)でも言及したように、「ようだ」「らしい」は基本的に「どうも」「どうやら」などの「証拠性判断」の副詞と共起する。しかし、対象資料の分析結果、以下の例文のように、疑似推量形式の「ようだ」も真正推量形式「だろう」と共起する典型的な推量副詞「たぶん」「おそらく」などと共起する場合が見られた。その一部を挙げると以下の通りである。

- (32) 坊の夫は、たぶん、自分の家族の中心は、あくまで自分でなくてはならぬと思っていたようだ。(文句)
- (33) 周知の事実だった。ふつうはそう考える。だが、たぶん寺澤は別の可能性を考えていたようだ。だからこそ、こちらまで調べにやってきた。鯨島ははっとした。(灰夜)
- (34) どこにもぶつけたりしていないので、おそらく水分がついたまま火にかけたのが原因のようだ。(灰夜)
- (35) コロッピーは間違いなくリウマチ性関節炎—それもおそらく多発関節炎を患っているようだ。(ハードライフ)

上の例文(32)～(35)のように、従来、「だろう」と共起する推量副詞として捉えられてきた「たぶん」や「おそらく」と共起する例文の特性を分析すると、表面的には典型的な「証拠性判断」の特性が前面に表れていないと思われる。これは従来の先行研究で述べた基準とも合致する。上の例文(32)～(35)は表面的には推量の「だろう」の本質的特性として把握されてきた「非実在的根拠」「推量事態の非現在性」などの特性を見せている。さらに、話者の主観的判断を表す推量副詞と認定されてきた「たぶん」「おそらく」との共起関係を見せている。換言すると、表面的には典型的な「証拠性判断」の特性を見せていない。張(2004)や杉浦(2009)などでも指摘されてきた通り、「ようだ」「らしい」のような「証拠性判断」形式は主に「どうやら」「どうも」などの証拠性判断と関わる副詞と共起関係を見せるとした。さらに、上の例文(32)～(35)は「だろう」との置き換えも可能である。勿論、上記の例文のように、同一構文に「だろう」「ようだ」が互換できるからといって、「だろう」と「ようだ」が意味的に類似するとは言えない。ただ、「ようだ」が典型的な「だろう」の推量用法に使用されているという事実は疑似推量の「ようだ」が真正推量の意味または用法に接近していると捉えられる手がかりにはなるとと思われる。

また、「らしい」も以下の例文(36)～(38)のように、推量副詞「たぶん」「おそらく」「きっと」などと共起する例文が見られた。

- (36) たぶん、私が良く聞いている80年代の曲で知っている曲がかかったらしい。
- (37) 実はその、たぶんクライストハウスで、あるいはウイローサイドで、何かが起こったらしいんだ。(世界)
- (38) ただし、おそらく涅槃經の大意をとったもので、何品のどこまでとは指摘できないらしい。殿中將軍・侍郎・常侍などと字が刻まれており、おそらく公主(天子の娘)の墓だったらしい。(三国志)

また、以下の例文(39)は「らしい」が「推量」と「証拠性判断」の属性をあわせ持ってい

る中間的用法として捉えることができる。すなわち、文面上の明示的証拠に基づいて判断に用いられている点から見ると、「らしい」の本質的特性である「証拠性判断」の性格を表していると分析できる。他方では、「らしい」が事態成立に対する高い確信を表す推量副詞「きっと」と共起している点や「だろう」との置き換えができるという点を考慮すると、この形式が部分的には真正推量「だろう」の用法を共有していると言える。

- (39) 今、バーのホステスをしている同級生が当時から高平先生の熱狂的なファンだったところを見ると、きっと彼の中に肉感的に女をひきつけるものがあつたらしい。

⑤話し手の主体的判断を表す語句「私の思いでは」「私の感情をいえば」との共起

以下の例文(40)～(41)は話者の内在的根拠に基づいた話者の主観的判断に用いられた「ようだ」である。従来の観点から考えると、これは典型的な証拠性判断の性格を見せる「ようだ」ではないと思われる。以下の例文(40)～(41)は「私の感情を言えば」「私が思うには」という語句との共起からも予測可能である。すなわち、現実世界から話し手が入手した実在的根拠に基づいた判断に用いられた典型的な証拠性判断の「ようだ」の性格を見せていない。さらに、以下の例文において、「だろう」も用いることができる。結局、ここでも疑似推量の「ようだ」が真正推量の「だろう」の用法に接近し、両形式または両類型間の厳格な対立が緩和されている現象を見せる。

- (40) a. 私の個人的な感情を言えば、縁さんというのはなかなか素敵な女の子のようだ。
(40) b. 私の個人的な感情を言えば、縁さんというのはなかなか素敵な女の子だろう。
(41) a. 私が思うには、犯人は警察に捕まるようだ。
(41) b. 私が思うには、犯人は警察に捕まるだろう。

⑥結果事態の推量

澤田(2007)は推量の「だろう」と「証拠性判断」に属する「ようだ」「らしい」の違いを原因・結果推量という因果性観点から説明した。澤田(2007)によると、ある原因を根拠とし、その結果を推量する結果推量には「だろう」は自然に許容されるのに対し、ある結果を根拠とし、その原因を推量する原因推量には不自然であるとした。逆に、「ようだ」「らしい」は原因推量には自然に用いられるが、結果事態の推量には馴染まないと論じた。

ところが、以下の例文(42)～(43)に用いられた「ようだ」「らしい」は「だろう」が持っている「結果推量」の性格が反映されているものとして把握できる。例えば、以下の例文はすべて発話時に話し手が入手した実在的根拠に基づいて、これから起こる事態の結果を推量していると捉えられる。以下の例文(42)は話し手が現場で入手した「ある議案の可決に対する現場の様子、すなわち、みんなが賛成していること」を根拠として、「この議案は問題なく決まる」という事態成立の可能性を判断している。また、例文(43)も「案内放送」という情報に基づいて、これから「花火大会が始まる」という結果事態を推量する構文として把握することも可能である。

- (42) (話者がある議案の可決に関する会議で現場での様子を観察しながら)
みんな賛成しているところを見ると、この議案は問題なく決まるようだ/らしい。
だろう。
(43) (まもなく花火大会が始まるという案内放送を聴いて)
そろそろ、はじまるようだ/らしい/だろう。

前述した通り、結果事態の推量は 木下(1998)や澤田(2007)などの研究で、「だろう」推量の中心的特性として規定した見解である。しかし、上の例文(42)～(43)に用いられた「よ

うだ」「らしい」も「だろう」と同様に、結果事態の推量にも使える場合が見られた。このような事実は「ようだ」「らしい」もこれから起こる結果事態の蓋然性判断に中心がある真正推量の用法にも使用可能であることを示すものである。また、異なる二つの類型に属する形式間の用法上の連続性または接点が存在することは、両形式が常に厳格に区別される両極性を見せるものではないという点を示すものである。

また、以上で述べた事実は従来の先行研究で「推量」と「証拠性判断」に属する形式を区別する基準として受容されてきた「実在的根拠の有無または証拠の有・無標性」という一つの特性だけでは、両類型の形式の違いが明らかになったとは言えないことを示している。

本論文では現象の指摘に留まったが、今後、どのような状況や条件で異なる推量類型に属する「だろう」と「ようだ」「らしい」類の間に意味または用法上の連続性が見られるのかという問題について、考察を深める必要がある。

3.9. まとめ

本章では本論文の論議全体に関わる基礎的な前提になる事項について述べた。主な内容をまとめると以下の通りである。

一つ目は、本論文における推量の捉え方と認識の違い及び本論文の考察対象である当該形式の推量モダリティ体系の中での位置づけを明らかにした。

二つ目は、推量に対する両言語の認識の違いについて考えてみた。すなわち、事態に対する話し手の不確かな認識を表すというものが推量であるという普遍的認識は同様であっても、実際の使用や適用において差異を見せるのは、その根底に両言語の推量に対する認識の違いが作用しているという点を述べた。本論文は両言語の推量に対する認識の違いを究明するために、両言語の真正推量と認定されてきた「だろう」と「-ㄹ-」「-을것이-」を考察対象とし、推量に対する認識の違いが実際の用法にどのように反映されているのかについて考えてみた。考察の結果、韓国語は事態自体に不確かさが存在する場合や確認済みの事態ではない限り、基本的に推量形式を使用する人が多いという「広義的推量」として把握できる。一方、日本語は韓国語に比べて推量の使用領域が狭いことが確認できた。すなわち、日本語の推量に対する認識は不確かさという推量概念上の本質に忠実だというよりは事態自体に対する話し手自身の実際の認識を重視する人が多い。そのため、「不確かさ」を本質とする推量という心的行為が発生する余地がない状況では推量形式ではなく、「断言形」で実現する人が多い。韓国語に比べて相対的に推量を狭く把握する「狭義的な推量」とであると把握できる点を述べた。

三つ目は、本論文は基本的に両言語の推量形式の間に見られる意味と用法上の違いが判断に対する話し手の主観介入の程度と深く関連性を持っていると捉えた。これにより、まず、本論文における「主観性」の捉え方及び推量形式間の主観性程度を測る一連の基準や特性などについて述べた。

四つ目は、従来の研究で認識的モダリティの下位類型において、完全に区分され、異なる意味範疇として位置づけられた真正推量の「だろう」と疑似推量の「ようだ」「らしい」の間に見られる意味及び用法上の接点が見られる現象に注目してみた。多くの用例を分析した結果、「だろう」と「ようだ」「らしい」は用法上の特性において、完全に区分される両極性を見せながらも、語用論的状况によっては、「推量」と「証拠性」という側面で、用法上の連続的な関係が見られる場合も存在するという点を述べた。

第4章 日韓真正推量形式の意味と用法の対照分析

4.1. はじめに

本章では推量の意味を表す多数の形式の中で、両言語において、真正推量形式と位置づけられる日本語の「だろう³⁰」とこれに最も類似する振る舞いを見せる韓国語の真正推量形式「-ㄹㄹ-」「-을것아-」を考察対象とし、対照言語学的観点から両言語形式の推量の意味及び用法上の異同を究明することを目的とする。特に、本章では従来の対照研究で十分に検討されて来なかった両言語の推量の意味と用法上の違いを究明すると共に、そういった違いが生じる理由または背景の究明に注力する。

また、本論文は従来の対照研究では論じていない問題、すなわち、両言語の真正推量形式の間に見られる多様な意味または用法上の違いが形式間の主観性程度と深く関わっている点を究明する。

本論文では、上記のような諸問題を裏付けるために、小説やシナリオなどの対象資料から抽出した多くの用例分析に基づいた実証的分析を通して、関連現象を明らかにする。

本章では主に以下のような(1)～(5)を研究課題とし、論議を行うことにする。

- (1) 推量モダリティ体系の中での「だろう」「-을것아-」「-ㄹㄹ-」の位置づけ
- (2) 「だろう」の推量意味と用法上の特性
- (3) 韓国語形式「-ㄹㄹ-」と「-을것아-」の推量意味と用法上の特性
- (4) 「だろう」と「-을것아-」「-ㄹㄹ-」の対照分析
- (5) 両言語形式の推量意味及び用法上の違いと主観性程度の関連性

以上のような研究課題について、以下のような点を述べる。

まず、上記した課題の中で、一つ目の課題に該当する推量モダリティ体系の中での三形式の位置づけの問題について、三形式は基本的に以下の①②のようなモダリティの意味及び形態・統語的特殊性と③④のような用法上の特性を共有している点で、両言語の推量モダリティ体系の中で真正推量形式として位置づけられる点を明らかにする。三形式の真正推量形式としての認可基準は、基本的に前述した仁田(1989、1991)や益岡(1991)、工藤(1982)などで主張してきた以下にある①～④のようなモダリティの意味と用法上の特性を考慮した。

①真正モダリティは基本的に「発話時現在の話し手の認識しか表せない」という真のモダリティの意味を充たしているものである。これは、発話時以外の認識を表すことができる疑似モダリティ形式とは区別されるという点である。例えば、仁田(1989、1991)は真の典型的な

³⁰ 「だろう」の意味について、「推量」という概念を使わずに記述している研究に、森山(1989)や益岡(1991)、益岡・田窪(1992)などがある。これらの研究では「だろう」の本質の意味について、「断定を保留する」または「断定を避ける」というように記述しているが、本論文はこのような立場は受容しない。「断定を保留する」というような記述は、あまりにも抽象的すぎて「だろう」の本質の意味の記述としては不適切であると考えられるからである。この点については、奥田(1985)も同様の見解を提示している。奥田(1985)も「だろう」の意味に「断定を保留する」というような抽象的な記述を与えることを批判し、やはり話し手の想像の中での認識(奥田の用語では「推し量り」)ということが妥当である旨を述べている。さらに、本論文で挙げた例文を含め、「だろう」が用いられた多くの用例を分析すると、「だろう」は主に、話し手の心中にある内在的根拠もしくは話し手自身の仮想世界の認識に基づいた不確かな判断に多く用いられる傾向を見せた点からすると、「だろう」の本質的な意味を「推量」と規定した方が妥当であると考えられる。

モダリティは「発話時における」「話し手の」といった要件を充たした心的態度の表現を真正モダリティと捉えている。一方、この要件から外れたところを有している心的態度の表現を「疑似モダリティ」と規定している。

②真正モダリティは「過去化不可」「連体修飾節内の生起不可」などの形態及び統語的特性において、両言語の疑似推量形式と区別される点から、真正推量形式として規定できる。

③真正モダリティは疑似モダリティに属する形式群とは違い、基本的に事態の真偽に対する話し手自身の判断に焦点が置かれるため、話し手自身が下した当該の判断をすぐさま疑問化及び否定化できない「事態成立の疑問化不可」の特性を持っている。

特に、三形式の推量モダリティ体系の中での位置づけと関連し、従来の韓国語研究であまり「推量叙法」として認定されて来なかった「-을것이-」について、本論文では上記のような条件を充たしている点と後述する推量の意味と用法上の特性を考慮し、「だろう」「-ㄹ-」と同様に、真正推量形式として規定できる点を明らかにする。

④推量用法上の特性から見ても、三形式は基本的に真正推量形式として位置づけられる。基本的に三形式は「ようだ」「らしい」などのような疑似推量形式のように、外部世界または現実世界から入手した実在的証拠に依存するのではなく、話し手自身の心中にある内在的根拠に基づいた主観的判断に用いられる傾向を見せる。

本論文は上記した①～④の要件を充たしている点を考慮し、三形式すべて真正推量形式として規定できると捉える。

また、上記した課題の中で、(2)と(3)に該当する両言語の個別形式の推量の意味及び用法については主に以下のような点を述べた。

①まず、上記した研究課題の中で、(2)に該当する「だろう」の推量意味または用法と関連し、次のような点を言及した。

前述した多くの先行研究では「だろう」の推量特性を「ようだ」「らしい」などのような「証拠性判断」との対比を念頭に置いて、主に「実在的根拠の不在」「根拠非前提」「仮想世界に基づいた推量」「結果推量」などのような単一基準の適用に基づいて把握してきた。

ところが、本論文では「だろう」が推量用法として使用された多くの用例分析に基いて、「だろう」推量に関わる多様な談話語用論的特性を検討し、「だろう」の推量特性を包括的に分析した。さらに、「だろう」の推量判断に関わる多様な特性間には緊密な関連性が見られる点を明らかにした。

②上記した研究課題の中で、(3)に該当する韓国語の両形式の推量特性については、主に各々の形式の文法的性格と推量の意味及び用法上の違いを解明することに注目した。

本論文は両形式が推量用法として用いられた多くの用例分析及び両形式の推量に関わる多様な談話語用論的特性及び使用上の傾向に基づいて、両形式の推量特性間の異同を明らかにした。特に、両形式は基本的に真正推量という共通の意味及び用法を共有しながらも、「-ㄹ-」は「-을것이-」と違い、疑似推量形式の属性を部分的に持っている「疑似性真正推量形式」として規定できる点で区別されるという点を明らかにする。

③上記の研究課題の中で、(4)に該当する両言語の真正推量形式の対照分析については主に以下のような点に言及した。

三形式は基本的に真正推量という本質的特性を共有しているが、次のような点で弁別される点に言及した。まず、韓国語の「-ㄹ-」は「だろう」や「-을것이-」と同様に、真正推量形式の基本的特性を共有しながらも、「様態性」「外在的根拠」「発話現場性」「事態または証拠自体の焦点付与」などのような疑似推量形式の属性をあわせ持っている点で相違点が見られる点を述べた。特に、「様態性」「事態自体の焦点付与」の特性は「だろう」や「-을것이-」には見られないものである。

また、「-을것이-」は推量の意味及び用法上の特性において、「だろう」に最も類似する形式であることを述べた。ただ、「だろう」と「-을것이-」もすべての推量特性において対応関係を見せるのではない点を明らかにした。すなわち、「-을것이-」は「間接的根拠(伝

聞情報)に基づいた推量」「対話忌避性の有無」などの用法において、相対的に使用上の制約を受けない点で、「だろう」とは少し異なる振る舞いを見せる点を述べる。

④上記した課題の中で、(5)に該当する主観性程度の問題については次のような点に言及した。すなわち、両言語形式の推量の意味及び用法上の違いが生じる背景には形式間の主観性程度の違いと深く関わっている点を明らかにする。主観性程度と関連し、両言語の真正推量形式の中で、「だろう」が韓国語の両形式より主観性程度が高いという点を論じた。また、韓国語の真正推量形式の中では、「-을것이-」が「-ㄹ-」より相対的に主観性程度が高いという点を述べる。特に、「-ㄹ-」は上記したような疑似推量形式の特性を部分的にあわせ持っている点から、三形式の中で、主観性程度が最も低いという点を明らかにする。

4.2. 「だろう」の推量意味と用法

4.2.1. 先行研究

前述した第2章の日本語の先行研究からも確認できたように、「だろう」の本質が推量であるという見解は普遍的に認められている。また、従来の研究で言われてきた推量の「だろう」に対する普遍的認識は、話し手の直接経験的領域にない知識について、想像、仮想、思考、仮定という不確かな認識によって判断を下す場合に用いられる点である。(奥田(1984)、三宅(1995、1996)、金水敏(1992)、宮崎(1993、2002)、仁田(2000)、日本語記述文法研究会(2003)など)。例えば、既述した仁田(2000)や宮崎(2002)によると、推量の「だろう」は単なる記憶の呼び起こしの中にではなく、想像・思考や推論の中に事態の成立を捉えるにあたっては、何らかの根拠が必要になる。推量とは、根拠を通して、想像や思考の何かに事態の成立を捉えることであると述べた。そのため、基本的に何らかの根拠から引き出される別の事態の成立に対する話し手自身の判断に中心があると捉えている。しかし、従来の研究では「だろう」の中心的意味が「推量」であるという普遍的認識はあるものの、「だろう」の推量用法上の特性に対する詳細な分析は行っていない。そのため、本論文は「だろう」の推量用法をより綿密に分析し、その推量特性を綿密に究明する必要があると思われる。

4.2.2. 「だろう」推量用法の特性

本節ではまず、多義的な意味を持っている「だろう」の本質的意味は「推量」であると捉える。「だろう」の本質が推量であるという事実は多くの先行研究に見られる普遍的認識であるが、本論文はこのような普遍的認識を実証的に確認した後、論議を進める。

また、本論文の冒頭でも言及した通り、ある特定の一つの基準を適用して、「だろう」の推量特性を把握するのではなく、多くの用例分析に基いて、「だろう」の推量に関わる多様な談話語用論的特性を検討する。対象資料における推量用法の「だろう」の用例と使用上の傾向を分析した結果、「だろう」の推量特性は概ね、「内在的根拠」「推量事態の非現場性」「対話または発話現場の忌避性」「仮想世界の認識」などの談話語用論的特性によって特徴付けられることが確認できた。

4.2.2.1. 「だろう」と推量

上記した従来の研究において普遍的に認識されてきた「だろう」の本質的意味が「推量」であることは対象資料に表れた使用上の割合や傾向からも確認できる。周知の通り、「だろう」は推量用法の他にも、語用論的状况によって、多義的な用法を見せる。

そこで、本論文は「CD-ROM版 新潮文献の100冊(1995)」と日韓対訳文献(日本語の作品)

から集めた「だろう」の用例909例を抽出し、「だろう」の諸用法の使用実態を調べてみた。分析の結果、「だろう」の用法は以下の表1のように、「推量用法」「確認要求用法」「疑問用法」「婉曲的質問用法」「感動用法」の五つに区分されて用いられることが確認できた。また、これらの各用法がどれくらいの割合で用いられるのかを調査した結果、以下の表1からも確認できるように、「だろう」の多義的な用法の中で、「推量用法」が最も高い使用上の傾向を見せることが確認できた。このような「だろう」の諸用法の使用上の傾向分析の結果はこの形式の本質が「推量」であることを間接的に裏付ける根拠になると思われる。

この調査はあくまで「だろう」の本質が「推量」であることを検証することであり、各々の多義的意味または用法間の関連性などの問題に対する分析は考慮しなかった。

表1. 「だろう」の諸用法と使用傾向上の順位

「だろう」の諸用法	出現頻度	割合
推量用法	468	54%
疑問用法	228	23%
確認用法	149	16%
婉曲的質問用法	49	6%
感嘆用法	15	2%
合計	909	100.0

4.2.2.2. 「だろう」推量根拠の特性

「だろう」の推量特性と関連し、考慮すべき点は推量根拠の問題である。前述した先行研究では、「だろう」の推量根拠の性質を「ようだ」「らしい」の証拠性判断との対比から、主に「一証拠性」「根拠非前提型」「根拠の無標性」などのように把握してきた。

本論文では「だろう」の推量根拠の特性と関連し、従来の観点とは少し異なる捉え方をしている。まず、「だろう」の推量根拠の特性が二面性を見せるという点である。ここで、二面性というのは、推量の「だろう」が話し手の仮想や想像世界に多く用いられる傾向を見せるのは確かであるが、現実世界で話し手が捉えた顕在的または実在的根拠に基づいた推量にも用いることができるという点である。

そこで、本論文では「だろう」推量根拠の特性を実証的に分析するために、「CD-ROM版新潮文献の100冊(1995)」と日韓対訳文献(日本語作品)などから推量用法として用いられた「だろう」144例を無作為に採集し、判断根拠の特性を分析してみた。その結果、従来の見解は一方的に受容しにくいという点が確認できた。分析の結果、「だろう」は根拠特性の面において非常に多様であり、上記の先行研究と違って、「実在的根拠の有無」にはあまり影響を受けないことが確認できた。また、先行研究で「だろう」の推量根拠の特性と規定した「根拠非前提型」「根拠の無標性」「一証拠性」などは本論文で述べる「だろう」の内在的根拠の特性に起因したものであるため、再考の余地があると思われる。

従来の先行研究で「だろう」の推量根拠の特性として述べた上記のような捉え方がどの見解も多くの用例分析に基づいて導き出した見解ではなく、直感に基づいた分析であった。

実例分析の結果、「だろう」の根拠特性は以下の①～④に類型化できることが確認できた。

①内在的根拠に基づいた推量 -101例

用例分析の結果、「だろう」は主に話者の心中にある内在的根拠に基づいた推量判断に使用されるという点が確認できた。「内在的根拠」とは、話者が心中に持っている非顕在的根拠であり、他人や第三者と共有することができない根拠を指す。このような内在的根拠という特性のため、「だろう」が用いられた推量は文面上に判断根拠が明示されていない場合が多かった。このような現象からすると、判断根拠が文面上に明示されていないからといっ

て、「だろう」の推量根拠を従来の先行研究で述べたような「無準拠」「根拠非前提型」と規定するのは再考の余地があると思われる。「だろう」の推量用法は主に以下の例文(6)～(8)のように、内在的根拠に基づいた非現場的事態を推量する場合に用いられる傾向が見えた。以下の例文は 話者の仮想や想像に基づいた単なる願望を述べる主観的判断を表すものである。

(6) “やがて 僕たちは海へ出る。永いこと待ちこがれていた海へでる。”

” そのまま 私たちの 自転車を 海の中へ乗り入れるよ。

“しばらく君の白いねまきが帆になって、 風を孕んで、 自転車は月に照らされた海の上をはしるだろう。(熱帯樹)

(7) そうと分かっても吉村はにわかには信じられなかった。こんなにいい子が…理枝の人の柄と仕事(風俗の子)という目地が一致しない。理枝は器量もいいし、頭もいいし、性格もいい。若い娘として優に平均点を超えているだろう。(マルゲリータの夜)

(8) ぼくがだまってさえいれば、いままでどおり、両親はすくなくとも画についてだけは子供に干渉することはないだろう。(パニック)

「だろう」が 話し手の心中にある内在的根拠に基づいた非現場的事態を推量する場合に最も多く用いられる理由は「だろう」推量の基本的特性と深く関わっている。先行研究でも述べた通り、推量の「だろう」の本質が話し手の 想像、仮想、思考、仮定という不確かな認識と密接に関わっているため、可視的・外在的根拠ではなく、話し手の心中にある「内在的根拠」「非現場性事態」と深く関わっていると考えられる。前述した多くの先行研究では、証拠性判断「ようだ」「らしい」との比較から、上記のようなタイプの推量判断は「根拠非前提」「根拠の無標性」などのように捉えられてきたが、文面上の根拠不在をそのように捉えるのは無理があるように思われる。基本的に、推量判断はある事柄や現状に対する話し手の不確かな認識を表すため、当該事態を把握する際には、基本的に「前提・証拠(事態)」→「推論過程」→「最終的判断」という事態把握のプロセスを経ると思う。

上のような例文(6)～(8)に用いられた「だろう」は話し手の心中にある内在的根拠に基づいた判断である。もう一つ、「だろう」が用いられた以下の例文(9)を加えて、考えてみる。

(9) あるとき、ウィツィロポチトリが神官の夢に現れ、次のようなおつげを伝えました。

石の上に生えたサボテンを探せ。その上に、きっと美しい一羽のワシがつばさを広げて、蛇を食っているだろう。(太陽と黄金)

上の例文(9)は文脈の中で、話者であるウィツィロポチトリが相手に自分が持っている既得知識や経験的情報などに基づいて、「きっと美しい一羽のワシがつばさを広げて、蛇を食っている」という命題の真偽可否について推量判断している場合である。このような例文は従来の推量の「だろう」の根拠特性として捉えてきた「実在的根拠の不在または証拠の無標性」などの観点によっては説明できないと思われる。上記の例文(9)は表面的には文面上に根拠になるものが明示されていないが、話し手自身の既得知識または経験情報によって内在された根拠に基づいて、判断を下していると把握することができる。

②文面上の根拠が明示された場合 - 23例

「だろう」は以下の例文(10)～(12)のように、発話時に外部世界から入手した現場性根拠ではないが、文面上に判断根拠が明示的に示されている場合にも使用される。以下の例文(10)～(12)は文面上の明示的根拠に基づいた話し手の判断を表している場合に「だろう」が用いられた場合である。

- (10) 角田は 25 年間この仕事を始めた。それからずっと現役を通して。下を見れば怖いけど、慣れてしまえばさほどのこともない。上役に気を使う必要もないし…。そこそこに満足のできる仕事と言って良いだろう。(待っている男)
- (11) 北朝鮮側は韓国側がドイツ式の「吸収統一」を狙っているのではないかと強い警戒心を示した。統一が実現するには、なお南北間の相互不信は深いと言えるだろう。
- (12) お母さんは、せんから、私の髪の短いのをいやがっていらしたから、うんと伸ばして、きちんと結って見せたら、よろこぶだろう。(女生徒)

例えば、上の例文(11)の場合、「北朝鮮側が強い警戒心を示した」という文面上に提示された明示的根拠に基づいて、「統一が実現するには、なお南北間の相互不信は深いと言える」という話し手の主観的判断に至っていると捉えることができる。

③ 発話時に外部世界から入手した実在的根拠³¹に基づいた推量判断 - 14 例

「だろう」は発話時に話し手が外部の現実世界から入手した実在的根拠に基づいた判断に用いられる場合がある。例えば、三宅(1995)や宮崎(2002)などの先行研究では、「ようだ」「らしい」などの「証拠性判断」と違い、話者が現実世界から入手した実在的根拠に基づいた判断には用いられないと言及した。ところが、多くの例文が見つかったのではないが、以下の例文(13)～(19)のように発話時に話者が現実世界で捉えた実在的根拠に基づいた判断に「だろう」が用いられた場合も 14 例見つかった。その一部の例文を挙げる。

- (13) ランプの光に気づいて、女が振向いた。女は器用にスコップを使って、石油罐のなかに砂をすくいこんでいた。その向うに、黒い砂の壁が、のしかかるようにそそり立っている。あの上が、昼間、虫をさがして歩いた場所だろう。(砂の女)
- (14) 木村は、銭を数える手を止めて、耳をすませた。人の気配はない。あたりはしんと静かである。この村の役所には、今の時間には誰もいないだろう。(行人)
- (15) 彼は息をつめ、苦痛をこらえてはらばいになると、右手と左足だけで崖っぶりまではっていき、身を投げた。高さは十メートルたらずだが、岩にぶつかれば死ねるだろう。
- (16) 鳥の群れが渦を巻き、大きな黒い鳥も混じっている。まさかこうもりではないだろう。
- (17) (閉店時間の近く、スーパーに買い物に行って、店員がマーカと値段を書くラベルを持って刺し身売り場に近づいているのを見て) 刺し身、安くなるだろう。(少年)
- (18) エレベーターから降りて、長い廊下を歩いていく。どこから聞えるのか、子供の泣き声、TV の歌、ピアノの音…。どの部屋からは全く分からず、ただ、音たちは細長い空間の中で、一緒になって踊り回っていた。こういう響きを聞けるのは、マンションの中だけだろう。(女社長)
- (19) この印象は、先に進むにつれてひどくなり、やがて、すべての家が、砂の斜面を掘り下げ、そのくぼみの中に建てたように見えてきた。さらに、砂の斜面のほうで、屋根の高さよりも高くなった。家並は、砂のくぼみの中に、しだいに深く沈んでいった。傾斜が急にけわしくなった。このあたりでは、屋根のてっぺんまで、すくなく見つっても、二十メートルはあるだろう。(砂の女)

「だろう」が内在的根拠に基づいた判断に多く用いられる傾向を見せるのは確かであるが、上記の例文(10)～(19)からも分かるように、「だろう」も文面上に明示された根拠または発

³¹ 本論文で述べる「実在的根拠」とは、発話時に話者が視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚などの五感を通して、外部世界または現場から入手した根拠を指す。

話時に話し手が入手した顕在的根拠に基づいた判断にも自然に用いられる点も注目する必要がある。

④論理的推論(客観的根拠)に基づいた推量- 6 例

「だろう」が用いられた推量の類型には以下の例文のように、推量の余地がないほど論理的な因果関係が成立する場合にも「だろう」が使用される。このような類型の構文は根拠節と判断帰結節の間に論理的推論関係が成立する。例えば、以下の例文(20)～(22)で「から」節で明示されている根拠節と判断帰結節の間に論理的推論関係を想定することができる。観点によっては、単なる言い回しや断定を和らげる婉曲的用法として捉えることも可能であるが、談話語用論的状况によって、話し手の心中に「未確認」「不確かさ」も想定することができるため、推量の枠組みの中で扱うことも可能であると思われる。

(20) 太郎が私より一つ下だから、今年30になるだろう。

(21) 太郎が私より5才位下だから、40才前後ぐらいだろう。

(22) 娘はこの3月で満6歳だから、来年、小学校へ上がるだろう。

例えば、上の例文(20)～(22)のような場合、実際の談話上には推量形式ではなく、「断言形」で表現する場合も多いが、推量の「だろう」を用いる場合も見られる。特に、上の例文(21)の場合、「だろう」の出現可否に関わらず、「40才前後ぐらい」という語句からも予測できるように、話し手の不確かさが反映されている。これは後接する「だろう」に推量意味が反映されていることを立証する。また、例文(22)の場合にも「この3月で満6歳である」からといって、必ず「来年に小学校に上がる」と断言できない場合も想定できる。このような論理的推論過程が成立する場合にも推量形式の使用が可能である点は話し手の心中または認識の中で、判断に対する不確かさが内在されているためであると思われる。

以上のような現象から考えると、先行研究で述べたように、「だろう」推量根拠の特性を「ようだ」「らしい」などのような「証拠性判断」との対比を明確にするため、「根拠非前提型」「根拠の無標性」「±証拠性」などと捉えるのは再考の余地があると思われる。さらに、上の②③に用いられた例文(13)～(19)の現象からみても、基本的に「だろう」は特定根拠の性質に制約を受けず、用いることができると思われる。

以上から考えてみると、従来の見解とは異なる次のような事実が確認される。

第一に、基本的に「だろう」は話し手の心中にある内在的根拠に基づいた推量に多く用いられる傾向を見せるという点である。

第二に、用例分析の結果、「だろう」は内在的根拠に基づいた判断に多く用いられる傾向を見せるが、上記した②～④のように、文面上の明示的根拠や発話時に外部世界から入手した実在的根拠に基づいた判断に使用された場合も43例が見つかった。これは「だろう」の推量根拠は非常に多様であり、特定の根拠に制約を受けないことを示す現象である。

第三に、従来、「だろう」の推量特性を単に「仮想や想像世界に基づいた推量」と規定した見解も再考の余地があることが確認できた。その理由は上記の用例でも確認したように、「現実世界に基づいた推量」に用いられた「だろう」も存在するからである。前述したように、「だろう」と「ようだ」「らしい」が担当する推量領域を「仮想世界」と「現実世界」に二分すると、上記の例文(13)～(19)に用いられた「だろう」の許容可能性を説明することができない。なぜなら、これらの例文はすべて現実世界で話し手が捉えた目前の実在的根拠に基づいた判断を示す現象であるからである。

4.2.2.3. 推量事態の非現場性

「だろう」が用いられる推量事態の属性を分析した結果、以下の例文(23)～(24)のように、非現場的事態を推量する場合に多く用いられることが分かった。「だろう」が推量用法とし

て用いられた144例の中で、発話時に外部世界から入手した実在的根拠に用いられた場合の14例を除いた130例はすべて非現場的事態の推量判断である。

- (23) 新聞では本の広告文が一番たのしい。一字一行で百円 二百円と広告料取られるの
だろうから皆 一所懸命だ。一字一句、最大の効果を収めようとうんうんと唸って、
絞りだしたような名文だ。こんなにお金のかかる文章は世の中に少ないだろう。
(女生徒)

- (24) あるとき、ウィツィロポチトリが神官の夢に現れ、次のようなおつげを伝えました。
石の上に生えたサボテンを探せ。その上に、きっと美しい一羽のワシがつばさを広げ
て、蛇を食っているだろう。(太陽と黄金の都)

推量の「だろう」が非現場的事態を推量する場合に多く用いられる点は「だろう」の重要な特性である。基本的に「推量事態の現場性」は後述する疑似推量に多く見られる属性であるため、「内在的根拠」「話者の仮想世界に基づいた推量」などを主な特性とする「だろう」と矛盾する特性である。そのため、「だろう」は上記のような非現場事態を推量する場合に多く用いられると思われる。

4.2.2.4. 対話忌避性

多くの用例を分析すると、推量用法の「だろう」は実際の対話状況にはあまり用いられない傾向を見せることが確認できる。実際、前述した対象資料から収集した推量用法の「だろう」144例を分析した結果、対話状況に用いられた「だろう」は見つからなかった。「だろう」の対話忌避性は先行研究でも指摘している。例えば、日本語記述文法研究会(2003)では基本的に推量用法の「だろう」は地の文(論説文や叙述文など)で用いられる傾向があると述べている。そのため、聞き手が想定される対話状況においては、主に「確認・同意要求の用法」「婉曲的質問用法」などの対聞き手モダリティへの移行が見られるという点は既に主張されてきた。また、日本語記述文法研究会(2003)によると、推量を表す「だろう」は話し手自身の想像や仮想または思考によって、それ事態が成立するという私的判断を下す場合に用いられる形式であると言及している。そのため、主に文語体や論説文などの書き言葉で用いられる傾向が強いのにに対し、話し言葉にはあまり用いられないと述べている。例えば、以下の例文(25)～(28)のように、実際の会話場面では不自然である³²。

- (25) (友人に話し手自身の見解を表明する場面)
翻訳やってみて。出版社が有名なところだから、原稿料も十分もらえる?だろう。
- (26) (息子が母に電話で話す場面)
お母さん、今日は飲み会があるから、きっと遅くなると思う/?だろう。
- (27) (囲碁指して間もない頃、話者が少し有利な状況になると、相手に話す場面)
今日は俺が勝つ?だろう/勝つと思う。
- (28) (食卓に置いてあるパンを食べた経験がある人が相手に話す場面)
このパン、きっとおいしいよ/おいしいと思う/?だろう。

推量の「だろう」が会話状況であまり用いられないのは前述した「非現場的事態の推量」

³² ただ、聞き手の存在を考慮する対話状況の場合には「だろう」の丁寧語である「でしょう」を用いることができる。「でしょう」を用いる場合、丁寧な表現となり、相手を尊重するという意味が生じる。従って、話し手が直接に知り得ない聞き手の感覚・感情・判断等の事柄に触れる際、「でしょう」を使うことによって、聞き手に配慮しながら話し手の考えを述べることがよく見られる。そのため、話し手推量用法では「だろう」が対話状況にはあまり用いられない。「でしょう」という形式は主に対話状況に用いられる形式である。

「話し手自身の内在的根拠に基づいた判断」という特性とも深く関わっていると思われる。会話状況というのは基本的に発話現場性を前提とする。話し手と聞き手の存在が必須である。そのため、非現場性事態に対する話者自身の推量を表す場合に用いる「だろう」は発話現場性と聞き手の存在を前提とする会話状況での使用が忌避されるのではないと思われる。

また、「だろう」は話し手自身の私的または主観的判断という性格が強いため、聞き手への働きかけ性が生じる会話状況よりは話し手自身の主観的態度や見解を表明する場合が多い文語体や論説文または独り言などの言述状況に多く用いられるのではないと思われる。

「だろう」の対話忌避性と関連して、看過できない点是对話状況では「だろう」の丁寧語である「でしょう」が用いられるという事実である。ここで考慮しなければならない点は「だろう」と「でしょう」の関係であり、両形式が役割を分担している点である。すなわち、「でしょう」は丁寧語として、主に対話状況に用いられるのに対し、「だろう」は非丁寧語として、主に非対話状況の推量用法として使用されると把握することができる。「だろう」と「でしょう」の推量特性の違いと関連する諸問題はより綿密な分析を必要とするため、この問題は今後の課題とする。ただ、多くの用例を分析してみると、推量用法の「だろう」は対話状況であり用いられない傾向を見せるという事実は否定できない。

4.2.2.5. 仮想世界における推量

「だろう」は以下の例文(29)～(32)のように、現実には起こらなかったことを仮想する、いわゆる反事実仮想を表す場合に用いられる場合が多い。これは先行研究で言及した「だろう」推量の主な特性である「仮想世界における推量」と関わっている。既に確認したように、「だろう」が内在的根拠に基づく推量であるという特性は仮想世界という非現実世界に基づいた推量とも深く関わっている。例えば、以下の例文(33)からも確認できるように、「だろう」は「想像する」という語と共に用いられる点も上記のような「だろう」の特性と深く関わっている。基本的に仮想というのは、推量判断の根拠が話し手の心中にある内在的根拠である場合が多い。つまり、外部世界に存在する実在的根拠に基づいた判断よりは、話し手の内在的根拠に基づいた判断により適切であるからである。

(29) あの時、江南に土地でも買っておいたら、今頃は大金持ちになっているだろう。

(30) もし彼らが大勢でやってきたら、つぐみの計画はだいなしになっただろう。(つぐみ)

(31) 彼がもう少し僕の悪口を言い続けていたら、僕は彼を殴っただろう。(魔女の結婚)

(32) 私の家では、子供たちに、贅沢なものを食べさせない。子供たちは、桜桃など、見たこともないかもしれない。もし、食べさせたら、よろこぶだろう。(桜桃)

(33) お貞さんは一座の席へ先刻から少しも顔を出さなかった。自分は大方極りが悪いだろうと想像して、その極りの悪い所を、此处で一目見たいと思った。(行人)

4.2.3. 諸用法間の関連性

上述したように、「だろう」の中心的推量特性は「仮想世界の認識」「内在的根拠」「対話忌避性」「推量事態の非現場性」「事態表現の非様態性」などの談話語用論的特性によって、特徴付けられることが確認できた。前述した通り、従来、「だろう」の推量特性については多様な見解が提示されてきたが、このような特性間の関連性についてはあまり注目されて来なかった。個別形式の属性または特性の単純な提示だけでは、当該形式の本質的特性が明確に究明されたとは言えない。

本論文は上記したような「だろう」の多様な推量特性の間に緊密な関連性があると思う。「だろう」推量の本質的特性は多くの先行研究でも述べた通り、話し手自身の仮想や想像世界において、命題の真偽を把握するものである。「だろう」の諸特性はすべて上記のような

本質的特性を共有する。「事態及び根拠の現場性」「対話及び発話現場性」「様態性」などの諸用法はすべて外部世界または現実世界を基にするものである。このような諸特性は「だろう」推量の本質的特性と合致しないため、推量用法の「だろう」は忌避されると考えられる。補足すると、「仮想や想像及び仮定条件の帰結」というのは基本的に話し手の主観的態度が多く反映されるため、外部世界から捉えた実在的根拠より内在的根拠に基づいた話し手自身の主観的判断に用いられるのが自然である。このような特性は上記した「事態及び根拠の現場性」「様態性」「発話現場性」などとも相容れない。このような諸特性はすべて事態や場面の現場性を共有しているため、「だろう」推量の基本的原理と矛盾すると考えられる。以上、「だろう」の推量用法に対する論議をまとめると、以下の①～⑤の通りである。

- ①使用領域：主に話し手の仮想世界や仮定条件の帰結などの非現実世界に基づいた推量判断に多く用いられる傾向を見せる。
- ②推量根拠：主に話し手の心中にある内在的根拠に基づいた推量判断に用いられる。
- ③推量内容：現場事態・様態中心の推量判断にはあまり用いられない。
- ④談話類型：主に対話状況ではない文語体に用いられる。対話状況ではあまり用いられない。
- ⑤諸用法間の関連性：「推量事態の非現場性」「内在的根拠」「対話忌避性」「非様態性」などの諸用法はお互いに深い関連性がある。これらの諸特性はすべて「だろう」推量の本質的特性である「話者の仮想世界及び非現実世界に基づいた推量」と深く関わっている。

4.3. 韓国語の真正推量形式「-ㄹ-」と「-을것이-」の意味及び用法

本節では韓国語の真正推量形式である「-ㄹ-」「-을것이-」両形式の推量の意味及び用法上の特性と異同を明らかにする。

4.3.1. 先行研究の残された課題

前章³³でも述べた通り、韓国語研究では「-ㄹ-」「-을것이-」について、「テンス」または「推量叙法」という二つの異なる文法範疇を巡る議論と両形式の推量意味と用法上の違いについて、多様な観点から分析されてきた。ところが、未だに以下のような残された課題が見られる。

一つ目は、両形式の文法的性格について十分に論じていない。すなわち、従来、日本語の「だろう」が推量助動詞として規定されてきた点とは違い、韓国語形式「-을것이-」は「先語末語尾(prefinal ending)」なのか、それとも「補助用言」であるのかなどの文法的性格については論じていない。

二つ目は、両形式の推量モダリティ体系の中での位置づけの問題については検討されていない。すなわち、これらの形式がモダリティ体系の中で、真正推量形式として規定できる根拠や基準などについて綿密な分析がなされていない。

三つ目は、両形式の推量意味と用法上の異同を分析する研究方法上の問題である。

「-ㄹ-」「-을것이-」に対する韓国語研究に見られる共通的問題は研究者の直感や少数の例文に基づいて、個別形式及び両形式間の異同を捉えてきたという点である。勿論、研究者の少数の作例に依存した諸研究も部分的に説得力はあるものの、両者が担っている推量の意味と用法上の違いをすべて解明したとは言えない。さらに、両形式の違いを「根拠の主・客観性」「根拠獲得の時間性」「確信度の高低」などのような単一基準の適用だけでは両形式の推量の意味及び用法上の異同を正確に把握することができないと思われる。当該形式の

³³ 詳しい内容は第2章の2.1.4.1節を参照されたい。

意味及び用法上の異同を正確に捉えるためには、できるだけ多くの用例を具体的に検討することが有効である。

4.3.2. 「-겠-」「-을것이-」の文法的性格

本論文では前章で述べた「真のモダリティの意味の適合性」と「形態・統語的特性」及び「推量用法上の特性」などを考慮し、両形式を韓国語の真正推量形式として位置づけた。前述した通り、伝統的に「-겠-」は「未来」「推量」「意志」などの意味を持っている形式であると捉えられてきた。従来の韓国語研究において、「-겠-」の文法範疇を巡る見解は、概ね、「未来時制説」「推量叙法説」の二つの見方に分かれてきたが、未だに統一的な見解が見られない。すなわち、一つは、「-겠-」を「未来時制の先語末語尾」と捉える立場であり、もう一つは、未来時制説を否定し、「推量叙法の先語末語尾」として捉える立場である。

本論文では以下の例文(34)～(35)の検討に基づいて、「-겠-」を真正推量のモダリティ形式と規定し、「未来時制説」を受容しないことにする。

- (34) a. 하나코는 어제 학교에서 점심을 먹었다.
(花子は昨日学校で昼ごはんをたべた。)
- (34) b. 하나코는 지금 학교에서 점심을 먹는다.
(花子は今学校でご飯を食べている。)
- (34) c. 하나코는 내일 학교에서 점심을 먹겠다(gess).
(花子は明日学校で昼ごはんを食べる)
- (35) a. 하나코는 어제 학교에서 점심을 먹었겠다(eoss+gess).
(花子は昨日学校で昼ごはんを食べ+「た(eoss)」+gess)
- (35) b. 하나코는 지금 학교에서 점심을 먹겠다.(gess)
(花子は今学校で昼ごはんを食べる+gessda。)
- (35) c. 하나코는 내일 학교에서 점심을 먹겠다.(gess)
(花子は明日学校で昼ごはんを食べる+gessda。)

「-겠-」を「未来時制」と捉える立場は上の例文(34)に基づいたものである。例えば、上の例文(34a)～(34c)の場合、「過去」「現在」「未来」の時制が明確に体系化されると把握される。ところが、「未来時制」の見解を受容すると、上の例文(35a)～(35b)のように、「時制説」で説明できない場合もある。結果的に未来時制形式「-겠-」が「推量」という別の意味を持っている形式として理解しなければならない。それに対し、「-겠-」を「推量叙法」と捉える立場は上の例文(35)に基づいたものである。例えば、例文(35a)～(35c)は各々「過去推量」「現在推量」「未来推量」と理解すれば、「推量」という一つの意味で上記の関連現象を体系的に捉えることができる。すなわち、「未来時制説」の見方では上の例文(35a)～(35b)のような「過去推量」「現在推量」の「-겠-」の用法を説明することができない。このような問題点を解決するためには、未来時制形式が「過去」「現在」「未来」の推量にも用いられるという別途の解釈が必要になるという複雑な問題が生じる。

以上のような点から、本論文では「-겠-」をモダリティという文法範疇の推量形式として規定する。

一方、「だろう」と類似するもう一つの韓国語形式「-을것이-」は連体形語尾「-을(eul)」+形式名詞「것(geos)」+繫辞「-이(i)-」という三つの形態素が結合して推量モダリティの意味を担う複合形式である。ここで明確に確認できる点はこの複合形式の三つの構成要素の意味が明確であり、韓国語文法研究においては未だに一つの文法形式として把握しない見解が多いという点である。しかし、これらの三つの形式の形態素分析は明確であり、各々の

形態素の本来の意味もそのまま認識されるが、各々の形態素の意味だけでは推量の意味を表すことができない。これはこれらの三つの形式の複合形式が推量モダリティ形式として文法化し、推量の意味を担うことになったと把握しなければならない。ただ、「-ㄹ-」とは違い、形式自体の形態素の分析が不可能ではないため、完全に文法形式化したものではないが、各々の形態素の本来の意味がそのまま分析されず、複合形式としての意味が推量の意味を表すという点を考慮すると、推量モダリティ形式としての意味を認めなければならない。そこで、本論文では「-을것이-」を推量モダリティ形式と規定し、その文法的特性を「-ㄹ-」のように先語末語尾の特性を持つ準文法形式として規定する。

- (36) a. 하나코는 벌써 밥을 먹었을 것이다(eulgeosi). (過去推量)
 (花子はもうご飯を食べた「(過去形態素「eoss」+「eulgeosida」)
 (36) b. 하나코는 지금 밥을 먹고 있을 것이다(eulgeosida). (現在推量)
 (花子は今ご飯食べている+推量)
 (36) c. 하나코는 이제 곧(未来) 밥을 먹을 것이다. (eulgeosida) (未来推量)
 (花子はもうすぐご飯を食べる+eulgeosida)

上の例文(36)は上記した論議を裏付ける現象になると思われる。すなわち、「-을것이-」も上の例文(36)に基づいて「-ㄹ-」と同様に、その本質が時制形式ではない推量叙法形式であると考えられる。

4.3.3. 推量モダリティ体系における「-ㄹ-」「-을것이-」の位置づけ

本論文は基本的に韓国語の両形式を「だろう」と同様に、推量モダリティ体系の中で、真正推量形式として位置づける。前章でも述べた通り、このように位置づける基準は前述した多くの先行研究、例えば、仁田(1989, 2000)、益岡(1991)、工藤(1982, 2000)などで述べた見解を受容する。すなわち、以下のような点を考慮した。

①真のモダリティの意味の適合性

「-ㄹ-」「-을것이-」は「だろう」と同様に、基本的に「発話時現在の話し手の認識しか表せない」という点で類似性を見せる。真のモダリティとは発話時の話し手の認識を表すと定義されてきた。これは、当該形式が発話時を離れた話し手の認識を表せないことを意味する。そのため、両形式は「だろう」と同様に、基本的に形式自体が「テンスの分化(過去化不可)」を許さない。「過去形の可否」は真正モダリティ³⁴の「だろう」と「ようだ」

「らしい」などのような疑似推量形式を区別する重要な基準として位置づけられてきた。
 ②韓国語の両形式は「だろう」と同様に、従来の先行研究で「真正モダリティ」の認定基準として受容されてきた「事態成立の疑問化または否定化不可」「過去化不可」「連体修飾節内の生起不可」などの特性を共有している。後述する推量意味及び用法上の特性からも「-ㄹ-」「-을것이-」は推量モダリティ体系の中で「真正推量形式」として規定できる。

総合すると、「-ㄹ-」「-을것이-」も上記のような真のモダリティ意味及び形態・統語的特性を「だろう」と共有している点、さらに、韓国語の疑似推量形式「것 같다」「모양이다」などとの区別にも同様に適用可能であるという点を考慮し、「-ㄹ-」「-을것이-」を韓国語推量モダリティ体系の中で、真正推量形式として位置づける。以下の例文は上記のような特性を示すものである。例えば、以下の例文(37a)～(37b)は両言語の真正推量形式「だろう」

³⁴ 工藤(1982, 2000)でも、叙法性(モダリティ)の最も基本的なものは「発話時のもの」「話し手のもの」という二つの特徴を充たしているのもであるとし、これを「基本叙法」と捉えている。

と「-겠-」「-을것이-」が発話時以前の認識を表すことができない点で類似性を見せる現象である。また、以下の例文(38a)～(38b)は、両言語の真正推量形式は基本的に連体節内の生起が不自然であるという点で類似性を見せるものである。また、例文(39)は両言語の真正推量形式すべて話し手自身が判断した事態成立について、すぐさま疑問化することはできないことを示すものである。

(37) a. 明日は雨が降る*だろうた。

(37) b. 내일은 비가 오*겠었다. (겠(gess)+過去形態素(eoss)+ 文終結語尾(da))

*을 것이었다. (을것이(eulgeosi)+ 過去形態素(eoss) +다)

(38) a. 私たちが修理する*だろう家

(38) b. 우리들이 수리하*겠(gess)/*을 것이(eulgeosi)+집

(39) a. あの飛行機、飛び立つ*だろうが、本当に飛び立つかな？ (仁田2000)

(39) b. 저 비행기, 날아오르*겠(gess)지만/*을 것이(eulgeosi)지만, 정말로 날아 오를까

ただ、後述するが、三つの形式の中で、「-겠-」は真正推量形式でありながらも、推量用法上の特性からみると、「疑似推量形式」または「証拠性判断」に接近する用法にも多く用いられるという点を考慮し、「-겠-」は「疑似推量形式」の属性を持っている形式として捉えることができると考えられる。

4.3.4. 「-겠-」の推量意味と用法

前述した通り、従来の韓国語研究における「-겠-」の推量の意味及び用法に対する分析は主に、この形式と類似性を見せる「-을것이-」との違いを究明する研究が多かった。また、両形式の違いを「根拠の性格」「根拠獲得の時間性」「確信度の高低」などのような単一基準から捉えようとした研究が多かった。また、研究方法においても研究者が恣意的に作った少数の例文や直感に基づいた分析が主流であった。しかし、「-겠-」の推量意味を正確に捉えるためには、推量用法として用いられた多くの用例の検討と多様な談話語用論的状况を綿密に検討し、その意味を把握する帰納的な分析を取る必要がある。

そこで、本論文では「-겠-」の推量の意味と用法上の特性を実証的に分析するために、「シナリオや戯曲」「長編小説」「論説文やエッセイ」などの異なる種類の文献から集めた実例を主な対象資料とした。また、「-겠-」の全般的な推量用法上の特性や使用上の傾向を分析するために、国立国語院(2011)の「21 세기 세종계획 말뭉치(21世紀世宗計画コーパス)」から抽出した用例も用いた。このような多くの用例に基づいた分析は諸形式が表す主な特性及び使用上の傾向を実証的に把握することによって、少数の作例に依存した従来の直観的な分析方法を改善し、従来の研究成果を検証するためのものである。用例分析の結果、推量と関わる「-겠-」の意味または用法は大きく以下の二つに区分されることが確認できた。

① 真正推量としての「-겠-」の用法

② 疑似推量形式に接近する「-겠-」の用法

以下では、上記した①②に該当する「-겠-」の用法について、具体的に検討する。

4.3.4.1. 真正推量としての「-겠-」の意味及び用法

「-겠-」の主な特性は話し手の心中にある内在的根拠に基づいた主観的判断に用いられる形式であることが分かった。このような事実は上記した通り、「-겠-」の本質的意味は「真正推量」である点を検証する手がかりになる。すなわち、「-겠-」も前述した「だろう」と

同様に、外部世界に存在する実在的根拠に依存する「証拠性判断」と違い、主に話し手自身の心中にある内在的根拠に基づいた判断に用いられる使用上の傾向が見られた。

①内在的根拠に基づいた推量

既述した通り、日韓推量形式の対照研究において、推量根拠の特性は真正推量と疑似推量形式の違いを区別する主な基準として受容されてきた。

本論文では韓国語の真正推量形式に見られる推量根拠の特性を根拠自体の有無の問題ではなく、内在及び外在的根拠³⁵に区分する。これは基本的に推量判断というものが何らかの根拠に基づいたことを前提とするものであり、根拠の有無とは性格を異にする。本論文は「-ㄹ-」の推量根拠の特性を従来の研究のような直感に基づいた少数の例文ではなく、多くの用例分析を通じた分析を行う。そこで、「-ㄹ-」の推量根拠の特性を調べるために、韓国語の小説やシナリオ及び論説類などの多様な文献³⁶と「21 세기 세종계획 말뭉치(21 世紀世宗計画コーパス)」から集めた実例を分析した結果、表 2 のような結論が得られた。以下に示すコーパスから抽出した 106 例は多義的な用法で使われている「-ㄹ-」の用例 1340 個を集めて、その中で、「-ㄹ-」が推量用法として用いられた 106 例を抽出し、その特性を分析したものである。また、以下に示す 294 例はその他の各種文献から抽出したものである。

このような実例を分析した結果、表 2 のような結果が得られた。以下の対象資料の分析結果、真正推量としての「-ㄹ-」の用法は、話者が発話時に外部世界から捉えた実在的根拠に基づいた判断よりは、主に話し手の心中にある内在的根拠に基づいた判断に用いられる傾向を見せることが確認できた。また、このような内在・外在的根拠などの推量特性は「可否」または「±」のような二分法的な意味素性の分析ではなく、あくまで、使用上の傾向に基づいた分析であることを示す。主に使用される根拠特性の割合を見ると、両類型の資料で、「-ㄹ-」はすべて内在的根拠に用いられた割合が 80%を超えることが確認できた。それに対し、外在的根拠に基づいた推量に用いられた割合は 20%に及ばなかった。

このような結果は「-ㄹ-」が基本的に内在的根拠に基づいた推量に用いられるという事実を実証するものであると考えられる。

表 2 「-ㄹ-」の推量根拠

対象資料の類型	内在的根拠	外在的根拠 (現場情報+様態)	合計
コーパス	85 (80.1%)	21 (19.9%)	106 (100%)
各種文献	246 (83.6%)	48 (16.4%)	294 (100%)
合計	331 (81.9%)	69 (18.1%)	400 (100%)

例えば、以下の例文(40)～(42)に用いられた「-ㄹ-」の推量特性は話し手の心中にある内在的根拠から、推論過程を経て最終的判断に至っている推論性推量の性格が強い。

(40) 사탄은 불륜과 혼전 관계와 같은 성적 타락을 통해서 현대 사회를 죄와 타락으로 이끈다. 대부분의 이단 교주들에게 성적 타락과 결혼 관계의 파괴 현상이 나타나 는 것도 이와 관련이 깊다고 말할 수 있ㄹ다(gess). (같이걷기)

(サタンは不倫と婚前の関係といった性的墮落を通じて、現代社会を罪と墮落に導いている。ほとんどの異端の教主たちに、性的墮落と結婚関係の破壊現象が現れること

³⁵ 本論文で述べる「外在・内在的根拠」とは、推量の根拠が話し手の心中に内在されている根拠なのか、それとも、発話時に話し手が外部世界で入手した根拠であるのかということを指す。

³⁶ 「韓国文化芸術振興院(1999)の韓国文学作品集」「김진명의韓日対訳創作シナリオ」「같이 걷기(2011)」などの小説やシナリオ及び論説文類を対象資料とした。

も、これと関連が深いと言える+gessda。)

(41) 사람들은 동네에서 툇 소리가 나면 홍시 떨어지는 소리, 아니면 황만근이 넘어지는 소리라고 생각했다. 누군가 황만근에게 도대체 하루에 몇 번 넘어지는지 세어 보라고 했다. 기왕 넘어지는 거 계산공부나 하라는 충고였겠다(gess). (황)

(人々は町内でドタンという音がすると、熟柿の落ちる音もしくはファンマングンが倒れる音であると思った。だれかファンマングンにいったい一日に何度倒れるのか数えてみろと言った。どうせ倒れるなら、計算の勉強でもしなさいという忠告だった+gessda)

(42) 그때 내가 어머니 말을 거역했는데, 지금 생각하면 할머니가 서운하셨다(gess). (その時、私が母ちゃんに逆らったけど、今になって思えば、お祖母さんが残念がっていた+gessda。) (시)

上の例文(40)～(42)は話し手の心中にある内在的根拠に基づいて主観的に判断をしている場合に用いられた「-겠-」である。例えば、上の例文(42)は過去の経験的知識によって蓄積された内在的根拠に基づいた話者の主観的判断に用いられた「-겠-」である。上の例(42)において、「그때 내가 어머니 말을 안 들었다(その時、私が母ちゃんに逆らった)」という根拠は発話時に外部世界から捉えた目前の實在的根拠ではない。また、「지금 생각하면(今になって思えば)」という語句との共起からも分かるように、話し手の主体的かつ主観的態度が強く反映されている「-겠-」であると言える。

②話し手自身の思考内容化の構成

「-겠-」は以下の例文(43)のように、話し手の内的思考の構成可否³⁷を表す「～と思う」の補文節内に生起することができる。さらに、このような話し手の内的思考の構成は両言語の疑似推量形式すべて許容度が落ちる点からも、真正推量としての「-겠-」の特性が反映されている現象として把握できる。このような「～と思う」の補文節内での生起は、「だろう」「-을것아-」を含んだ真正推量形式に見られる共通的特性である。

(43) 얼굴도 생각했던 것보다 건강한 것 같았고, 생글생글 웃으면서 농담도 했고, 말투도 이전보다 훨씬 정상적이었고, 미장원에 갔었다 하면서 새 헤어스타일을 자랑하기도 했어, 그래서 이 정도라면 어머니 없이 우리 둘이라도 걱정 없겠다(gess)고 생각했지. (아들)

(顔つきも思ったより健康そうだったし、にこにこして冗談なんかも言っていたし、しゃべり方も前よりずっとまともになったし、美容院に行ったんだって新しい髪形を自慢していたし、まあこれぐらいならお母さんがいなくて私と二人でも心配ない+gess+と思ったわけ。)

③事態成立の疑問化不可

「-겠-」は話し手自身が判断した事態成立をすぐさま疑問化する場合、逸脱性が生じる。この現象について、仁田(2000)は以下の例文(44)を挙げながら、話し手の主観的判断よりは証拠や目前の事態または証拠自体の認識に焦点が置かれる疑似推量形式である「ようだ」「らしい」は、すぐさま事態成立を疑問化しても逸脱性は生じないと言及した。それに対し、話し手自身の判断性が強い「だろう」は逸脱性が生じるとした。以下の例文(44)において、「-겠-」も話し手が判断した事態成立をすぐさま疑問化する場合、逸脱性が生じる。「것같다」「모양이다」「ようだ」などの疑似推量形式と違い、「-겠-」の事態成立の疑問化ができないことも同様の説明が可能であると思われる。すなわち、「-겠-」は根本的に事

³⁷ ただ、「-겠-」が「現場の知覚情報に基づいた判断」や「様態性」などのような「証拠性判断」の属性を見せる場合には、内的思考の構成可否を表す「～と思う」の補文節内に生起できない。これは「-겠-」が真正推量の意味と「証拠性判断」または「疑似推量形式」の属性をあわせ持っているためである。

態または証拠自体に焦点を置く形式ではなく、事態の成立可否に関わる真偽判断により焦点を置く形式であるため、事態成立をすぐさま疑問化することはできないと考えられる。

- (44) a. あの飛行機、飛び立つ*だろうが/ようだが/らしいが本当に飛び立つかな？
 (44) b. (저 비행기 날아오르*겠는데/을 모양인데/을 것같은데, 정말로 날아오를까?)
 (gess)/(moyangida)/(geosgatttda)

上記のような現象は「-겠-」が後述する「だろう」「-을것이-」と同様に、事態に対する話し手の判断性が強い真正推量の意味を共有している点を示す手がかりになる。

④結果事態の蓋然性判断

「-겠-」が用いられた多くの例文を分析すると、以下の例文(45)のように、何らかの根拠事態に基づいて、これから起こる結果事態の蓋然性を推量する場合にも用いられる。この例文は「朝から雨が降り続けている」現状を判断根拠とし、「大井川は増水する」という結果事態の蓋然性に対する話者の判断に焦点が置かれている真正推量の意味を表している。

- (45) a. 이 수업은 5시에 끝나니까, 앞으로 10분 있으면 종소리가 울리겠다(gess).
 (45)b. この授業は五時に終わるから、あと10分すれば終りのベルが鳴る+gessda
 (46)a. この授業は五時に終わるから、あと10分すれば終りのベルが鳴る*ようだ/*らしい.
 (46) b. 이 수업은 5시에 끝나니까, 앞으로 10분 있으면 종소리가 울릴 *모양이다.
 (moyangida)

このような「-겠-」の用法は同一文脈の例文(46)において、両言語の疑似推量形式の許容度が落ちる点からも立証できると思われる。結果事態の蓋然性を推量する場合に多く用いられる点は後述する「-을것이-」も同様である。

4.3.4.2. 疑似推量形式に接近する「-겠-」の用法

前述した通り、「-겠-」は「-을것이-」と違って、真正推量形式でありながらも、部分的に疑似推量の属性を持っている点を論じた。以下ではこのような事実に対する具体的な論議を行うことにする。

本論文は韓国語の小説やシナリオなどの文学作品から推量用法として使われている「-겠-」の用例を抽出し、用法上の特性を分析した。用例の分析結果、「-겠-」は真正推量の意味を担いながらも、談話語用論的特性によって、従来の証拠性判断または疑似推量形式に見られる一部の特性をあわせ持っていることが確認できた。

このように、「-겠-」が疑似推量形式の属性もあわせ持っている点は後述する「-을것이-」や日本語の「だろう」と明確に区別される特性である。以下では「-겠-」のこのような特性について探ってみる。

①現場の知覚情報に基づいた判断

前述した推量根拠の特性でも述べたとおり、「-겠-」は後述する「だろう」「-을것이-」より、相対的に発話時に話し手が入手した現場の知覚情報に基づいた判断に用いられる場合が多い。例えば、以下の例文(47)～(49)は発話時に話し手が現場で知覚した情報に基づいた推量判断であり、このような事実を裏付ける。例えば、以下の例(47)は話し手が発話時に捉えた知覚情報である「映画館の前に人々が混んでいる」ことから「あの映画面白い」という判断の成立可否について推量判断を行っている。以下の例文(48)～(49)も同様である。

- (47)극장 앞에 사람이 몰려 있는 걸 보니까, 저 영화 재미있겠다. (gess)

(映画館の前に人々が混んでいるのを見ると、あの映画、面白い+gessda。)

- (48) 키무라는 동전을 세고 있던 손을 멈추고, 귀를 기울였다. 사람의 인기척은 없다. 주변은 아주 조용하다. 이 동네의 시청에는 지금 시간에는 아무도 없겠다(gess).
(木村は、錢を数える手を止めて、耳をすませた。人の気配はない。あたりはしんと静かである。この村の役所には、今の時間には誰もいない+gessda。)
- (49) (지역의 사투리로 말을 하고 있는 사람들 중에 한 사람만 표준어를 쓰는 사람을 보고) 저 사람, 이 지역 사람은 아니겠다(gess). (만추)
(地元の方言で話す人たちの中に一人だけ標準語の人を見つけて)
あの人は地元の人ではない+gess。)

上記のような「-겠-」の用法は話し手自身の心中にある内在的根拠に基づいた判断に多く用いられる真正推量形式の特性ではなく、典型的な証拠性判断に属する形式に見られるものである。そのため、以上のような現象は真正推量形式の「-겠-」が疑似推量形式の属性を表している現象として把握できると考えられる。

②様態中心の推量

事態の真偽判断や蓋然性判断よりは目前の事物や事態の様子や外見をそのまま描写する様態性用法は以下のような二つの類型が見られる。

A. 目前の瞬間性事態と推量

韓国語の真正推量形式「-겠-」は以下の例文(50)～(51)のように、今にも起こりそうな目前の瞬間性事態を表す場合に用いることができる。このような場合に用いられた「-겠-」は事態の真偽や蓋然性判断に中心があるのではなく、目前の事態や事物に対する話し手の印象を述べることに中心がある様態性が前面に浮かび上がる。このような意味は「ようだ」「しそうだ」などの「疑似推量形式」に見られる用法上の特性である。

- (50) (공이 테이블의 끝단을 향해서 굴러가고 있는 걸 보면서)
저기 공 떨어지겠다(gess)/*을것이다(eulgeosi)。(目前事態の様態を述べる)
(ボールがテーブルの端に向かって転がっているのを見て)
あ、あのボール、落ちる+gess/*eulgeosi。
- (51) (レスリングのリング上で高橋に投げられた崔倍達をみた観客が)
저것 봐라, “아앗!” 스포트라이트에 부딪치겠다(gess)/*을것이다(eulgeosi).
(あれ見ろ! ああっ! スポットライトにぶつかり+gessda/*eulgeosi) (대야망)

この現象で重要な前提は発話時と推量する事態との時間的距離感及び事態実現の確実性である。この場合、目前ではほぼ瞬間的に起こりえる事態と発話時との距離は非常に短いと言える。ここで発話と推量事態は時間的に分離されていない一つの固まりとして認知されやすい。この場合は物体が落ちるという臨界点に直面している状況であるから、事態の様子をそのまま述べる描写性が表れる。そのため、このような場面では「だろう」「-을것이-」よりは「様態性機能」を持つ「-겠-」が許容されやすいのではないと思われる。この現象も「だろう」「-을것이-」と「-겠-」推量の中心的意味機能の違いと関連すると思われる。上記の例文(50)～(51)の場合、三形式の中で「-겠-」のみ可能である。この場合には純粹推量の用法以外に、現状描写の修辭的意味が強く表れる。このような現象は真正推量形式の特性ではなく、証拠性判断または疑似推量形式に見られる特性である。

B. 事物の外見や様子を述べる様態性推量

「-겠-」は以下の例文(52)～(53)のように、発話時と推量する事態との時間的距離感とは関係なく、目の事物や事態に対する話し手の印象や直感を述べる場合である。この場合は何らかの根拠に基づいた事柄の真偽に対する推量判断というよりは、目の事物の外見を述べる様態性が強い推量である。

(52) (食卓においしそうに見えるパンの外見や様子を述べる)

이 빵, 맛있겠다(gess)/?을 것이다(eulgeosi).

(このぱん、おいしい+gessda。)

(53) (진열장 안에 오토바이 시리즈가 놓여 있는 것을 보면서)

야... 이빠이 땡기면 300 도 나오겠다(gess). 두고 봐라 내가 산다!」 (비트)

(ショーケースの中にバイクシリーズが置かれているのを見ながら)

や、いっぱい回すと、300 も出る+gessda。見てろ、俺が買ってやる。)

本論文は前述した羅(1996)や金(1999)などで、推量の「-겠지(gessci)-」と現状描写の「-겠-」を「純粋判断型」「根拠依存判断型」または「根拠非前提型」「根拠前提型」などの異なる範疇に位置づけた点とは明確に区分される。本論文は基本的に発話時における話し手の認識を表す真正推量形式「-겠-」が談話語用論的状况によって、「ようだ」「しそうだ」などの証拠性形式のように、「様態性」「現状描写性」を持っている疑似推量形式に接近する二面性を持っている形式として捉える。

③ 目の事態や証拠自体の焦点付与

「-겠-」は目前事態の現場性が前提になる場合、事態の真偽に対する話者の判断よりは目の事態や証拠自体に対する認識に焦点が置かれる。前述した通り、根本的に「-겠-」は真正推量形式の意味を表す形式であるが、以下の例文(54)のように発話時に話し手が捉えた現場事態や証拠自体に対する認識に焦点が置かれる疑似推量形式の属性を表す場合がある。例えば、以下の例文(54)の場合は、「怪我をして痛いかどうか」という真偽可否に対する判断に焦点が置かれていない場合である。この場合は「怪我をしてかすり傷ができている写真」がまさに「痛そうな様子や現状を呈している」ことを認識することに焦点が置かれている場合である。これは以下の(55)における「-겠-」の不自然さとも関連性があると思われる。

以下の例文(54)～(55)は表面的には同一状況を根拠とし、判断を行っているが、例文(54)の場合、「-겠-」の許容度が落ちる理由は証拠自体に焦点が置かれているためである。これは例文(55)のような話し手自身の私的または主観的判断を表す「思考内容化の可否」テストから説明できる。すなわち、「-겠-」は認識対象になる事態の属性が現場性を持っている場合、疑似推量形式の属性が前面に浮かび上がるため、話者の主体的・主観的判断を表す思考動詞「～と思う」による思考内容化ができないと考えられる。後述するが、例文(55)において、「-겠-」を除外した二つの真正推量形式「だろう」と「-을것이-」は「～と思う」による思考内容化が自然である点も「-겠-」の上記のような特性を裏付けられると思われる。

(54) (상처가 나서, 긁힌 상처가 나 있는 사진을 보고) 아프겠다(gess).

(怪我をしてかすり傷ができている写真をみて)痛い+gessda。

(55) (상처가 나서, 긁힌 상처가 나 있는 사진을 보고) 아프*겠다고 생각해.

(怪我をしてかすり傷ができている写真をみて)痛い+*gessda+と思う。

したがって、以上のような現象は「-겠-」が部分的に「証拠性判断」または「疑似推量形式」の属性をあわせ持っていることを示す一つの手がかりになると考えられる。

④対話及び発話現場性と疑似推量への接近

「-ㄹ-」が用いられた多くの用例を分析した結果、談話類型の特性と関連し、論説文や専門研究書などにはあまり使用されない傾向が見られた。すなわち、「-ㄹ-」は概ね話し手の主観的見解を表明する論説文や社説などの談話類型よりは、実際の会話のような談話類型に多く用いられる傾向が見られた。本論文で談話類型による使用上の傾向を調査した理由は単純に「-ㄹ-」が主に用いられる文体の類型を把握するためではなく、このような対話や発話現場性が「-ㄹ-」の疑似推量への接近と関わっていると考えたからである。

そこで、本論文は上記のような事実を実証的に検証するために、以下のような調査をした。まず、対象資料を三つの類型³⁸に区分した。すなわち、「戯曲やシナリオのような典型的な対話体」「エッセイや専門研究を含んだ論説文類」と前の二つの類型の中間的性質を持っている「小説などの文学作品類」の三つの類型の文献から得られた資料を対象とした。小説類は対話文と地の文を同時に持っている点を考慮し、中間的類型の資料として捉えた。これらの文献から集めた「-ㄹ-」の使用頻度と割合を分析した結果、以下の表3のような結果が得られた。「-ㄹ-」の特性を正確に捉えるために、後述する「-을것이-」との比較も視野に入れた。分析の結果は以下の通りである。

表3 「-ㄹ-」 「-을것이-」 と談話類型

談話類型	「-ㄹ-」	「-을것이-」	合計
対話体 (戯曲及びシナリオ)	156/206 (75.7%)	51/206 (24.3%)	206 (100%)
非対話体 (エッセイや論説文)	51/230 (22.2%)	179/230 (77.8%)	230 (100%)
対話+非対話 (小説類)	63/86 (73.2%)	23/86 (26.8%)	86 (100%)

上の表3のような対象資料の分析結果から以下のような点が明らかになった。

一つ目は、「-ㄹ-」が対話状況で圧倒的に多く用いられるのに対し、「論説文やエッセイ」などのように、話し手自身の主観的見解の表明が多い非対話性が高い論説文のような文語体においては、使用頻度が低かった。論説文類に比べると、小説類に相対的に多く使用されている点は小説類の資料には対話性を含んでいる場合も少なくないからである。このような事実からすると、「-ㄹ-」は対話性を主な特性とすることが分かった。

この結果からもう一つ注目すべき主な特性は後述するが、「-ㄹ-」が忌避される論説類の談話には「-을것이-」が圧倒的に多く用いられる傾向が見られる点である。このような事実は両形式に見られる重要な弁別特性である。

二つ目は、実際の対話や発話場面に多く用いられるという点は「-ㄹ-」の主な用法でもあるが、この「対話場面」に用いられる推量用法の「-ㄹ-」は常に現場性を前提とする。「-ㄹ-」の対話状況での使用が意味する現場性はまず目前の現場事態であり、推量判断の根拠が現場事態になる場合が多いという点である。このような対話状況と関わる「-ㄹ-」の発話現場性と判断根拠の現場性はこの形式が事態の真偽に対する話者の判断より目前の事態や証

³⁸ 対象資料は 会話的性格が強い戯曲やシナリオなどの資料と会話的性格が弱い話し手の主張や見解の表明が目立つ論説文やエッセイなどの文語体中心の資料から推量と関わる「-ㄹ-」「-을것이-」の例文を抽出し、使用頻度を調査した。戯曲とシナリオは「한국현대대표희곡선집(韓国現代代表戯曲選集) 1999」「한국시나리오선집(韓国シナリオ選集) 1997」からであり、エッセイは「같이걷기 2011」という作品からである。また、長編小説は「객주 (1981)」「오남 (2010)」「하늘이여 땅이여 (2011)」などの作品から抽出した資料を利用した。

拠に対する認識に中心がある疑似推量への接近を見せる現象として理解できると思われる。

実際の用例を分析した結果、対話状況で用いられた推量の「-겠-」は概ね、以下の例文(56)～(58)のように、発話現場から話者が捉えた根拠に基いた判断に用いられた場合が多かった。「-겠-」は以下の例文のように、「発話現場性及び根拠の現場性」と深く関わっている対話状況に多く用いられる特徴が見られた。例えば、以下の例文(56)は機関士が発話現場で捉えた車輪の状態を根拠とし、「時間が7-8分はかかる」という判断に対する話者の不確かさを「-겠-」を用いて表している。また、例文(57)～(58)も同様に、実際の発話現場で捉えた現場の知覚情報に基づいた推量判断を下している場合に「-겠-」を使用している。

(56) (요란한 엔진소리)

기관사 1,2가 내려서, 바퀴 부근을 점검하고 있다. 여객전무와 차장이 달려온다

전무: 왜 그래요?

기관사: 고장이야 7,8분 걸리겠다. (gess) (만추)

(けたたましいエンジンの音)

機関士1,2が降り、車輪付近を点検している。旅客専務と車掌が駆けつける。

専務: どうしたんですか?

機関士: 故障です。7、8分かかる+gessda。

(57) (상처가 나서, 긁힌 상처가 나 있는 친구의 팔을 보며) 너 아프겠다 (gess).

(怪我をしてかすり傷ができている友人の腕を見ながら)

お前、痛い+gessda. (例(55) 再掲)

(58) 제발 나와요. 거긴 춥잖소. 오늘 아침엔 서리까지 왔다던데,

나 때문이라면 자리를 바꿉시다. 내가 거기에 가있는 게 낫겠 (gess) 오.” (면빛)

(どうかこっち来いよ。そこは寒いじゃないか。今朝は霧まで降りたのに。僕のためだって言うなら、場所を取り換えよう。僕がそっちに行っているほうが良い+gess。)

本論文では「-겠-」は基本的に真正推量形式でありながらも、後述する「-을것이-」と違い、談話語用論的環境によって「様態性」「根拠の現場性」「事態認識の焦点付与」「発話現場性」という疑似推量形式の属性もあわせ持っている点を実際のデータの分析や使用上の傾向分析に基づいて検証した。上記した「-겠-」の用法上の特殊性を考慮すると、「-겠-」は本質的に真正推量形式であるが、部分的に疑似推量形式の属性をあわせ持っている二面性がある形式として捉えることができると思われる。結果的に、「だろう」「-을것이-」と違い、「-겠-」は「疑似性真正推量形式」として位置づけることができると思われる。

上記のような本論文の「-겠-」の捉え方は前述した従来の対照研究の見解とは異なる。例えば、羅(1995)では「-겠-」を「推量」の「-겠-」と「根拠依存型」に属する「様態」の「-겠-」という二つの異なるレベルの「-겠-」に区分した。すなわち、羅(1995)のような捉え方は「推量用法」と「様態」の「-겠-」を同音異義語として捉えた立場として理解できる。

また、金(1999)で「-겠다」を日本語の先行研究で述べた「証拠性判断」と同じ意味的規準として理解できる「根拠前提型」の下位類型の「現状描写」に位置づけて、真正推量形式としての「-겠다」の意味を認めていない点とも異なる立場である。

4.3.5. 「-을것이-」の推量意味と用法上の特性

既述した通り、本論文では「-을것이-」も基本的に「発話時における話し手の認識」を表すという真のモダリティの意味を充たしている点と「過去化不可」「連体修飾化の不可」「事態成立の疑問化不可」「話者の内在的根拠に基づいた判断」などの形態・統語的特性及

び用法上の特性から、「-ㄷ-」と同様に、真正推量形式と位置づけられる点を述べた。

ところが、推量用法上の観点から見ると、「-을것이-」は「-ㄷ-」とは異なる振る舞いを見せることが確認できた。本節では論議の実証性を確保するために、韓国語の小説やシナリオなどの文学作品から「-을것이-」が推量用法として用いられた多くの用例分析を通して、「-을것이-」が表す推量の本質的特性を探ってみた。「-을것이-」が推量用法として実現した多くの用例を分析すると、その使用状況や発話前提条件において、「-ㄷ-」とは異なる振る舞いを見せることが確認できた。実例の分析結果、「-을것이-」の推量特性は①「内在的根拠」②「推量事態の非現場性」③「反事実仮想条件文との共起」④「事態真偽に対する話し手判断の焦点」⑤「推量副詞「아마(ama)」との共起」などのような推量判断に関わる多様な特性によって特徴付けられることが確認できた。このような事実は、従来の韓国語の先行研究で言及してきたような、ある特定の用法や基準だけでは「-을것이-」が表す推量の本質を正確に把握することができないことを示唆する。本論文は以上の①～⑤のような「-을것이-」の推量用法上の特性を考慮し、真正推量形式「-을것이-」の推量特性を以下のように捉える。

「-을것이(eulgeosi)-」は主に話し手の心中にある内在的根拠に基づいて、非現場的事態を推量する場合に用いられる主観性の高い真正推量形式である。

上記したような「-을것이-」の推量特性を明らかにするために、推量用法として使われている「-을것이-」の用例を分析した結果、「-을것이-」の推量判断には上記した多様な語用論的特性が関わっていることを確認した。以下では、上記したような推量に関わる多様な特性について考察を行う。

4.3.5.1. 内在的根拠

「-을것이-」が推量用法として用いられた多くの用例を分析すると、「-을것이-」は主に話し手の内在的根拠に基づいた主観的判断に用いられる場合が多かった。このような特性は「だろう」や「-ㄷ-」とも類似する。たとえば、以下の例文(59)～(61)のように、「-을것이-」は外部世界から得た実在的根拠または文面上に明示された根拠ではなく、主に話し手の心中にある内在的根拠に基づいた推論性判断に多く用いられることが確認できた。

(59) 전화를 끊고 난 생각했다.

제이슨은 부모의 도움을 받기 위해 또 다시 여자와 결혼할 것이다(eulgeosi).

그의 부모도 결코 포기하지 않을 것이다(eulgeosi).

(電話を切って、私は思った。ジェイソンは、親の助けを受けるために、またも女性と結婚するだろう。彼の両親も決して放棄しない+eulgeosida.)

(60) 역사는 거창한 무엇이 아니다.

그것은 바로 나의 할머니 나의 아버지 생애에서 시작한다.

그러나 발견을 통하여 우리는 그 동안 하나의 지식으로 배워온 역사학의

불필요한 무게로부터 어느 정도 해방 될 수 있을 것이다(eulgeosi).

(歴史は何も大げさなものではない。それはまさに私のおばあさん、私の父の生涯からはじまる。しかし、発見を通じて、私たちはその間、一つの知識で学んできた歴史の不必要な重さからある程度、開放されることが出来る+eulgeosida.)

(61) 그러나 우리가 살고 있는 이 시대에는 혼인을 지배와 종속의 관계로 보지 않는다. 혼인은 두 인격의 만남을 뜻한다. 이것을 혼인에 대한 기대가 높아진 것이라고 표현할 수 있을 것이다. (eulgeosi) (결혼과 성)

(しかし、私たちが住んでいるこの時代には婚姻を支配と従属の関係とは見ない。婚姻は二人の人格の出会いを意味する。これを婚姻に対する期待が高まったものと表

現することができる+eulgeosida.)

上の例文(59)～(61)に用いられた「-을것이-」は、発話時に外部世界や第三者から得た実在的根拠に基づいた判断ではなく、話し手の内在的根拠や経験的知識などに基づいた話し手自身の主観的判断に用いられた場合である。例えば、上の例文(59)において、「제이슨은 부모의 도움을 받기 위해 또 다시 여자와 결혼한다(ジェイソンは、親の助けを受けるために、またも女性と結婚する)」「그의 부모도 결코 포기하지 않는다(彼の両親も決して放棄しない)」という命題成立の可能性を実在的根拠ではなく、話し手の心中にある内在的根拠に基づいて判断を下している。

本論文は「-을것이-」が内在的根拠に基づいた推量を主な特性とするという事実を検証するために、戯曲や小説及び論説文類などの対象資料から、推量用法として用いられた「-을것이-」の用例を収集し、推量根拠の性質を分析してみた。多様な談話類型の文献を対象とした理由は、談話類型による根拠の偏りを避けるためである。これはあくまで「-을것이-」の推量根拠の傾向を把握することに目標を置いてある。「-을것이-」の推量根拠の特性を分析した調査結果は以下の表4の通りである。

表4 「-을것이-」の推量根拠

資料文献の類型	内在的根拠	外在的根拠	合計
戯曲及びシナリオ	44 (93. 6%)	3 (6. 4%)	47 (100%)
長編小説	133 (95. 7%)	6 (4. 3%)	139 (100%)
論説文類	164 (100%)	0 (0%)	164 (100%)
合計	341 (96. 4%)	9 (3. 6%)	350 (100%)

以上の表4の分析は「-을것이-」が対象資料の文献類型、すなわち、談話類型に関係なく、主に話し手自身の心中にある内在的根拠に基づいた推量に使用される事実を検証するものである。また、このような推量根拠の傾向は前述した「だろう」と同様に、「-을것이-」が真正推量形式であることを客観的に検証する手がかりとなる。すなわち、「-을것이-」も基本的に外部世界から入手した目前の実在的根拠ではなく、話し手の内在的根拠に基づいた主観的判断に多く用いられる真正推量形式の一般的な使用上の傾向を共有していると把握できる。

4. 3. 5. 2. 推量事態の非現場性

上記した根拠の特性とも関わっているが、「-을것이-」は主に話し手の心中にある内在的根拠に基づいた判断に用いられるため、推量事態の属性も非現場性事態を推量する場合が多い。

この形式が推量用法として用いられた多くの例文を分析した結果、主に話し手自身の内在的根拠に基づいて、発話現場から離れた事柄に対する真偽を推量判断する場合に用いられる傾向があるため、以下の例文のように、推量事態が非現場的事態である場合が多い。

(62) 빨리 도덕이 확 바뀔 때가 왔으면 좋겠다고 생각한다. 그러면 이런 비굴함도, 또 자신을 위해서가 아니라, 남에게 좋은 평판을 얻기 위해 매일 땀을 뻘뻘 흘리면서 사는 일도 없어질 것이다. (eulgeosi) (사회)

(早く道徳が一変するときが来ればよいと思う。そうすると、こんな卑屈さも、また自分のためではなく、人の評判を得るために毎日汗をポタポタ流しながら、生活することもなくなる+eulgeosida.)

(63) 여성으로서 볼 때에는 그다지 자극적이라고 생각되지 않아도 젊은 남성에게는 그

렇지 않다는 것을 알아야 한다. 여성이라고 해서 장난기가 없으리라는 법은 없다. 호기심도 있을 것이고 모험도 해보고 싶을 때도 있을 것이다. (eulgeosi)
 (女性として見る時はあまり刺激的であると思わない場合でも、若い男性にとってはそうでないということを知るべきだ。女性だからといって、茶目っ気がないとは言えない。好奇心もあるだろうし、冒険もしてみたい場合もある+eulgeosida。)

例えば、上の例文(62)～(63)からも分かるように、「-을것이-」は話し手の心中の内在的根拠に基づいて、命題に該当する「こんな卑屈さも、また自分のためではなく、人の評判を得るために毎日汗をポタポタ流しながら、生活することもなくなる」の非現場的事態の真偽可否について推量判断を行っている。このような推量事態の非現場性は上記した「-을것이-」の推量根拠の性格とも関連性がある。

4.3.5.3. 仮想世界における推量

「-을것이-」は話者の非可視領域の状況がどういう性質を持つかを表す場合に多く用いられる。このような推量特性は以下の例文(64)のような反事実仮想条件文における使用上の傾向からも確認できる。前述した通り、反事実仮想条件文との共起は話し手の仮想世界での認識と深く関わっている。このような事実を検証するために、本論文は「만약…한다면(もし…すれば/ならば…)」という反事実仮想条件文と共起する韓国語の文末推量形式の傾向を調べてみた。分析した結果、反事実仮想条件文と共起する 51 例の中で 47 例(92%)は「-을것이-」が使用されていることが分かった。

(64) 만약 면허를 뺐는데도, 차를 사지 못한다면, 아파트 전체의 웃음거리가 될 것이다.
 (もし免許をとったのに車も買えぬとなればアパート全体の笑い話になる+eulgeosi。)

このような現象は「-을것이-」がその他の韓国語推量形式より、判断に対する話し手自身の主観的態度が最も反映される真正推量形式の性格を見せる形式であることを裏付けるものであると思われる。

4.3.5.4. 事態真偽に対する判断の焦点

同一状況を基にした判断の場合、形式上の違いまたは形式間の許容度の違いが生じる理由は話し手の事態または場面認識において、どこにより焦点を置くのかという点と関わっていると思われる。言い換えれば、表面的に同一事態や状況を把握する際に、話し手が事態のどの部分により焦点を置くのかという問題と関わっている。「-을것이-」は目の前の事態や証拠自体に対する認識ではなく、主に事態真偽に対する話し手の主観的判断に焦点が置かれる際に用いられる形式である。「-을것이-」が事態認識において、事態真偽に対する話し手自身の判断に焦点が置かれるという点はこの形式が真正推量形式であることを立証するものである。なぜなら、このような特性は事態または証拠自体に焦点を置く疑似推量形式と弁別される特性であるからである。

事態の真偽に対する話し手の判断に焦点が置かれるという事実は以下の例文(65)～(66)のように、話し手自身の主観的な見解や判断を表す「～라고 생각하다(と思う)」や「～라고 판단한다(判断する)」との共起からも確認できる。

- (65) a. (먹구름 낀 하늘을 올려다보며) 이제 곧 비가 올 것이다. (eulgeosi).
 (黒雲がかかった空を見上げて)もうすぐ、雨が降る+eulgeosida。
 (65) b. (먹구름 낀 하늘을 올려다보며) 이제 곧 비가 올 거라고 생각해.
 (黒雲がかかった空を見上げて)もうすぐ、雨が降る+eulgeosida+と思う。
 (65) c. (먹구름 낀 하늘을 올려다보며) 이제 곧 비가 올 거라고 판단된다.

- (黒雲がかかった空を見上げて)もうすぐ、雨が降る+eulgeosi+と判断される。
- (66) a. 제비가 낮게 나는 걸 보니, 곧 비가 올것이다. (eulgeosi)
ツバメが低く飛んでいるのを見ると、もうすぐ、雨が降る+eulgeosida。
- (66) b. 제비가 낮게 나는 걸 보니, 곧 비가 올 거라고 생각해.
ツバメが低く飛んでいるのを見ると、もうすぐ、雨が降る+eulgeosi+と思う。
- (66) c. 제비가 낮게 나는 걸 보니, 곧 비가 올 거라고 판단된다.
ツバメが低く飛んでいるのを見ると、もうすぐ雨が降る+eulgeosi+ と判断される。

このような事実は同一文脈における両言語の疑似推量形式の不適切性からも予測できる。すなわち、目前の事態や証拠自体に対する認識に焦点が置かれる両言語の疑似推量形式は以下の例文(67)～(68)のように、話し手自身の思考内容の構成を表す「～と思う」や話し手自身の私的判断を表す「～と判断する」とは共起しにくいと思われる。

- (67) a. (먹구름 낀 하늘을 올려보며) 이제 곧 비가 올 *모양이라고/*것같다고 생각해.
(67) b. (黒雲がかかった空を見上げて)
もうすぐ、雨が降る+*moyangida+と思う/*geosgattda+と思う。
*ようだと思う/*らしいと思う。
- (68) a. (먹구름 낀 하늘을 올려다보며) 이제 곧 비가 올 *모양이라고 판단된다.
*것같다고 판단된다.
(*moyangida/*geosgattda+判断される)
- (68) b. (黒雲がかかった空を見上げながら)
もうすぐ雨が降る+*ようだと判断される/*らしいと判断される。

以上のように、「-을것이-」は事態認識において、事態の真偽に対する話し手自身の判断に焦点が置かれる形式であると考えられる。

4.3.5.5. 推量副詞「아마」との共起関係

韓国語の真正推量形式「-을것이-」が用いられた多くの例文を分析すると、以下の例文(69)～(71)のように、推量副詞「아마(ama)」と共起するケースが多く見られる。

韓国語の叙法副詞または推量副詞の先行研究である張英熙(1994)、서정수(1996)などでは「아마」を典型的な推量副詞として規定している。例えば、張英熙(1994)は叙法副詞を命題の外側に位置し、命題内容に対する発話時における話し手の心理的態度を表すものであると定義し、このような意味を持つ多様な様態副詞を個々の副詞の意味的素性によって、下位分類を行なっている。その中でも、「아마」を推量副詞として位置づけている。

張英熙(1994)では推量副詞「아마」の意味について、確実に断定はできないが、「たぶん～そうだろう」という話し手の主観的判断を表す際に用いられる形式であると述べている。

また、話し手自身が仮定した状況の結果やその判断の結果について推量を行う場合に用いる副詞であると規定した。その他に、後述するが、推量副詞「아마」は「だろう」と同様に、基本的に推量文に用いられるという点も、その他の推量性副詞とは区別される点である。

上記のような意味を持つ典型的な韓国語の推量副詞「아마」が共起する文末推量形式を分析すると、以下の例文のように、「-을것이-」と共起するケースが多く見られた。

- (69) 시미즈씨는 처음부터 규슈에서 자리잡은 전통적 영주 가문입니다. 아마 황족을 빼
놓고는 일본에서 가장 훌륭한 가문일 것이다(eulgeosi). (雪国)
(清水氏は はじめから 九州に根をおろした 伝統的な領主の 家系です。 たぶん 皇族を
除いたら、日本で最も 立派な 家柄+eulgeosi。)
- (70) 아내와 아이들이 집에서 대낮에 아빠를 보기로는 아마 몇 개월 만에 처음이었을 것

이다. (eulgeosi)

(妻と子供たちが家で昼間から父をみるのはおそらく何ヶ月ぶりかのことであった+eulgeosida.)

- (71) 비록 한국 유교계의 안팎에서 만만치 않은 저항이 있기도 하지만, 이렇게 유교 진영 스스로가 「종교로서의 유교」를 주장하는 배경에는 아마 무슨 사정이 있을 것이다. (eulgeosi)

(たとえ韓国儒教界の内外で手ごわい抵抗があつたりすが、このように儒教陣営自らが「宗教としての儒教」を主張する背景には、たぶん何らかの事情がある+eulgeosida.)

そこで、本論文では上記したような意味を持つ韓国語の推量副詞「아마(ama)」と共起する文末推量形式804例を抽出して、その共起関係の傾向を調べてみた。対象資料は韓国の 국립국어원(国立国語院)で構築した「21세기 세종계획 말뭉치(21世紀世宗計画コーパス)」から収集したものであり、「아마」と文末推量形式が共起する傾向を調べて、その順位を整理した。その結果は以下の表5の通りである。上記のようなコーパスを利用した理由は多様なジャンルのデータが集まれているというコーパス資料の多義性を考慮したためである。また、このような全般的な使用上の傾向を調査するには、データの多義性と多くの用例を集めることができる書き言葉のコーパスを利用した方が有効であると考えたからである。

表5 「아마(ama)」と文末推量形式の共起関係

推量形式	出現頻度	割合
「-을것이-」	557	69.2%
「-겠-」	44	5.4%
「-ㄴ/ㄹ 것 같다」	70	8.7%
「-는/을 모양이다」	68	8.4%
「-나/가 보다」	53	6.5%
「-듯하다-」	12	1.4%
合計	804	100.0%

上の表5からも確認できるように、推量副詞「아마」は70%ぐらいが「-을것이-」と共起することが確認できた。すなわち、その他の推量形式に比べて、「아마」と共起する割合が絶対的に高いと傾向が見られた。このように、典型的な推量副詞「아마」がその他の推量形式より「-을것이-」と共起する割合が高いという事実はこの形式が真正推量形式であることを裏付ける手がかり³⁹になると思われる。

4.3.5.6. 「-을것이-」の諸推量特性間の関連性

上述した「-을것이-」の推量特性に関わる様々な意味または用法は有機的に関わっている。

まず、「内在的根拠」と「仮想世界の認識」というのは緊密に関わっている。「仮想世界の認識」というのは非現実世界を前提とするため、外部世界から入手した実在的根拠よりは話し手の心中の内在的根拠に基づいた判断に用いられやすい。また、内在的根拠や仮想世界に基づいた認識などの特性も推量事態の非現場性が前提とされる場合が多い。上記した一連の用法上の特性はすべて外部や現実世界に基づいた判断とは距離があるため、このような多様な特性には話し手の主観が反映される余地が多くなると考えられる。

また、上記した「事態成立の疑問化不可」「思考内容の構成」などの統語的特性も前述した「内在的根拠」「仮想世界の認識」「蓋然性判断の焦点」などと深く関わっている。この

³⁹ ある副詞と特定の文末推量形式が共起関係を見せる場合、その副詞とモダリティ形式の意味は似通った意味を持っていると捉えることができる

ような特性は話し手の判断に焦点が置かれることと深い関連性がある。その理由は、このような諸特性は事態に対する話し手の主観介入が強く作用しているものであるからである。

4.3.6. 「-ㄹ-」と「-을것이-」の推量用法の違い

本節では前節で述べた両形式の推量特性と用法分析に基づいて、両形式の間に見られる推量の意味及び用法上の違いを明らかにする。前述した個別形式の意味及び用法上の特性でも確認した通り、両形式は基本的に真正推量形式の主な推量特性である「内在的根拠」「事態の真偽に対する話し手自身の判断の焦点」「事態成立に対する疑問化不可」などのような点で類似性を見せた。一方、両形式は真正推量形式としての主な特性を共有しながらも、推量判断に関わる①「談話類型による用法上の特性」②「事態成立に対する確信度」③「事態把握における焦点」④「推論方式」⑤「様態性」⑥「反事実仮想条件文との共起関係」⑦「証拠依存度」などのような多様な特性において相違点が見られた。

以下では上記した多様な用法に見られる両形式の違いについて考察する。

①談話類型による両形式の用法上の違い

両形式の推量用法は談話類型と緊密な関連性を持っている。すなわち、談話類型によって、用法上の傾向に違いを見せる。「-ㄹ-」が会話のような対話場面で高い使用上の傾向を見せるのに対し、「-을것이-」は話し手自身の主観的な見解の表明が多い論説文やエッセイなどの非対話状況で高い使用上の傾向を見せることが確認できた。

本論文はこのような用法に対する実証性を確保するために、集めた対象資料を以下のような三つの類型に区分して、両言語の談話類型による推量用法上の違いを分析した。第1類型はほぼ対話状況であり、第2類型である小説類は対話と地の文の両方の類型があったため、第1類型に比べて、対話場面の割合が少なかった。

また、第3類型の資料は専門研究関連の論説文なので、話し手自身の主観的な見解の表明が多い非対話体の構文である。また、論説文なので、現場性や様態性の属性を見せるものは全く見られなかった。以下の表6は談話類型による両形式の使用上の違いを見せるものである。さらに、両形式の「発話現場性」「様態性」との関連性及び「-ㄹ-」の疑似推量の属性を検証するにも意味があると思われる。

表 6

談話類型	第1類型 ⁴⁰ (戯曲及びシナリオ類)	第2類型 ⁴¹ (長編小説)	第3類型 ⁴² (論説文類)
-ㄹ-	143 (76.5%)	151 (52.1%)	42 (20.4%)
-을것이-	44 (23.5%)	139 (47.9%)	164 (79.6%)
合計	187 (100%)	290 (100%)	206 (100%)

上記のような文献資料の分析から次のような点が確認できた。

一つ目は、対話性及び発話現場を主な特性とする戯曲やシナリオ類型では「-을것이-」より「-ㄹ-」が高い使用上の頻度を見せる点である。それに対し、第3類型に該当する論説文類では「-ㄹ-」は非常に低い使用上の頻度を見せるのに対し、「-을것이-」が絶対的に高い

⁴⁰ 第一類型の対象資料としては「한국예술학회편(韓国芸術学会編), 1993」「韓国現代戯曲選集 2」「韓日創作対訳 シナリオ 選集 2013」「韓国 シナリオ選集 2001 15巻」などから集めた資料を参考した。

⁴¹ 第2類型の対象資料としては韓国語の長編小説「최후의 경전(最後の経典)」「객주」「수잔 콜린스」「형거 게임」などから抽出した資料を参考にした。

⁴² 第3類型の資料としては論説文「덕 윤리의 현대적 의미 2012」を参考資料とした。

頻度を見せる点である。すなわち、両形式は談話類型による使用上の頻度において、相反する傾向を見せることが確認できた。上記のような両形式が使用される談話類型上の違いが生じる背景には「発話現場性」が深く関わっていると思われる。対話及び発話状況は基本的に話し手と聞き手の対面が前提とされるため、現場性は必然的な特性になる。それに対し、論説文類は主に話し手自身の個人的な主張や見解及び論理的思考が表される場合が多いため、基本的に現場性とは距離がある。

二つ目は、上記したような談話類型による両形式の使用傾向の違いは、前述した両形式の推量用法上の違いとも関わっている。「-겠-」の用例を分析した結果、「-을것이-」に比べて、以下の例文(72)のような外在的根拠に基づいた推量や以下の例文(73)のような目の事象または事物の様子を述べることに焦点が置かれる様態用法に用いられる場合が多かった。

- (72) 언니야 내리자. 내려서 걸어가는 게 빠르고 덜 춥겠(gess)다. 오줌이라도 누었으면 좋겠다. 눈물을 글썽이며 울려고 했다. (서울)
 (お姉さん、降りようよ。降りて歩いて行くほうが速いし、もっと寒そうじゃないよ。おしっこできたらいいな。涙をいっぱい浮かべ泣こうとした。)
- (73) (링 밖에 쓰러진 최배달, 최선의 힘을 다해, 미자와 영하에게 외친다)
 배달: 나 혼자 힘으로 올라간다! 저리 비켜라!
 영하: (영하는 배달을 막으려 한다) 형! 정말…기권을 해요!
 미자: (그리고 미자도 외친다) 그러다 죽겠(gess)어요. (대야망)
 (リングの外に転落した崔倍達, 懸命の力をふりしぼってミジャとヨンハに叫ぶ)
 崔倍達: 俺の一人の力で上がる。そこ、どけ!
 ヨンハ: (ヨンハは倍達を止めようとする) 兄貴! 本当に…棄権しましょう。
 ミジャ: (そしてミジャも叫ぶ) こんなことしてたら、死ぬ+gess。

上記した対象資料の中で、第1 類型の戯曲やシナリオから集めた 187 例から両形式が外在的根拠に基づいた推量及び様態用法として用いられた 58 例を分析した結果、49 例が「-겠-」であり、「-을것이-」は 9 例しか見つからなかった。特に、「-을것이-」が用いられた 9 例の中では、例文(73)のような様態用法は見られなかった。「-겠-」の現場性や様態性は論説文類よりは発話現場の対話が中心となるシナリオや戯曲などと深い関連性がある。それに対し、「-을것이-」の非現場性や非様態性は話し手自身の主張や見解の表明が多く見られる論説文類とより深い関連性を持つ。結局、両形式が特定の談話類型とより深い関連性を見せる現象は各々の形式と談話類型の間に重要な特性を共有しているからであると言える。

②事態成立に対する確信度の違い

韓国語の両形式「-겠-」「-을것이-」は事態成立に対する話し手の確信度の度合においても、違いが見られる。結論から先に言うと、事態成立に対する話し手の確信度において、「-을것이-」が「-겠-」に比べて、相対的に高い確信度を表すと考えられる。このような点を明らかにするために、韓国語のモダリティ副詞の中で、事態成立に対する話し手の高い確信や信念を表す「틀림없이(teullimeobsi)」と文末推量形式の共起関係の傾向を調べてみた。用例は韓国語の書き言葉コーパスである「21 世紀世宗計画コーパス」から「틀림없이」と共起する文末推量形式 182 例を抽出した。共起関係の傾向を最も共起する割合が高い文末推量形式を順に整理すると、以下の通りである。

表7 「틀림없이(teullimeobsi)」と文末推量形式の共起関係

推量形式	出現頻度	割合
「-을것이-」	156	85.7%
「-겠-」	9	5.0%

「-ㄴ/ㄹ 것 같다」	14	7.8%
「는/을 모양이다」	2	0.2%
「-나/가 보다」	1	0.1%
合計	182	100.0%

上の表 7 は命題成立に対する話し手の高い確信度を表す副詞「틀림없이」との共起関係において、「-을것이-」が圧倒的に高い割合を占めていることがわかる。

また、以下の例文(74)のように、「確信がある」という語句との共起可否のテストもこのような事実を立証する手がかりになると思われる。例文(74)において、「-을것이-」は自然に用いられるのに対し、「-겠-」は不自然である。

- (74) 사요코는 다카히라 선생님을 동경하고 있었으나 선생님은 자신에 관해서는 기억도 못할 것이(eulgeosi)/*겠다(gess) + 라는 확신이 있었다.)
 (小夜子(さよこ)は、高平先生に憧れていたが、先生は自分のことなど覚えてもいない +eulgeosi/*gess +という確信があった。)

このような諸現象からすると、「-을것이-」が「-겠-」に比べて、事態成立に対する話し手の強い確信度や信念を表すと考えられる。

③同一事態に対する焦点付与の違い

話し手の同一事態に対する焦点付与において、「-을것이-」と「-겠-」は相違点が見られる。これは前述した通り、「-겠-」は真正推量の特性に加えて、疑似推量へ接近する属性も併せ持っているのに対し、「-을것이-」は真正推量の特性だけを持っている点で区別される点と深く関わっている。次の例文を見られたい。

- (75) a. (散歩中、黒雲がかかっている空の様子だけを見て直感的に話す場面)
 지금이라도 비가 오겠어(gess)/?올거야(eulgeosi).
 (今にも雨が降る?だろう。)
- (75) b. (散歩中、黒雲がかかっている空の様子を根拠とし、雨が降るかかどうかという真偽判断に焦点を置く場面) 오후에는 비가 올 거야(eulgeosi)/겠다(gessda)
 (午後には雨が降る+gess/eulgeosi。)

上の例(75a)は、話し手が「黒雲がかかっている目の前の空の様子を述べること」に焦点を置いた場合であるが、「-겠-」は適切であるのに対し、「-을것이-」は許容度が落ちる。それに対し、例文(75b)のように、目の前の現状を根拠にこれから起こる事態の蓋然性判断に焦点を置いて、真正推量の意味を前面に表す場合は「-겠-」「-을것이-」両形式すべて許容可能である。このように、表面的に同一事態であっても、話し手がどの部分により焦点や注意を向けるかによって、両形式の間に許容度の違いが見られる。

④推量方式の違い

本論文で述べる「推量方式」というのは、上記したような何らかの根拠に基づいて最終的判断に至る一連の心理的過程を指す。推量判断において、どのような推量方式に基づいて判断に至るかを測るのは簡単ではない。文脈や発話の内容及び話し手の心理的態度などの多様な要因の影響を受ける。本論文では「推量方式」と関連し、二つの類型を考えることができると捉える。一つは話し手がある事態に対する把握または判断を行う場合、根拠に基づいて分析的または論理的推論過程を通して、最終的判断に至る方式である。もう一つは、ある事態を話し手の主観的な印象や直感などに基づいて、最終的判断に至る方式である。

「広辞苑 第六版」では「直観」「推論」について次のように定義している。

「直観(Intuition)」とは、知識の持ち主が熟知している知の領域で持つ推論など論理操作を差し挟まない直接的かつ即時的な認識の形式である。また直観は、合理的かつ分析的な思考の結果に概念化された知識の実体が論理的に介在するようなすべての知識の形式とは異なっているものである。一方、「推論」とは、ある事実や根拠などをもとにして、他の事をおしはかること。推理や推定を重ねて結論を導くことである。

本論文では基本的に上記のような事態認識の二つの方法を受容し、便宜上、前者の推量方式を「推論性」、後者の推量方式を「直観性」と呼ぶことにする。両形式が用いられたすべての推量判断において、上記のような推量方式上の区分が適用できるとは限らない。

本論文はこのような推論方式の違いを測る基準を作って、韓国語の両形式は推量方式において相違点を見せることを述べる。

一つ目は、事態に対する話し手の直観や主観的印象を表す副詞句「私の直感では」などとの共起可否や事態が今にも起こりそうな直前の段階にあることを表す場合に用いる副詞「今にも」との共起可否は両形式の推量方式上の違いと関わっていると思われる。このテストを適用して見ると、これらの副詞句と共起できる「-겠-」は「直観性推量」の特性を見せるのに対し、「推論性推量」の特性が強い「-을것이-」は共起しにくいことが確認できる。

(76) (구체적인 근거가 없이 직관적으로 회사의 성공 여부에 대해)

내 직감으론 이 회사 망하겠다(gess)/?을거야.(eulgeosi)

(頓在的根拠の無い、話し手の単なる直観で会社の成功可否について)

私の直感では、この会社、もうじきつぶれる+gessda/?eulgeosida.

(77) 나의 직감으론, 올해 나에게 웬지 안 좋은 일이 생기 겠(gess)어.

?을 거야.(eulgeosi)

(私の直感では、今年、僕に何となく悪いことが起こる+gess/?eulgeosida.)

(78) (산책 도중 갑자기 어두워진 먹구름을 보고)

하늘 좀 봐, 지금이라도 비가 오겠다.(gess)/?올 것이다.(eulgeosi)

(散歩中、急に暗くなった曇った空を見て)

あ、空を見てごらん。今にも雨がふる+gessda/?eulgeosida.

上の例文(76)～(78)の場合、話し手の直感や印象を表す副詞句「一見みても」や「私の直感では」などはある現状や事態を瞬間的に概略的に捉えるという意味を持つものであり、話し手が受けた直観的な印象を述べる際に用いられやすい。特に、このような直観性は「-겠-」の現場性及び様態性と深い関連性がある。そのため、「-겠-」とは共起しやすいが、何らかの根拠に基づいて、話し手が推論過程を経て最終的判断に至る「-을것이-」とは共起しにくいと考えられる。また、例文(78)のように、望ましくない事態がすぐにも起こりそうな様を表す「今にも」と共起している点も、両形式の推量方式の違いを反映していると考えられる。

二つ目は、感嘆表現「あ」「ほら」の使用可否において、両形式は許容度の差異を見せる。感嘆表現「あ」のような瞬間的な驚きや感嘆を表す語句が文頭に用いられた場合、両形式のは以下の例文(79)～(80)のように、許容度の違いを見せる。このような瞬間的な驚きを表す語句「あ」「あっ」や現場で話し手が瞬間的に捉えた様子を指し示して相手の注意をひく場合に多く用いられる「ほら」などは主に話し手の発話時に捉えた事態に対する瞬間的感じや印象を表す場合が多い。このような状況では根拠に基づいた推量よりは話者の直観に基づいた判断が優先する。これらの感嘆表現と共起できる「-겠-」は「直観性推量」の特性を見せるのに対し、「推論性推量」の特性が強い「-을것이-」は許容度が落ちる。

(79) (링위에서 다카하시에게 던져진 최배달을 보고서 관객이)

아앗! “스포츠라이트에 부딪치겠다!” (gess)/*을것이다(eulgeosi) (대야망)
(リング上で高橋に投げられた崔倍達を見て観客が)

ああっ! スポットライトにぶつかる+gess/*eulgeosida。)

- (80) (산책중, 갑자기 구름진 하늘의 모양을 보면서 직감적으로 말하는 장면)
저기 봐, 하늘 좀 봐, 지금이라도 비가 오겠다(gess)/*을것이다. (eulgeosi)
(散歩中、急に曇った空の様子だけを見て、直感的に話す場面)
ほら、空を見てごらん、今にも雨がふる+gess/*eulgeosi。)

逆に、以下の例文(81)のように、経験的根拠に基づいた推論性推量の性格が強い「을것이」は可能であるのに対し、直観性推量の「-겠-」は不可能な場合も見られる。

- (81) 미나: 앤디씨, 설렁탕 먹어 봤어요?

(アンディさん、ソルロンタン食べてみましたか?)

앤디: 아니요, 미나씨는 먹어봤어요?(いいえ、ミナさんは、食べてみました?)

미나: 네, 전 자주 먹어요. 한번 먹어보세요. 맛있을 거예요/맛있*겠(gess)어요.)

(はい、私はよく食べます。一度、食べてみてください。おいしい+eulgeoeyo

*gessoyo

上の例文(81)において、「-을것이-」は話し手自身が過去に体験した経験情報を根拠とした推論性推量の性格が強い。このような場合、現場の知覚情報に基づいた直観性推量の性格を持っている「-겠-」は許容度が落ちる。

⑤ 目前の事態に対する様態性有無

韓国語の両形式は以下の例文のように、目前の現状または事物に対する様態を表す用法において、許容度の違いを見せる。例えば、以下の例文(82)～(83)の「-겠-」は根拠に基づいた推論過程を経て判断に至っているのではなく、話し手の瞬間的な印象や直観に頼って、目前の事物や現状を描写することに焦点を置いた様態性が強く表れている場合である。このような様態性中心の推量において、両形式の間には許容度の違いが見られる。これは前述した「-겠-」の二面性、すなわち、真正推量と疑似推量としての意味と関わっている。それに対し、根拠に基づいた話し手の内的推論過程を経て、最終的判断に至る特性を持っている「-을것이-」は不自然である。

- (82) (공이 테이블의 끝단을 향해서 굴러 가고 있는 걸 보며)

어, 저기 공, 떨어지겠어(gess)/*질 거야. (eulgeosi)

(ボールがテーブルの端に向かって転んでいるのを見て)

あっ、あのボール、落ちる+gess/*eulgeosi。

- (83) (서커스 단원이 공중에서 줄타기를 하는 아슬아슬한 장면을 보면서)

저 사람 떨어지겠다. (gessda)/*을 거야. (eulgeosi)

(サーカスの団員が空中で綱渡りをするのはらする場面を見ながら)

あの人、落ちる+gess/*eulgeosi。

⑥ 反事実仮定条件文との共起関係

反事実仮定条件文は話し手が仮に作った前提から想定可能な事態の帰結を予測する意味が強く反映されている。韓国語の両形式はこのような反事実仮定条件文との共起する頻度において差異を見せる。韓国語の長編小説⁴³を対象に、「만약… 한다면(もし… すれば/なら

43 用例は韓国語の長編小説「푸른수염의 첫번째 아내」「第3の情死」から収集したものである。

ば…)」という反事実假定条件の帰結に用いられた文末推量形式51例を分析した結果、以下のように、「-을것이-」が「-겠-」に比べて、圧倒的に多い使用上の頻度が見られた。

① 「-을것이-」 : 47 例 (92%)

② 「-겠-」 : 2 例 (4%)

③ 「것같다」 : 2 例 (4%)

以下の例文(84)～(85)は対象資料から採集した実例の一つである。

- (84) 그때, 강남에 땅이라도 사 놓았더라면 지금쯤은 큰 부자가 됐을것이다. (eulgeosi)
 (あの時、江南に土地でも買っておいたら、今頃は大金持ちになっていた+eulgeosida.)
 (85) 만약 그 아이가 여느 아이들처럼 초등학교에 입학해 무난히 학업을 계속할 수 있었다면 그 평범함은 장점이 될 수도 있었을 것이다. (eulgeosi)
 (もしその子が普通の子供のように小学校に入学して、無難に学業を続けることができていたら、その平凡さは長所になることもあった+eulgeosida.) (푸른 수업)

上の例文(84)～(85)において、「-겠-」が全く許容できないとは言えないが、「-을것이-」に比べ、やや許容度が落ちる。このような点は後述する両言語の対照分析でも言及するが、両言語の三つの真正推量形式の中で、「だろう」と「-을것이-」が最も類似する対応関係を見せる形式として把握できる客観的な根拠になると考えられる。

⑦ 証拠依存度の違い

前述した通り、基本的に「-겠-」「-을것이-」両形式すべて内在的根拠に基づいた判断に用いられるが、「-겠-」「-을것이-」は以下の例文(86)～(87)からも確認できるように、根拠依存度において、程度の差異が見られる。つまり、「-을것이-」に比べて、「-겠-」は相対的に証拠依存度が高い。このような現象は「-겠-」が「-을것이-」に比べて部分的に疑似推量または証拠性判断が持っている特性を共有している点と関わっていると思われる。

- (86) a. 딱히 근거는 없는데, 그 사람들, 아마 살아 있을 것이다. (eulgeosi)
 (特に、根拠はないが、彼らは たぶん生きている+eulgeosida.)
 (86) b. 딱히 근거는 없는데, 그 사람들, 아마 살아있?겠다(gess).
 (特に、根拠はないが、彼らは たぶん生きている+?gessda.)
 (87) a. 단순한 나의 상상이긴 하지만, 영수는 미국에서 돈 많이 벌었을 거야(eulgeosi).
 (87) b. 단순한 나의 상상이긴 하지만, 영수는 미국에서 돈 많이 벌었?겠다(gess).
 (単なる私の想像だけど、ヨンスはアメリカで結構儲かっている+eulgeosi/?gess)

上記した例文(86)～(87)における両形式の許容度の違いからも分かるように、「-을것이-」は実在的根拠または証拠の存在有無に関わらず、用いることができるのに対し、「-겠-」は相対的に「根拠」または「証拠」の性格によって、許容度が変わってくることが確認できる。例えば、上の例文のように、「特に根拠はないが」「単なる私の想像では」などのように、当該の判断が話し手の漠然とした想像に基づいていることを示す語句が介在された場合、両形式の間には許容度の違いが生じる。上記のような語句との共起可否は両形式の証拠依存度の違いを測る一つの手がかりになると考えられる。

以上のように、韓国語両形式は推量判断に関わる上記のような多様な推量用法上の特性において、異同が見られる点が確認できた。このような諸特性に見られる両形式の用法上の違いは後述する両形式の主観性程度の違いと緊密に関わっていると思われる。

両形式の間に見られる主観性程度の違いは以下で検討する「だろう」との対照分析も視野に入れて、5節で具体的に論議する。

4.4. 真正推量形式の日韓対照

本節では前節で述べた両言語の真正推量形式の意味及び用法上の異同を反映し、対照言語学的観点から、「だろう」と韓国語の真正推量形式「-ㄹㄹ⁴⁴」と「-을것이-」の推量意味及び用法上の異同を明らかにすることを目的とする。両言語の対照分析に当たって、本節では主に以下のような事項を研究課題として取り上げ、論議を進める。

①従来の対照研究で綿密に分析されなかった韓国語の両形式及び両言語の推量意味及び用法上の異同を究明することに注目する。

②従来の対照研究で論じていない韓国語の両形式及び両言語の真正推量形式の間に見られる意味用法上の違いが両言語形式の主観性程度の違いと関わっている点を究明する。

上記のような研究課題と関連し、本論文は次のような二つの観点から論議を進める。

一つは、両言語の真正推量形式間の対照分析であり、もう一つは、「だろう」「-을것이-」と「-ㄹㄹ-」の対照分析である。前者は両言語の真正推量形式間の対照分析であり、後者は一種の類型間の対照である。後者は前述した通り、推量特性において、純粋な真正推量形式の意味特性を持っている「だろう」「-을것이-」と疑似性真正推量形式である「-ㄹㄹ-」の対照分析である。両言語の対照分析に対する本論文の基本的な立場は従来の対照研究のように、両言語形式を括るある特定の意味的基準を設定することには注力しない。本論文は両言語形式の推量判断に関わる多様な談話語用論的特性を検討し、各々の諸特性に見られる両言語形式の異同を究明する綿密かつ包括的な対照分析を行うことにする。

4.4.1. 日韓対照の先行研究と残された問題

前述した通り、従来の日韓対照研究(羅(1996)、金(1999)など)は両言語の推量形式の対応関係と両形式を括る意味的基準を設定することに注目してきたため、両言語の真正推量形式の間に見られる推量意味及び用法上の違いについてはあまり分析されてこなかったと思われる。従来の対照研究で述べた対応関係の結果を再掲すると以下の通りである。

表8 羅(1996)

言語		日本語	韓国語
分類基準			
純粋判断型 ⁴⁵		「だろう」	「겠다」「을 것이다」
根拠依存判断型	推量根拠の直接性	「ようだ」	「것 같다」「듯하다」
	推量根拠の間接性	「らしい」	「가보다」「모양이다」

表9 金(1999)

言語		日本語	韓国語
分類基準	根拠非前提型	「だろう」	「ㄹㄹ지」「을 것이다」

⁴⁴ 「だろう」と同様に、「-ㄹㄹ-」は使われる言語的環境によって、推量の意味以外に、それぞれ「確認用法」と「意図」という各々別の対聞き手モダリティの意味を有するという相違点が見られるが、本論文では両形式の推量意味に限定して考察を行う。

⁴⁵ 羅(1995)は「だろう」を純粋判断型に属する推量形式に位置づけ、判断の根拠を特に文面上に表面化する意識がなく、単に話し手の想像世界による推量判断に用いる形式として捉えている。

根拠前提型	主体推量 ⁴⁶	「ようだ」	「것 같다」 「듯하다」
	客体推量 ⁴⁷	「らしい」	「가보다」 「모양이다」

表 10 尹(2003)

	準拠推量形		無準拠推量形
	内在準拠推量形	外在準拠推量形	
日本語	「ようだ」	「らしい」	「だろう」
韓国語	「듯 하다」	「모양이다」「가보다」	「을 것이다」
	「것 같다」		
	中立準拠推量形		

前述した通り、上述した従来の対照研究は以下のような点については論じていない。

一つ目は、「だろう」と韓国語の推量形式「-ㄹ-」「-을것이-」の主な違いを考慮せず、日本語形式に適用してきた意味的基準を韓国語にもそのまま適用し、両言語形式の対応関係を「根拠非前提型」や「無準拠推量形」などのような単一の観点から捉えた点は再考の余地がある。

二つ目は、両言語形式の意味的側面にだけ集中したため、日本語形式に対応する韓国語諸形式の文法的性格については明確な立場を示していない点である。

三つ目は、各々形式の推量判断または用法に関わる多様な談話語用論的特性及び各々の特性間の関連性については検討されていない点である。

四つ目は、談話語用論的環境によって、異なる振る舞いを見せる両言語及び個別形式間の弁別特性については述べていない。また、そういった違いが生じる理由または背景については論じていない。

4.4.2. 「-ㄹ-」と「だろう」「-을것이-」の意味及び用法上の異同

前節で述べた個別形式の用法上の特性からすると、三形式はすべて真正推量形式である共通性を見せる。その中でも「だろう」と「-을것이-」はほとんどの推量特性において、最も高い類似性を見せるが、「-ㄹ-」とは異なる振る舞いを見せる。このような点を考慮し、本節では「だろう」と「-을것이-」両形式と「-ㄹ-」の間に見られる推量の意味及び用法上の異同を明らかにする。

4.4.2.1. 「-ㄹ-」と「だろう」「-을것이-」の意味及び用法上の類似点

真正推量という共通の意味を持つ三形式は以下に述べる「内在的根拠に基づいた判断」という推量根拠の性質と「結果事態の推量」という推論の方向性において類似性を見せる。

①内在的根拠に基づいた判断

「-ㄹ-」と「だろう」「-을것이-」の三形式は各々の個別形式の特性でも言及した通り、話し手の内在的根拠に基づいた主観的判断において、類似性を見せる。これらの三形式が主に話し手の心中にある内在的根拠に基づいた推量に使用されるという点は前述した個別形式の特性で言及した。前述した対象資料から内在的根拠に基づいた推量に使用された三形式の使用上の傾向分析の結果だけを集めて再掲すると、次の通りである。

⁴⁶ 主体推量とは、話し手が自分の判断及び判断が示す命題内容に対して主体的な叙述態度、すなわち、判断の持ち主としての態度をとる推量と金(1999)は定義づけている。

⁴⁷ 客体推量とは、話し手が自分の判断及び判断が示す命題内容に対して客体的な叙述態度、すなわち、第三者的な態度をとる推量と定義づけている。

	総実例数	内在的根拠(割合)
a. 「だろう」	144 例	101 例(70.1%)
b. 「-을것아-」	350 例	341 例(96.4%)
c. 「-겠-」	400例	331 例(82.8%)

上記のような根拠特性の傾向分析は三形式が主に「内在的根拠に基づいた推量」という特性を立証する手がかりになると思われる。これは既述した多くの日本語及び日韓対照の先行研究で「根拠の無標性」「根拠非前提」「無準拠」などの見解とは性格を異にする。本論文で述べる内在的根拠とは当該判断において、その根拠が不確かな場合はあっても、根拠自体が存在しない場合はないということを前提とする。上記の数値は調査対象になる文献によって、流動性もあり得るが、全体的な傾向を把握するには十分な根拠になると思われる。これらの三形式が内在的根拠に基づいた推量に用いられた例文を挙げると、以下の通りである。

- (88) a. 사탄은 불륜과 혼전 관계와 같은 성적 타락을 통해서 현대 사회를 죄와 타락으로 이끈다. 대부분의 이단 교주들에게 성적 타락과 결혼 관계의 파괴 현상이 나타나는 것도 이와 관련이 깊다고 말할 수 있겠다. (gess) (같이걷기)
을것이다. (eulgeosi)
- (88) b. サタンは不倫と婚前の関係といった性的墮落を通じて、現代社会を罪と墮落に導いている。ほとんどの異端の人々に、性的墮落と結婚関係の破壊現象が現れることも、これと関連が深いと言えるだろう。
- (89) a. 고압선은 걷고 있는 우리들의 머리 위를 엇비슷이 지나고 있었다. 그뿐이라면 별로 문제가 될 것이 없겠다(gess)/을것이다. (eulgeosi) (고압선)
- (89) b. 高圧線は歩いている私たちの頭上を斜めに通っていた。それだけならとりたてて問題になるようなことはないだろう。

②結果事態の推量

三形式は以下の例文(90)～(92)のように、何らかの根拠事態(原因事態)に基づいて、これから起こる結果事態を推量する場合に用いられるという特性を共有している。このような「結果事態の推量」に許容される点も真正推量形式が「ようだ」「らしい」「 모양이다」などの両言語の疑似推量形式と区別される特性である。以下の例文(90)は「朝から雨が降り続けている」現状を判断根拠とし、これから起こりえる結果事態である「このままだと大井川は増水する」という事柄の蓋然性に対する話者自身の判断に焦点が置かれる真正推量形式の用法である。このような場合には疑似推量形式「ようだ」「らしい」などの形式は許容度が落ちる。

- (90) a. 朝から雨が降り続けている。このままだと大井川は増水するだろう。
- (90) b. 아침부터 비가 계속 내리고 있다. 이대로라면 오오이강은 증수 할 것이다.
(eulgeosi)
증수 하겠다. (gess)
- (91) a. 멋진 계획을 제시하는 것도 중요하지만 한시라도 빨리 손님의 신뢰를, 그것도 인간적인 신뢰를 얻는 것은 그 이상으로 중요하다. 이 사람에게 맡긴다면 일이 순조롭게 진행되겠다(gess)/될 것이다(eulgeosi). (별)
- (91) b. 素敵な計画を提示することも重要だが、一刻も早くお客様の信頼を、それも人間の信頼を得ることはそれ以上に重要である。この人に任せると仕事が順調に進んでいくだろう。
- (92) a. 굶주림과 뜨거운 태양열에 맞부딪쳐 빈사의 경지에 빠지게 되면 구정물도 마시게 될 것이다(eulgeosi)/되겠다(gess)지. (기억)

(92)b. 飢えと暑い太陽熱にぶつかって瀕死の境地に陥ると、汚水も飲むようになるだろう。

③事態成立の疑問化可否

仁田(2000)は以下の例文を挙げながら、話し手の主観的判断よりは証拠や事態の認識に焦点が置かれる疑似推量形式である「ようだ」「らしい」は、すぐさま事態成立を疑問化しても逸脱性は生じないと述べた。それに対し、話し手の主観的判断に焦点が置かれる「だろう」は逸脱性が生じるとした。韓国語の真正推量形式「-겠-」「-을것아-」も日本語の「だろう」と同様に事態成立の判断をすぐさま疑問化するのは不自然である。このような事実は基本的に真正推量形式が疑似推量形式に比べて、判断に対する話し手の主観性程度が高いことを証明するものである。すなわち、三形式はすべて真偽判断に対する話し手の主観介入の程度が疑似推量形式より強いため、以下の例文(93)のように、話し手が下した事態成立をすぐ疑問化することは逸脱性が生じる。この現象は上記した「-겠-」が疑似推量形式に接近する二面性を持っているにしても、「-을것아-」「だろう」と同様に、根本的には真正推量形式であることを裏付ける手がかりになると思われる。

(93) a. あの飛行機、飛び立つようだが/らしいが/*だろうが、本当に飛び立つかな？

(93) b. 저 비행기, 날아오를 것 같은데/*을것인데/*겠는데, 정말로 날아오를까?)

geosgattda/*eulgeosi/*gess (例文(12) 再掲)

4.4.2.2. 「-겠-」と「だろう」「-을것아-」の推量用法上の相違点

基本的に「-겠-」は真正推量形式ではあるが、疑似推量形式に近い振る舞いを見せる二面性を持つ形式である。そのため、「だろう」「-을것아-」とは多くの点で異なりを見せる。以下では「-겠-」と「だろう」「-을것아-」の推量用法上の違いについて述べる。

①目前の同一事態に対する焦点付与の違い

目前の同一事態を推量する談話状況において、「だろう」「-을것아-」と「-겠-」は話し手の事態認識と深く関わっている焦点付与において、相違点が見られる。例えば、以下の例文(94)の場合は話者の場面認識において、目前の事態や様子を述べることに焦点が置かれている「様態中心の推量」である。このような場合、「だろう」「-을것아-」と「-겠-」は許容度の違いを見せる。すなわち、「だろう」「-을것아-」と違い、「-겠-」は自然に用いられる。それに対し、以下の例文(95)のように、発話時に話し手が入手した根拠に基づいて、これから起こる事態の真偽判断に焦点が置かれる場合には三形式すべて許容可能である。

(94)a. (散歩中、黒雲がかかっている空の様子だけを見て直感的かつ瞬間的に話す場面)
あ、雨が降る?だろう。

(94)b. 어, 비가 오겠다(gess)/?올거야(eulgeosi)。

(95) a. (散歩中、黒雲がかかっている空の様子を根拠とし、雨が降るという事態の蓋然性判断に焦点を置く場面) 午後には雨が降るだろう。

(95) b. (산책중, 먹구름이 끼있는 하늘의 모양을 근거로, 비가 올 사태의 개연성 판단에 초점을 두는 장면) 오후에는 비가 올 거야(eulgeosi)/겠다. (gess)

上記のような現象は三形式が真正推量の意味を持っている点では類似性を見せながらも、上の例文からも分かるように、「-겠-」は両形式とは異なる振る舞いを見せる。すなわち、事態の真偽に対する蓋然性判断に関わる特性を共有しながらも、従来の研究で「証拠性判断」に位置づけられてきた日本語の「ようだ」「しそうだ」などに類似する属性をあわせ持っている点で異なる振る舞いを見せる。

もう一つ、例文を加えて検討する。例えば、以下の例文(96a)のように、表面的に同一状

況であっても、話し手がどのような観点から事態を捉えるのかによって、文法性判断は変わってくる。すなわち、以下の例文(96a)～(96b)のように、話し手が目の事態や事物の様子をそのまま述べることに焦点を置くと「だろう」「-을것이-」は不自然である。しかし、例文(96c)のように、副詞句「もうすぐ」を介在させ、これから起こる事態の蓋然性に対する話し手の判断に焦点が置かれると、「だろう」「-을것이-」「-겠-」すべて許容される。つまり、「だろう」「-을것이-」と違って、「-겠-」は疑似推量形式に見られる特性をあわせ持っている二面性が確認できた。

- (96) a. (공이 테이블의 끝단을 향해 굴러 가고 있는 것을 보면서)
저기 공, 떨어지겠다(gess)/*을것이다. (eulgeosi)
(96b) b. (ボールがテーブルの端に向かって転がっているのを見て、)
あのボール、落ちる*だろう.
(96c) c. もうすぐ、あのボール、落ちるだろう.
(이제 곧 저 공, 떨어질 거야(eulgeosi)/겠다. (gess)

②推量方式の違い

三形式の間に見られる推量方式の違いとそういった推量方式の違いを判断する基準については先行節3.6で詳細な論議を行った。そこで、ここでは詳細な論議は省略し、推量方式の違いと関わっている実際の言語現象を中心に検討する。

両言語の真正推量形式「だろう」「-을것이-」と「-겠-」の間には前述したような推量方式において、相違点が見られる。このような違いは以下に示す「直観性副詞句との共起可否」から確認できる。例えば、以下の例文(97)～(99)の直観的副詞句「私の印象では」「私の直感では」との共起可否からも分かるように、「だろう」「-을것이-」と「-겠-」の間には許容度の違いが見られる。すなわち、「-겠-」は推量方式において、「直観性推量」の性格を持っているため、話し手の単なる印象や直感などに基づいた判断を表す副詞句と共起可能であるのに対し、「だろう」「-을것이-」は根拠に基づいた「推論性推量」の性格が強いため、話し手の単なる印象や直感に基づいた判断を表す副詞句とは共起しにくいと思われる。

- (97) a. (구체적인 근거가 없이 단순한 화자의 직감이나 느낌에 기초해서)
내 직감으론/내 인상으론 이 회사 망하겠다(gess)/?을것이다(eulgeosi).
(97) b. (何らかの根拠に基づいたのではなく、単なる話し手の直感に基づいて)
私の直感では/私の印象では、この会社、つぶれる?だろう.
(98) a. 내 직감으론/내 인상에는, 올해 나에게 왠지 안 좋은 일이 생기겠다(gess)다/?
을 것이다. (eulgeosi)
(98) b. 私の直感では/私の印象では、今年、僕に何となく悪いことが起こる?だろう.
(99) a. A: 이 신발 서현이에게 맞을까?
B: (신발의 외관을 보며, 직감적인 인상을 말하는 경우)
글쎄, 내 직감엔 좀 작겠다(gess)/?작을 거야(eulgeosi).
(99) b. A: この靴、ソヒョンに合うかな?
B: (靴の外観や様子から直感的な印象を述べる場合)
さあ、私の直感では、ちょっと小さい?だろう.
(100) a. (깜깜한 동굴을 걸어가면서)
왠지 기분이 나쁘다. 도깨비가 나오겠어(gess)/?을 것이다. (eulgeosi)
(100) b. (暗い洞窟を歩いていて)何か気味が悪いな。お化けが出る?だろう.

例えば、上の例文(97)～(99)の場合、話し手の直感や印象を表す副詞句「私の印象では」や「私の直感では」などはある現状や事態を瞬間的に概略的に捉えるという意味を持つもの

であり、話し手が受けた直観的な印象を述べる際に用いられやすい。そのため、「-ㄷ-」とは共起しやすいが、事態の真偽に対する話者自身の主観的判断に中心がある「だろう」「-을것이-」は許容度が落ちる。上記のような単なる話し手の直観に基づいた予測に用いられた「-ㄷ-」は日本語の疑似モダリティ形式の中で、様態性や直観性が強い「しそうだ」に近い意味を表す。また、例文(100)のように、目の前の事態や現場で捉えた状況に対する話し手の単なる印象や直感に基づいた判断においても、許容度の違いが見られる。

それに対し、以下の例文(101)の場合には、「だろう」「-을것이-」は自然に使えるのに対し、「-ㄷ-」は許容度が落ちる。

(101) a. (수년 전에, 위암 말기를 선고 받은 지인을 문병하러 미국에 갔을 때, 의사가 회복 가능성이 없다고 한 말을 떠올리며, 친구의 생사에 대해서 판단 하는 경우) 그 녀석, 틀림없이 죽었을 것이다(eulgeosi)/?죽었겠다(gess).

(101) b. (数年前, 胃がん末期を宣告された知り合いの見舞いで, アメリカに行った時, お医者さんが回復の可能性がないと言った話を思い出し, 友人の生死について判断) あいつ, きっと亡くなっているだろう。

例えば、上の例文(101)は単なる話し手の印象や直観による判断は成立しない。直観や印象による判断を行うためには、発話時に何らかの具像的または抽象的な根拠が存在しなければならない。すなわち、話し手のこれまでの経験的情報や既得知識を根拠とし、推論過程を経て判断に至っている。このような推論性推量の性格が強い文では「だろう」「-을것이-」は自然に用いられるのに対し、「-ㄷ-」は許容度が落ちる。以下の例文(102)にも同様の解釈ができる。

(102) ミナ: 앤디씨, 설렁탕 먹어 봤어요?

(アンディさん、ソルロンタン食べてみましたか?)

アンディ: 아니요, 미나씨는 먹어봤어요?(いいえ、ミナさんは、食べてみました?)

ミナ: 네, 전 자주 먹어요. 한번 먹어보세요. 맛있을 거예요/맛있*ㄷ(gess)어요.)

(はい、私はよく食べます。一度、食べてみてください。おいしい+eulgeoeyo

*gessoyo

(例(81) 再掲)

③ 目の前の事態や動的事態に対する「様態性」「現状描写性」と推量

「だろう」と「-ㄷ-」「-을것이-」及び韓国語の両形式は常に一律的な対応関係を見せるのではなく、談話語用論的状况と関連し、推量用法において許容度の違いが見られる。例えば、以下の例文のように、目の前の事態や事物に対する外見を述べることに中心がある「様態性中心の推量」において、三つの形式は許容度において違いが見られる。以下に挙げる現象からも確認できるように、「だろう」「-을것이-」と異なる「-ㄷ-」の特殊性は真正推量でありながらも、日本語の証拠性形式が持っている様態⁴⁸性用法を見せる点である。「-ㄷ-」の様態性用法は真正推量から疑似推量へ、その意味または用法が拡張することを意味する。以下の例文(103)～(105)の「-ㄷ-」は根拠に基づいた推論過程を経て判断に至っているのではなく、話し手の瞬間的な直観によって判断を下している場合であり、現状描写性や様態性機能が前面に表れる。

⁴⁸野林(1999)は「様態」の状況は話し手が発話時に現場で自らの感覚によって直接捉えた事態や事物の様子や印象をそのまま述べることに中心がある場合であるとした。

- (103) a. (백화점 식품 매장에 놓여 있는 처음 본 요리의 외양만을 보고)
어, 이 요리 맛있겠다. (gess)/?을 거야. (eulgeosi)
 (103) b. (デパートの食品売場に置いてある知らない料理の外見や様子だけを見て)
あ、この料理、おいしい?だろう。
 (104) a. (공이 테이블의 끝단을 향해 굴러 가고 있는 것을 보면서)
저기 공, 떨어지겠다(gess)/?을 것이다. (eulgeosi)
 (104) b. (ボールがテーブルの端に向かって転んでいるのを見て)
あのボール、落ちる?だろう。
 (105) a. あの人シャツのボタンがとれそうだ/?だろう。(日本語記述文法研究会 2003)
 (105) b. 저 사람, 셔츠의 단추가 떨어지겠(gess)어?을 것이다(eulgeosi).

上記のような場合に用いられた「-겠-」は日本語の推量形式「しそうだ」に近い特性を見せる。多くの先行研究でも述べた通り、「しそうだ」は「様態助動詞」として規定されている形式である。このような現象は「-겠-」が真正推量でありながらも、疑似推量形式の特性をあわせ持っている二面性を傍証する手がかりになると思われる。

④ 仮想世界における推量

話者の仮想世界の中での非可視領域の状況がどのような性質を持つかを叙述することと深く関わっている反事実仮想条件文と共起する頻度において、三形式は差異が見られる。

「だろう」「-을것이-」は仮想世界に基づいた判断に多く用いられるのに対し、「-겠-」は全く使えなくはないが、「だろう」「-을것이-」に比べると、やや許容度が落ちる。さらに、実際の使用上の傾向においても「-겠-」は非常に低い使用上の頻度を見せる。

前述した4.3.5.3節でも言及したように、「だろう」「-을것이-」と「-겠-」が「もし…すれば/ならば…」という反事実假定条件文と共起する文末推量形式の実例を収集し、その使用頻度を調査した結果からみても、「-을것이-」が圧倒的に高い使用上の頻度を見せた。すなわち、反事実假定条件文に用いられた51例の文末推量形式を調査した結果、51例の中で47例が「-을것이-」であり、「-겠-」は2例しかなかった。

- (106) a. だが、免許をとれば、車を買うという問題にぶつかる。免許をとったのに車も買えぬとなれば、アパート全体の笑い話になるだろう。(女の決闘)
 (106) b. 하지만 면허를 따면 차를 산다는 문제에 부딪친다. 면허를 땀으면서 차도 사지 못한다면 아파트 전체의 웃음거리가 될 것이다. (eulgeosi)
 (107) a. 그러나 우리들의 애정 관계는 돈을 주고받는 것일 수가 없었다. 그런 관계였다면 서울에 와서까지 만나지는 않았을 것이다. (第3の情死)
 (107) b. しかし我々の愛情関係は金をやりとりするものであるはずがなかった。もしそんな関係だったら、ソウルに来てまで会いはしなかっただろう。

以上の事実は根本的に三形式すべて真正推量形式であっても、「だろう」「-을것이-」が部分的に疑似推量の属性を持っている「-겠-」より真正推量形式としての真正度が相対的に強い形式であることを裏付ける一つの手がかりになると思われる。

⑤ 根拠依存度の違い

前述した通り、「-겠-」「-을것이-」両形式は基本的に内在的根拠に基づいた話者の主観的判断に多く用いられる傾向を見せる点に言及した。しかし、両形式は内在的根拠に基づいた判断に多く用いられる属性を共有しながらも、証拠依存度において相違を見せる。例えば、推量形式「-겠-」「-을것이-」は以下の例文(108)のように、当該の判断が単なる話し手の直観や頭の中で巡らした漠然たる想像に基づいた判断であることを示す「特に根拠はないが」

という語句との共起において、両形式は許容度の違いを見せる。これは両者の基本的推量特性の違いと深く関わっていると思われる。すなわち、「-을것이-」は主に話者の内在的根拠に基づいた非現場的事態を推量する場合に用いられる傾向が強いため、許容可能であるのに対し、「-겠-」は疑似性推量の属性を持っているため、上記のようなほぼ根拠がないと言える話者の漠然たる想像に基づいた判断では許容度が落ちると考えられる。

- (108) a. 딱히 근거는 없는데, 그 사람들 아마 살아 있을 것이다. (eulgeosi).
 (特に、根拠はないが、彼らは、たぶん生きている+eulgeosida. (例(86)再掲)
 (108) b. 딱히 근거는 없는데, 그 사람들은 아마 살아 있[?]겠다. (gess)
 (特に、根拠はないが、彼らは、たぶん生きている+gessda.)

「だろう」と同様に、「-을것이-」は判断における「証拠依存度」が低いため、上記の例文(108)のように、証拠依存度が低い話し手の漠然たる判断において、問題なく許容できる。それに対し、疑似推量形式の属性を持っている「-겠-」は許容度が落ちると考えられる。

⑥両言語の推量副詞「たぶん」「おそらく」「아마」と文末推量形式の共起関係

「だろう」「-을것이-」と「-겠-」は前述した両言語の先行研究で典型的な「推量副詞」または「蓋然性判断副詞」として規定されてきた「たぶん」「おそらく」「아마」との共起関係において異なる振る舞いを見せる。例えば、以下の例文(109)～(111)のように、「-겠-」は推量副詞「아마」との共起において、「-을것이-」「だろう」と違って、やや許容度が落ちる。

- (109) a. 일에는 아무 자신이 없어도 용서하는 재주만은 자신있다. 예수 그리스도는 아마 전생에 죄를 많이 지은 사람이[?]겠다(gess)/을것이다(eulgeosi).
 (109) b. 仕事には何の自信がなくても赦す才能だけは自信ある。イエス・キリストは たぶん前世に罪をたくさん犯した人[?]だろう。
 (110) a. 그리스나 로마의 시인 중에도 이처럼 아름다운 이름을 가진 경우는 아마 드물 었을 것이다(eulgeosi)/[?]겠다. (gess) (포구)
 (110) b.ギリシャやローマの詩人の中にも、このように美しい名前を持つ場合は、たぶんほとんどなかった[?]だろう。
 (111) a. 一段と推し進め、日米安保体制に一つの節目を形づくる実質的な安保改定であることは[?]おそらく異論のないところ[?]だろう。(沖縄同時代史)
 (111) b. 더욱 추진해서 일미 안보 체제에 하나의 이정표를 만드는 실질적인 안보 개정인 것은 아마 이견이 없는 부분 일것이다. (eulgeosi)/[?]겠다. (gess)

この現象は主に真正推量形式「だろう」と共起する傾向を見せる「たぶん」「おそらく」、さらに、「-을것이-」と共起する傾向が強い「아마」が部分的に疑似推量形式の特性をあわせ持っている「-겠-」との共起を忌避するためである。このような推量的副詞との共起関係に見られる差異は、「だろう」と「-을것이-」はほぼ同じ類型に属する反面、疑似性真正推量形式である「-겠-」は少し異質的な類型に属することを裏付ける一つの手がかりになると考えられる。以下では実際の対象資料に見られる三形式の推量副詞との共起関係を通して、上記の立場に対して、実証的な分析を行うことにする。

A. 蓋然性判断に関わる副詞「たぶん・おそらく」と文末推量形式の共起関係

「だろう」は推量副詞との共起関係においても、疑似推量形式とは相違点が見られる。以下のような共起関係の傾向に基づいて、両言語の真正推量形式の意味を考えると、「だろう」は「ようだ」「らしい」のような疑似推量形式とは異なる意味を表す形式であることが分か

る。ある副詞と特定のモダリティ形式が共起関係を見せる場合、その副詞とモダリティ形式の意味は矛盾しないと思われる。また、ある副詞とモダリティ形式が共起しやすい傾向を見せる場合、その副詞とモダリティ形式は似通った意味を持っていると捉えることができる。

本論文は「たぶん」「おそらく」のような推量副詞との共起関係に見られる傾向は「だろう」がその他の疑似推量形式と違って、典型的な真正推量形式であることを立証する客観的な根拠の一つであると捉える。例えば、工藤(1982, 2000)と張(2004)では「たぶん」と「おそらく」を「推量副詞」「蓋然性判断副詞」と規定し、これらの副詞に見られる共通的意味はある事態の実現に対する話し手の推量判断に焦点が置かれるものであると把握している。上記のような見方を実証的に検証するために、本論文は現代日本語書き言葉コーパス「少納言」から「たぶん」「おそらく」と共起する文末推量形式を抽出し、その共起関係の傾向を調べた。結果は以下の表 11 と表 12 の通りである。ここで、「だろう」は事態の真偽に対する話し手の判断に中心があるため、「蓋然性判断」に中心がある「たぶん」「おそらく」のような推量副詞との共起が圧倒的に多いことが確認できた。

表11 「たぶん」と文末モダリティ形式の共起関係

推量形式	出現頻度	割合
「だろう」	833例	91.2%
「かもしれない」	60例	6.6%
「にちがいない」	10例	1.0%
「ようだ」	7例	0.7%
「らしい」	3例	0.3%
合計	913	100.0%

表12 「おそらく」と文末モダリティ形式の共起関係

推量形式	出現頻度	割合
「だろう」	1253例	90.9%
「かもしれない」	52例	3.7%
「にちがいない」	53例	3.8%
「ようだ」	6例	0.4%
「らしい」	15例	1.1%
合計	1379	100.0

B. 韓国語の推量副詞「아마(ama)」と文末推量形式との共起関係

韓国語の真正推量形式「-겠-」と「-을것아-」は推量副詞との共起関係において、著しい違いが見られた。事態の蓋然性に対する話し手の判断と深く関わっている両言語の「推量副詞」である「たぶん」「おそらく」と「아마」が最も対応する形式として捉えられる根拠は以下の例文(112)～(114)のように、両副詞が用いられる文類型の類似性からも予測することができる。「たぶん/おそらく」と「아마」は基本的に推量文にしか使えない。例えば、推量的意味を表すという共通的意味を持ちながらも、事態成立に対する話し手の高い確信や信念を表す「きっと」「틀림없이・반드시」などは以下の例文のように、「意志文」「命令文」「推量文」「知識表明文」に用いることができる。それに対し、「たぶん/おそらく」と「아마」は「推量文」にしか用いられないという点で違いを見せる。両言語の推量副詞「たぶん」「おそらく」と「아마」が基本的に推量文に用いられるという点は両形式が典型的な推量副詞でありながら、最も対応する形式として把握できる手がかりになると思われる。

(112) a. 毎日、きっと/*たぶん/*おそらく、学校に行った。(知識表明文)

(112) b. 매일 틀림없이 /*아마 학교에 갔다.

- (113) a. 私、明日はきっと/*たぶん/*おそらく、学校に行くぞ (意志文)
 (113) b. 나, 내일은 틀림없이/*아마 학교에 가겠어(gess)/갈거야(eulgeosi)
 (114) a. 明日はきっと/*たぶん/*おそらく、学校へ行けよ。(命令文)
 (114) b. 내일은 반드시/*아마 학교에 가라.

そこで、本論文は日本語の「たぶん・恐らく」に最も類似する意味を持つ韓国語の推量副詞「아마(ama)」と共起する文末推量形式804例を抽出して共起関係の傾向を調べてみた。対象資料は国立国語院(2011)で構築した「21세기 세종계획 말뭉치(21世紀世宗計画のコーパス)」から「아마(ama)」と共起する文末推量形式804例を採集し、その共起傾向を調べてその順位を整理した。その結果は以下のである。

表13 「아마」と文末形式の共起傾向

推量形式	出現頻度	割合
「-을것이-」	557	69.2%
「-겠-」	44	5.4%
「-ㄴ/ㄹ 것 같다」	70	8.7%
「는/을 모양이다」	68	8.4%
「-나/가 보다」	53	6.5%
「-듯하다-」	12	1.4%
合計	804	100.0%

上記の表13からも確認できるように、韓国語の叙法副詞の研究(張(1994)、徐(1996)など)で典型的な推量副詞と規定されてきた「아마」が「-겠-」と共起する割合はおおよそ5%ぐらいで、非常に低いのに対し、「-을것이-」と共起する割合は70%で最も高い共起関係の傾向を見せることが確認できた。このような点は「だろう」と同様に、「-을것이-」が「-겠-」に比べて、真正推量形式としての真正度が相対的に高い形式であることを立証する根拠になると考えられる。このような推量副詞との共起関係に見られる「だろう」「-을것이-」と「-겠-」の共起傾向の違いは後述する三形式の主観性程度の違いと深く関わっている。

⑦事態成立に対する確信度の違い

三形式は事態成立に対する確信や信念の程度において、違いが見られる。

両言語の真正推量形式「だろう」と「-을것이-」は「-겠-」と違って、以下の例文(115)～(116)のように、事態成立に対する話し手の強い確信や信念を表す推量的副詞「きっと」「틀림없이」と共起する場合が多いのに対し、「-겠-」はあまり共起しない傾向を見せる。さらに、以下の例文において、「-겠-」は許容度が落ちる。

- (115) 행복감이 담겨 있었다. 왕은 자신에게 말했다. 저렇게 노래를 부르는 사람은 틀림없이 완벽하게 행복한 사람일 것이다(eulgeosida)/?겠다(gessda).
 (幸福感が込められていた。王は自分に言った。あのよう歌を歌う人はきっと完全に幸せな人であるだろう。)

- (116) 今、バーのホステスをしている同級生が、当時から高平先生の熱狂的なファンだったところを見ると、きっと彼の中に、肉感的に女をひきつけるものがあっただろう。
 (지금 바의 호스티스를 하고 있는 동급생이 당시부터 타카하라 선생님의 열광적인 팬이었던 점으로 보면, 틀림없이 그에게는 육감적으로 여자를 끌어당기는 것이 있었을 것이다.(eulgeosi)/?겠다(gess). (眠る夫たち)

上記の推量副詞「きっと」について、先行研究では概ね以下のように捉えている。例えば、

杉浦(2009)では副詞「きっと」は事態成立に対する話し手の強い信念を表すと述べた。また、小林(1992)も「きっと」の推量的機能について「事態成立に対する話し手の強い確信や期待を表す」と述べている。そこで、本論文では事態成立の高い確信を表す副詞「きっと」「틀림없이」との共起関係の傾向に見られる三形式の違いを明らかにするために、対象資料を分析した。対象資料⁴⁹の分析結果、以下の表 14 と表 15 のように、「だろう」と「-을것이-」は 事態成立に対する話し手の強い確信を表す推量的副詞「きっと」「틀림없이」と共起する割合が圧倒的に高いのに対し、「-ㄹ-」はあまり共起しないことが確認できた。

表14 「きっと」と共起する文末推量形式の共起関係

推量形式	出現頻度	割合
「だろう」	1158例	90.9%
「ようだ」	52例	3.7%
「らしい」	53例	3.8%
「かもしれない」	6例	0.4%
「にちがいない」	15例	1.1%
合計	1379	100.0

表15 「틀림없이」と文末推量形式の共起関係

推量形式	出現頻度	割合
「-을것이-」	156	85.7%
「-ㄹ-」	9	5.0%
「-ㄴ/ㄷ 것 같다」	14	7.8%
「는/을 모양이다」	2	0.2%
「-나/가 보다」	1	0.1%
合計	182	100.0%

このような事態成立に対する確信度の程度に見られる三形式の違いは後述する形式間の主観性程度の違いと深く関わっている。

4.4.3. 「だろう」と「-ㄹ-」「-을것이-」の推量用法上の違い

本節では、日本語の真正推量形式「だろう」と韓国語の真正推量形式「-ㄹ-」「을것이-」の間に見られる推量意味及び用法上の違いについて述べる。上述したように、推量意味または用法上の特性において、「だろう」に最も対応する形式は「-을것이-」であることが確認できた。ただ、推量用法上の特性と関連し、両形式は推量根拠の範囲において相違点が見られる。

①間接的情報に基づいた推量判断

前述した通り、従来の対照研究では日本語の「だろう」と同様に、韓国語の真正推量形式「-ㄹ-」「을것이-」も伝聞情報などの間接的情報に基づいた判断には許容できないと述べた。ところが、用例分析の結果、韓国語形式は以下の例文のように、伝聞情報に依存する判断において、許容可能な例文が見られた。例えば、「だろう」と「-ㄹ-」「-을것이-」は以下の例文(117)～(118)のように、間接的情報に基づいた推量判断に用いられるのに対し、

⁴⁹ 日本語の場合、現代日本語書き言葉コーパス「少納言」から推量的副詞「きっと」と共起する文末推量形式を抽出し、共起する割合を調べたものである。一方、韓国語は 国立国語院(2011)で構築した「21세기 세종계획 말뭉치(21世紀世宗計画のコーパス)」から推量性副詞「틀림없이」と共起する文末推量形式の傾向を調べた。

「だろう」は許容度が落ちる。以下の例文のように、判断の根拠が典型的な間接的情報を表す伝聞情報である点を明確にしめす「～によると」が介在されている場合、両言語の間に許容度の違いが見られる。

- (117) a. 1972년 한 보고서를 출간하였다. 성장의 한계라는 보고서에 의하면 21세기가 되면 산업 자원은 소멸될 것이다(eulgeosi)/겠(gess)지. (500년후의 미래)
(117) b. 1972年に報告書を出版した。成長の限界という報告書によると、21世紀になると産業資源は枯渇する*だろう。
(118) a. 아까, 라디오에서 들은 일기예보에 의하면, 내일 비 오겠(gess)어/울것이다(eulgeosi)
(118) b. さっき、ラジオで聞いた天気予報によると、明日、雨が降る? だろう。(秘密)

両言語の間に見られるこのような違いは推量と関連し、伝聞情報に基づいた判断に対する認識の違いと関わっていると思われる。日本語の真正推量「だろう」の場合、話し手の主観が反映されない客観性が高い伝聞情報は話し手自身の主観的判断の性格が強い「だろう」推量の根拠として認識されないため、許容度が落ちるとと思われる。言い換えれば、伝聞情報に基づいた判断は基本的に話し手自身の主観がほぼ介入されないため、主観性が高い「だろう」の使用は忌避されると思われる。典型的な間接情報である伝聞情報に基づいた判断に「だろう」が不適切である事実は金(1999)や日本語記述文法研究会(2003)でも言及している。すなわち、「だろう」は話し手自身の発話時現在の主観的判断を表すため、伝聞の内容にならないと述べている。実際、多くの用例を分析した結果、先行研究で述べた通り、間接的情報源を表す語句「～によると」「～の話では」という文脈に「だろう」が用いられた用例は見つからなかった。また、基本的に日本語の母語話者も上記のような文脈では許容度が落ちると捉えている。この現象と関連し、本論文も上記した先行研究の見方と実際の用例が見つからないという点を考慮し、「だろう」は典型的な間接情報である伝聞情報に基づいた判断には不自然であると把握する。一方、韓国語の場合は上記の例文のように、許容する用例が存在した。これは韓国語の真正推量形式は伝聞情報もその他の推量根拠と同様に認識する傾向があるから、日本語に比べて許容可能性が高いのではないと思われる。

そこで、本論文では日本語の「だろう」と違って、伝聞情報に基づいた判断における韓国語の真正推量形式の許容可能性が高いという点を実証的に検証するために、韓国語母語話者を対象とし、アンケート調査を実施した。20代から60代までに渡って、各年齢層の82人を対象に、伝聞情報に基づいた判断における「-겠-」「-을것이-」の使用可否の傾向を調査した。

特に、対象とした例文は「だろう」との直接的な対照分析のために、従来の研究で「だろう」は許容できないと捉えられてきた間接的情報源を表す語句「～によると」「～の話では」「噂によると/噂では」などの三つの類型の例文を対象とした。また、各類型にそれぞれ3個の例文をあげて、全部で9個の例文を提示した。韓国語例文の終結形を「-다(da)」ではなく、「-어(eo)」にしたのは、後者が自然な非丁寧の終結語尾であるのに対し、前者は後者に比べて、文語や格式体の性格が表れたりし、両終結形はこれらの例文において、自由な置き換えが可能であるからである。以上で述べたアンケート調査の概要と結果を要約すると以下の表16と17の通りである。この調査は韓国語両形式の伝聞情報に基づいた判断の許容可否に対する母語話者の内省と許容度の傾向を調べるものなので、事前にこれと直接関わっていない内容や目的を考慮していない。また、あくまで、許容度の傾向を調べる調査であり、統計上に表れたその他の意味分析は今後の課題とする。真正推量形式の伝聞情報に基づいた判断の使用可否の問題は次節で述べる両言語の真正推量形式の主観性程度の違いとも深く関わっている問題である。調査概要は以下の通りである。

①応答者数：82人 応答者の年齢代：20～60代の成人男女

- ②応答文の数：a. 「-ㄹ-」 9 文 b. 「-을것아-」 9 文
 ③伝聞類型：a. 第1類型(3例) 「～에 의하면(～によると)」
 b. 第2類型(3例) 「～의 말로는(～話では)」
 c. 第3類型(3例) 「～소문으로는(～噂では)」

表16 伝聞情報に基づいた判断における「-ㄹ-」の許容可否

	応答者数	許容可	不自然	許容不可
1類型	246(100%)	120(48.9%)	36(14.6%)	90(36.6%)
2類型	246(100%)	123(50%)	38(15.4%)	85(34.6%)
3類型	246(100%)	127(51.6%)	26(10.6%)	93(37.8%)
合計	738(100%)	370(50.1%)	100(13.6%)	268(36.3%)

表17 伝聞情報に基づいた判断における「-을것아-」の許容可否

	応答者数	許容可	不自然	許容不可
1類型	246(100%)	169(68.7%)	31(12.6%)	46(18.7%)
2類型	246(100%)	132(53.7%)	43(17.5%)	71(28.9%)
3類型	246(100%)	154(62.6%)	35(14.2%)	57(23.2%)
合計	738(100%)	455(61.7%)	109(14.8%)	174(23.6%)

上の調査結果⁵⁰が示す意味は以下のように把握することができる。

一つ目は、日本語の「だろう」と違って、韓国語両形式はすべての類型において、許容可能の割合が高いという点である。すなわち、「-ㄹ-」は52%「-을것아-」は60%が許容可能であると答えられた点は注目すべき現象である。それに対し、許容不可の判定については、それぞれ、36%と22%であり、両形式の間に違いが見られた。

二つ目は、三つの類型すべて許容度の割合において、大きな差異が見られない。

三つ目は、伝聞情報に基づいた推量判断において、韓国語の両形式も完全に許容可能であるとは限らないが、「だろう」に比べて、使用上の制約を受けないことが確認できた。

四つ目は、許容度の割合において、全般的に「-을것아-」が「-ㄹ-」よりやや高い許容度を見せる。これは「-ㄹ-」よりは「-을것아-」が「だろう」により類似性を見せる形式であるにも関わらず、伝聞情報に基づいた推量において、大きな許容度の違いが見られるという点を見せるものである。

五つ目は、両形式すべて許容できないまたは不自然な場合も少なくない。

以上から見ると、従来の研究で「だろう」は不自然であると把握されてきた伝聞情報に基づいた判断において、韓国語両形式は50～60%ぐらいの人が自然に許容できると判断しているため、「だろう」に比べると、許容度が非常に高いと言える。このような事実は韓国語の真正推量形式は「だろう」と違って、典型的な間接的情報源を表す伝聞情報というものが真正推量形式の使用面において、絶対的な制約にはならないことを意味する。言い換えれば、他人や第三者から聞いた典型的な間接的情報も真正推量の根拠になれるという点を意味する。ただ、韓国語の場合も不自然または許容不可と答えた人が少なくないという事実は、韓国語も伝聞情報のような間接的根拠に対する認識がまったくないとは限らない。しかし、この調査で「可能」または「許容不可」の割合が各々の形式や類型において、類似する割合を示し

⁵⁰ 上記のような調査結果と関連し、韓国語両形式が伝聞情報に基づいた推量において、許容不可または不自然であると判断される理由や背景、さらに、伝聞情報に基づいた推量に対する解釈の仕方や話し手の捉え方によって、文法性判断が違ってくる可能性もある。これらの諸問題については今後の課題とする。その理由は、本論文はあくまで同じ伝聞情報を表す典型的な副詞句と両言語の真正推量形式が共起する傾向の対照にだけ目的を置いたからである。

たのは両言語形式の許容可否において、明確な差異が存在するという点を裏付ける根拠になると思われる。

この調査は単なる母語話者の直感的な内省を調べた現象の指摘に留まっているので、この問題と関連し課題も多いと思われる。例えば、日本語の「だろう」も上記のような伝聞情報に基づいた判断の場合、判断根拠になる伝聞情報を話し手がどのように捉えるかによっては、許容できる特定の語用論的条件を想定することも可能であるかもしれない。また、韓国語形式の場合も不自然であると答えた人も少なくないため、許容可否の判断に関わる要因や使用可否に関わる具体的な語用論的条件などの諸問題については、今後、更なる考察を行う必要がある。

②対話状況における使用忌避性

前述した個別形式の推量用法の分析でも確認した通り、日本語の真正推量形式「だろう」は実際の対話場面において、使用忌避性が見られるのに対し、韓国語の真正推量形式は以下の例文のように、基本的に文体の違いや談話状況に関わらず、自然に用いられる。

- (119) a. (바둑을 조금 두었을때, 화자가 조금 유리한 형국이 되자 친구에게 말하는 장면) 오늘은 내가 이길 거야(eulgeosi)/겠다(gessda). (이기중 2001)
(119) b. (囲碁指して間もない頃、話者が少し有利な状況になると、相手に話す場面)
今日は俺が勝つ?だろう。
(120) a. “엄마하고 전에 살던 살강 마을에 가고 싶어. 네 진짜 아버지가 있는 데 말이지? 응. 우리 아버지 이젠 돈 많이 벌어 집도 사고 양식도 많이 사 놓았을 거야. (eulgeoya) (몽실언니)
(120) b. 母さんと、前の住んでいたサル川村に戻りたいの
モンシルのほんとうの父さんがいるところ?
うん。父さん今ごろは、きっとお金をいっぱい稼いで家を買って、食べ物もいっぱい買ってある?だろう/と思う。
(121) a. (식탁에 놓여 있는 빵을 먹어본 경험이 있는 사람이 먹어보지 못한 상대방에게)
이 빵 틀림없이 맛있을 거야(eulgeosi).
(121) b. (食卓においてあるパンを食べた経験がある人が食べたことがない相手に)
このパン、きっとおいしいよ/おいしいと思う/?だろう/?でしょう。

前節の「だろう」の推量特性の分析でも言及したように、日本語の場合は「だろう」と「でしょう」が役割を分担している。すなわち、「でしょう」は聞き手に対する丁寧語として、主に対話状況に用いられるのに対し、「だろう」は非丁寧語として、聞き手の存在が必須ではない事柄に対する話し手の判断を表す推量用法として使用される場合が多い傾向を見せる。実際、多くの用例を分析してみると、「だろう」は対話状況であり用いられない傾向が見られるという事実は否定できない。それに対し、韓国語の両形式は対話状況における使用上の傾向や可否において、制約を受けず、日本語のような使用上の制約は見られない。

本論文は上記のような「だろう」の対話忌避性は、前述した「だろう」の推量特性として言及した「内在的根拠」「事態の非現場性」と深く関わっていると思う。実際の会話状況とは判断の根拠が主に目前の可視的・外在的事態であり、発話現場そのものである場合が多いため、上記のような「だろう」の推量特性と衝突する。韓国語の両形式も、「だろう」と同様に、「内在的根拠」「事態の非現場性」などの特性を共有しているが、相対的に対話状況の違いによる使用上の制約は受けない点で相違点が見られる。本論文では両言語は上記のような明らかな違いを見せるという事実だけを指摘し、その他の問題は今後の課題とする。

③真正推量と発話時以前の認識可否

発話時認識可否と関連し、韓国語の両形式と「だろう」の間に特徴的な違いが見られる。すなわち、稀ではあるが、韓国語両形式は「だろう」と違って、発話時以前の事態に対する話し手自身の認識が可能な場合が存在する。上述したように、基本的に三形式は真正推量形式であり、多くの場合、発話時現在における話し手自身の判断に用いられる。ところが、このような本質的な意味を共有しながらも、実際の用例を分析すると、上記のような特性において、韓国語両形式は少し異なる振る舞いを見せる。すなわち、韓国語両形式は発話時以前の認識が部分的に可能な場合が見られる。勿論、これは傾向性を見せるものではないが、発話時以前の認識が全くできない「だろう」とは弁別される点であるため、両言語の対照分析において注目すべき現象である。韓国語の真正推量「-ㄹㄹ-」「-을것이-」の発話時以前の認識を表す「ㄹㄹ+었(eoss)」と「을것이 + ㄹ(eoss)」の許容可能性については、未だに統一的な見解が見られないが、成立可能であると捉えた見解も多い。この現象について従来の韓国語の先行研究では次のような指摘が見られる。例えば、홍중선외(2009:102)では「ㄹㄹ」の連鎖について以下のように述べている。

「ㄹㄹ」の連鎖は文法的な構成であり、「-ㄹㄹ-」「-ㄹㄹ-」が共存する現象が韓国語先語末語尾の配列順序を支配する一般的原理に矛盾しない現象である。「-ㄹㄹ-」の連鎖が可能な環境や文章の範囲を明らかにする必要がある。

また、박승빈(1935:103-104)でも「ㄹㄹ」の連鎖⁵¹は基本的に許容可能であるとし、「ㄹㄹ」の意味について以下のように述べている。

「-ㄹㄹ-」に「-ㄹ-」が後接した「-ㄹㄹ-」は過去の特定時点を基準とし、その当時の未来時相の意味を表示するものである。

一方、「-ㄹㄹ-」に「-ㄹ-」が後接した「-ㄹㄹ-」の連鎖が不可能であると捉える見解も見られる。このような立場を支持する見解として한동완(1991、1996)、최동주(1995)などがある。

以上のような「-ㄹㄹ-」の連鎖または文法性に対する従来の韓国語研究の指摘を踏まえてみると、「-ㄹㄹ-」の連鎖や文法性可否の判断には程度差はあるが、多くの論議において、「-ㄹㄹ-」の連鎖が可能であると捉えている点は否定できない。ただ、「-ㄹㄹ-」が「-ㄹ-」を用いることができるすべての文で成立可能とは言えない。

また、本論文で真正推量形式と位置づけた「을것이」の場合も、以下のように、発話時以前の認識を表す「-을것이었-」が使用されている実際の用例も存在する。

本論文も「-ㄹㄹ-」と「-을것이었-」が常に許容可能であるとは限らないが、日本語の「だろう」と違って、実際にこのような文の連鎖が可能なが存在する点と少数ではあるが、実例が存在するという現象は否定できないと思われる。このような連鎖が可能なが環境や文章の範囲などに対する具体的な事項は更なる検討が必要であるため、本論文では深入りしないことにする。次の例文を見られたい。

例えば、以下の例文(122)～(123)のように、韓国語の両形式は使用上の傾向はないが、疑似推量形式の主な特性である発話時以外の認識を表す際に用いる場合が見られる。以下の例文に用いられた両形式は話し手が過去の特定時点に推量した事態を現在に回想する意味を表している。上記の現象は推量という認識行為が過去の事態であり、現時点では既に客体化された事態である。

(122) a. 昨日はこの問題を解ける*だろうたが、今は解けない。

⁵¹ 「ㄹㄹ」の連鎖を許容可能であると捉えるその他の見解として、정인승(1956), 이병기(2006)などがある。

파위는 느끼지 않았을 것이었다 (eulgeosi+. 過去時制素「eoss(た)」 (外村場)
(昔は売春婦でしたよと答えていたら、私は彼女の答えにいささかの感動などは覚え
なかったはずだった。)

例えば、上の例文(124)～(126)において、韓国語推量形式に後接する過去時制素「-았/었-(eoss)」は推量自体が発話時の推量ではなく、過去の特定時に行なわれた推量であることを表すものである。また、上記の例文はすべて主語が話し手である。話し手が過去時点に推量した事態を現在に回想する意味で用いられている。上記の現象は推量という認識行為が過去の事態であり、現時点では既に客体化された事態である。

本論文は上記のような現象は両形式が真正推量という点では同じであるが、真正推量としての真正度と共に、主観性程度に違いがあることを裏付けるものであると思われる。先行研究でも言及した通り、「だろう」は発話時における話者の認識のみを表すことができるという点から最も主観的形式であるとした。そのため、推量の意味を表す多数の形式の中で、最も主観性程度が高い形式である。それに対し、韓国語形式は普遍的な現象ではないが、既に客体化された過去事態に対する現在時の認識を表すことができるため、相対的に主観性程度が低いと言える。過去事態の認識は基本的に発話時の認識に比べると、話し手の主観的認識が反映される余地がほぼないと言える。勿論、前述した通り、韓国語形式も概ね発話時の話し手の認識に用いられるため、疑似推量形式に比べると、主観性程度が高いと言える。ただ、部分的であっても、客体化された過去事態の認識が可能であるという事実は両言語の真正推量形式の主観性程度の違いを傍証する根拠になると考えられる。また、上の例文(125)～(126)に用いられた「-을 것이-」はすべて話し手が過去の事態、つまり、過去に実現可能性があったと思った事態を発話時現在に話し手自身が回想するものであり、発話時以前の客体化された認識を表すことができる日本語の疑似推量「はずだった」に類似する意味を表す。

結論的に、上記の現象と関連し、本論文で意図した点は韓国語真正推量形式が持っている一部の特殊用法の重要性を言及するものではない。ただ、普遍的な用法ではないが、このような現象が日本語の真正推量形式「だろう」より韓国語の両形式が主観性程度が落ちるということを実証する一つの根拠になるとと思われる。

4.5.2. 推量用法上の特性と主観性程度の関連性

4.5.2.1. 間接的根拠と主観性

前節では典型的な間接情報に依存する判断を表す伝聞情報に基づいた推量において、両言語の真正推量形式の間に許容度の違いが見られるという点に言及した。本論文はこのような問題と関連し、韓国語の両形式は「だろう」と違って、相対的に許容可能性が高いという点を明らかにした。このような点を明らかにするために、本論文では母語話者を対象としたアンケート調査から実証的に検証した。ここでは上記のような現象が両言語の真正推量形式の主観性程度の違いと深く関わっていることを論ずる。

前節の先行研究でも確認したように、伝聞情報に基づいた判断というのは基本的に話者の判断作用がほぼ介在しない「話し手の判断介入の最少化」を意味する。そのため、伝聞に基づいた判断は話し手の主観がほぼ介在しないから、判断に対する話し手の主観性程度の反映が最小化されると捉えてきた。前節でも言及した通り、「だろう」と「-ㄹ-」「-을 것이-」は他人や第三者から聞いた間接的情報に基づいた判断において、許容度の違いを見せる。基本的に、「だろう」は伝聞情報のような客観的情報に基づいた判断に用いられないのに対し、韓国語の「-ㄹ-」「-을 것이-」は許容可能である。

このような現象が意味するのは、専ら話し手自身の私的判断に依存する「だろう」が韓国語の両形式より主観性程度が高いことを示す根拠になるとと思われる。伝聞情報に基づいた判

断は話し手の主観的態度の反映が最少化されるため、それだけに判断が客観性を持つ。

- (127) a. 1972년 한 보고서를 출간하였다. 성장의 한계라는 보고서에 의하면 21세기가 되면 산업 자원은 소멸될 것이다(eulgeosi)/겠다(gessda). (500년후의 미래)
- (127) b. 1972年に報告書を出版した。成長の限界という報告書によると、21世紀になると産業資源は枯渇する*だろう。
- (128) a. (TV에서 일기예보를 보고, 나중에, 일기예보를 보지 않은 친구에게) 내일 눈이 오겠(gess)어/올 거야(eulgeosi).
- (128) b. (テレビで天気予報を見て、その後、天気予報を見てない友達に) 明日、雪が降るらしいよ/?だろうよ。

4.5.2.2. 事態把握の違いと主観性

- (129)a. (道である人の風体を見て)あの人、100キロはあるだろう/겠다(gess).
을것이다(eulgeosi).
(129)b. (道である人の風体を見て)あの人、100キロはあるだろうと思う.
(129)c. (길에서 어떤 사람의 풍채를 보고)저 사람 백 키로는 되?겠다고 생각해.
(gessda+と思う)
될 거라고 생각해.
(eulgeosi+と思う)
- (130)a. (黒く曇った空を見上げながら)もうすぐ、雨が降るだろう/겠다. (gess)
을것이다. (eulgeosi)
(130)b. (黒く曇った空を見上げながら)もうすぐ、雨が降るだろうと思う.

118

め、「と思う」による思考内容化が不自然である。この現象は「-겠-」が真正推量でありながらも、疑似推量形式に接近するという二面性を持っていることを示すものである。

このような見解を裏付けることができるもう一つの理由は以下の例文(132b-c)のように、両言語の疑似推量形式「ようだ」「らしい」「모양이다」なども「-겠-」と同様に許容度が落ちる点で類似性を見せるという点である。疑似推量形式は基本的に目の事態や証拠自体を認識することに中心があるため、このような状況においては、真正推量形式としての真正性が強い「だろう」「-을것이-」は許容度が落ちる。それに対し、疑似性推量の特性を持っている「-겠-」は許容度が上がると考えられる。

(132)a. (길에서 어떤 사람의 풍채를 보고) 저 사람 100킬로는 되겠다고 생각해.
gessda+と思う

(132)b. (길에서 어떤 사람의 풍채를 보고) 저 사람 100킬로는 될 ?모양이라고 생각해.
moyangida+と思う.

(132)c. (道である人の風体を見て)あの人、100キロはある?ようだと思う/らしいと思う。

このような現象も「だろう」「-을것이-」が事態に対する話者の主観介入の程度が「-겠-」より高いという点を裏付ける根拠になると思われる。

4.5.2.3. 疑似推量への接近と主観性

「だろう」「-을것이-」と違って「-겠-」は疑似推量の属性を見せる用法を持っている。すなわち、「-겠-」が部分的に以下の例文(136)～(138)のような「様態性用法」「現場の知覚情報に基づいた判断」「目の事態や証拠自体の焦点付与」「対話及び発話現場性における使用傾向」などのような疑似推量形式に見られる典型的な属性を持っている点で「だろう」「-을것이-」とは異なる振る舞いを見せる。これらの用法は話し手の主観的判断に依存するのではなく、目前または外部世界に存在する実在的証拠に依存する判断である。そのため、上記したような諸特性は「だろう」「-을것이-」に比べて、「-겠-」が事態に対する話し手の主観介入の程度が相対的に低いことを裏付ける根拠になると考えられる。以下の例文は上記の論議を裏付ける。例えば、例文(133)～(136)は「-겠-」の「様態性」「現場性根拠に基づいた直観的推量」を示すものである。それに対し、例文(139a-c)は同一事態であっても、「だろう」「-을것이-」と違って、「-겠-」は相対的に、事態把握の焦点が事柄の真偽に対する話し手の判断よりは目の事態認識に焦点が置かれていることを示す手がかりになる。

(133)a. (食卓においしそうに見えるパンの外見を述べることに焦点を置く場合)
このパン、おいしい*だろう。

(133)b. 이 빵 맛있겠다(gess)/*을 것이다. (eulgeosi)

(134)a. (話者が劇場の前に大勢の人々が集まっている様子だけを見て直感的に話す場面)
この演劇、面白い*だろう。

(134)b. 연극 재미있겠다(gess)/*을 거야(eulgeosi).

(135)a. 긁힌 상처가 나 있는 친구의 팔을 보며 말을 건다)너 아프겠다. (gess)
?아플 거야. (eulgeosi)

(135)b. 我をしてかすり傷ができている友人を見て話しかける) お前、痛い?だろう。

(136)a. 元の方で話す人たちの中に一人だけ標準語の人を見つけて、直感的に話す)
あの人、地元の人ではない だろう/겠다(gessda)/?을 것이다. (eulgeosi)

(136)b. (地元の方で話す人たちの中に一人だけ標準語の人を見つけて、直感的に話す)
あの人、地元の人ではない だろうと思う/だろうと判断される。

(136)c. 저 사람, 여기 지역 사람이 아닐 거라 생각한다/아닐 거라 판단된다.
(eulgeosi+と思う/eulgeosi+判断される)

?겠다고 생각한다/?겠다고 판단된다.
(gessda+と思う/gessda+と判断される)

三宅(1995)、仁田(2000)などでも述べたように、「ようだ」「しそうだ」などのような「疑似推量」または「証拠性判断」の形式が事態に対する話者の主観的判断に中心がある「だろう」に比べて、主観性が低いと把握したのは、上述したような疑似推量に見られる典型的な用法を持っている「-겠-」が「だろう」「-을것이-」に比べて、主観性程度が相対的に低いということを立証すると考えられる。

4.5.2.4. 仮想世界における推量と主観性

澤田(2007)は話し手が事態を認識する際には基本的にその認識が現実世界に基づく認識なのか、話し手自身の仮想や想像世界に基づく認識であるかによって、区別できると述べた。仮想世界の認識は専ら話し手自身の内的思考に基づいて事態を認識することである。例えば、澤田(2011)は法助動詞が表している話し手の心的態度を正確に捉えるためには「仮想性」または「現実性」というムード的意味を考慮しなければならないと述べた。仮想世界に基づいた認識は話し手の主観的態度が介入する余地が現実世界に基づいた認識より多いと言える。このような話者の仮想世界の認識が反映されているのが以下の例文(137)のような反事実仮想条件文である。反事実仮想というのは話し手が仮に作った前提状況から想定可能な事態の帰結を予測するため、話し手の主観が強く反映される。

(137)a. 만약 그 아이가 여느 아이들처럼 초등학교에 입학해 무난히 학업을 계속할 수 있었다면, 그 평범함은 장점이 될수도 있었을 것이다(eulgeosi)/?겠다(gess).
(사회의 논리)

(137)b. もしその子が普通の子供のように小学校に入学して、無難に学業を続けることができていたら、その平凡さは長所になることもあっただろう。

前述した通り、三形式の反事実仮想条件文における両者の使用上の頻度を調査した結果、「-겠-」は反事実仮想条件文にはあまり用いられないのに対し、「だろう」「-을것이-」は多く用いられるという点を確認した。このような事実も「だろう」「-을것이-」が「-겠-」に比べて、事態の真偽判断に対する話者の主観介入の程度が高いことを示すものである。

4.5.2.5. 両言語の推量副詞との共起関係と主観性

前節の三形式の対照分析で挙げた表11～表13の分析結果でも確認した通り、三形式は推量副詞「たぶん」「おそらく」「아마」との共起関係の傾向において著しい違いが見られた。

本論文はこのような推量副詞との共起関係の傾向に見られる違いが三形式の主観性程度と深く関わっていると考ええる。その理由は上記のような副詞は工藤(1982, 2000)や張(2004)などで「推量副詞」「蓋然性判断副詞」として規定されてきたものであり、これらの副詞は基本的にある事態の真偽または事態が起こる蓋然性に対する話し手自身の判断と深く関わっている副詞であるからである。前述した通り、ある副詞と特定の文末モダリティ形式が共起関係を見せる場合、その副詞とモダリティ形式の意味は矛盾しないと考ええる。本来、「推量」や「蓋然性判断」というのは、すべて事柄の真偽や蓋然性に対する話し手自身の判断に焦点が置かれるため、このような判断には必然的に話し手の主観が大きく作用する。そのため、上記のような推量副詞との共起関係の傾向に見られる違いは三形式の主観性程度を測る一つの手がかりになると思われる。

換言すると、両言語の推量副詞「たぶん」「おそらく」「아마」が三形式と共起する傾向を調べることによって、三形式の間に見られる主観性程度の違いを測ることができると考えられる。本論文はこのような事態の真偽または蓋然性に対する話し手自身の判断に中心があ

る推量副詞「たぶん」「おそらく」や「아마」と共起しやすい傾向を見せるほど、その形式の主観性程度は高いと考える。このような両言語の推量副詞との共起関係の傾向に見られる三形式の違いは、「-겠-」より「-을것이-」「だろう」両形式が相対的に主観性程度が高い形式であることを立証すると思われる。

前節の対照分析でも確認した通り、推量副詞「아마」が「-겠-」と共起する割合は5.4%ぐらいであったのに対し、「-을것이-」と共起する割合はおおよそ70%ぐらいで非常に高いことが確認できた。また、日本語の推量副詞「たぶん」「おそらく」も「だろう」と共起する割合が90%を超えるほど、圧倒的な共起関係を見せることが確認できた。

三形式が真正推量であるという意味を共有しながらも、両言語の推量副詞「たぶん」「おそらく」「아마」との共起関係の傾向において、著しい違いを見せるのは、三形式の推量特性と関わっていると思われる。「-겠-」は「-을것이-」「だろう」と違って、部分的に疑似推量の属性を持っている。このような事実は「-겠-」が「-을것이-」「だろう」に比べて、相対的に真正推量としての主観性程度が低いことを示すものである。そのため、相対的に真正推量としての主観性程度が高い「だろう」「-을것이-」と圧倒的に高い共起関係の傾向を見せる推量副詞「たぶん」「おそらく」及び「아마」が主観性程度が低い「-겠-」とはあまり共起しないと見ることができる。

結論的に推量副詞との共起関係の傾向から確認できる点は、相対的な意味で推量副詞「아마」との共起関係が「-을것이-」の高い主観性と「-겠-」の低い主観性を立証する手がかかりになると思われる。上記のような見方は以下に挙げる三形式の許容度の違いからも予測可能である。例えば、三形式が両言語の推量副詞と共起する以下の例文(138)～(139)を見ると、「だろう」や「-을것이-」は推量副詞「たぶん」「おそらく」「아마」とは自然に共起できるのに対し、「-겠-」との共起は不自然な場合が多い。

(138a) 일에는 아무 자신이 없어도 용서하는 재주만은 자신이 있다. 예수 그리스도는 아마 전생애 죄를 많이 지은 사람일 것이다(eulgeosi)/?겠다. (gess)

(例文(109) 再掲)

(138b) 仕事には何の自信がなくても赦す才能だけは自信がある。イエス・キリストはたぶん前世に罪をたくさん犯した人だろう。

(139a) 택시는 곧 염산에 도착했다. 아마 읍내를 출발한 지 채 30분도 경과하지 않았을 것이다(eulgeosi). 얼마 만에 내가 이곳의 땅을 밟아보는 셈인가. 아마 정확하게 했수로 따져서 15년 만일 것이다(eulgeosi)/?겠다. (gess) (시작)

(139b) タクシーはすぐヨムサンに着いた。たぶん街を出てからまだ30分も経っていないだろう。どれだけぶりにこの地を踏むことになるのだろう。おそらく正確に年数で数えて15年ぶりだろう。

以上のような両言語の真正推量形式の推量副詞との共起関係の傾向からすると、三形式の間には主観性程度の差異が見られる。すなわち、「だろう」「-을것이-」に比べて、「-겠-」が判断に対する話者の主観介入の程度が低い形式であると言える。

4.5.2.6. 事態成立に対する確信度の違いと主観性

前節の対照分析で述べた表14と15の分析結果からも分かるように、三形式は事態成立に対する話し手自身の高い確信や信念を表す推量的副詞「きっと」「틀림없이」との共起関係の傾向において差異が見られる点が明らかになった。本論文はこれらの副詞との共起関係に見られる違いは三形式の主観性程度の違いと深く関わっていると見る。

小林(1992)によると、「きっと」は「事態成立に対する話し手の強い確信や期待を表す場合に用いられる推量副詞であると言及している。その他に、坂口(1996)も「きっと」「絶対」などの副詞は事態成立に対する話し手の強い確信を表すため、話し手の主観性程度が高

いと述べた。推量文において、「きっと」は当該の事態成立が確実であるという話し手の推論を表す。これに類似する意味を持つ韓国語の推量副詞「틀림없이」も文末推量形式との共起関係から見ると、「-을것이-」と共起する割合が圧倒的に高いことが分かった。このような事態成立に対する話者の高い確信を表す「きっと」「틀림없이」との共起関係の傾向から見ると、「だろう」「-을것이-」に比べて、「-겠-」が相対的に主観性程度が低いと言える。

また、三形式は以下の例文(140)のように、「確信」と共起する場合、許容度の違いを見せる。すなわち、「だろう」「-을것이-」は自然に用いられるのに対し、「-겠-」は許容度が落ちる。この現象も「-겠-」が両形式に比べて、事態に対する話し手の主観化介入の程度が相対的に低いことを示す手がかりになると思われる。

(140) 小夜子は、高平先生に憧れていたが、先生は自分のことなど覚えてもないだろう
という確信があった。(眠る夫たち)

(사요코는 다카히라 선생님을 동경하고 있었으나 선생님은 자신에 관해서는 기억
도 못할 거(eulgeosi)라는 확신이 있었다/?겠다(gessda)라는 확신이 있었다)

以上から、三形式は真正推量形式であるという共通性を持ちながらも、事態成立に対する話し手の主観介入の程度において差異が見られることが確認できた。さらに、「だろう」「-을것이-」が「-겠-」に比べて、相対的に主観性程度が高い形式であるという点を推量副詞との共起関係によって、実証的に検証した。

以上で述べた両形式の推量意味または用法上の異同からも確認したように、「-겠-」は、「様態性」「対話及び発話現場性」「証拠依存度」などのような証拠性判断に見られる典型的な用法上の属性を共有している点から、主観性の程度が「だろう」や「-을것이-」に比べて、相対的に低い形式であることが確認できた。また、「だろう」が「-을것이-」に比べて、相対的に主観性程度が高いという事実を明らかにした。その根拠として、「-을것이-」は「だろう」と違い、「伝聞情報に基づいた判断における許容可能性」と「発話時以前の過去事態に対する認識」の2点において、許容可能性が高いという点を提示した。

4.6. まとめ

本章では両言語の真正推量形式「-겠-」「-을것이-」「だろう」の三つの形式間に見られる推量意味及び用法上の異同を究明することに注目した。考察の結果、基本的に「だろう」と「-겠-」「-을것이-」は真正推量形式という点では類似性を持ちながらも、推量意味と用法上において相違点も多く見られる点を明らかにした。特に、本章では両言語形式間の主観性程度の問題に注目し、両言語の真正推量形式の間に見られる意味または用法上の違いが三形式の主観性程度の違いと深く関わっている点を明らかにした。「だろう」「-을것이-」は専ら発話時における話し手の主観的判断を表すのに対し、「-겠-」は両形式と同様に真正推量の意味を担いながらも、談話語用論的環境によって「様態性」「現場性」「事態自体の焦点付与」という「疑似推量形式」の属性もあわせ持っていることを明らかにした。また、「-을것이-」は推量意味及び用法上の特性において、「だろう」に最も類似する振る舞いを見せると共に、「推量根拠の範囲」「対話状況における使用傾向」などの多様な談話語用論的特性において相違点が見られた。

また、本論文は両形式の間に見られる推量意味及び用法上の違いと共に、モダリティの概念と関わる「発話時以前の認識可否」などは個別形式及び両言語の真正推量形式間の主観性程度の違いと関わっている点に注目した。前章の第3章でも言及した通り、具体的に主観性程度を測る基準として、以下のような点を考慮した。

- ①「発話時以前の認識可否」②「思考内容の構成可否」③「伝聞情報に基づいた判断」
- ④「仮想世界の認識」⑤「推量副詞との共起関係」⑥「事態成立に対する確信度の違い」
- ⑦「事態成立の判断に対する疑問化可否」

以上のような形式間の主観性程度と深く関わる多様な意味用法及び統語的特性などに基づいて、両言語及び個別形式間の主観性程度に差異が見られることを究明した。分析の結果、両言語の真正推量形式の間には「だろう」→「-을것이-」→「-ㄹ-」の順に、真正推量形式としての主観性程度が低くなることを明らかにした。結局、日本語の「だろう」が韓国語の両形式より主観性程度が高いという点が確認できた。本章の内容をまとめると以下の通りである。

(1) 両言語形式の推量モダリティ体系の中での位置づけ

「だろう」「-을것이-」「-ㄹ-」三形式はすべて推量モダリティ体系の中で「真正推量形式」と位置づけられる。その根拠として、以下のような点を挙げた。

基本的に三形式は事柄に対する発話時の話し手の主観的態度を表す場合に用いられるという真正モダリティの意味を充たしている。すなわち、「発話時の話し手の認識」しか表せないという「真のモダリティの概念の適合性」及び「過去化不可」「否定化」「連体修飾節での生起不可」などの真のモダリティの意味と形態及び統語的特性を共有している点を反映した位置づけである。

また、用法上の特性から見ると、三形式すべて、主に話し手の心中にある内在的根拠に基づいた判断に用いられる傾向を見せる点である。その他にも、「事態把握の焦点付与」と関連し、事態の真偽可否に対する判断に焦点が置かれるという点で、三形式すべて真正推量形式として位置づけられる点を明らかにした。

本論文で特に注目した点は韓国語形式「-ㄹ-」の特殊性である。「-ㄹ-」は真正推量形式でありながらも、「だろう」「-을것이-」と違って、部分的に疑似推量形式の属性をあわせ持っている二面性を持っているという点を明らかにした。このような「-ㄹ-」の特性を考慮し、本論文ではこの形式を「疑似性真正推量形式」として位置づけた。本論文で三形式の意味特性を整理すると以下の通りである。

A. 推量の意味上の観点

「だろう」：真正推量 「-을것이-」：真正推量 「-ㄹ-」：真正推量

B. 推量用法上の観点

「だろう」：真正推量 「-을것이-」：真正推量 「-ㄹ-」：疑似性真正推量

(2) 両言語の真正推量形式の意味及び用法のまとめ

両言語の真正推量形式の間に見られる意味及び用法上の特性を分析した結果、概ね以下のような結果が得られた。

A. 共通的推量意味

三形式すべて「真正推量」という本質の意味において共通性を見せる。

B. 三形式の推量用法上の共通点

①推量根拠：話し手の心中にある内在的根拠に基づいた推量に用いられる。

②推論の方向：基本的に何らかの根拠に基づいて、これから起こる結果事態を推量する。

③事態判断の疑問化不可：真正推量形式であるため、話し手自身が下した判断をすぐさま疑問化することができない。

C. 両言語の真正推量形式の用法上の相違点

「だろう」「-을것이-」「-ㄹ-」は真正推量形式である類似性を見せながらも、実際の推量用法上において、多くの相違点が見られた。推量用法上の特性を分析した結果、三形式は「推量方式の直観性」「現場性根拠の依存度」「様態性」「根拠の間接性」などの多様な側面において、相違点が見られた。三形式の主な違いを整理すると、以下のようである。

(A) 「だろう」「-을것이-」と「-ㄹ-」の違い

①発話及び根拠の現場性：三形式は使用される主な談話類型においても、相違点が見られた。「-ㄹ-」は両形式に比べて、発話現場性を前提とする実際の対話状況で多く用いられる傾向が見られる。そのため、「だろう」「-을것이-」に比べて、「-ㄹ-」は目の前の現場事態を根拠とする状況に多く用いられる傾向を見せることが確認できた。

②様態性：目の前の事態または事物に対する外見や様子を述べることに焦点が置かれる様態性用法を持っている点で、「-ㄹ-」は「だろう」「-을것이-」と区別される。

③事態把握の焦点：基本的に「だろう」「-을것이-」「-ㄹ-」は真正推量形式であるため、事態成立の蓋然性に対する話し手自身の判断に焦点が置かれる点で類似する。その一方で、「-ㄹ-」は「だろう」「-을것이-」と違い、目の前の事態や証拠自体に焦点を置く場合にも使える。すなわち、事態成立の蓋然性に対する話し手自身の判断と目の前の事態自体の描写または表現の両方に焦点が置かれる。

④証拠依存度：「だろう」「-을것이-」は明示的根拠または顕在的根拠の有無に関わらず、用いられるが、「-ㄹ-」は「だろう」「-을것이-」に比べて、証拠に依存する度合いが強い。

⑤疑似推量形式への接近：「-ㄹ-」は「だろう」「-을것이-」と違って、上記した①②③の用法上の特性を持っている点から、疑似推量または証拠性判断の属性を持っている。

⑥推論方式：推論方式において、「だろう」「-을것이-」は推論性推量の性格が強いのに対し、「-ㄹ-」は相対的に直観性推量の性格が見られる。

⑦推量使用の範囲：日本語の「だろう」に比べて、二つの真正推量形式を持っている韓国語形式の使用範囲が広い。これは「だろう」という一つの形式で表される日本語の真正推量形式が二つの真正推量形式で表される韓国語に比べて使用範囲が狭いことを意味する。

上記した①～⑦のような推量判断に関わる多様な談話語用論的状况において、三形式の異同を分析した結果、基本的に「-ㄹ-」は真正推量形式ではあるが、「だろう」「-을것이-」と違い、部分的に疑似推量形式の属性をあわせ持っている形式であることが確認できた。

(B) 「だろう」と「-을것이-」「-ㄹ-」の違い

基本的に「だろう」と「-을것이-」は概ね類似する振る舞いを見せる。ただ、「だろう」と韓国語の両形式の間には以下のような推量用法上の違いが見られた。

①「だろう」は伝聞情報に基づいた判断のような典型的な間接的情報に基づいた判断ではあまり使用されないのに対し、韓国語の両形式は「だろう」に比べて、許容度が高いという点を確認できた。

②推量用法の使用傾向において、両言語の間には談話類型上の相違点が見られた。すなわち、韓国語は対話状況のような談話類型や文体の違いによる使用上の制約を受けないのに対し、推量用法としての「だろう」は実際の対話場面ではあまり使えず、主に文語体や独話の場面に用いられる傾向を見せた。

(3) 真正推量形式としての主観性程度

両言語の真正推量形式「だろう」「-을것이-」「-ㄹ-」の間に見られる多様な推量用法上の違いが三形式の主観性程度と関わっている点を述べた。三形式は真正推量形式としての意味を持っている点では類似性を見せながらも、真正推量形式としての主観性程度においては程度差が見られるという点を明らかにした。すなわち、三つの形式の中で、「だろう」が最も主観性程度が高いのに対し、疑似推量形式の属性を持っている「-ㄹ-」が最も主観性

程度が低い形式である点を述べた。まず、「だろう」と「-을것이-」の両形式は推量意味と用法上の特性において、ほぼ類似する振る舞いを見せる。ただ、判断に対する話し手の主観介入の余地がほぼ反映されない「間接的根拠に基づいた判断」と普遍的な現象ではないが、真正推量とは区別される疑似推量形式の属性である「発話時以前の認識」にも使用される点から、「だろう」よりは主観性程度が低い形式である点を述べた。また、韓国語の両形式の間にも主観性程度の違いが見られるという点を指摘した。すなわち、「様態性推量の可否」「推量副詞との共起関係」「反事実仮想条件文との共起」「現場性条件」「事態把握における焦点付与の違い」などの意味・統語的機能上の違いを手がかりに「을것이」が「-ㄹ-」に比べて、主観性程度が相対的に高いという点を述べた。結果的に、両言語の真正推量形式の主観性程度は「だろう」→「-을것이-」→「-ㄹ-」の準に低くなるという点を論じた。

第5章 日韓疑似推量形式の意味と用法の対照分析

5.1. はじめに

本章では事態に対する不確かさを表す形式の中で、従来、認識的モダリティの下位類型の一つである「証拠性判断」または判断モダリティ体系の中で「疑似モダリティ」に位置づけられてきた「ようだ」「らしい」とその意味及び用法上の特性において最も類似性を見せる韓国語形式「것같다(geosgatda)」「모양이다(moyangida)」の推量の意味⁵²及び用法上の異同を明らかにすることを目的とする。

本論文で上記のような両言語形式間の対応関係を受容する理由は基本的にこれらの形式が推量意味や用法上の特性において最も類似性を見せる点と両言語形式の対応関係に対する従来の対照研究の分析を反映したからである。その他にも、本論文で日韓対訳文献(日本語→韓国語訳)から収集した対象資料に見られる両言語形式の対応様相を分析した結果、そういった対応関係を見せる傾向が見られた。

前述した先行研究でも概観した通り、当該形式の対照分析を考察対象とした研究は多く見られるが、未だに未解決の課題も残されていると見受けられる。そこで、本章では従来の対照研究と韓国語研究で十分に検討されて来なかった以下に挙げる①～⑤の研究課題を解明することに主眼を置いて論議を行う。

- ①「ようだ」の推量意味及び用法上の特性と原型的意味との関連性
- ②「것같다」「모양이다」の文法的性格と推量モダリティ体系の中での位置づけ
- ③「것같다」と「모양이다」の推量意味及び用法上の特性と原型的意味との関連性
- ④「ようだ」「らしい」と「것같다」「모양이다」の推量意味及び用法上の違い
- ⑤両言語の疑似推量形式の意味及び用法上の違いと主観性程度の関連性

本章では上記のような研究課題について、以下のような点を述べる。

一つ目の課題である「ようだ」「らしい」の推量意味と用法上の特性については、次のような点を述べる。前述した通り、両形式の推量意味の違いについては既に多様な観点から多くの研究が蓄積されている。ところが、多くの先行研究は主に少数の例文や研究者の直観に頼る分析が多かったため、実証的な分析には至っていない。そこで、本論文ではできる限り、恣意的に作った作例を排除し、多くの実例分析に基いて、当該形式の推量意味と用法上の特性を分析してみた。

本論文は「ようだ」「らしい」の基本的推量意味を形式自体の原型的意味(root meaning)と推量用法上の特性を考慮し、それぞれ「類似性推量」と「推論性推量」と規定できる点を明らかにする。

二つ目の課題である韓国語の両形式「것같다」「모양이다」の文法的性格については次のような点に言及する。すなわち、「것같다」の文法的性格は「推量モダリティの補助形容詞」として位置づけられる点を論ずる。また、「모양이다」の文法的性格を推量モダリティという文法的機能を持っている補助名詞として規定できる点を明らかにする。

⁵² 「ようだ」「らしい」などの疑似推量形式は言語的環境によって、「比況」「例示」「属性表示」などのような多義的な意味の広がりを見せるが、本論文は、基本的に話し手の事態に対する不確かな認識を表す推量と関わる意味に注目する。

また、これまでの韓国語研究で論じられて来なかった「것 같다」「모양이다」の推量モダリティ体系の中での位置づけの問題について言及した。従来の研究ではこれらの形式が推量意味を担っている点については論じているものの、推量モダリティ体系の中での位置づけの問題と関連し、詳細な分析がなされてこなかった。

そこで、本論文では仁田(1989, 1991)や益岡(1991)などの先行研究で一般的に受容されてきた真正または一次的モダリティと疑似または二次的モダリティの区分基準を適用して、「ようだ」「らしい」と同様に、韓国語の両形式も推量モダリティ体系の中で、疑似推量形式として位置づけられる点を明らかにする。

三つ目は、両言語の疑似推量形式の原型的意味と推量用法上の特性などを考慮し、両言語及び個別形式の間に見られる違いとそういった違いが生じる背景について次のような点を述べる。まず、「ようだ」の推量意味として規定した「類似性推量」は「ようだ」の原型的意味(root meaning)である「様」と実際に深く関わっている点を述べる。また、「らしい」の推量意味は「根拠に基づいた推定」を表す場合に多く用いられる推量用法上の特性から、「推論性推量」と規定できる点を明らかにする。

また、韓国語形式の推量意味と用法上の特性については次のような点を述べた。

韓国語の疑似推量形式「것 같다」「모양이다」の推量意味及び用法上の特性はこれらの形式自体の構成要素である「같다」と「모양」の原型的意味と用法上の特性に基づいて、それぞれ「同一性推量」「外見性推量」と規定できることを明確にする。

四つ目の課題である両言語の疑似推量形式の対照については、以下のような点を述べる。

まず、両言語の疑似推量形式「ようだ」「らしい」と「것 같다」「모양이다」は常に全面的な対応関係を見せるのではなく、談話語用論的状况によって、多様な用法上の違いを見せることを明確にする。また、推量の使用範囲においても全般的に韓国語の疑似推量形式が日本語形式より制約を受けず、広い範囲で用いられる点を明らかにする。例えば、従来「ようだ」と対応するとした韓国語の「것 같다」は推量用法において全く制約を受けず、その他のすべて疑似推量形式の用法を包括するという点を明らかにした。

また、従来、「らしい」と対応関係を見せる形式と把握した韓国語の「모양이다」も推量用法上の特性において、常に対応関係を見せるのではなく、「모양이다」が「らしい」の推量用法をすべて包括する点を明らかにした。また、このような現象を両形式の原型的意味特性または主な用法上の違いと関連している点に言及する。

五つ目の課題である形式間の主観性程度の問題については、以下のような点を述べる。

両言語の疑似推量形式に見られる推量意味と用法上の違いが形式間の主観性程度の差異と深く関わっている点を明らかにする。本論文は両言語形式の主観性程度の違いを明らかにするために、客観的な基準を設けた。すなわち、形式間の主観性程度を判断する基準として前章でも言及した以下のような基準を適用した。以下に述べる①～⑤の諸特性は従来の研究で「推量」と「証拠性判断」または「真正モダリティ」と「疑似モダリティ」を区別するために受容されてきた一連の特性であるが、本論文ではこれらの意味または用法及び統語的特性を疑似推量形式間の主観性程度を測る基準として援用した。

- ①「思考内容の構成可否」②「判断根拠の性格及び制約程度」③「仮想世界の認識可否」④「推量的副詞との共起関係」⑤「連体節内の生起可否」

本論文では上記の基準で両言語の間に見られる主観性程度を分析した結果、全般的に韓国語の疑似推量形式「것 같다(geosgattda)」「모양이다(moyangida)」が日本語の「ようだ」「らしい」より主観性程度が高いという点を明らかにする。

5.2. 「ようだ」「らしい」の推量意味と用法

5.2.1. 「ようだ」「らしい」の先行研究と本論文の立場

前述した第2章の先行研究で詳細に検討したため、本節では便宜上、両言語の違いに対する結論だけを簡単に述べる。従来、両形式の推量意味の違いについては、多様な観点から分析されてきた。本論文と関連する主な見解をまとめると、以下のようである。

①推量根拠になる話し手の体験観察の直・間接性-森田(1983), 寺村(1984)

森田(1983)-直接根拠:「ようだ」 間接根拠:「らしい」

②推量根拠の主観・客観性-阪田・倉持(1980)

主観的根拠:「ようだ」 客観的根拠:「らしい」

③事態に対する話し手の心理的な距離-柴田(1982)、早津(1988)

心理的距離の近さ:「ようだ」 心理的距離の遠さ:「らしい」

④対象と判断内容の距離による推論過程の有無-菊地(2000a)

推論過程の無し-「ようだ」 推論過程の有り-「らしい」

⑤基本的意味の違いに基づいた分析-中畠(1990), 田野村(1991)

「ようだ」: ~という外見・様子である。~である印象を受ける。

「らしい」: ある根拠から、事実は~であると推定される。

上記のように、「ようだ」「らしい」の違いは多様な観点から分析がなされてきた。その中でも、「根拠性格の違い」「事態に対する話者の心理的態度」という基準が両者を区分する一般的な見解として受け入れられてきた。従来の分析は基本的に「ようだ」「らしい」はいずれもある根拠に基づいた推量を表す「証拠性判断」に属するという共通的特性を持っていることを前提としながらも、その上で両者を区別するための意味特性を見出そうとする方向である。勿論、従来の先行研究のように、「根拠の特性」「心理的態度」という異なる視点の導入によって新たな知見が得られる可能性はあるが、従来のような単一基準や特性による分析だけでは両形式の本質の違いを説明することができない点を看過している。

本論文は「ようだ」「らしい」の違いについて、基本的に上記した中畠(1990)と田野村(1991)の見解を受容する。中畠と田野村の分析はその他の研究と違って、「ようだ」「らしい」が持っている多様な用法上の特性を考慮して、当該形式の基本的意味を抽出した分析である。多くの先行研究では「ようだ」の推量意味を主に「らしい」との比較を通して、「判断根拠の特性」「事態に対する心理的要因」「推論過程の有無」などの単一基準を用いて、「ようだ」の推量意味を捉えた。しかし、中畠(1990)と田野村(1991)の見解は各々の形式自体が持っている多様な意味または用法上の特性を考慮し、その中から抽出した基本的意味に基づいて、両形式の違いを把握した方が妥当性を得ることができると思われる。

ただ、両研究は以下の2点については明確に論じていない。

一つ目は、両形式に対する中畠(1990)と田野村(1991)の見解は研究方法上において、多くの用例分析に基づいた帰納的分析ではなく、研究者が作った少数の例文や直観に頼った分析が多かったため、実証的な分析にはなっていない点が挙げられる。

二つ目は、「ようだ」の推量意味を獲得した背景については論じていない。

この問題について、本論文は「ようだ」が推量意味を獲得した背景はこの形式の原型の意味(root meaning)である「様(よう)」と深く関わっている点を明らかにする。

本論文は前述した田野村と中畠の見解を受容しながらも、それに加えて、「ようだ」が原型意味「様」から推量意味を獲得した背景と実際の用法に反映されている原型意味を考慮し、「ようだ」の推量意味を「類似性推量」と規定する。

5.2.2. 「ようだ」の推量意味と用法

真偽判断モダリティ体系の中で、根本的に「ようだ」が「証拠性判断」または「疑似モダリティ」に属するという点は多くの研究で言及されてきた。また、「ようだ」のような「証拠性判断」に属する形式は事態の真偽判断や蓋然性判断よりは目前の事態や証拠自体の認識に焦点が置かれるという点も指摘されてきた。本論文も先行研究で述べた上記のような基本的前提を受容しながら、「ようだ」の推量意味と用法上の特性を探ってみる。

5.2.2.1. 「ようだ」の推量意味の背景

前述した通り、これまでの先行研究では「ようだ⁵³」が表す推量意味を主に「らしい」との比較を通して、「判断根拠の特性」「事態に対する心理的距離」「推論過程の有無」などの基準を用いて、「ようだ」の推量意味を分析した。また、研究方法上でも主に研究者が作った少数の例文や直感に基づいた分析が多かった。しかし、本論文では「ようだ」が表す推量意味の本質を捉えるためには以下に述べる二つの側面を考慮する必要があると考える。

- 一つ目は、「ようだ」形式自体の構成要素「様」の語彙性意味
- 二つ目は、「ようだ」の推量意味と用法上の特性

まず、「ようだ」の意味と関連し、中畠(1991)や田野村(1991)では「ようだ」の基本的意味を「～という外見・様子である、～である印象を受ける」と規定したが、このような規定も「ようだ」の形式自体の構成要素「様」の意味と関わっている。「様」という実質名詞の基本意味は「～外見や様子またはありさま」であり、これは「様子」「模様」の意味と類似する。このような「様」の意味が最も反映されているものが様態中心の推量に用いられた「ようだ」である。また、「ようだ」の意味と関連し、三宅(2011)は「ようだ」の多義的意味である「比況」「例示」「推量」などを考慮し、これらの多義的意味に共通する抽象的意味(スキーマ)を「類似性」と捉えてきた。本論文では、「ようだ」の推量意味を正確に捉えるためには、上記したような「ようだ」の構成要素「様」の意味と「ようだ」の多義的意味に共通する本質的意味である「類似性」の両方を考慮する必要があると考える。既に言及した従来の研究の中でも、中畠(1991)や田野村(1991)などでは「ようだ」の基本的意味を「～という外見・様子である。～である印象を受ける」と規定した。しかし、このような「ようだ」の意味がどのように「類似性」と関わっており、また、どのように推量意味を獲得したのかについては納得できる見解が見られない。

本論文は「ようだ」の多義的意味に共通する抽象的意味(スキーマ)を「類似性の表示」と捉えた三宅(2011)の見解を受容しながらも、それに加えて、「ようだ」が推量意味を獲得した背景を「ようだ」の構成要素「様(よう)」の語彙的意味と関わっていると捉える。

本論文は前述した中畠(1991)や田野村(1991)の見解に注目しながら、「ようだ」の「様」に該当する本来の意味を原型的意味(root meaning)として捉える。

まず、「ようだ」の諸用法を検討する。例えば、「ようだ」には以下の例文(1)のように、「比況」「推量判断」「例示」などの多義的用法が存在する。

- (1) a. 彼の姿はまるで江戸時代の将軍のようだ。(比況)
- b. 顔の色彩を見ると、この人はどうやら生きているようだ。(推量)
- c. 例えばピーマンのような緑黄色野菜は健康にいい。(例示)

⁵³「ようだ」は話し言葉では「みたいだ」と用いられることが多い。「みたいだ」は、その歴史的変換過程(みたようだ→みたよだ→みたいだ)からも裏づけられるように、話し言葉に用いられるという文体的な違いを除けば、「ようだ」とほぼ同様の振る舞いを見せるものである。これを踏まえ、本論文では「ようだ」に代表させて考察を行う。

上の例文(1a)の「比況」は「彼」が江戸時代の将軍ではないことが既に分かっている場面で使われる。「彼」に江戸時代の将軍が持つ属性のあることを根拠にして、彼の姿は江戸時代の将軍に似た状態であることを述べた表現である。一方、(1b)は「ようだ」の推量用法である。これは「この人」の生死の真偽を推量判断する場面で使われ、顔の色彩を根拠にして、生きてると判断している。(1c)のような例示の用法は「ピーマンのような 緑黄色野菜」「ピーマンのように栄養がある」のように、「ような+体言」または「ように+用言」の形で用いられ、「ようだ」のように、文末形式の形では使われない。

上記の例(1)において、「ようだ」の多義的意味に共通する意味特性は「類似性」である。

例えば、「比況」というのも比較する二つの対象間の外見的類似性が前提とされるものであり、「推量」も本質的に事態に対する不確かさと共に、二つの事態間の類似性を前提とする。また、上の例文における「例示」も二つの植物間の類似性が前提とされている。

このように、「ようだ」の類似性というものが「ようだ」の基本的意味であり、「類似性の表示」から「推量」の意味が派生したと捉えることができる。

そこで、本論文は「様」の原型的意味と二つの事態間の「類似性」の表現、そして、ここから派生した推量意味を考慮し、「ようだ」の推量意味を「類似性推量」と規定する。

5.2.2.2. 「ようだ」の推量用法上の特性

本節では「ようだ」の構成要素「様」の原型的意味と「類似性」を本質とする「ようだ」の推量意味がどのように実際の用法に反映されているのかについて検討する。前述した先行研究でも確認した通り、「ようだ」の推量意味は「らしい」との比較を通して、多様な観点から分析されてきたが、本論文では上記のような「ようだ」の推量特性を多くの用例分析に基いて、実証的に検討してみる。そこで、本論文は「ようだ」の推量意味と用法上の特性を明確にするために、「CD-ROM 版 新潮文献の 100 冊(1995)」と日韓対訳文献(日本語の作品)などの小説や文学作品から「ようだ」が推量用法として用いられた 128 個の実例を収集し、「ようだ」推量用法上の特性を実証的に分析した。用例を分析した結果、「ようだ」の推量用法は概ね以下①～④のように区分することができる。

- ①「様態中心の推量」②「感覚自体に対する描写中心の推量」③「現場の知覚情報に基づいた推量」④「間接的根拠に基づいた非現場性推量」

①様態中心の推量 –28例

「ようだ」の用例を分析した結果、「ようだ」には様態性が強く反映されている類型の構文28例が見つかった。ここで、「様態」というのは、基本的に話し手が発話時に現場で知覚したある事物や事態の様子や外見を表すことを意味するが、このような具象の様態は抽象の様態に使用領域を拡張していく場合が多い。

まず、以下に挙げる例文(2)～(5)のような外見や様子または印象を述べる様態中心の推量を見ると、「ようだ」の構成要素である「よう(様)⁵⁴」の意味が最も反映されていると考えられる。このような構成要素「様」の意味から抽出される類似性意味は「ようだ」の推量意味にも反映されていると思われる。例えば、以下の例文(2)は話者が現場で捉えた知人の顔色の様子を述べることに中心がある様態中心の推量である。すなわち、現状Xである「顔色の様子」と「日に焼けなかった」という事態Yが類似するまたは似ているという類似性が前提とされている。また、以下の例文(4)も「顔色の様子」と「疲れている」という現状と事態が似ているという外見的類似性が前提とされていると捉えることができる。さらに、以下の例文(4)では「相手の様子を見て」という語句と共に「ようだ」が用いられている点から見ても、「ようだ」が様態中心の表現である点を裏付けている。以下のような例文(2)

⁵⁴ 本来「様」の原型意味は「外見や様子またはありさま」である。「AはBのようだ」の場合、AとBの間には類似するまたは似ていると言う外見的類似性が前提とされている。

～(5)は上記の論議を裏付けているものであり、このような類型の「ようだ」形式自体の構成要素である実質名詞「様」という原型的意味が反映されていると捉えることができる。

- (2) コーヒーを注文するとすぐに矢嶋は里彩の顔をまじまじと見つめた。「日に焼けなかったようだね。沖縄に行ってたんだって?」「お電話いただいたこと、祖母から聞きました、なにか急用だったんでしょうか」 (ルージュ)
- (3) ははははは——僕は瀬川君を精神病患者だと言う訳では無いよ。しかし君の様子を見るのに、何処か身体の具合でも悪いようだ。(破戒)
- (4) 彼女は手のひらを僕のかみにあてた。「もういいわ。考えるのはまたにしましょう。そのうちに何かふと思いだすかもしれないね」
「最後にもうひとつだけ古い夢を読むよ」と僕は言った。
「(相手の様子を見て)あなたはずいぶん疲れているようだわ。」 (春の言葉)
「つづきは明日にした方がいいんじゃないかしら? 無理することはないのよ。」
- (5) ゲーリーは、「なに、あんな奴」
とうそぶく。トレーシーはペタンと砂場に坐ったまま、こちらを時々ちらっと見ては、「でもあの人の方があんたより大きくて強そうよ」
と正直なことを言う。ゲーリーは、
「でもオレの方が強いんだ、あんな野郎より」
と歯をむいているが、さっきの勢いは少々衰えたようだ。

また、「ようだ」は以下の例文(6)～(7)のように、「～ように見える」「～様子である」などにおいても、目前の事態の様子や様態を描写する実例が多く見られる。

- (6) 様子がおかしい、と石神は直感していた。この刑事は戸惑っているように見える。(容疑者 X の献身)
- (7) インたちはやって来た。昨日と比べて、とくに変わったところもない。石ひとつ、動いたような様子もなかった。みんなして、立ちすくむ。(魔女の結婚)

②話し手自身の感覚自体の描写中心の推量 - 7 例

「ようだ」が用いられた例文の中では、以下の例文(8)～(11)のように、発話時に話し手自身が感覚したものをそのまま描写する場合に焦点が置かれる場合がある。これは日本語の推量形式のなかで、「ようだ」の固有用法である。上記した例文(2)～(5)も話し手の視覚的情報に基いた判断ではあるが、命題の真偽は未確認の状態である推量であり、物事の外見や様子を表すところに焦点が置かれている。それに対し、以下の例文は話し手自身の直接感覚によって、事柄の真偽がほぼ確認できる話者の感覚自体の描写に中心がある。

このように、感覚情報に基づく場合、話者と経験主は一致しなければならない。その理由は発話時判断における話者自身の内的感覚の陳述は主体だけが認識できるためである。このような場合に用いられる「ようだ」にも「類似性に基づいた推量」という「ようだ」の基本的推量意味が反映されていると思われる。例えば、以下の例文(8)～(9)は現状 X である「コートを着た」「お風呂をさわった感じ」という話し手自身が直接体験したままの感覚や印象が「少し小さい」「お風呂がぬるい」という事態 Y と「似ている」または「類似する」「～という印象である」という類似性が前提とされていると思われる。ただ、この場合は視覚情報による外見的類似性というよりは話し手自身の感覚に基づいて、「話者が体験している対象」と「判断」が「類似する」という意味であるため、上記の例文(2)～(5)とは区別される。

- (8) (コートを着ながら)このコート僕には少し小さいようだ。
(9) (触って)このお風呂ぬるいようだ。

(10) (ラーメンを試食して見て) このラーメン、味が薄いようだ。

(11) 金魚をいじった後の、あのたまらない生臭さが、自分の体いっぱいにしみついている
ようで、洗っても落ちないようだ。(女生徒)

また、上の例文(8)～(11)の場合、「ようだ」を用いたのは、話し手自身が発話時に感覚で体験したことを述べている場合ではあるが、事態の真偽に対して話し手が信じる度合いが弱いため、不確実性の領域に持ち込みたいという話し手の心理的態度に起因するのではないと思われる。客観的な事実を表す際に、推量表現を用いることで断言の度合いや直接性を弱化させる語用論的原理が作用していると思われる。また、話し手自身の中ではまだ事実としては断定していない、言い換えれば、上記の例文(8)～(11)は命題の真偽が既定ではないため、推量表現を用いている。

③発話時に話者が現場から入手した知覚情報に基づいた現場性推量－72例

「現場性推量」とは発話時に話者が現場から入手した知覚情報に基づいた推量を意味する。「ようだ」が用いられる多くの例文を見ると、以下の例文(12)～(15)のように、発話現場で話し手自身の感覚を通して得られた根拠に基づいた推量に用いる場合が最も多かった。この場合の「ようだ」も構成要素「様」の意味と関連していると思う。事態に対する推量判断だけではなく、外見や印象を表すのに中心があると思われる。これは上記した「様態性」「現状描写性」と「現場性」というものが分離されない性格を持っているためである。例えば、以下の例文(12)の場合、話し手は発話時に捉えた目の前の現場情報に基づいて判断している。

(12) タクシーは先ほどの位置からカーブまで半分くらいのところまで来ていた。

どうやらカーブの先で工事をやっているようだ。(落差)

(13) 「本官を侮辱すると、ただで済みせんぞ」

「待て、何をしとるんだ」

その時、吟子の後ろから太い声がした。

振り返ると頬から鼻下へ髭を連ねた大柄な男が立っている。

まだ三十前のようだが、背広を着たところはかなりの高官に違いない。(花埋み)

(14) 「キキてきなジョウキョウ」とふかえり、天吾の言ったことを反復した。そして苦い薬を目の前に出された小さな子供のような顔をした。その言葉の響きが気に入らない
ようだ。(IQ84)

(15) 雨戸の隙間が、赤い色のガラスのような光をはなち、どうやら久しぶりに雨があがった
ようだ。(他人の顔)

用例分析において、上記のような現場性推量が最も高い割合を占めることが確認できた。

④実在的根拠に基づいた非現場事態の推量－21例

以下の例文(16)～(19)は「ようだ」の本質的意味である「外見や様子を述べる」という構成要素「様」の原型意味(root meaning)はあまり反映されてない。例えば、以下の例(16)～(19)は話し手が発話時に発話現場で視覚を通して得られた事物や事態に対する表面的印象を表すものではない。以下の例文は話し手が第三者や外部世界から得た間接的根拠から推論の思考過程を経て導かれる推量である。

(16) 他にもいろいろな神話伝説が絡んでいるところを見ると、シンボは単なる南のはずれの小さな島ではなかったようだ。(メラネシア)

(17) ところがこの熊五郎は戦後の不況が訪れだしたころ、急転直下 社会主義者をもって任じだした。それには楡病院のT型フォードの運転手が急に見えなくなったことも一

因であったようだ (孤高の人)

(18)あとで分かったのですが、メキシコの人たちは英語読みの「メキシコ市」という言葉はあまりすきではないようです。

(19)野田さん、最近、しばしば授業をサボっている。どうやら、何か問題があるようだ。

上の例文(16)～(19)は根拠に基づいた推定という推論性が強い場合であり、田野村(1991)で述べたように、「根拠に基づいた推定」を主な特性とする「らしい」への接近を見せる現象である。また、上の例文は「らしい」と置き換えも可能である。上の例文(16)～(19)はすべて「ようだ」の本質であるとした事物や事柄の「外見・様子を述べる」または「二つの対象が外見的に類似する」という意味の反映が前面に表れていない種類の例文である。

類似性推量を本質とする「ようだ」が「らしい」に近接している現象は「類似性推量」の「ようだ」から「証拠に基づいた推定」の「ようだ」へ、その用法が拡張していく現象として捉えることができる。しかし、本論文は「ようだ」が「らしい」と同じ状況に使われることがあるとしても、これは外見や印象を述べることに中心がある「ようだ」の基本的な働きの一つの現れ方に過ぎないものと考ええる。さらに、上記した用例の分析から見ても、「ようだ」の用法は多様であるが、概ね「ようだ」の原型的意味「よう(様)」と直・間接的に関わっていると思われる。ただ、間接的根拠に基づいた推量に用いられた「ようだ」の場合、原型的意味との関連性を把握することが容易ではないが、これは具象的かつ現時的な属性を持つ「様」または「様子や外見を述べる」という「様態」の意味から抽象的用法へ、その推量領域が拡張していく現象であると思われる。結局、上記のような現象は「様子や外見を述べる」ことを本質的特性とする「類似性推量」の「ようだ」から「外様や様子」の意味が薄くなり、根拠に基づいた推量の特性がより強く反映されているものとして把握できる。

5.2.2.3. 「ようだ」の推量用法間の関連性

前節では「ようだ」が推量用法として用いられた用例を分析し、上記の①～④に区分されるという点を述べた。本節では上記した①～④のような「ようだ」の各々の推量用法がどういう関わりを持っているのかについて検討する。以下では前述した各々の推量用法の例文を再掲して、各々の推量用法がどういう関係性を持っているかについて考える。

(20) (久しぶりにある知人の顔を窺って)あなた、どうも疲れてるようだね。

貞行はそういつて、家の中でぶらぶらするようになった。(塩狩峠)

(21) (お風呂のお湯を触って)このお風呂ぬるいようだ。

(22)野田さん、最近、しばしば、授業をサボっている。どうやら、何か問題があるようだ。

(23)ところがこの熊五郎は戦後の不況が訪れだしたころ、急転直下 社会主義者をもって任じだした。それには楡病院のT型フォードの運転手が急に見えなくなったことも一因であったようだ。(孤高)

前述した通り、上の例文(20)～(21)は「ようだ」の「事物の外見や印象を述べる」または「話者が体験した現状をそのまま描写する」という「ようだ」の原型的意味が強く反映されている構文である。一方、上記の例文(22)～(23)は話し手が何らかの証拠に基づいて導かれる別の事態の成立可能性に対する推量の性格が強い。例えば、上の例文(22)は「野田さんがしばしば、授業をサボっている」という実在的根拠から、「何か問題がある」という別の事態の成立可能性に対する推量の性格が強い。ところが、本論文は例文(20)～(21)と(22)～(23)は用法上の特性において、それぞれ「様態中心」「推量中心」という違いを見せるが、両類型はお互いに関連性を持っていると考える。上の例文(22)～(23)のように、根拠に基づいた推量判断の性格が強い「ようだ」の場合も、その根底には「事物や事態の外見や印象を述べる」という「ようだ」の本質的意味属性が内在していると思われる。勿論、「様態」か

ら「推量用法」が派生したという根源的な関連性を考慮しなくても、「ようだ」を通して、表される事態の「様」の属性は上の例文(22)～(23)のような推量の性格が強い構文にも反映されていると考えられる。ただ、このような場合「ようだ」の「様」は「具象性」よりは「抽象性」が強く表されている「様」の用法を見せる現象として把握できる。「具象性」を特性とする言語形式が「抽象性」へその用法を拡張するのは言語普遍的な現象の一つである。

上記した「ようだ」の「外見や印象を述べる」または「現状を描写する」用法は「ようだ」の構成要素である「様」という原型的意味がよく反映されているものであり、相互分離されない同質の特性である。上記した「ようだ」の推量特性の中で、最も高い使用上の傾向を見せる「発話現場の知覚情報に基づいた推量」も上記の特性と関連がある。現場の知覚情報とは主に目の事態であり、推量判断の直接的根拠になるのはこのような目の事態の外見や様子と関わっていると思われる。上記した「ようだ」の推量用法の中で、例文(23)のように、実在的根拠に基づいた非現場性事態の推量は「らしい」の推量特性と類似する属性を見せるものである。ただ、このような場合も「実在的根拠」というのは事態の具象的または抽象的「様」と関わっていると思われる。例えば、上の例文(23)の場合は典型的な実在的根拠に基づいた推量であり、「ようだ」の根本的特性ではない「らしい」の推量特性に接近していると捉えることができる。

5.2.3. 「らしい」の推量意味と用法

5.2.3.1. 「らしい」の推量意味

前述した先行研究の分析でも確認した通り、従来、「らしい」は主に「ようだ」との比較分析的観点から、その推量意味及び用法上の特性が把握されてきた。しかし、「ようだ」との比較分析に依存して「らしい」の推量意味を分析すると、「らしい」の本質を把握しにくい場合がある。本論文は田野村(1991)で言及した通り、「らしい」の意味を「ある根拠から、事実は～であると推定される」と捉えた方が「らしい」の本質を把握しやすいと思われる。さらに、「ようだ」との区別がより明確になると考える。

本論文は基本的に「らしい」の推量意味については田野村(1991)の見解に従う。本論文では「らしい」が使われている多くの用例の観察や使用上の傾向分析に基づいて、田野村(1991)が述べた見解の妥当性を検証することに主眼を置く。

これまでの多くの先行研究では「らしい」の用法として「根拠に基づく推定」と「伝聞相当用法」の二つを認めてきた。例えば、野林(1999)や益岡(2000a)も「らしい」の用法を「根拠に基づいた推定」と「伝聞用法」に分けて捉えている。すなわち、益岡(2000a)では「らしい」は根拠に基づく判断とはいえない用法があると述べながら「らしい」の意味を以下のように推量意味と伝聞の意味を別の意味用法として捉えている。

- a. 伝聞の意味：この場合は根拠に基づいた推量の意味はないと規定している。
- b. 推量の意味：この場合は根拠に基づいた推量の用法であると述べている。

たしかに、「らしい」が使われている多くの用例を分析した結果、話し手が外部世界で捉えた根拠に基づく推定を表す場合と第三者から得た間接的情報に依存する推量に用いられる場合に「らしい」の用法は区分される。しかし、先行研究で区分した「らしい」の両用法は判断の情報となる根拠の性格は異なっても、すべて何らかの根拠に基づいた推定という点では同様である。勿論、伝聞相当用法の「らしい」は根拠に基づいた推定であると捉えにくい側面もあるが、他人から得た情報に基づいて話者の判断を表明している。ここにも話者の主観的態度が反映されていると捉えられるため、伝聞相当用法も根拠に基づいた推定という「らしい」の基本的意味の中に含まれると考えられる。その理由は基本的に「らしい」も推

量形式であるため、話し手の見解が全く反映されないまま、伝聞情報だけを表していると捉えるのは容易ではない。このような場合は伝聞専用形式「(する)そうだ」「という」などのような表現を用いる。

以上を踏まえ、本論文は田野村が言及した「らしい」の意味と、根拠に基づいた推量を表すという側面を考慮し、「らしい」の推量特性を「推論性推量」と規定する。次節ではこのような「らしい」の推量意味と実際の用法間の関連性について述べる。

5.2.3.2. 「らしい」の推量意味と用法間の関連性

本論文は「らしい」の推量の意味は「根拠に基づいた推定を表す推論性推量」と述べたが、このような見解の妥当性を用例分析によって実証的に証明する必要があると思われる。そこで、本論文は「CD-ROM版 新潮文献の100冊(1995)」と日韓対訳文献(日本語の作品)などの対象資料から推量用法として用いられた「らしい」の用例151個を収集し、その推量用法上の特性を分析してみた。その結果、田野村(1991)で述べたように、「らしい」は基本的に何らかの根拠に基づいた推定を表す例文が多かった。以下では推量用法と関わる「らしい」の実例を分析し、その特性によって区分した。

①間接的情報に基づいた推量-96 例

ここで、間接的情報とは他人や第三者から入手した情報を指す。「らしい」が用いられた151 例の中で、最も多い 96 例が以下の例文(24)～(26)のように、間接的情報に基づく判断に用いられた例文であった。

- (24) 昼休みに清掃会社のほうへ電話を入れてみると遊佐はなにか事情があって休みをとったらしい。(危険な場所)
- (25) 寺林さん自身は洞窟があるという噂を知らなかったが、現地の人に声をかけてくれると、知っている男がいた。ムンダの山手にあるらしい。洞窟は背より高く、水が流れて出ているという。(メラネシア)
- (26) この間、羽田で、賢次郎に会ったんですって。夕方だったもので、純子さんが賢次郎を向かえに来てたらしいの。(夫婦の情景)

また、「らしい」は以下の例文(27)～(29)のように、間接的根拠という情報源を明確に表す副詞的表現「～によると」と共起する場合が多く見られることから、「らしい」は伝聞相当用法に多く用いられることが分かる。

- (27) 聞くとところによると、マナウスではお姉ちゃんがいる飲み屋をボワッチと言うらしい。(鳥頭)
- (28) 渡辺誠氏の調査結果によると、編布の衣服は今世紀に入って急速に消滅したらしい。
- (29) 母の話によると、母は大変な苦勞をしてこの劇場を維持してきたらしい。(フロイド)

上記したような用法上の傾向から見ると、寺村(1984)で述べた通り、「らしい」は 外部や第三者から得た間接的情報に基づいた判断に多く用いられることが確認できた。

②話者が発話現場で捉えた外在的根拠に基づいた推量-55 例

「らしい」が用いられた151例の中で55例は以下の例のように、話し手が発話時に入手した外在的根拠に基づいた推量判断であった。例えば、以下の例文(30)は話し手が発話時に現場で捉えた知覚情報に基づいた推定であり、「ようだ」に近い属性を見せるものである。使用上の傾向から見ると、「らしい」は現場の知覚情報よりは上記したような間接的根拠に基づく判断が多い。しかし、以下の例文(30)の場合は話し手が発話現場で自分の視覚によって

捉えた情報を根拠にして、「ここが駐車場の入り口である」という印象を受けるとする意味であり、このような用法は「ようだ」と部分的に共通性を持っていると思われる。

- (30) ホテルの門を入れて左側に、地下へと続くスロープがある。駐車場への入り口らしい。
(容疑者Xの献身)
- (31) まあ、そこらでもながめながら、ゆっくり食え。まだ時間はたっぷりある。私は、食べのこした飯を食おうと思ったが、箸がなかった。土手をのぼるとき、落としたらしい。
(忍ぶ川)
- (32) 吉村は上京するたびに理枝に会った。お小遣い、あげるよ。うん、ありがとう
いつもなにほどこかの金銭を与えたが、理枝はなんの屈託もなく受け取る。ほとんど抵抗感もないらしい。
(マルゲリータの夜)
- (33) 父親は、村にいるころから、うさぎの毛皮の防寒帽でも麦わら帽でもあみだがぶりに
するくせがあったが、今度も真新しいハンチングのひさしをあげて、はげあがった額
を丸出しにして帰ってきた。どうやら、工事現場のヘルメットばかりは自分の流儀で
気まにかぶるというわけにもいかないらしい。
(盆土産)

以上のように、対象資料から集めた「らしい」の用例を分析した結果、「らしい」は他人または第三者などの外部世界から入手した間接情報に基づいた推定に用いられた場合が最も高い用法上の傾向(151例の中で96例(63.6%))を見せることが確認できた。その他に、「らしい」が使用された151例の中で55例(36.4%)は話し手が現場で入手した知覚情報に基づいた推定を表す場合であった。

結果的に、「らしい」の主な推量用法である「間接的情報に基づいた推定」と「話し手が現場で捉えた知覚情報に基づいた推定」は根拠の属性は異なっても両方すべて何らかの根拠に基づいた推定という点では同様であると考えられる。このような特性は前述した「ある事物や事態に対する外見や様子を述べる」ことを本質的意味とする「類似性推量」の「ようだ」とは対比される点である。

本論文では多くの先行研究で「らしい」の用法として述べた「推量用法」「伝聞相当用法」を別のものではなく、前述した田野村(1991)の見解と同様に、「らしい」は「根拠に基づいた推定」を表すのが本質であり、上記したような二つの下位用法の区分が可能であることを多くの用例分析を通して、実証的に検証した。以上のように、「らしい」の推量用法は「根拠に基づいた推定を表す」ことに中心がある「推論性推量」の特性を裏付けられると思われる。

5.2.4. 「ようだ」「らしい」の推量意味及び用法上の異同

5.2.4.1. 「ようだ」「らしい」の相違点

既述した通り、「ようだ」「らしい」の異同に関しては、これまで非常に多くの研究がなされてきた。田野村(1991)は、これらの研究の中には、いわゆる推量の「ようだ」と「らしい」を取り上げ、これをどちらもある根拠をもとにした推量と考えて、そのニュアンスの違いに言及するものが多い(柏岡1900、柴田1982、寺村1984、早津1988など)ということを指摘しながら、このような傾向に異議を唱えている。そして、ラシイは「根拠」に基づく「推定」を表し、ヨウダは「外見」「様子」「印象」を表すとして、両形式の基本的な意味が異なることを指摘した。中島(1991)でも「らしい」は基本的に「事実を推論」するときに用いられるが、「ようだ」の本質は、事実を推論することにはなく、「現実界を描写する」という点にあると指摘している。

田野村(1991)の見解は「らしい」と「ようだ」の性質をよりの確に捉えていると思われる。

本論文も基本的にこのような立場を受け入れるという点を明確にした。

両形式の推量用法を分析した結果、「ようだ」と「らしい」の違いを捉えるためには、

多くの先行研究で述べてきた「根拠性格の違い」や「心理的態度または叙述態度の違い」などのようなある特定の単一基準だけでは、両者の本質的違いを究明するには限界があるという点を述べた。

本論文は前述した両形式が担っている「類似性推量」「推論性推量」という基本的な推量意味の違いが以下に述べる両者の多様な用法上の相違にも反映されていると考える。

①判断根拠の現場性

前述した用例分析から見ても、基本的に「ようだ」は「発話現場」とより密接な関連性を持っているのに対し、「らしい」は「ようだ」に比べると、相対的に「発話現場」との関わりが密接ではない。このような特性は両形式の判断根拠の性格とも関わっている。前述した両形式の根拠性格による使用上の傾向からも確認できたように、「らしい」は間接的根拠に基づいた判断に使われる傾向が強いため、基本的に非現場的事態に基づいた推量に使われる傾向が見られた。用例の分析結果、「らしい」は主に実在的根拠に基づいた話し手の推量に用いられる場合が多いが、その根拠が現場性を欠くものが多かった。上記した151例文の中で96例はすべて間接的に得た情報または文面上に示された根拠に基づいた判断に用いられた「らしい」であり、根拠自体は現場性がないものであった。それに対し、「ようだ」は用例分析の結果、話し手が発話時に捉えた現場の知覚情報に基づいた判断に多く用いられる傾向が見られた。

②様態性意味の有無

用例の分析結果、「ようだ」が「様態性」を主な特性とする点と違い、「らしい」は話者が発話時に目前で捉えた事物や事態に対する表面的印象や様子を述べる様態中心の推量に用いられた例文は見当たらなかった。これは「ようだ」が形式自体の構成要素「様(よう)」の原型の意味と深く関わっているためであると思われる。これに対し、「らしい」は根拠に基づいた推論の性格が強い「推論性推量」を本質とするため、「ようだ」のような「様子」や「外見」という意味を抽出することができない場合が多い。これは以下のような例文(34)～(35)からも確認できる。

(34) (久しぶりに会う知人の顔を窺って)あなた、どうも疲れるようだね/*らしいね。

貞行はそういつて、家の中でぶらぶらするようになった。(塩狩峠)

(35) (目前に飛行機のように見える物体を見て)あれは飛行機のようだ/*らしい。

例えば、上の例文(34)は「知人の顔」が「疲れている様子を呈している」ことを表現することに中心がある場合であり、「ようだ」は自然であるが、「らしい」は不自然である。

③推論過程の有無

根拠に基づいた推論の性格が強い「らしい」は判断における推論過程が重視されるのに対し、「ようだ」は「らしい」に比べて、相対的に「目前の事態や事物に対する外見や印象を述べる」ことに重点が置かれる。基本的に推量判断というのは「根拠－推論－最終的判断」という一連のプロセスを想定することができるが、推論方式の内容においては違いがある。

「推論性推量」の「らしい」が「類似性推量」の「ようだ」より、判断において推論過程が目立つのに対し、現場性や様態性が強い「ようだ」は推論過程が縮小または省略される場合がある。例えば、「ようだ」は以下の例文(36)のように、根拠に基づいた推論よりは発話時に話し手自身が知覚した事態に対する印象をそのまま述べる場合に用いることができるのに対し、根拠に基づいた推論性が強い「らしい」は用いられない。このような現象も前述した両形式の基本的意味の違いと深く関わっていると思われる。すなわち、「様」の意味の反映可否と関わっていると言える。

(36) (スープの味見をしながら) 少し、味が甘すぎるようだ/?らしい。

④話し手の内的根拠に基づいた推量

他人や外部世界から入手した根拠に基づいて、事実を推定する「推論性推量」の特性が強い「らしい」は以下の例文のように、話し手自身の内的根拠に基づいた推量には許容度が落ちるのに対し、「ようだ」は自然に使える。以下の例文(37)の場合、「らしい」は他人や第三者などの外部世界から得た情報に基づいた判断ではないため、許容度が落ちるが、「ようだ」は自分の内的根拠に基づいた判断の場合にも自然に使える。

(37) (話し手自身の内的根拠に基づいて) 事実、彼の感情のたかぶりは、単に女の愚かさに対する腹立ちというような単純なものではなかったようだ/?らしい。(砂の女)

以上の現象における「ようだ」と「らしい」の許容度の違いも前述した両形式の推量意味の違いと関わっていると思う。事物や事態に対する話し手の印象を述べる場合に用いられる特性を持っている「ようだ」は上の例文(37)のように、話し手自身の内的感覚情報に基づいた判断においても自然に用いられる。それに対し、主に外部世界または現実世界から得た情報を根拠として推定する場合に用いられる「推論性推量」の「らしい」は許容度が落ちる。これも前述した両者の基本的推量意味の違いと関連性があると考えられる。

⑤伝聞性意味との関連性

「らしい」と「ようだ」は形式自体の「伝聞相当用法」の可否において相違点が見られる点は周知の事実である。前述した通り、「ようだ」「らしい」は「証拠性判断」の属性を共有しているため、第三者から伝え聞いた伝聞情報に基づいた推量に用いることが可能である。しかし、「らしい」は以下の二点において、「ようだ」とは異なる振る舞いを見せることから、形式自体に伝聞相当の意味または用法を持っていると考えられる。

a. 間接的情報源「～によると」との出現頻度

前述した通り、「ようだ」と比べて、「らしい」は他人から得た伝聞情報に基づいた判断であることを明確に示す「～によると」との共起関係の傾向において違いが見られる。

「らしい」が間接的情報に基づいた判断に用いられる場合が多い点は以下のような間接的根拠という情報を明確に表す副詞句「～によると」との共起傾向の違いからも確認できる。

そこで、本論文は「現代日本語書き言葉コーパス 少納言」から「～によると」と共起する「ようだ」「らしい」の例文160個を収集し、両形式の共起関係の傾向を分析した。

共起する傾向を分析した結果、「らしい」は外部情報に基づく推量の中でも、特に、聴覚による推量は「らしい」が一番よく使われることが分かった。また、伝聞情報に基づく推量判断には「ようだ」「らしい」両形式すべて用いることができるが、以下のように、第3者から得た伝聞情報に基づく判断であることを明確に示す「～によると～らしい」の形で現れる場合には「らしい」の使用が「ようだ」に比べて圧倒的に多いことが確認できた。

①「～によると～らしい」の形で現れる出現頻度：134例

②「～によると～ようだ」の形で現れる出現頻度：26例

以上のような結果は「らしい」は形式自体に伝聞相当の意味を持っていると捉えられる根拠になると思われる。以下の例文(38)の場合も「～の話では」という典型的な伝聞情報に基づいた判断であり、「らしい」との共起が自然である。

(38) 付添婦の話では、病人は一日に一回必ず激痛に襲われて、このときばかりは苦しくてたまらないらしい。

b. 伝聞情報に基いた判断の否定化可否

「ようだ」「らしい」両形式は以下のような伝聞情報に基づいた判断の否定化可否においても許容度の差が見られる。すなわち、以下の例文(39)のように、伝聞情報に基づいた判断をすぐさま否定する構文において、「らしい」は自然に用いられるのに対し、「ようだ」はやや許容度が落ちる。

(39) a. 新聞情報によると、今回は証人喚問に応じるらしいが、僕はそう思わない。

(39) b. ?新聞情報によると、今回は証人喚問に応じるようだが、僕はそう思わない。

このような現象が生じる理由は両形式の推量意味の違いと深く関わっている。例えば、益岡(2000)や野林(1999)などでも述べた通り、「らしい」の用法は大きく、「客観的根拠に基づいた推定を表す用法」と「伝聞相当用法」の二つに区分されると把握してきた。上の例文(39)は伝聞情報に基づいた判断であるため、話し手の主観介入がほぼ排除された客観的事態を表現しているものであるため、話し手自身が下した判断をすぐさま否定することも可能である。それに対し、「ようだ」は「らしい」と同様に伝聞情報に基づいた判断であっても、「らしい」よりは判断に対する話し手の主観介入の程度が強いため、話者自身が下した判断をすぐさま否定する場合には「らしい」よりは許容度が落ちると思われる。

5.2.4.2. 「ようだ」と「らしい」の類似点

本論文で疑似推量形式と位置づけた両形式は証拠に基づいた事態認識を表す「証拠性判断」の性格を共有している点で類似性を見せる。上記した対象資料の用例分析からも確認できるように、「ようだ」「らしい」の基本的な推量意味はそれぞれ「類似性推量」と「推論性推量」に区分される点を述べた。しかし、両形式はすべて何らかの証拠に基づいた推量判断に用いられる傾向が強い。「らしい」が根拠に基づいた推定の性格が強いが、以下のような例文(40)において、「ようだ」と類似する振る舞いを見せる。以下の例文では両形式すべて、話し手自身が現場で五感を通して捉えた根拠に基づいた判断を行う場合である。このような場合は「らしい」が「ようだ」に近い振る舞いを見せる例文として把握できる。さらに、以下の例文における「らしい」は話し手自身の直接感覚によって捉えた情報を根拠にしているので、以下の例文(40)の「らしい」は典型的な「ようだ」の領域に接近している現象として捉えることができる。また、例文(41)のように、伝聞のような間接的情報に基づいた場合に用いられた「ようだ」も「ようだ」の基本的意味である「外見や様子を述べる」や「類似性または似ている」という視覚的印象に基づいた推定とは言えない。典型的な「らしい」の推量特性に接近していると捉えることができる。このように、両者がお互いの領域に接近する現象が見える背景には、基本的に両者は何らかの証拠に基づいた認識を表すという「証拠性判断」の属性を共有しているためであると考えられる。

(40) 渡辺は葉巻の煙を緩く吹きながら、ソファの角の処の窓を開けて、外を眺めた。窓の直ぐ下には材木が沢山立て並べてある。ここが表口になるらしい/ようだ。(高瀬丹)

(41) 話によれば、君の影はずいぶん元気をなくしておるようだ/らしい。(世界の終り)

(42) 銀婚式にレストランへ連れてきて頂いたんで、満足しているのよ。冗談半分の嫌味を言おうとしたのに、うまくいかなかった。善吉は「うん」と半ば照れたように答えをばかしていた。善吉は本気で感謝されているのだと思ったらしい/ようだ。

5.3. 「것 같다」「모양이다」の推量意味と用法

既述した通り、韓国語形式「것 같다」「모양이다」は日本語の「ようだ」「らしい」に最

も近い対応関係を見せる疑似推量形式である。日本語の場合と同様に、基本的に真正推量形式は事態成立に対する話し手自身の真偽判断に焦点が置かれているのに対し、疑似推量形式は判断の証拠になる目前の事態に焦点が置かれる。ただ、韓国語の疑似推量形式「것 같다」「모양이다」の場合、形式自体の原型的意味と関連し、推量意味が派生して、目前の事態自体の認識中心と推量判断中心の機能が共に用いられるという点に特殊性がある。

5.3.1. 先行研究の残された課題

推量形式をある事態や事実に対する不確かな認識を表す際に用いる形式であるという観点から見ると、当該形式の意味または用法を「判断根拠の性格」を通して、各々の推量形式の意味と用法上の違いを分析する従来の分析は確かに妥当性がある。ただ、当該形式の推量意味と用法上の違い及び形式間の異同を体系的かつ正確に捉えるためには、ある特定の一つの基準や特性だけでは関連形式の意味や用法上の異同を正確に把握することはできない。また、各々の形式の推量判断に関わる多様な語用論的状况を十分に考慮せず、研究者の直観に基づいて恣意的に作った少数の例文だけで、諸形式の意味用法を把握するには限界があると思われる。従来の対照研究及び韓国語研究の問題点を簡単に要約すると以下の4点である。

①両形式の推量意味と用法上の違い

従来、両形式の意味と用法上の違いに対する綿密な分析がなかった。その背景には前述した通り、これらの形式は推量モダリティ形式として位置づけられてこなかったためであると思われる。

②両形式の推量用法上のズレが生じる背景

前述した通り、従来の対照研究では両言語の推量用法上の違い及びそういった違いが生じる背景については論じていない。

③研究者の直感に基づいた当該形式の意味と用法の分析

当該形式の推量意味と用法を分析する際に、主に研究者が作った少数の例文や直感に依存する分析が多かったため、実証的な分析になっていない。

④両形式の推量モダリティ体系の中での位置づけ

韓国語の先行研究ではこれらの形式がモダリティという文法範疇に属する形式として受容されて来なかったため、推量モダリティ体系の中での位置づけの問題については論じていない。従来の両言語の推量モダリティの対照研究において、韓国語形式の推量意味と用法上の特性に対する綿密な分析がなされて来なかった。韓国語形式の推量モダリティ体系の中での位置づけの問題は個別形式及び形式間の意味と用法上の異同の究明が優先されるべきである。

5.3.2. 「것 같다」の推量意味と用法

5.3.2.1. 「것 같다」の文法的性格

今までの韓国語のモダリティ研究において、「것 같다(geosgattda)」の文法的性格についてはあまり論じられてこなかった。その理由は「것 같다(geosgattda)」は形式名詞「것(geos)」と形容詞「같다(gattda)」の複合形式であるため、文法要素としての推量叙法形式として認定されてこなかったためである。従来の対照研究においても、「것 같다」は「ようだ」と類似する推量意味を表す形式であるという点は言及されてきたが、その文法的性格については論じていない。

本論文では「것 같다(geosgattda)」を推量モダリティという文法的機能を担う文法形式として規定する。その理由は以下のようである。

一つ目は、「것 같다(geosgattda)」は構成要素である形式名詞「것(geos)」や形容詞「같다」自体に推量意味が存在しないにも関わらず、両者の複合形式である「것 같다(geosgattda)」は明らかに推量意味を表すからである。この現象は両形式の複合が推量モダリティ形式として文法化されている点を示唆する。

二つ目は、以下に述べる統語及び意味的特性のためである。次の例文を見られたい。

(43) 비가(雨)가 +올(降る)+ 것 같다(geosgattda).

上の例文(43)の統語構造を見ると、主語は「비(雨)」である。そうすると、一次的にこの主語の述語は「올(降る)」になる。そうすると、この文全体の述語は何なのかについて考えてみると、「같다」が述語でなければならない。韓国語は述語が文末に位置する言語であるからである。そうすると、「같다」の主語を想定しなければならない問題が生じる。このような場合、対案として考えられるのは「것 같다(geosgattda)」を補助形容詞として位置づける見方である。次の例文は「것 같다(geosgattda)」が典型的な補助形容詞として用いられたものである。

(44) 오늘은 추운 것 같다(geosgattda).
(今日は寒い+geosgattda。)

上の例文(44)は主語「오늘(今日)」と「述語「추운(寒い)」+ 補助形容詞「것 같다」の構造である。ここで、「것 같다」を推量モダリティ形式として位置づけるためには、この形式が「補助形容詞」である点を明らかにし、必ず連体節語尾「는(neun)/은(eun)/을(eul)」が先行する形態・統語的条件が前提にならない条件も明確に認識する必要がある。これは韓国語の補助形容詞や補助動詞が持っている共通的特性である。

本論文は以上のような点を踏まえ、「것 같다(geosgattda)」の文法的性格を「推量モダリティの補助形容詞」として位置づける。前述した通り、「것 같다」を推量モダリティ形式として位置づけるためには、この形式が補助形容詞としてある程度文法形式化⁵⁵したという前提が必要である。これは「것 같다」が前述した「-ㄹ-」のように、完全に文法形式化したものであるとは言えないが、準文法形式として位置づけられる可能性を示唆する。

5.3.2.2. 「것 같다」の推量意味

「것 같다」の推量意味を捉えるためには、形式自体の構成要素である「것(geos)」と「같다(gattda)」の原型的意味を考える必要がある。

まず、「것(geos)」から考えてみる。「것(geos)」は自立名詞としては用いられず、いつも連体形語尾が先行しなければならない特性を持つ依存名詞または形式名詞である。

(45) 저기 있는 것(geos)은 내 것(geos)이다
(あそこにおいてあるのは私のものである。)

(46) 저것은 내가 점심에 먹을 것이다. (あれは私がお昼に食べる+もの(物)+である)

(47) 나는 타로가 오는 것(geos)을 몰랐다. (私は太郎が来ることを知らなかった。)

上の例(45)の「것」は物や事物を指すが、具体的な実体は表れない。実体があると、例文(46)における「geos」が「食べ物」を示すことのように、文脈によって理解される。それほど、「것」の意味は固定されておらず、語用論的状况によって多様な解釈が可能である。このような意味から考えると、「것」の意味は非常に抽象的である。

⁵⁵ 本論文では形式自体の文法化程度の問題については述べないことにする

また、上の例文(47)において、「것」はその前に韓国語の連体形語尾「는」を持つ連体節の修飾を受けている構造である。さらに、上の例文(47)における「것」はその意味が抽象的である。上の例(45)～(46)に用いられた「것」はある実体や物を提示するのに対し、上の例文(47)の場合は、統語的に、「것」が「몰랐다(知らなかった)」の目的語であるが、提示する実体がない。このような場合は先行する連体形語尾と複合して、「-(으)ㄴ/는/ㄴ 것」の形態で、一つの名詞形語尾になると把握することもできる。このような場合、「타로가 오는 것(太郎が来ること)」全体が「몰랐다(知らなかった)」の目的語になる。以下では「같다(gattda)」と関わる問題について検討する。次の例文を見られたい。

- (48) a. 너의 모자와 내 모자는 같다(gattda). (お前の帽子と私の帽子は同じだ。)
 (48) b. 너의 모자는 내 모자와 같다(gattda). (お前の帽子は私の帽子と同じだ。)
 (48) c. 내 모자는 너의 모자와 같다(gattda). (私の帽子はあなたの帽子と同じだ。)
 (49) 마치 너의 모자는 내 모자 같다(gattda). (まるでお前の帽子は私の帽子のようだ。)

上の例文(48)において、「お前の帽子」と「私の帽子」が「同じだ」というのはどういう意味を表すのかについて簡単に考えてみる。二つの対象が「同じだ」という意味で解釈することができる。しかし、もう少し綿密に考えると、「같다(gattda)」について、少なくとも以下の二点を想定することができる。

一つ目は、「スケール」の問題である。「같다(gattda)」と「同一だ」「同じだ」などが数学の等式のように、完全な同値を意味する場合もあるが、部分的な一致を意味する場合もある。ここには多様な程度差が存在する。

二つ目は、対象または属性の問題である。例えば、上の例文(48)において、同じものが「色」であるかもしれず、「形」や「大きさ」または「材質」、さらに、これらの一部または全てである可能性もある。明らかな点は二つの対象や事物を「같다(gattda)」と述べる際に、「같다(gattda)」の同一性には多様な程度差が存在する。もう一つ、例文を検討する。

- (50) 저 아이 하는 행동이 꼭 제 아버지(와) 같다(gattda).
 (あの子の行動がちょうど自分のおやじ+gattda。)

上の例文(50)では、副詞「꼭(ちょうど)」が「같다」を修飾し、二つの対象間の「同一性」を強調しているが、このような場合、明らかな点は「あの子がやっている行動」と「おやじの行動」が完全に同じであるとは言えない。上記した例文を通して、確認できる点は「같다(gattda)」や「동일하다(同一だ)」の意味は前述したような数学の等式のような完全な一致を表す意味では使われず、概ね、「類似する」「似ている」の意味で用いられる。

ここで看過できない問題の一つは、以上のような「것같다」がどのように推量意味を担う形式として機能するのかという点である。言い換えれば、「것」と「같다」の結合形式がどのように推量助動詞として文法化してきたのかという点である。

まず、統語的に「같다」は必ず、名詞または名詞句が先行するが、この名詞(句)は「같다」の比較対象の一つになる。例えば、「A는 B 같다 (AはB+gattda)」の場合、AとBは比較または類似性の対象になる。「것같다」において、「것」は名詞(句)であるBに該当する。そして、「같다」が多くの場合、事態の「同一」を意味するよりは「類似する」の意味で用いられる場合が多い。ところが、このような類似性が同一性の語彙的意味を持った「같다」によって、表されることも特徴的な現象である。

結局、「(것)같다」の主な意味特性は「類似性」または「同一性」であるが、このような「類似性」は推量の本質的特性でもある。従って、「類似性」を主な意味特性とする「같다」が事態間の類似性を本質とする推量の意味を獲得することになるのは自然な意味派生の現象であると思われる。本論文は後述する「것같다」の多様な推量用法において、このような

「같다」の原型的な語彙性意味の残存を確認することができると考える。

そこで、本論文は「짓같다」の推量意味が「같다」の本来の語彙的意味から派生され、このような語彙的意味がこの形式の多様な推量用法に反映されていると捉える。

以上を踏まえ、本論文は「짓같다」の本質的な推量意味を「同一性推量」と規定する。

「같다」と関わる内容を整理すると、次の通りである。

一つ目は、「같다」の語彙的意味特性は「同一性」と「類似性」である。

二つ目は、「같다」は数学の等式に見られる「同一性」から部分的な「同一性」まで、そのスケール(程度)に多様な違いが存在する。

三つ目は、「같다」または「同一だ」の判断は文脈的状况や話し手の主観的認識などの語用論的条件によって、非常に幅広いスケールの違いが存在する流動性を見せる。

四つ目は、「같다」の実際の内容は前述したように、以下の二つに表れる。

①数学的同一性 ②類似性

五つ目は、「짓같다」は「같다」の類似性から二つの事態間の類似性を本質とする推量の意味が派生した。また、形式自体の構成要素である「같다」の語彙性原型意味は多様な推量用法に残存している。

5.3.2.3. 「짓같다」の推量用法

前述した通り、「짓같다」は推量判断に関わる多様な素性において制約を受けない点特徴的である。韓国語の小説などの文学作品から抽出した用例を分析した結果、「짓같다」は本質的には発話時以外の認識を表せるという点で疑似推量モダリティ形式の属性を持つ。

また、推量意味及び用法と関連する「判断根拠の性格」「様態性機能」「事態成立に対する確信度」「仮想世界の認識」「事態の捉え方」などのような推量判断に関わる多様な談話語用論的特性において、使用上の制約を受けないことが確認できた。すなわち、韓国語の推量形式の中で最も使用範囲が広い広域の推量形式であるという点が確認できた。

「짓같다」の上記のような特性のため、本論文の考察対象を含め、全ての推量形式と置き換えができる。以下では上記した推量意味と関わる「짓같다」の推量用法上の特性を簡単に検討する。

①推量根拠の範囲

基本的に推量根拠の範囲において、「짓같다」は制約を受けない。すなわち、以下の例文(51)～(57)のように、「짓같다」は直接・間接または内在的根拠・外在的根拠などの根拠特性において、全く制約を受けず、許容可能である。例えば、以下の例文(51)～(53)のように、外部世界や他人から得た根拠のない単なる話者の直感や印象などの内的根拠に基づいた主観的推量判断にも制約を受けず自然に用いられる。このような特性は両言語のその他の疑似推量形式と明確に区分される「짓같다」の推量特性である。

(51) 웬지 올해 나에게 안 좋은 일이 생길 것 같다.(geosgattda)

(何となく、今年僕に悪いことが起こる+geosgattda/?moyangaida。)

(52) 딱히 근거는 없지만, 타로도 내일 올 것 같다.(geosgattda)

(特に、根拠はないが、太郎も明日来る+geosgattda/?moyangaida。)

(53) 부모 덕에 큰 노력 없이 부자가 된 사람들을 떠올리며)

이 사람들은 전생에 착한 일을 많이 한 것 같다.(geosgattda)

(親のおかげで大きな努力なしで、金持ちになった人たちを思い出して)

この人たちは前世で善良な行動をたくさんした+geosgattda。

(54) (자기가 응원하는 야구팀의 선수들의 컨디션이 좋아 보여서)

- 오늘 시험은 이길 것 같다(geosgattda)
 (話し手自身が応援する野球チームの選手たちの調子が良さそうなのを見て)
 今日の試合は勝つ+geosgattda.
- (55) (대통령이 비행기를 내려오면서 흐뭇한 표정을 보인다)
 오늘 협의는 잘 이루어진 것 같다. (geosgattda)
 (大統領が飛行機を降りながら、満足そうな表情を見せる)
 今日の協議はうまく行った+geosgattda.
- (56) 일기예보에 의하면 내일은 비가 올 것 같다(geosgattda)
 天気 予報によると、明日は雨が降る+geosgattda.
- (57) 차갑고 신선한 공기가 피부에 닿는 것으로 보아, 아직 이른 아침인 것 같다.
 (冷え冷えとして、新鮮な空気の肌触りからして、まだ早朝である+geosgattda.)

② 仮想世界に基づいた推量

「것 같다」の用例を分析すると、以下の例文(58)～(59)ように、反事実仮想に基づいた認識表現に用いられる場合も少なくなかった。反事実仮定というのは現実と異なるある状況、つまり、非現実的状況を仮定し、そのような仮想世界で発生可能なある事態を話し手が言及する場合に用いられる。このような用法は「だろう」や「을 것이」などの両言語の真正推量形式に見られる典型的な用法であるが、両言語の疑似推量形式の中で、「것 같다」は許容可能である。これは前述した「同一性推量」という「것 같다」の推量意味と深く関わっている。

- (58) 만약 그가 만류했던 보도가 맞다면, 그리고 그게 사실이라면 그 역시 이제 좀 쉬
 어갈 때가 된 것 같다(geosgattda) (경성애사)
 (もし、彼が 引き止めたという報道が正しければ、そしてそれが本当なら、彼も今
 はちょっと休んで行く時が来た+geosgattda.)
- (59) 만약 그가 없었다면, 이 계획은 실패했을 것 같다(geosgattda).
 (もし彼がいなかったら、この計画は失敗していた+geosgattda.)

③ 目前の事態に対する様態性用法

「것 같다」が使用されている多くの例文を分析すると、以下の例文(60)のように、目前の対象に対する外見や印象を述べる場合に用いられる場合も少なくない。

- (60) (오랜만에 만나는 친구의 안색을 살피면서)
 너, 상당히 피곤한 것 같다(geosgattda).
 (久しぶりに会った友人の顔色を窺いながら)
 お前、相当、疲れている+geosgattda.)

④ 話し手自身の感覚自体の描写

「것 같다」は以下の例文(61)～(62)のように、発話時に話し手自身が体験した感覚自体を描写する場合にも用いられることができる。このような場合はほぼ推量の余地がないと言える。すなわち、以下の例文は話し手が「ようだ」を用いて、当該現象を表しているため、不確かさを本質とする推量の余地が全くないとは限らないが、発話時にある事物について、話し手が知覚した内容をそのまま表現または描写することに焦点が置かれている場合である。

- (61) (국물의 간을 보면서) 맛이 많이 단 것 같다(geosgattda)
 (스ूप의味見をしながら) 少し、味が甘すぎる+geosgattda. (眞実)
- (62) 나이 탓인가, 요즘 몸이 쭈시는 게, 아무래도 나 요즘 피곤한 것 같다(geosgattda).
 (年のせいかな。最近、どうやら、最近疲れている+geosgattda.)

⑤推量副詞との共起関係

従来から推量モダリティ形式の意味を分析するのに適用されてきた叙法副詞との共起関係においても、基本的に「것같다」は制限なく共起可能である中立的特性を見せる。これは上記した推量判断に関わる多様な語用論的特性において、制約を受けない点とも関連性がある。

例えば、「것같다」は以下の例文のように、韓国語研究において典型的な推量的副詞と位置づけられてきた「아마(たぶん)」「틀림없이(きっと)」や張(2004)で「証拠性判断副詞」と規定されてきた「どうやら」「どうも」に類似する韓国語の「아무래도」「왠지」などの副詞との共起において、制約を受けない。例えば、以下の例文(63a)のように、「것같다」は日本語の推量的副詞「たぶん」に類似する「아마」や張(2004)で「証拠性判断副詞」と規定されてきた「どうやら」「どうも」に類似する振る舞いをみせる「아무래도」「왠지」などの副詞との共起関係においても、制約を受けない。

以下の例文(63)～(65)からも確認できるように、基本的に、「것같다」は推量副詞や証拠性判断副詞との共起関係において制約を受けない。

- (63) (지방 사투리로 말하고 있는 사람들중에 한 사람만 표준어를 쓰는 사람을 보고)
 a. 아마, 저 사람은 지방 사람이 아닐 것같다. (geosgattda)
 (地元の方言で話す人たちの中に一人だけ標準語の人を見つけて)
たぶん、あの人は地元の人ではない+geosgattda.
- (63) b. (지방 사투리로 말하고 있는 사람들중에 한 사람만 표준어를 쓰는 사람을 보고)
아무래도/왠지, 저 사람은 지방 사람은 아닌 것같다. (geosgattda)
 (地元の方言で話す人たちの中に一人だけ標準語の人を見つけて)
どうやら/どうも、あの人は地元の人ではない+geosgattda
- (64) a. (黒く曇った空を見上げながら)
틀림없이 내일 비가 올 것같다 (geosgattda)
きっと、明日は雨が降る+geosgattda
- (64) b. (먹구름긴 하늘을 올려다 보며)
아무래도/왠지 내일 비가 올 것같다. (geosgattda)
 (黒く曇った空を見上げながら)
どうやら/どうも、明日、雨が降る+geosgattda
- (65) a. 사람들이 젖은 우산을 들고 지하도를 걷고 있다.
아무래도/왠지 밖은 비가 오고 있는 것같다 (geosgattda)
 (人々が濡れた傘を持って地下道を歩いている。)
どうやら外は雨が降っている+geosgattda.
- (65) b. (사람들이 젖은 우산을 들고 지하도를 걷고 있다.)
아마 밖에는 비가 오고 있는 것같다 (geosgattda)
 (人々が濡れた傘を持って地下道を歩いている。
たぶん、外は雨が降っている+geosgattda.)

以上のように、「것같다」は多様な推量用法において制約を受けない点から両言語の疑似推量形式の用法をすべて包括していることが確認できた。本論文は推量判断に関わる多様な用法において、全く制約を受けない理由を前述した「것같다」の推量意味である「同一性推量」と深く関わっていると考ええる。すなわち、推量の「것같다」は以下の例文(66)からも分かるように、二つの対象や事態が完全に同じであることを意味するのではなく、二つの対象や事態が「類似する」「似ている」ということを意味する。以下の例文(66)はこのような事実を証明する。

- (66) 저쪽에서 이리로 걸어 오고 있는 사람, 하나코인 것같다(geosgattda).
(あそこからこっちに歩いてきている人、花子のようだ。)

以上のような背景で、「것같다」が 推量用法上において、ほぼ制約を受けないと言う現象はこの形式の構成要素「같다」の語彙的原型意味の残存と深く関わっていると思われる。

5.3.3. 「모양이다」の推量意味と用法

5.3.3.1. 「모양이다」の推量意味

今までの韓国語研究において、「(-는/은/을) 모양이다(moyangida)」の推量モダリティ体系の中での位置づけについては検討されていない。ただ、既述した日韓対照の先行研究において、「らしい」と類似する振る舞いを見せる推量形式として規定されてきただけで、未だにこの形式の文法的性格についてはあまり述べられていない。

「-는/은/을 모양이다(moyangida)」を推量モダリティ形式として位置づけるためには、上記のような問題を検討する必要がある。

本論文では「(-는/은/을) 모양이다(moyangida)」の文法的性格を「推量モダリティの補助名詞」として規定する。「(-는/은/을) 모양이다(moyangida)」は連体形語尾「-는/은/을」＋実質名詞「모양」＋繫辞「이다」の三つの形態素の結合によって構成された複合形式である。「모양(이다)」は大きく以下のような二つの意味を表す。一つは、この形式の構成要素「모양」の語彙意味で使用される自立性のある実質名詞であり、もう一つは、「모양」の意味が薄くなり、その他の形式と共に結合し、推量の意味を表す「形式名詞」としての「模様」である。次の例文を見られたい。

- (67) (그림을 보면서) 개와 고양이가 싸우는 모양이다(moyangida).
(絵を見ながら) 犬と猫が喧嘩する[様子だ]

- (68) a. 이 그림은 개와 고양이가 싸우는 모양(moyang)을 그린 것이다.
(この絵は猫と犬が喧嘩している様子を描いたものである。)

- (68) b. 이 그림은 개와 고양이가 싸우는 것으로 추측된다.
(この絵は犬と猫が喧嘩していると推測される。)

上の例文(67)は(68a)(68b)のような二つの意味を持っている文である。一つは、(68a)のように、「모양이다」が完全な実質名詞として、犬と猫が喧嘩している「様子」を述べるものであり、この場合は推量意味が表れていない。もう一つは、(68b)のように、本来の意味がなくなった形式名詞として機能する「모양(이다)」である。(68b)はこのような形式名詞が連体形語尾「-는/은/을」と繫辞「이다」と結合して、推量意味を表す「모양이다」が派生する過程を示すものである。「모양이다」の推量意味が本来の原型意味「모양」から派生されたと言える理由は「모양」に含意されている二つの対象や事物の間に見られる「外見的類似性」という意味特性が推量モダリティとして機能する多くの「모양이다」の用例にも反映されているからである。すなわち、「模様」が持っている類似性が推量モダリティとして機能する「모양이다」への意味拡張を見せる。上記の例文を通し、三つの形態素の複合形式として推量意味を表せる文法化の背景を把握することができる。上の例文(67)を見ると、「模様」が実質名詞として用いられた場合でも、二つの事物に対する「外見的類似性」の意味が含意されている。このような「外見的類似性」という意味が前面に出る場合、「모양이다」の推量意味が表れる。すなわち、例文(67)において、「모양(模様)」の語彙意味が前面化されると実質名詞の意味になるのに対し、二つの事物の外見上の類似性意味が前面に出されると、推量の意味が表れる。上の例文(67)のような重義性が存在する場合、どっちの意

味に解釈されるかは話し手または聞き手の場面解釈や焦点付与の違いによって決まる。
「모양(模様)」の意味をより明確に説明するために、もう一つの例文を加えて説明する。

- (69) 저 남자는 여자 모양(moyang)을 하고 있다.
(あの男は女の模様をしている。)

上の例文(69)は「男子の様子＝女子の様子」という等式を想定することができるようであるが、実際には上の例文において、「女子の様子」は「外見的に女子と似ている」または「女子と類似する」という模様を意味する。すなわち、この場合に「모양(模様)」は二つの対象の間に外見的類似性が前提とされている。本論文はこのような類似性が「모양이다」の推量意味に反映されてきたと把握する。このような説明が可能である理由は推量というものが二つの事態間の類似性に基づいているからである。例えば、「타로가 우는 모양이다(太郎が泣いている様子だ)」といった場合、これは現在、太郎の顔の様子と人々が泣いている場合の一般的な様子の間に類似性が前提とされている。従って、本論文は「모양이다」の場合、語彙的には推量意味が読み取れないが、「모양이다」の原型的意味から推量意味が派生してきたと捉えるのは可能であると思われる。

また、「모양이다」の実質名詞としての語彙的意味と推量意味は客観的に区別することができる。例えば、特定の推量副詞との共起可否の現象はこの形式の推量意味を確認する客観的な手がかりになる。例えば、前述した韓国語の推量副詞「아마(ama)」との共起可否によって、「모양」の推量と非推量用法を区分することができる。例えば、以下の例文(70)のように、「아마」を介在させて見ると、推量の意味として用いられた(70a)は共起可能であるが、(70b)のように、「모양」が完全な実質名詞として機能する場合は、推量副詞「아마」とは共起不可能である。

- (70) a. (그림을보면서) 아마 개와 고양이가 싸우는 모양이다(moyangida).
(絵を見ながら) たぶん、犬と猫が喧嘩する+moyangida.
(70) b. (그림을 보면서) 이 그림은 아마 개와 고양이가 싸우는 *모양이다(moyangida).
(絵を見ながら) この絵はたぶん、犬と猫が喧嘩している+moyangida.

5.3.3.2. 「모양이다」の文法的性格

これまでの韓国語研究では「모양이다」の文法的性格、つまり、推量モダリティとしての「모양이다」に対する具体的な論議はあまりなされていない。実質名詞「모양」＋繫辞「이다」の結合形式として捉えただけで、「모양이다」の文法的性格に対する論議は概ね看過されてきた。前述したように、これまでの韓国語の叙法研究が文法範疇という徹底的な形式優先の研究に集中してきたため、複合形式としての推量意味を担う「것 같다」「모양이다」などの補助用言形式の研究は韓国語の文法または叙法研究であまり関心の対象にならなかった。

ところが、本論文では「모양이다」が複合形式であっても、文末に位置する場合、推量というモダリティの意味を担っている点を重視し、「모양이다」を韓国語の推量モダリティ体系の中に位置づけて論議を進める。そうすると、推量形式「모양이다」の文法的性格をどのように捉えるかについて考える必要がある。実質名詞「모양(模様)」は文の述語として機能する。すなわち、「A는B이다(AはBである)」の形である名詞文の述語になる。しかし、「모양이다」が推量モダリティという文法的機能を表す場合には述語として機能しない。よって、「모양이다(moyangida)」を推量モダリティ形式として捉えると、この形式に対する文法性、すなわち、文の構成要素としての成分を規定しなければならない。従来の対照研究で、「모양이다」に類似する形式として規定されてきた日本語の「らしい」は推量助動詞として捉えられている。しかし、韓国語の「모양이다」は上記したように、推量モダリティとして機能

する場合であっても、「意味範疇としての推量」にだけ注目し、文法範疇としての推量形式の問題はほとんど論じられていない。次の例文を見られたい。

(71) 비가 오는 모양이다. (moyangida).
(雨が降る+moyangida。)

上の例文(71)において、主語は「雨」であり、述語は「오는(降る)」である。構造的には「비가 오는(雨が降る)」は「모양(模様)」を修飾する連体節である。そうすると、「모양이다」がこの文の述語になると把握すべきだが、そうすると、この構文には述語だけが存在する主語のない文として解釈される。さらに、「모양이다」をこの文の述語として捉える場合、もう一つの問題が生じる。すなわち、上の例文(71)において、推量という文法的機能を持つ「모양이다」が単独では述語になれないという点である。文の基本的な構造を考えると、述語が文の末端に位置するのが韓国語の特性であるが、推量の文法的機能を持つ形式が述語になれない。このような諸現象を考慮すると、「모양이다」は先行する述語を補助する補助用言の一つとして捉えるのが妥当である。ただ、本論文で「補助名詞」という用語を用いたのは、この形式が既存の補助動詞や補助形容詞にはならないからである。韓国語において、文の述語になれる要素は基本的に「動詞」「形容詞」「名詞+だ(繫辞)」の三つの類型が存在するという点を考慮すると、補助用言も「補助動詞」「補助形容詞」「補助名詞」に類型化した方が妥当であると思われる。

以上の論議を踏まえ、本論文は「모양이다」の文法的性格を「推量モダリティという文法的機能を持っている補助名詞」として規定する。この形式に対する以上の論議を整理すると概ね以下のである。

- 一つ目は、「모양이다」は推量モダリティという文法的機能を担っている。
- 二つ目は、推量の「모양이다」は単独で文の述語にならない。
- 三つ目は、推量の機能を担うためには、連体形語尾が先行しなければならない。
- 四つ目は、推量モダリティという文法形式として規定できるが、構成要素「模様」の原型意味は残存している。

5.3.3.3. 「모양이다」の原型的意味と推量用法の関連性

本論文では「모양이다」の推量特性について、「모양이다」の構成要素である実質名詞「模様」が持っている本来の原型的意味、すなわち、「視覚を通して事物や事態を知覚する」という「모양(模様)」の語彙的意味が推量モダリティ形式として機能する「모양이다」にも反映されていると捉える。前述した通り、連体形語尾の前接を必須条件とする「모양이다」が推量の意味を表す多くの用例を分析すると、実質名詞「모양」の本来の意味、すなわち、原型意味としての「모양」の意味が残存していると捉えられる現象が多く見られる。言い換えれば、実質名詞から推量モダリティ形式として文法形式化しているが、依然として、「事物の様子や外見を表す」という名詞「모양」の意味が部分的に残存して、この形式の推量意味や用法に反映されていると把握できる場合が少なくない。「모양」の意味が表れている現象は前述した「ようだ」の「様」が実質名詞「様」に根を置いて推量助動詞として文法化され、このような原型的意味が推量用法に残存している背景と類似性がある。

- (72) a. 이 호랑이는 고양이 모양이다(moyangida).
(この虎は猫の模様である。)
- (72) b. 이 호랑이는 자는 모양이다(moyangida).
(この虎は寝ている+moyangida。)

例えば、上の例文(72a)の実質名詞「모양(模様)」は完全な自立名詞であり、本来の語彙意味で用いられているが、例文(72b)では推量モダリティとして機能している。実質名詞「模様」には外見的類似性が前提とされるが、このような捉え方は(72b)にも適用可能である。すなわち、現場の「虎の模様」と「寝ている様子」の間に外見上の類似性が存在する。このような外見上の「類似性」は「模様」本来の語彙的意味と共に「모양이다」が推量用法として用いられた多くの例文に反映されていることが確認できる。例えば、以下の例文のように、「모양이다」が推量用法として用いられた多くの例文を分析すると、「模様」の原型的意味が反映されている場合が多いことが確認できる。

(73) (오랜만에 만나는 친구의 피곤한 듯한 표정을 보며)
너, 웬지 피곤한 모양이다. (moyangida)
(久しぶりに会う友人の元気がなさそうな表情を窺って)
お前、どうも疲れている+moyangida.

上の例文(73)に用いられた「모양이다」は「友達の表情」が「疲れている様子」を表しているという様態性意味が前面に表れていると把握できる。

このように、「모양이다」の推量特性と規定した「外見性推量」とこの形式の原型的意味である「모양(様子)」が密接に関わっていることが確認できる。

5.3.3.4. 「모양이다」の推量用法

前述した通り、「모양이다」は基本的に疑似推量形式であり、主な推量用法上の特性はこの形式に実質名詞「모양」の意味が残存している点である。「모양이다」が推量用法として用いられた多くの例文を観察すると、名詞「模様」の意味が反映されていると把握できる例文が多い。これは実質名詞「모양」から推量意味が派生する過程の中で、本来の語彙的意味が弱化されるが、元来の語彙的意味の一部が残存していることを意味する。

このような現象は文法化のメカニズムと関わっているものである。例えば、Bybee and Pagliuca(1985:74)では文法化のメカニズムの中で、以下の「保持化(persistence)」という特性を述べている。

保持化(persistence)とはある形式が語彙的機能から文法的機能を担うようになる際、その文法的機能と矛盾しない限りにおいて、元来語彙的意味の痕跡が残存し、その形式の分布にある種の文法的制約を課すものである」と言及した。

すなわち、「모양이다」が推量用法として用いられた多くの例文を観察すると、話者が捉えた事態や現場の様子や外見などのような現場の知覚情報に基づく判断に用いられる場合が多い。そこで、本論文は韓国語の小説などの文学作品から推量用法として用いられた「모양이다」の例文 172 個を収集し、その推量用法上の特性を分析した。分析の結果、「모양이다」は話者が捉えた事態や現場の様子や外見などのような現場の知覚情報に基づく判断に用いられる場合が多いことが確認できた。また、発話時に話者が目前で入手した現場の知覚情報に基づいた推量判断と様態性用法に最も多く用いられることが確認できた。「모양이다」が用いられた推量用法の類型は以下の通りである。

A. 話者が現実世界で入手した外在的根拠に基づいた推量- 40 例

①発話時に捉えた事物や事態の外見や様子を述べる様態性推量

以下の例(74)～(75)は話し手が現場で捉えた事物や事態の外見や様子を述べることに焦点が置かれている様態性推量である。「모양이다」の構成要素である実質名詞「모양(模様)」という語彙的意味が最も強く反映されている例文である。例えば、以下の例文は根拠に基づ

いた推量判断に中心があるのではなく、知人の顔色が疲れている様子や外見を呈している。

(74) (오래간만에 만난 친구의 얼굴을 보고) 너 아무래도 피곤한 모양이다(moyangida).
(久しぶりに会った友人の顔色を窺って) お前、どうも疲れている+moyangida。

(75) 키, 190쯤이군. 요즘 애들이라 해도 지나치게 커.
머리, 갈색으로 염색한 물이 거의 빠진 모양이다(moyangida). (美)
背は190ぐらいだな。最近の子だとしても、あまりにも高いな。頭、茶色に染めた
色がほとんど抜けた+moyangida。 (황)

上の例文(74)～(75)は 実質名詞「모양」の意味と推量の意味がすべて反映されている場合であり、推量モダリティ形式として機能する「모양이다」にも元来の語彙の意味が残存していることを示す。例えば、上の例文(74)は、久しぶりに会う友人の顔が「疲れている様子や外見を表している」という実質名詞「模様」の意味が推量用法に反映されていると把握することができる。このような類型の「모양이다」は172例中40例見つかった。

②話者が直接捉えた現場根拠に基づいた推量- 113 例

「모양이다」が使われた例文の中で、以下の例文(76)～(77)は使用上の傾向において最も多く見られる類型の推量である。上記した例文(74)～(75)ほど「模様」の様態性意味が強く表されていないが、上記した様態中心の用法と関連性がある。すなわち、視覚を通して事物や事態を知覚するという「모양」の語彙の意味が以下のような用法にも反映されていると把握できるからである。話し手が発話時に捉えた現場の知覚情報に基づいた判断に用いられた例は 172 例の中で最も多い 113 例が見つかった。

(76) 윤씨는 무덤 옆의 솔밭과 보리밭 어름을 손가락질하고 있었다. 뻐꾹새가 울었고,
질은 꽃 향내가 날아왔다. 근처 어디에 아카시아 숲이 있는 모양이다(moyangida).
(경성)

ユンさんは、墓の隣の松原と麦畑の氷を指差していた。カッコウが泣いて、濃い花のにおいが漂ってきた。近くのどこかにアカシアの森がある+moyangida。

(77) 최씨는 일변 짜증을 내었으나 아이에게 무슨 죄가 있누 하고 뉘우쳤다.
야학종이 또 울린다. 벌써 한 시간 수업이 지난 모양이다(moyangida). (당진)
崔さんは一変し、かんしゃくを起こしたが、子供に何の罪があるのかと悔い改めた。
夜学の鐘がまた鳴る。もう一時間の授業が過ぎた+moyangida。

上記の用法は「모양이다」の推量判断が発話現場で話し手が捉えた知覚情報と深く関わっていることを示す現象であり、原型的意味である「模様」と関連があると思われる。すなわち、このような用法は上記した様態中心から現場の知覚情報に基づいた推量に拡大したものとして理解できる。

B. 間接的根拠に基いた推量-11 例

「모양이다」が使われた 172 例の中で 11 例は典型的な間接的情報源に基づいた判断を表す伝聞情報に基づいた判断に用いられた以下のような類型の例文であった。このような類型の例文はすべて事態の非現場性が前提とされる。現段階では現場性を欠く間接的根拠に「모양이다」が用いられる例文が少ない理由はこの形式の基本的推量意味である「外見性推量」と関わっているからと考えられる。前述した「모양(模様)」や「様態」などは話し手が現場で知覚した対象になりやすいのに対し、話し手が現場で経験していない間接的情報は相対的に現場性が前提とされない場合が多いからである。

- (78) 과학적인 계산에 의하면 한 사람이 하루 흘리는 땀의 양은 1리터 정도이며 용광로 근처에서 일하는 사람 일지라도 10리터를 넘지 않는 모양이다(moyangida). (차한잔)
(科学的計算によると、人が一日で流す汗の量は1リットル程度であり、溶鉱炉の近くで働く人でも10リットルを超えない+moyangida。)
- (79) 전문가들에 의하면 일본을 제외한 아시아계와 중동계 이외에는 일반적으로 남아보다는 여아를 더 선호하는 모양이다. (moyangida) (고압선)
(専門家によると、日本を除くアジア系と中東系以外は一般的に男の子より女の子をもっと好む+moyangida。)

C. 話者の内的根拠に基づいた話者自身を対象とする推量 - 8 例

「모양이다」が用いられた推量構文の中では、実際の使用上の傾向はないが、以下の例文(80)～(81)のように、話し手の内的根拠に基づいた主観的判断に用いられる場合や話し手自身の感情に対する推量の場合も見られた。「外見性推量」を本質とする「모양이다」は基本的に外見や様子という可視的・視覚的認識の対象を意味するが、このような実体的現象が抽象的な現象に意味や用法上の拡張を見せるのは言語普遍的な現象である。以下の例文(80)～(81)はこのような「모양이다」の特性を見せるものであると考えられる。

- (80) (부모 덕에 큰 노력 없이 부자가 된 사람들을 떠올리며)
이 사람들은 전생에 뭔가 착한 일을 많이 한 모양이야(moyangida). (창)
(親のおかげで大きな努力なしで、金持ちになった人たちを思い出して)
この人たちは前世で何か善良な行動をたくさんした+moyangida。
- (81) 이제야 나는 자신의 불면과 두통과 헛구역질을 이해할 것 같다. 바로 지금도 나는 그렇게 당신을 겪고 있는 모양이다(moyangida). 심장이 뛰고 호흡이 거칠어 지는 증세를, 나는 자각한다. (당진)
(やっと私は自分の不眠と頭痛と吐き気が理解できそうだ。まさに今も、私はそのようにあなたを経験している+moyangida。心臓が鳴り、呼吸が荒れる症状を私は自覚する。)

以上の用例分析から見ると、「모양이다」は主に「話し手が現場で入手した知覚情報に基づいた判断」と事物や事態に対する外見や様子を述べる「様態中心の推量」という二つの用法に多く使用される用法上の傾向が見られた。これは前述したような「모양(様子)」という構成要素の意味と「外見性推量」という「모양이다」の推量特性と深く関わっていることを示す現象であると思われる。

5.3.4. 「것 같다」「모양이다」の推量意味と用法上の違い

両形式は疑似推量形式という主な意味を共有しているが、前述した通り、推量用法上の特性において、両形式は根本的な相違点が見られる。それは両者の語彙の原型意味と関連していると思われる。本論文は「것 같다」「모양이다」の原型の意味の違いと実際の用法上の特性や傾向に基づいて、それぞれ「同一性推量」及び「外見性推量」と規定した。両形式はこのような推量の本質的意味の違いのため、「判断根拠の特性」「仮想世界に基づいた事態認識」「推量事態の属性」という語用論的特性において相違点が見られる。

①判断根拠の特性

前述した用例分析からも確認したように、「모양이다」は主に「話し手が発話時に現場で入手した知覚情報に基づいた推量」と事物や事態に対する外見や様子を述べる「様態中心の

推量」という二つの用法に多く用いられる傾向が見られた。そのため、以下の例文(82)～(83)のように、話し手の心中にある内在的根拠に基づいた主観的判断にはあまり用いられないのに対し、推量判断に関わる多様な談話語用論的特性において、ほぼ推量根拠上の制約を受けない「것 같다」は問題なく用いられる。以下の例文(82)～(83)のように、単なる話し手の内的根拠や直感に基づいた判断における両形式の許容度の違いは上記のような事実を裏付けると考えられる。

(82) (화자의 막연한 내적근거에 기초해서)

언젠가는 타로도 나의 마음을 이해해 줄 것 같다. (geosgattda)

*모양이다. (moyangida)

(話し手の漠然とした内的根拠に基いて)

いつかは太郎も私の気持ちを理解してくれる+geosgattda/*moyangida。)

(83) 새 엄마는 지극하였다. 엄마라고 하기에는 너무 나이가 많았다. 할머니라고 부르는 것이 맞을 것 같다 (geosgattda) / *모양이다. (moyangida)

(新しいお母さんはひどすぎだった。ママと呼ぶにはあまりにも年を取っていた。

おばあちゃんと呼ぶことが正しい+geosgattda/*moyangida。)

② 仮想世界に基づいた事態認識

「것 같다」は現実世界・仮想世界の認識において、基本的に制約を受けないのに対し、話者の仮想世界に基づいた判断の場合、「모양이다」は不自然である。例えば、以下の例文(84)～(85)は推量判断が話し手自身の仮想世界に基づいた事態認識であることを示す現象であるが、このような場合、「것 같다」は自然であるが、「모양이다」は不自然である。すなわち、「反事実仮想条件文における生起可否」は両形式を弁別する客観的基準になる。

反事実仮想条件文に「모양이다」が用いられない理由はこの形式が相対的に目前の可視的な様子や模様に基づいた判断により比重を置くためであると思われる。このような特性は

「모양이다」の推量意味である「外見性推量」と深く関わっていると思われる。

(84) 만약 선생님이 없었더라면, 나는 작가가 될 수 없었을 것 같다. / *모양이다.

geosgattda/*moyangida.

(もし先生がいなかったら、僕は作家になれなかった+geosgattda/moyangoda。)

(85) 만약, 이 이상 더 비가 온다면, 오늘의 소풍은 중지가 될 것 같다 / *모양이다.

(もし、これ以上雨が降ったら、今日の遠足は中止になる+geosgattda/*moyangida)

③ 推量事態の属性

前述した両形式の用例分析を通して確認した使用上の傾向からすると、基本的に「모양이다」は形式自体の構成要素「모양」の語彙性意味の残存のため、主に「様態性用法」や「現場の知覚情報に基づいた判断」に多く用いられる傾向が見られた。それに対し、「것 같다」は基本的に推量用法と関連し、使用上の制約を受けないことが分かった。すなわち、「것 같다」は推量事態の現場性・非現場性に制約を受けず、すべての言述状況に用いることができる点で弁別される。このような事実は「것 같다」と違って、前述した例文(84)～(85)における不適切さからも確認できるように、「모양이다」は相対的に実在的な根拠を要求する形式であることを示している。

5.3.5. 「것 같다」と「모양이다」の主観性程度の違い

本節では前述した両形式の間に見られる推量意味及び用法上の違いが両形式の主観性程度

の違いとどう関わっているのかについて考察する。前述した韓国語の先行研究でも見たように、ほとんどの研究が「根拠の性格」という一つの基準で両形式の推量意味を捉えてきた。従来の韓国語研究で「것 같다」が「모양이다」に比べて、主観性が高いという指摘はされてきたが、ほとんどの研究が「根拠の性格」という一つの基準で把握してきた。

本節では両形式の主観性程度を測るために、形式間の主観性程度と深く関わっている以下のような用法及び統語的特性に基づいて、両形式の主観性程度の違いについて述べる。表現形式間の主観性程度を測る基準については前の第3章でも言及したが、本節では両形式の主観性程度と関連する問題を検討する。

①話者の主観的印象を表す「感じ」「直感」の補文名詞節の生起可否

「것 같다」と「모양이다」は以下の例文(86a)～(86b)のように、話し手自身の主観的印象や直感を表す「感じ」「気」「直感」などを補文名詞とする補文節内に「것 같다」は生起できるのに対し、「모양이다」は不適切である。このような現象は事柄に対する話し手の主観介入の程度において、「것 같다」が「모양이다」より高いことを示すものであると思われる。

(86) a. 나는 내 자신이 아주 재미있는 사람이고, 재미있는 인생을 보내고 있는 것 같다 은 기분/느낌이 들었다. (僕は自分がとても面白い人間でとても面白い人生を送っている+geosgattda+気がした/geosgattda+感じがした。)

(86) b. 나는 내 자신이 아주 재미있는 사람이고, 재미있는 인생을 보내고 있는 *모양인 기분/*모양인 느낌이 들었다 (僕は自分がとても面白い人間でとても面白い人生を送っている+*moyangida+気がした/*moyangida+感じがした。)

②話し手の直感的な感じを表す語句「私の印象では」「私の直感では」との共起可否

「것 같다」と「모양이다」は以下の例文(87)～(88)のように、話し手自身の直感的な感じや印象を表す副詞句「私の印象では」「私の直感では」などとの共起可否において、許容度の違いが生じる。すなわち、「것 같다」はこのような直感的意味を表す副詞句と共起可能であるのに対し、「모양이다」は不適切である。

(87) 단순한 내 인상으로 저 회사 곧 망할 것 같다 (geosgattda) / *모양이다. (moyangida)
(単なる私の印象では、あの会社、もうすぐつぶれる+geosgattda/*moyangida)

(88) 나의 직감으로 저 회사 망할 것 같다 (geosgattda) / *모양이다. (moyangida)
(私の直感では、あの会社、潰れる+geosgattda/*moyangida。)

このような副詞句は事態の真偽に対する判断が、何らかの実在的根拠に基づいた判断ではなく、話し手の単なる直観や印象を意味する副詞句であるため、話し手の主観が反映されることを意味する。これは「것 같다」が「모양이다」より主観性の程度が高いことを示すものであると考えられる。

③話し手の思考内容の構成可否

この基準は「～と思う」の補文節内の生起可否という点と関連する。前述した通り、「～と思う」は話し手自身の主観的な思考を表す認知動詞であり、話し手の主観介入と関わりを持つと考えられる。宮崎(2002)は純粹に話し手の内的思考として文を述べることができるか否かということは「～と思う」による思考内容化が可能か否かというテストによって確認できると述べている。すなわち、「～と思う」は話者の主観的態度の反映を表す思考動詞であり、以下の例文(89)のように、韓国語の「것 같다」は「～と思う」の内容節に生起できるのに対し、「모양이다」は「～と思う」の補文節内に生起することができない。これは「모양이다」が発話時に話し手が現場で捉えた知覚情報に基づいた判断に用いられる傾向

が強いからであると思われる。このような基準からすると、「것 같다」が「모양이다」より話し手の主観性程度が高い形式と言える。

- (89) a. 이 편지를 받은 것은 11월경이었다. 나는 직감적으로 재미있을 것 같다고 생각해서 조금 더 고려해 보기로 했다. (geosgattda +go+sengakhada)
 (89) b. 이 편지를 받은 것은 11월경이었다. 나는 직감적으로 재미있을 *모양이라고 생각해서 조금 더 고려해 보기로 했다. (*moyangida+go+sengakhada)
 (この手紙をもらったのは11月頃だった。私は直感的におもしろい+geosgattda+と思
*moyangida+と思い、少し考えて見ることにした。) (若き数学者のアメリカ)

④判断根拠の明示性程度

判断根拠の明示性程度と関連しても、前述した通り、「것 같다」は根拠の制約を受けないため、外部世界から入手した実在的根拠だけではなく、話し手の心中にある内在的根拠や直感などによる判断にも問題なく用いられる。一方、「모양이다」は実在的根拠の依存度が高い形式であるため、「것 같다」より明示的な根拠を要求する。例えば、以下の例文(90)～(91)の場合は「まだ分からないが」「特に、根拠はないが」という語句の存在からも確認できるように、「것 같다」は話し手自身の直観に頼って判断を行っている。

- (90) (단지 막연한 자신의 소망을 말하는 것처럼)
 아직 잘 모르겠지만, 그 남자는 나를 소중하게 대해 줄 것 같다/*모양이다.
 (geosgattda)/(moyangida)
 (ただ漠然とした自分の願望を述べるかのように)
 (まだ、分からないけど、彼は私のことを大事にしてくれる+geosgattda/moyangida。)
 (91) 딱히, 근거는 없는데, 웬지 타로도 참석할 것 같다/*모양이다. (moyangida)
 (特に、根拠はないが、何となく、太郎も参加する+geosgattda/moyangida。)

このように、判断根拠の性格に制約を受けない「것 같다」は判断における話し手の主観が介入される余地が多いのに対し、上の例文(90)～(91)の不適合性からも分かるように、相対的に実体的かつ明示的な根拠を必要とする「모양이다」は判断において、話し手の主観が介入される余地が「것 같다」より縮小される。もう一つ、例文を検討する。

- (92) (친구가 손을 내밀면서 이 손안에 무엇이 들었겠냐고 묻는 말에)
 (직감적으로) 아무것도 들어 있지 않을 것 같다(geosgattda)/*모양이다(moyangida)
 (友人が手を差し出しながら、手の中に何が入っているかと聞いたところ)
 (直感的に)何も入っていない+geosgattda/*moyangida.

上の例文(92)のように、手の中に入っているものが何らかの明示的・実在的根拠のない単なる話し手の漠然とした根拠に基づいた判断をする際、「것 같다」は許容可能であるのに対し、「모양이다」は不自然である。すなわち、事態表現や判断において、「모양이다」の証拠依存度が「것 같다」より高いことを意味する。証拠依存度が高いほど、相対的に話し手の判断に対する主観介入の余地が少なくなる。なぜなら、証拠に依存するというのは外部世界に存在する客観的事態に依存するからである。それに対し、話し手自身の直感や印象などの心中の内在的根拠に依存するほど、判断に対する主観介入の余地が拡大される場合が多い。

5.4. 疑似推量形式の日韓対照

前述した個別形式の推量用法上の特性でも確認した通り、日本語の「ようだ」「らしい」とこれに対応する韓国語形式はすべて以下の例文(93)～(94)のように、発話時に捉えた顕在的根拠に基づいた推量に用いられるという点で類似性を見せる。例えば、以下の例(93)は「パソコンの電源が入らないことを根拠とし、「壊れている可能性」を推量判断している。

- また、以下の例文(95)～(96)のように、「ようだ」「らしい」は主に根拠の直接・間接性や事態に対する主体的または客体的な叙述態度(例文(97)と(98))という使用上の側面において違いがあるという見解が一般的に認定されてきた。既述した従来の対照研究(羅(1996)、金(1999)、尹(2003)など)は基本的に日本語の「ようだ」「らしい」に類似する韓国語形式を選定し、日本語と同じ意味的範疇を適用させて両言語の対応関係を捉えてきた。例えば、従来の対照研究では上記のような基準を適用させて、「것 같다」「듯하다」は「ようだ」に対応するのに対し、「가보다」「모양이다」は「らしい」に最も対応する形式⁵⁸として捉えてきた。

- ⁵⁸従来の対照研究で「ようだ」「らしい」に対応する韓国語形式として提示されてきた「듯하다(deushada)」と「가보다(gaboda)」は本論文の考察対象である「것 같다」「모양이다」とほぼ類似する意味及び用法上の特性を見せる形式である。ただ、本論文では使用上の傾向や用法上の類似性を反映し、「ようだ」「らしい」に最も類似する振る舞いを見せる「것 같다」「모양이다」に考察対象を限定し、両形式は論議の対象から除外した。「것 같다」「모양이다」と「듯하다」「가보다」の推量意味及び用法上の違いについては、今後の課題とする。

- (97) a. 私が思うには、あの人が犯人のようだ。 金(1999)
 (97) b. 내가 생각하기에는, 저 사람이 범인인 것같다/듯하다.
 (98) a. ?私が思うには、あの人が犯人らしい。 金(1999)
 (98) b. ?내가 생각하기에는, 저 사람이 범인인 모양이다/가보다.

しかし、推量用法と関わる多くの事例を観察すると、両言語の対応関係は常にある特定の一つの基準によって、一律的な対応関係を見せるとは言えない。例えば、以下の例文(99)～(107)のように、個別形式が使われる語用論的状况によって両言語の間に推量用法上のズレが生じる場合も多い。以下の現象はすべて同じ状況の推量文における個別形式の推量意味の違いが反映されているものであり、従来の基準では説明できない現象である。すなわち、以下の例文(99)～(107)は「ようだ」「らしい」と対応する韓国語形式の対応関係が従来の対照研究で述べたような「判断根拠の直・間接性」または「主体的・客体的叙述態度」という一つの基準では体系的に捉えることができない点を示している。

- (99) a. (話し手が久しぶりに会った知人の顔色を窺って)
 お前、どうも疲れている?らしい.
 (99) b. 너, 아무래도 피곤한 모양이다. (moyangida)
 (100) a. A: 어제 시험은 내가 졌지만, 오늘은 다를거야
 B: (상대의 기합이 들어간 모양을 보면서) 정말로 꽤나, 마음을 단단히 하고 온 모양인데 (moyangida), 그래도 네 실력으로론 무리야.
 (100) b. A: 昨日の試合は俺が負けたけど、今日は違うよ。
 B: (相手の気合入っている様子を見て)
 相当、覚悟をしてきた?らしいな/ようだな、でも、お前の実力では無理だよ。
 (101) a. (散歩をしていた話者が、道端の石につまずいて、足に痛みを感じて)
 あ、痛い、足を挫いた?らしい/ようだ.
 (101) b. (산책을 하고 있던 화자가 갑자기, 돌부리에 걸려 넘어지면서)
 아, 아파, 다리 접지른 모양이야 (moyangida) / 것같다 (geosgattda)
 (102) a. 나 저 아이 싫어하는 모양이야 (moyangida) / 것같다. (geosgattda)
 별로 말을 걸고 싶지가 않아
 (102) b. 私、あの子、嫌い?らしいな。あまり声をかけたくないなあ。
 (103) a. (咳をしながら、疲れたようにしている太郎の様子を見て)
 太郎、風邪を引いたらしい.
 (103) b. 타로, 감기 걸린 모양이다 (moyangida).
 (104) a. 新聞情報によると、今回は証人喚問に応じるらしいが、僕はそう思わない。
 (104) b. ?신문정보에 의하면 이번엔 증인소환에 응할 모양이지만, 나는 그렇게 생각 안해.
 (moyangiciman)
 (105) a. 私の直感では、今年、何となく僕にいいことがある?ようだ.
 (105) b. 내 직감으론, 올해 웬지 나에게 좋은 일이 있을 것같다 (geosgattda).
 (106) a. 舞台に上がった曲ではない。しかし、その曲の完成度はコンサートだけでなく、一般的な舞台でもぴったり合う?ようだと思う。
 (106) b. 무대에 올라간 곡은 아니다. 하지만 그 곡의 완성도는 공연장뿐만 아니라 일반 무대에서도 딱 맞을 것같다고 생각한다. (geosgattda + と思う)
 (107) a. もし先生がいなかったら、僕は作家になれなかった*ようだ/*らしい.
 (107) b. 만약 선생님이 없었더라면, 나는 작가가 될 수 없었을 것같다/*모양이다.
 geosgattda/moyangida

本論文は上記したような個別形式及び両言語間の推量用法上のズレは基本的に「ようだ」

「らしい」と韓国語形式が担っている推量意味及び用法の違いと関わっていることを述べる。

また、両言語の疑似推量形式「ようだ」「らしい」と「것 같다」「모양이다」に見られる推量意味及び用法上の違いは両言語及び個別形式間の主観性程度と関わっている点を明らかにする。さらに、表現形式の主観性程度と関連して、日本語形式「ようだ」「らしい」より対応する韓国語形式「것 같다」「모양이다」の方が主観性程度が高いという点に言及する。

5.4.1. 日韓対照の先行研究と残された課題

前述した第2章の先行研究の検討でも述べたが、説明の便宜上、「ようだ」「らしい」と対応する韓国語形式に対する従来の対照研究の結果を再掲すると、以下の通りである。

表1 羅(1996)

言語 分類基準		日本語	韓国語
純粹判断型 ⁵⁹ の「推量」		「だろう」	「겠다」「을 것이다」
根拠依存判断型	直接的根拠	「ようだ」	「것 같다」「듯하다」
	間接的根拠	「らしい」	「모양이다」「가보다」

表2 金(1999)

言語 分類基準		日本語	韓国語
根拠非前提型		「だろう」	「겠지」「을 것이다」
根拠前提型	主体推量 ⁶⁰	「ようだ」	「것 같다」「듯하다」
	客体推量 ⁶¹	「らしい」	「가보다」「모양이다」

表3 尹(2003)

言語 分類基準	準拠推量形	
	内在準拠推量形	外在準拠推量形
日本語	「ようだ」	「らしい」
韓国語	「듯 하다」	「모양이다」「가보다」
	「것 같다」	
	中立準拠推量形	

前章でも述べた通り、従来の対照研究には以下のような残された課題が見られる。

①韓国語推量形式の意味及び用法上の特性に対する綿密な分析がないまま、日本語の枠組みを韓国語形式にそのまま適用した点である。すなわち、両言語を括る意味的なカテゴリーを設定することに大きな力を注いだため、両言語形式及び個別形式の間に見られる意味・用法上の異同に対する綿密な分析にはなっていない。

②上記した例文(99)～(107)からも確認した通り、両言語及び個別形式の間に見られる多様な推量用法上の差異を考慮せず、両言語の対応関係を皮相的に捉えた点は再考の余地がある。

⁵⁹ 羅(1996)は「だろう」を純粹判断型に属する推量形式に位置づけ、判断の根拠を特に文面上に表面化する意識がなく、単に話し手の想像世界による推量判断に用いる形式として捉えている。これは基本的に三宅(1995)の見解を受け入れたものである。

⁶⁰ 主体推量とは話し手が自分の判断及び判断が示す命題内容に対して主体的な叙述態度、すなわち、判断の持ち主としての態度をとる推量と金(1999)は定義づけている。

⁶¹ 客体推量とは、話し手が自分の判断及び判断が示す命題内容に対して客体的な叙述態度、すなわち、第三者的な態度をとる推量と定義づけている。

一つ目は、羅(1996)や金(1999)はすべて「것같다」は「ようだ」に最も対応する形式であるという点にだけ注目したため、「것같다」が推量用法において、「ようだ」「らしい」「모양이다」などのような疑似推量形式の用法をすべて包括している点は看過してきた。尹(2003)の場合、羅(1996)や金(1999)と違い、「것같다」がその他の形式の用法をすべて包括していると把握した点は妥当性が見られる。しかし、両言語形式の対応関係を「根拠の特性」という一つの基準で一律的に捉えた点は羅(1996)や金(1999)と同様である。さらに、「ようだ」と韓国語形式「것같다」の意味及び用法上の類似性を考慮せず、「ようだ」に対応する形式を「듯하다(deushada)」のみに限定した点も再考の余地がある。

二つ目は、「らしい」と「모양이다」を最も類似する対応関係を見せる形式である点にだけ注目し、両形式の間に見られる意味及び用法上の違いについては論じていない。これは従来の対照研究が看過してきた共通の問題である。

③従来の日韓対照研究では両言語の推量用法上のズレが生じる理由または背景については論じていない点も残された課題である。この問題は従来の対照研究や韓国語形式の研究において論じられていない。個々形式の意味または用法上の違いが生じる理由や背景は各々の形式の意味と用法上の特性と深く関わっている問題であり、このような問題は体系的な対照研究をするためにも、必ず究明する必要があるというのが本論文の基本的な立場である。

④日本語の推量助動詞に対応する韓国語形式「것같다」「모양이다」の文法的性格に対する考察がなかった点である。「推量」の意味的側面だけを考慮し、これらの形式の文法範疇及び文法的性格などの問題は論じていない。

5.4.2. 対訳文献における両言語形式の対応様相

本節では両言語の間に見られる異同に対する具体的な分析に入る前に、日韓対訳文献から収集した対象資料に両言語の疑似推量形式がどのような対応様相を見せているのかを検討する。この調査を行う理由は実際の言語資料に見られる両言語の対応様相を見ることによって、両言語の対応形式の設定において、客観的な妥当性を得ることができるためである。また、従来の対照研究においては、主に一対一または一対二のような単純な対応関係の存在を前提とするものが多く、主に少数の例文や直観に依存したものが多いためである。

そこで、本論文は対象資料に見られる両言語の対応様相を見ることによって、論議における実証性を確保しようとした。そこで、다락원(ダラグォン)から出版された日韓対訳文献から両言語形式の対応様相を調査してみた結果、概ね以下の表4のような結果が得られた。

表4 日韓疑似推量形式の対応様相

推量形式	「것같다」	「듯하다」	「모양이다」	「나/가보다」	合計
「ようだ」	53(60.2%)	18(20.4%)	16(18.1%)	1(1.1%)	88(100%)
「らしい」	32(39.1%)	11(13.4%)	37(45.1%)	2(2.4%)	82(100%)

表4からも確認できるように、基本的に「ようだ」は「것같다」に対応する例文が最も多かった。具体的に「ようだ」が「것같다」に対応する類型の例文は、以下の例文(108)のように、話し手が発話時に捉えた知覚情報に基づいた判断に用いられる場合が多かった。ただ、従来の対照研究の分析とは違って、「ようだ」が「것같다」ではなく、「모양이다」に対応する場合も16例見られた。「ようだ」が「모양이다」に対応する16例の中で、12例は以下の例(111)のように他人から聞いた間接的情報に基づいた判断に用いられた場合であった。また、残りの4例は以下の例(112)のように、話し手が発話時に直接入手した情報に基づいた推定を表す場合であった。

一方、「らしい」は「모양이다」と対応する場合は最も多く、37例見つかった。対象資料

の分析から見ると、「らしい」が「모양이다」と対応する場合は主に以下の例(111a)～(111b)のような間接的情報に基づいた判断に用いられた場合が30例で最も多かったが、以下の例(113)のように、話し手が現場で捉えた知覚情報に基づいた推定を表す場合も7例見つかった。その他に、既存の対照研究の指摘とは違って、「らしい」が「것 같다」に対応する場合も32例見つかった。「らしい」が「것 같다」に対応するほとんどの場合は話し手が捉えた直接根拠に基づいた推量を表す場合であった。また、「らしい」が「모양이다」と常に一律的対応関係を見せるのではなく、「것 같다」と「모양이다」両方にすべて対応する例文も多かった。特に、上記の資料分析から見ると、尹(2003)で「ようだ」に対応する韓国語形式を「듯하다」だけに限定した点は再考の余地がある。

また、この対応様相の結果から分かる主な特性は、「것 같다」が「ようだ」だけではなく、多くの場合、「らしい」の代わりに用いることもできるという点である。言い換えれば、用法上の側面において、「것 같다」が「ようだ」と「らしい」両形式の領域を包括している点が確認できた。

- (108) a. ぴしゃぴしゃという音から判断すれば、どうも両手を揉みほいでいるようだ。
 (108) b. 찰싹찰싹 하는 소리로 판단하면, 아무래도 양손을 마구 주무르고 있는 것 같다. (geosgattda)
 (109) a. このローテーションは20年経った今でもきちんと守られているようだ。
 (109) b. 이 로테이션은 20년이 지난 지금도 어김없이 지켜지고 있는 모양이다. (moyangida)
 (110) a. サイレンの音がだんだん大きくなっているところからすると、その数も増えているようだ。
 (110) b. 사이렌 소리가 차츰 커지고 있는 걸 보면, 그 숫자도 점점 증가하는 모양이다 (moyangida).
 (111) a. 昼休みに清掃会社のほうへ電話を入れてみると、遊佐はなにか事情があつて休みをとったらしい。
 (111) b. 점심시간에 청소회사 쪽에 전화를 걸어보니 유사는 뭔가 사정이 있어 휴가를 낸 모양이다. (moyangida)
 (112) a. ケーキの跡が残っているところをみると、一応、夢ではないらしい。
 (112) b. 케이크의 흔적이 남아 있는 걸로 보면, 일단 꿈은 아닌 모양이다. (moyangida)
 (113) a. 吉村は上京するたびに理枝に会った。「お小遣い、あげるよ」「うん、ありがとう」いつもなにほどかの金銭を与えたが、理枝はなんの屈託もなく受け取る。ほとんど抵抗感もないらしい。
 (113) b. 요시무라는 상경할 때마다 리에와 만났다. “용돈 줄게!” “응, 고마워요”. 언제나 얼마간의 돈을 쥐어 주었으나 리에는 아무런 거리낌도 없이 받는다. 저항감도 거의 없는 것 같다. (geosgattda)

上記のような対象資料の対応様相から確認できたのは両言語形式間の対応様相の傾向は見られたが、従来の対照研究で述べた一律的な対応関係は見せないことが確認できた。つまり、上記した実例(108)～(113)からも分かるように、従来の対照研究で述べたように「ようだ」と「らしい」が常に「것 같다」と「모양이다」に対応しているのではなく、談話語用論的環境によって、形式間に交差対応する場合も多く見られた。また、直接・間接根拠のような「根拠性格」の違いだけでは両言語の対応関係は体系的に捉えることができない点も確認できたと思われる。

5.4.3. 本論文の立場

本節では両言語の疑似推量形式「ようだ」「らしい」と「것같다」「모양이다」の意味及び用法の対照に対する本論文の立場を述べる。主な内容は以下の①～⑤の通りである。

①従来、両言語形式を括る主な基準として受容されてきた「判断根拠」や「叙述態度」などの単一基準だけでは体系的な対照分析及び両言語の弁別特性を究明することができない。

②両言語の推量形式は推量判断に関わる各々の語用論的特性において個別形式及び両言語の間に多様な違いが見られる。例えば、「判断根拠の範囲」「様態性有無」「現場性条件」「仮想世界に基づいた推量可否」などのような多様な用法において、少なからず相違点が見られる点を述べる。

③両言語の個別形式の推量意味及び用法上の違いはこれらの形式が推量モダリティ形式として文法化される以前の原型的意味(root meaning)と関わっている。特に、日本語の「ようだ」と韓国語の「것같다」「모양이다」の推量意味の分析には形式自体の原型的意味または語彙性意味が関わっていることを述べる。これは各々の形式の推量用法に原型的意味の反映程度には差異があっても、当該形式の用法にその原型的意味が残存していることを意味する。

④基本的に両言語の推量意味及び用法上の違いは両言語の疑似推量形式の主観性程度⁶²の違いと深く関わっている。考察の結果、主観性程度において、韓国語形式の方が日本語形式より主観性程度が高いことが確認できる。

5.5. 両言語形式の推量意味及び用法の対照

本節では日本語の疑似推量形式「ようだ」「らしい」とそれに類似する振る舞いを見せる韓国語形式「것같다」「모양이다」との間に見られる推量意味及び用法上の異同を探る。

本論文は両言語の推量判断に関わる多様な用法上の特性を考慮し、各々の特性の間に見られる両言語の異同を明らかにする。本論文はこれまで両言語の推量モダリティ形式の意味及び用法分析において、論じられてきた特性である「判断根拠の性格」「様態性」「現状描写性」「仮想世界に基づいた認識」「内的思考の有無」「推論過程」などの多様な素性における両言語の疑似推量形式の間に見られる異同を探る。

5.5.1. 「ようだ」と「것같다」の対照

まず、本節では前章で検討した両形式の推量意味と用法上の特性に基づいて、両形式の異同を探る。本論文は推量意味または用法と関連し、「ようだ」と「것같다」の異同に関わる多様な推量特性は①「様態性」②「証拠に基づいた推定」③「描写性」④「判断根拠の明示性程度」⑤「仮想世界に基づいた推量」⑥「事態成立の否定化」⑦「思考内容の構成可否」などによって、特徴付けられることを明らかにする。また、各々の特性における両形式の異同を明らかにする。

本節でも各々の意味用法の間に見られる違いが生じる理由は基本的に両形式の原型意味、そして、この意味と関連させて当該形式の推量意味と規定した「類似性推量」と「同一性推量」の違いと関わっている点を反映しながら、論議を進める。

5.5.1.1. 「ようだ」と「것같다」の類似点

まず、本節では「ようだ」と「것같다」の推量意味及び用法上の類似点を明らかにする。

⁶² 本論文で述べる主観性程度とは判断における話者の主観的態度の介入程度を意味する。

①様態性

これは前述した形式自体の原型的意味と関連性がある。「ようだ」と「것 같다」は上記した通り、基本的に「外見や印象を述べる」または「～のような様子である」という意味特性を共有している。例えば、両形式は以下の例文(114)～(115)のように 事態の様子や外見に注目する様態性中心の推量において類似点がある。これは二つの事態や事物に対する「類似性に基づいた推量」という意味特性を共有しているため、外見や様子を述べることに中心がある以下のような様態性中心の推量に用いることができると考えられる。

(114) a. (久しぶりに会う知人の顔を窺って)あなた、どうも疲れているようだね。

貞行はそういつて、家の中でぶらぶらするようになった。(塩狩峠)

(114) b. (오랜만에 만나는 지인의 안색을 살피며)

당신, 아무래도 피곤한 것 같다(geosgattda)

(115) a. (久しぶりに会う友人の顔を見て)お前、相変わらず、元気なようだ。

(115) b. (오랜만에 만나는 친구의 얼굴을 보고)

너 변함없이 건강한 것 같다. (geosgattda)

②証拠に基づいた推量

基本的に「ようだ」と「것 같다」は何らかの根拠に基づいた推量を表す場合に用いることができる。両言語すべて話し手の直接体験情報や他人または第三者から得た間接的情報に基づく判断に自然に用いられる。これは両形式すべて実在的根拠に基づいた認識判断に用いられるという「証拠性判断」の意味を共有しているからである。

(116) a. 冷え冷えとして、新鮮な空気の肌触りからすると、まだ早朝であるようだ。

(秘密)

(116) b. 차갑고 신선한 공기가 피부에 닿는 것으로 보아, 아직 이른 아침인 것 같다.

(geosgattda)

(117) a. 噂によると、あの店の経営者は変わった人のようだ。

(117) b. 소문에 의하면, 저 가게의 경영자는 특이한 것 같다(geosgattda).

例えば、上の例文(116)は話し手が現場で捉えた「新鮮な空気の肌触り」という直接的体験情報に基づいて、「まだ早朝である」という事態の成立を推定している。また、例文(117)も話し手が第三者または外部世界から得た間接的情報に基づいて、「あの店の経営者は変わった人だ」という事態の真偽可否を推量している。

③話し手の感覚自体に対する描写中心の推量

「ようだ」と「것 같다」は事態の描写⁶³中心の推量を表す点において類似する。例えば、以下の例文(118)～(120)は話し手自身の感覚器官を通して、知覚した状況に対する印象をそのまま描写することに焦点が置かれている場合であり、推量の余地がほぼないとも言える場合である。このような発話時の話者自身だけの感覚自体を描写する場合には、両形式すべて許容可能である。このような用法も前述した「ようだ」と「것 같다」が持っている原型的意味と関わっていると思われる。前述した通り、「것 같다」の構成要素である「같다(gattda)」の意味は数学の等式のような完全な一致を表す意味では使われず、ほとんどの場合には「類似する」「似ている」の意味で用いられる。また、「ようだ」の場合も構成要素である「様」の意味である「事物の外見や様子」を表すという原型的意味が反映されていると思われる。以下の例文(118)～(120)に用いられた両形式は話し手自身が観察または知覚した様子とそれ

⁶³ 仁田(1991)によると、一般的に文法で用いる「描写」という用語はある事態や現象をありのまま、言語化して描き出す修辞方法の一つである。このような事態描写の特性が前面に出る場合は推量の意味が弱化する。

に密着して導かれた判断の間には「類似する」「似ている」という関係が成立すると思う。

- (118) (食べ物をなめて) 少し、味が甘すぎるようだ/*甘すぎるらしい。
(음식을 맛보고) 조금 맛이 단 것 같다(geosgattda)/*모양이다(moyangida).
(119) (スープの味見をしながら) 少し、味が甘すぎるようだ/*らしい。(美)
(국물의 간을 보면서) 맛이 많이 단 것 같다(geosgattda)/*모양이다(moyangida).
(119) (触ってみながら) このあたり、凹んでいるようだ/*らしい (仁田 2000)
(직접 만지며) 이 부분, 움푹 들어간 것 같다(geosgattda)/*모양이다(moyangida).
(120) (話者自身の胸の胃のあたりを指さして) どうも、このへんが痛いようだ/*らしい。
(자신의 가슴의 위 부분을 가리키면서) 아무래도 이 부분이 아픈 것 같다/*모양이다.
geosgattda/moyangida

上記の現象について、菊池(2000)は「観察された様子」「それに密着して導かれた判断」の間に見られる「距離の近さ」は推論過程がないと述べた。菊池は上記のような現象は「距離の近さ」は推論とは認められないと捉えた。しかし、本論文は推論を認識とその根拠との間の「距離」が小さい場合を含み、すべての非現実世界の認識に関わる広い概念として捉える。

5.5.1.2. 「ようだ」と「것 같다」の相違点

基本的に「것 같다」と「ようだ」は多くの類似性を持っていると同時に、以下に述べる「判断根拠の明示性」「仮想世界に基づいた推量」などにおいて相違点が見られる。「ようだ」が持っている推量用法はすべて「것 같다」と置き換えることができるが、その逆は部分的にだけ成立可能である。言い換えれば、「것 같다」が「ようだ」のすべての用法を包括することを意味する。これは両形式の本質的違いである。このような違いが生じる理由は「것 같다」の「全般的な無標性」に起因する。全般的な無標性というのは推量判断に関わる多様な用法において、基本的に制約を受けないことを意味する。このような両形式の本質的違いを考慮せずに、一部の共通的特性に基づいて、両形式の対応関係を捉えるのは限界がある。

①判断根拠の明示性程度

「ようだ」と「것 같다」は判断根拠の明示性程度によって、許容度の違いを見せる。「것 같다」が根拠の明示性程度に関係なく、自然に使えるのに対し、「ようだ」は相対的に明示的な根拠を要求すると言える。

そこで、本論文は判断根拠の明示性程度を測る基準は話し手が発話時に知覚した事態(根拠節S1)と判断帰結節(S2)の関係において、必然的關係や論理的妥当性が読み取れやすいほど、その根拠は明示的であると捉える。例えば、「ようだ」と「것 같다」は以下の例文(121)～(122)のように、判断根拠の明示性程度によって、許容度の違いが見られる。以下の例文における両形式の許容度の違いからも分かるように、推量用法と関わる多様な語用論的特性において、使用上の制約を受けない「것 같다」は根拠の明示性有無に関係なく用いることができる。それに対し、「ようだ」は(121)と(122)における許容度の違いからも分かるように、相対的に判断根拠の明示性が落ちる(121a)では許容度が落ちるのに対し、(122a)のように、判断根拠が明示的である場合は許容度が上がる。

- (121) a. (閉店時間の間近にスーパーに買い物に行って、売れ残りの刺身を見て直感的に話す) 刺身、安くなる?ようだ
(121) b. (폐점시간이 가까워져서 슈퍼에 쇼핑을 가서, 팔고 남은 회를 보고 직감적으로) 생선회 가격이 내릴 것 같다. (geosgattda)
(122) a. (閉店時間の間近にスーパーに買い物に行って、店員がマーカーと値段を書くラ

ベルを持って刺し身売り場に近づいているのを見て)
刺し身、安くなるようだな。

- (122) b. (폐점 시간이 가까워져서 슈퍼에 쇼핑을 가서, 점원이 마카와 가격을 적는 라벨을 가지고 생선회 매장에 다가가고 있는 것을 보고서)
생선회 싸질 것 같다. (geosgatttda)
- (123) a. A: 이 신발 서현이에게 맞을까?
B (구두의 모양을 얼핏 보고 직감적으로) 글썽? 좀 작을 것 같다. (geosgatttda)
- (123) b. A: この靴、ソヒョンに合うかな?
B: (靴の様子を一見みて、直感的に話す) さあ、ちょっと小さい? ようだ.

また、上の例文(123)のように、「直感的に」「一見みて」などの直観性を表す語句と共に使用している場合にも、両形式の間に許容度の差異が見られる。すなわち、話者の直感や印象などのような非明示的根拠に基づく判断において、根拠の制約を受けない「것 같다」は問題なく用いられるのに対し、「ようだ」は許容度が落ちる。両形式の間に見られる許容度の違いは前述した両形式の推量意味の違いと深く関わっていると思われる。すなわち、形式自体の原型の意味である「様」に根を置いている「ようだ」は外見や様子を表す「類似性推量」を表すことに中心があるため、上記したような非明示的根拠や単なる話者の直感などに基づいた判断には許容度が落ちる。これに対し、韓国語の「것 같다」は事態や事物の外見や様子と関係なく、話者の主観的見解が強く反映される「同一性」または「類似性」を基盤とする推量形式であるため、特定根拠の制約を受けず、自然に用いられる。両言語の間に見られる推量意味の違いはこのような根拠の有無の問題にも反映されていると思われる。

② 仮想世界に基づいた推量

「ようだ」と「것 같다」が異なる意味または用法を持つことは、以下の例(124)～(125)のように、反事実の仮想状況を命題内容として構成することができるか否かという点からも明らかである。

- (124) a. もし彼がいなければ、この計画は失敗していた*ようだ。(世界)
(124) b. 만약 그가 없었다면, 이 계획은 실패했을 것 같다.(geosgatttda).
- (125) a. 만약 그가 만류했던 보도가 맞다면, 그리고 그게 사실이라면 그 역시 이제 좀 쉬어갈 때가 된 것 같다.(geosgatttda). (경성애사)
(125) b. もし、彼が引き止めたという報道が正しければ、そしてそれが本当なら、彼も今はちょっと休んで行く時が来た*ようだ。

上記のような仮想世界に基づいた認識を表す反事実仮想条件文においては、韓国語の「것 같다」だけが用いられる。前述した通り、根拠性格の制約を受けない「것 같다」が仮想世界に基づいた推量に用いられるのは予測できるが、「外見的類似性」を推量の基本的意味とする「ようだ」は仮想状況を命題内容とする文には不自然である。このような仮想世界に基づいた推量における両言語のズレも上記した「것 같다」の推量用法上の無標性に起因する。繰り返しになるが、無標性というのは多様な推量用法において制約を受けないことを意味する。そのため、「것 같다」は推量判断において「仮想世界に基づいた判断」と「現実世界に基づいた判断」の両方に制限なく用いることができる。これに対し、「ようだ」は「現実的存在」「事態や事物の外見や様子」を前提とする「よう(様)」を原型の意味としながら、推量判断においても依然として「よう(様)」という原型の意味が反映されている場合が多い。例えば、上記した事態や事物に対する外見や様子を述べる「様態性推量」や「発話時の現場の知覚情報に基づく判断」に「ようだ」が最も多く用いられる点は「様」という原型の意味と深く関わっていると考えられる。そのため、「ようだ」は上の例文(124)～(125)のよう

に、話し手の仮想世界に基づいた認識の反映と深く関わっている「反事実仮想条件文との共起」において、許容度が落ちると思われる。

5.5.2. 「らしい」と「모양이다」の対照

本節では「らしい」と韓国語の「모양이다」の意味と用法上の異同を探って、両言語間の対応関係を模索する。特に、「らしい」と「모양이다」の推量用法上の違いが生じる理由は前述した「모양이다」の原型的意味(root meaning)の残存と深く関わっている点を述べる。

5.5.2.1. 「らしい」と「모양이다」の類似点

前述した個別形式の用法分析からも確認できるように、「らしい」と韓国語の「모양이다」は基本的に証拠に基づいた事態認識という「証拠性判断」の属性を共有している点で類似する。上記した推量意味や用法の中で、両形式は以下のような三つの用法において類似性を見せる。例えば、田野村(1991)で「らしい」の基本的意味として捉えた「ある根拠から、事実はある〜である」という推量特性において、「らしい」と「모양이다」は類似性を見せる。

①根拠に基づいた推論

「らしい」と「모양이다」は上記した個別形式の用法分析でも確認した通り、以下の例文のように、話し手が捉えた何らかの根拠に基づいた推定を表す場合に用いられる。

- (126) a. 그 천정화가 그려진 곳으로 들어오는 입구에는 발 밑을 조심하라는 경고가 각 나라 말로 여러 번 쓰여져 있다. 들어오는 순간 천정만 보다가 계단을 보지 못해 넘어지는 사람들이 많은 모양이다(moyangida) (유럽)
- (126) b. その天井画が描かれた場所に入ってくる入口には、足元に気をつけろという警告がそれぞれの国の言葉で何度も書かれている。入った瞬間天井だけを見て階段があるのに気づかず倒れる人が多いらしい。)
- (127) a. 渋谷で横井がこれも中古で手に入れたスカイライン 2000GT(車の名前)をとめていた。彼が葉山でのバイトの話をするのにあいづちをうつうちに、車は青山の坂をはしり、大きな鉄柵の門と車庫のある家の前に停まった。付近には4台の車が停車している。みなこの客らしい。
- (127) b. 차는 아오야마의 언덕을 달려 커다란 철책 문과 차고가 있는 집앞에 멈췄다. 부근에는 4대의 차가 서 있다. 모두 이곳의 손님인 모양이다(moyangida).

②推論過程の有無

「らしい」と「모양이다」は根拠に基づく推論過程が必ず想定されるという点で類似する。「らしい」と「모양이다」は発話時の話者自身の感覚自体を描写する場合は使えない。例えば、以下の例文(128)のような場合は発話時に話し手の直接的感覚によって、事態の真偽がほぼ確認可能な場合である。このような場合は根拠に基づいた推論過程を想定することが不適切であるから、両形式すべて許容度が落ちると考えられる。

- (128) a. (触ってみて) このあたり、凹んでいる*らしい。(仁田2000 : 144)
- (128) b. (직접 만져보고) 이 부분, 움푹 들어간 *모양이다.(moyangida)

③仮想世界に基づいた推量判断

「らしい」と「모양이다」は「ようだ」と同様に、仮想状況を命題とすることができない。これは両形式共に相対的に明示的な根拠を要求するため、仮想世界のように、話者の内面的

根拠を基にする判断には不適切である。話者の仮想世界に基づいた認識は基本的に話し手の主観に基づいた事態の認識を前提とするため、証拠に基づいた事態認識という特性を共有している両形式は許容度が落ちる。これは上記した個別形式の基本的意味と関わっていると思われる。つまり、「らしい」の基本的意味は客観的な根拠に基づいた推論性推量であり、「모양이다」も「様態性」「外見性」などを中心的推量特性とする形式であるため、以下の例文(129)のように、話者の仮想世界の認識を表す場合には馴染まないと思われる。

(129) a. もし彼がいなければ、この計画は失敗していた*らしい。

(129) b. 만약 그가 없었다면, 이 계획은 실패했을 *모양이다(moyangida)

5.5.2.2. 「らしい」と「모양이다」の相違点

既に述べたように基本的に「らしい」は推量助動詞として文法化された形式である。これに対し、複合形式として文末に位置し、推量意味を担っている「모양이다」は「実質名詞＋繫辞」の構造で、未だに実質名詞の意味を維持している点から、韓国語では概ねモダリティ形式としては認められていない点で異なる。「らしい」と「모양이다」は以下に述べる推量用法において許容度の違いが見られる。

①様態性中心の推量

「らしい」と「모양이다」は以下のような「様態性中心の推量」において許容度の違いが見られる。基本的に「모양이다」は自然に用いられるのに対し、「らしい」は適格性が落ちる。様態性意味の有無は「らしい」と「모양이다」が持っている本質的な推量特性の違いと関連性がある。本論文は基本的に「らしい」はある根拠から事実の推論を表すものであると述べた。

一方、「모양이다」は「모양(模様)」という原型的意味特性のため、多くの例文を観察すると、現場の知覚情報に基づいた判断及び事態や事物の様子を述べる様態性中心の推量に使用される場合が多い。例えば、以下の例文(130)は推量形式で実現されているため、推量意味がまったくないとは言えないが、何らかの根拠に基づいた推定を表すよりは事物や事態の外見や様子を述べることに中心がある。すなわち、話し手の事態認識の焦点が根拠に基づいた推定判断に中心があるよりは相手の表情から見える様子を述べることに主眼を置く様態性または現状描写性が強い。ただ、「彼がやってきたので、不愉快である」という事態の真偽は未確認の状態であるから、話し手の不確かな認識を表すために推量形式「모양이다」が使われている。これは前述したような両言語の推量意味である「推論性推量」と「外見性推量」の違いと関わっている。すなわち、根拠に基づいた推定に使用される「推論性推量」の「らしい」と目前の事態や事物の外見や様子を述べる「外見性推量」の性格が強い「모양이다」の中心的推量特性の違いのため、両形式の間に許容度の違いが生じるとと思われる。「모양이다」も「らしい」と同様に、根拠に基づいた推量判断にも使えるが、「らしい」と違って、上記のような事態や事物に対する外見や様子を述べる「様態用法」も併せ持っているのに対し、「らしい」は様態用法には使えないため、許容度の違いを見せる。

(130) a. A: 시간이 없습니다. 왜 왔습니까?

B: (상대의 표정을 살피며) 너, 내가 찾아와서 불쾌한 모양이다. (moyangida)

(130) b. A: 時間がないんですよ。何で来たんですか？

B: (相手の表情を窺って) お前、俺がやって来たので、不愉快? らしいな。

(131) a. 키, 190쯤이군. 요즘 애들이라 해도 지나치게 키.

머리, 갈색으로 염색한 물이 거의 빠진 모양이다 (moyangida).

(131) b. (話者が現場である学生の外見を見ながら話す場面、話者はこの学生に対する既得情報は無い場面) 背は190ぐらいだな。最近の子だとしても、あまりにも大きな。頭も、茶色に染めた色がほとんど取れた? らしい

(132) a. (久しぶりに会った友達の表情を見て) 君、どうも気分が良くない? らしいな。

(132) b. 오랜만에 만난 친구의 표정을 살피며) 너, 웬지 기분이 안 좋은 모양이다.

moyangida

②現場性根拠の依存度

個別形式の推量用法上の特性でも言及した通り、両形式は現場性根拠の依存度において相違点が見られた。すなわち、推量判断の根拠性格において、両形式は違いを見せる。基本的に「らしい」は「모양이다」に比べて「現場性根拠の依存度」が低い。「らしい」は相対的に発話時に捉えた現場の知覚情報に基づいた判断にはあまり用いられない。それに対し、「모양이다」は主に現場の知覚情報に基づいた判断に用いられる傾向がある。前述した両言語の実例分析の結果は上記のような事実を実証的に裏付けられると思われる。すなわち、「らしい」は対象資料から集めた151例の中で96例(64%)が間接的情報に基づいた判断に使用された場合であり、55例(36%)が現場の知覚情報に基づいた判断に用いられた。

一方、「모양이다」は172例の中で、153例(89%)が現場の知覚情報に基づいた推量や目前の物事の様子を述べる様態用法であった。

以上のような「らしい」の推量意味と実際の使用上の傾向から見ると、「らしい」は「모양이다」に比べて、推量判断の根拠が現場性を欠くものが多い。現場性を有するにしても、話者が思考や推論過程を経て判断に至る推論性推量の性格が強い例文が多かった。

それに対し、韓国語の「모양이다」は形式自体の原型的意味の影響で、様態性が強い用法や話し手が発話時に捉えた現場の知覚情報に基づいた判断に多く用いられることが確認できた。このような現象は前述した「らしい」と韓国語形式の基本的推量意味の違いと関わっている。もう一つ、例文を検討する。

(133) a. (新聞のテレビ番組欄を見ながら)今日は野球の中継はない*らしい。

(133) b. (신문의 텔레비전 드라마 편성표를 보며) 오늘은 야구중계는 없는 모양이다.

(moyangida)

上の例文(133)の場合は、発話時以前に話し手が他人や外部から入手した情報に基づいた判断ではなく、話し手が目前の現場で「新聞のテレビ番組欄」を見て発話する場面である。

この場合、表面的に判断の根拠は「新聞のテレビ番組欄」であるが、これは話し手が発話時現場で直接知覚及び確認した情報に基づいて、「野球の中継はない」という事態の真偽について、判断を下している状況である。すなわち、話し手が根拠に基づいて推論過程を経ていることが有標的に表されている場面として捉えにくいと思われる。そのため、何らかの根拠に基づいて、推論過程を経て最終的な判断に至る「根拠に基づいた推論性推量」を主な推量特性とする「らしい」は許容度が落ちるのではないと思われる。それに対し、推論過程の経路有無と関係なく、話者が直接体験した現場の知覚情報に基づいた判断に多く用いられる傾向が強い「모양이다」は自然に使えると思われる。

③話者の内在的根拠に基づいた推量

既存研究で述べた通り、「らしい」と「모양이다」は両者すべて直・間接根拠を含んだ外在的根拠に基づいた判断に用いられる。しかし、以下の例(134)～(136)のような話者の主観が強く反映される心中の内在的根拠に基づく判断において、両形式の間に許容度の差が生じる。客観的根拠に基づいた推論性推量の性格が強い「らしい」は以下の例文のように、話し手の主観が強く反映される内的根拠に基づいた判断に抵抗を見せるのは予測できる。それに対し、韓国語の「모양이다」は自然に用いられる。

(134) a. (부모 덕에 큰 노력 없이 부자가 된 사람들을 떠올리며)

이 사람들은 전생에 착한 일을 많이 한 모양이다. (moyangida) (피리)

- (134) b. (親のおかげで大きな努力なしで、金持ちになった人たちを思い出して)
この人たちは前世に善良な行動をたくさんした?らしい。
- (135) a. (話者の内的感覚に基づいて) 俺、最近物覚えが悪くなった?らしい。
- (135) b. (화자 자신의 내적 감각에 기초해서) 나, 요즘 기억력이 나빠진 모양이야.
(moyangida)
- (136) a. 미안하다… 두선아, 난 너의 충고를 지켜낼 수 없었다. 사람의 마음이란…
아니 내가 아직 그런 그릇이 안 되는 모양이다(moyangida). (종교)
- (136) b. すまない… ドゥソン、私は君の忠告を守ることができなかった。人の心というものは…いや、私がまだその器になっていない?らしい。)

④伝聞相当の意味用法の有無

従来の対照研究である羅(1996)や金(1999)などでも指摘した通り、「らしい」と「모양이다」が「間接的根拠に基づいた判断」「事態に対する客体的叙述態度」という点で類似する振る舞いを見せる形式である点は確かである。ただ、「伝聞根拠」と「形式自体の伝聞相当の意味」と関連し、両形式は違いが見られるという点には注意を向けなかった。先行研究でも述べた通り、韓国語形式「모양이다」は「らしい」と同様に、伝聞情報に基づいた判断において使用上の制約は受けない。ただ、伝聞根拠との共起傾向において、両形式は大きな違いを見せた。

A. 伝聞根拠との共起傾向

本論文では「らしい」と「모양이다」が伝聞根拠とどう関わっているのかを調べるために、両言語の対象資料から抽出した例文を用いて傾向分析を行った。対象資料は両言語の書き言葉コーパスから伝聞情報源であることを明確に示す両言語の副詞句「によると」と「~에 의하면」共起する例文を抽出した。分析の結果、「~によると」と共起する「らしい」は134例見つかった。それに対し、「~에 의하면」と共起する韓国語⁶⁴の「모양이다」は以下に挙げる1例しか見当たらなかった。

①間接的根拠という情報源 を明確に表す「~によると」と「らしい」: 134例

②間接的根拠という情報源 を明確に表す「~에 의하면」と「모양이다」: 1例

- (137) 수사 진전을 좀더 두고 봐야 알겠지만 국민들은 검찰의 수사 태도에 의아함을 느낀다. 보도에 따르면 검찰로서도 고충이 없는 것은 아닌 모양이다. (moyangida)
(捜査の進展をもう少し待たなければならないが、国民は検察の捜査に取り組む態度に疑問を感じている。報道によると、検察としても苦勞がないわけではないらしい。)

上記のような現象は両形式の伝聞相当の意味有無の判定と関わっていると思われる。従来「らしい」が伝聞相当の意味を持っている形式という点是指摘されてきた。例えば、益岡(2000)は「らしい」にも根拠に基づく判断とはいえない用法があると述べながら「らしい」の用法を以下のように推量と伝聞の用法を別の意味として捉えている。益岡は「らしい」の意味を「伝聞」と「推量」の二つに区分し、伝聞性意味は根拠に基づいた推量の意味はないと捉えた。その他に、寺村(1984)や野林(1999)などでも「らしい」の伝聞性意味を認めている。前述した従来の対照研究では上記のような「らしい」の意味特性を韓国語の「모양이다」にも適用し、両形式を同一意味特性を持っているものとして捉えてきた。しかし、上記のような傾向の違い及び両形式の推量用法上の特性からも分かるように、両形式が担っている

⁶⁴ 韓国語は「によると」という間接的情報源を示す副詞句が用いられる際には、ほとんどの場合、日本語の伝聞専用形式「そうだ」「~という」に対応する「~라고 한다(~rago handa)」「한 단다(handanda)」が用いられた。

本質的推量意味や用法は異なる。

B. 伝聞情報に基づいた判断と否定化可否(伝聞性意味の有無)

以下の例文(138)の場合、「らしい」は話し手の主観が排除された客観性の高い伝聞情報に基づいた判断であるため、話者自身がその判断をすぐさま否定することができる。それに対し、「모양이다」は「らしい」より相対的に判断に対する話者の主観が反映される形式であるため、伝聞情報に基づいた判断であっても、これをすぐさま否定することができない。

(138) a. 新聞情報によると、今回は証人喚問に応じるらしいが、僕はそう思わない。

(138) b. 신문정보에 의하면 이번엔 증인소환에 응할? 모양이지만(moyangida), 나는 그렇게 생각하지 않는다.

すなわち、上記のような場面において、形式自体が伝聞相当の意味を持っている「らしい」は話者が下した判断を否定することができるが、相対的に話し手自身の判断性が強い「모양이다」は許容度が落ちる。

5.6. 両言語の疑似推量形式間の互換性

本節では両言語の疑似推量形式の間に見られる交差対応の現象が生じる状況を探る。

①「ようだ」と「모양이다」の置き換え

前述した通り、本論文は「ようだ」は「것 같다」に、「らしい」は「모양이다」と最も近い意味を持つ形式と規定したが、以下の例(139)のように、「ようだ」が「모양이다」と置き換えが可能な場合もある。特に、目の前の事態の様態を表す場合には、両形式は置き換えが可能である。つまり、両形式は意味特性において部分的に重なる意味上の共通点が見られる。例えば、以下の例(139)のような様態性中心の推量においては類似点がある。

(139) a. (久しぶりに会った友人の顔色を窺いながら)

お前、どうも疲れているようだね/?らしいな。

(139) b. (오랜만에 만나는 친구의 안색을 살피면서)

너, 아무래도 피곤한 모양이다. (moyangida)

本論文は上記のような「ようだ」と「모양이다」の様態性中心の推量において、両者が類似性を見せる背景に注目してみた。現段階では両者の形式自体の本来の語彙的意味である「様(よう)」と「模様」の意味的類似性と関わっているのではないかと考えられる。語源的に「ようだ」の「様」と「모양이다」の構成要素「모양(模様)」の意味的類似性のため、上のような例文(139)のような外見や様子に対する話者の印象を述べる様態中心の推量において、類似性を見せる。そのため、このような様態性中心の推量において、両形式すべて自然に用いられると思われる。また、前章で述べた両形式の用例分析から見ると、「ようだ」「모양이다」は発話時に現場の知覚情報に基づいた判断に多く用いられる点で類似性を見せるのも、両形式の「様」と「模様」が持っている本来の語彙的意味の類似性が、実際の推量用法にも反映されていると考えられる。

②「것 같다」とその他の形式との互換性問題

前述した通り、「것 같다」は「同一性推量」という本質的推量意味から両言語の疑似推量形式の中で推量用法上の制約がほぼない最も使用範囲が広い形式である。そのため、「모양

이다」「ようだ」「らしい」の推量用法をすべて包括する用法上の特性を見せる。このような推量用法上の無制約性は「같다」の原型的意味である「同一性」という意味特性と深く関わっている。つまり、A とBの二つの事物や事態が「같다(gattda)」という「同一性判断」は話し手の主観的捉え方によって流動性があると思われる。そのため、「것같다」は推量用法において制約を受けないと思われる。それに対し、その他の形式が「것같다」に置き換えられるには制約を伴う。個別形式間に共通性と共に弁別的特性もあるため、形式間の互換性において多様な相違を見せる。

5.7. 両言語及び個別形式の間に用法上の違いが生じる理由

本節では従来の対照研究で論じていない上記のような両言語形式の意味及び用法上の違いが生じる理由について考えてみたい。基本的に形式と言語が異なるため、それぞれの個別形式が担っている意味や用法上の特性において相違点が見られるのは当然な現象である。

本質的には言語または形式が異なる場合、事態に対する話し手の場面解釈または事態認識に対する捉え方が異なるため、非常に類似する意味的対応関係を見せる形式の場合であっても、用法上の違いが生じる場合がある。以下では前述したような本質的な違いの他に、両言語の疑似推量形式の間に見られる用法上の違いが生じる理由について考えてみる。

本論文は両言語形式の間にズレが生じる原因には以下のような点が想定できるとと思われる。

一つ目は、両言語の個別形式が持つ原型的意味の違いであると思われる。つまり、両言語の形式自体の原型的意味が異なるため、そこから派生される推量意味や用法も性格を異にする。既に、このような形式自体の原型的意味は両言語の推量意味及び用法上の特性にも深く関わっていることを確認した。

本論文が注目するのは両言語の疑似推量形式の主な構成成分が類似する推量の意味特性を担っている一方、各々の形式が異なる語彙の原型意味を持っている点である。このような原形的意味が現在の推量用法に残存して、形式間の推量用法上の違いに作用すると捉えるのである。例えば、「ようだ」の場合、「よう(様)」という原型的意味が「様態中心の推量」や「現場の知覚情報に基づいた判断」に多く用いられるのに対し、「らしい」は根拠に基づいた推定を表す場合に多く用いられる「推論性推量」の性格が強いため、「らしい」は「様態性用法」「目前の知覚事態の認識」を表す場合にはあまり用いられないと考えられる。

上記の原理は韓国語の疑似推量形式「것같다」「모양이다」の場合にも適用可能である。例えば、上述した通り、A とBの二つの事物や事態が「같다(gattda)」という「同一性判断」は話し手の主観的捉え方によって流動性がある。そのため、「것같다」は推量用法において制約を受けないという点を指摘した。つまり、100%の同一性判断から1%の同一性に至るまで、いずれも「것같다」を用いることができる。そのため、このような場合の「同一性」というのは、実際には二つの事態や事物間の類似性の特性がより目立つようになるとと思われる。

一方、「모양이다」の場合は「모양(模様)」の意味と関連する「外見や様子」「様態」「事物や事柄の具体性・実体性」などの特性のため、推量用法の範囲において、制約を受ける。本論文の考察対象を含め、両言語の推量モダリティ形式の中で、「것같다」だけが推量用法において制約を受けない、最も使用範囲が広い形式である。

二つ目は、両言語の間にズレが生じる原因は両言語形式の文法化程度に違いが見られるからである。前述した通り、日本語文法において「ようだ」「らしい」は推量助動詞として文法化された形式として位置づけられている。これに対し、本論文の考察対象である韓国語の疑似推量形式「것같다」「모양이다」は日本語形式に比べて、相対的に推量助動詞として完全に文法化していないと把握できる。まだ、完全に推量助動詞として文法化されていないと把握できる理由はこれらの形式が推量用法として用いられた多くの場合、形式自体の語彙の意味が残存または反映されていることを示すものである。前述した通り、これらの形式が推

量用法として用いられた多くの例文を観察すると、このような語彙的意味が反映されている場合が多く見られた。このような現象は前述したBybee and Pagliuca(1985)で言及した「保持化(persistence)」という文法化のメカニズムとも深く関わっている。

両言語形式の推量モダリティ形式としての文法化程度に違いが見られるという事実はこれらの形式の推量意味及び用法上の違いが生じる一つの理由になると考えられる。

5.8. 日韓疑似推量形式の推量用法と主観性程度の関連性

前章では両言語の真正推量形式の間に主観性程度の差異が見られる点に言及したが、両言語の疑似推量形式の間にも主観性程度に差異が存在することを明らかにする。

そこで、本節では従来の研究で論じていない両言語の疑似推量形式の間に見られる主観性程度の違いについて検討する。主観性に関わる言語現象を対照言語学的な観点から説明するために、本論文では客観的に同一の事象を表すのに用いる両言語の疑似推量形式の意味及び用法上の異同に注目し、両言語形式が使われる多様な用法上の特性に見られる違いが前述したような表現形式間の主観性程度と深く関わっていることを明らかにする。

両言語の疑似推量形式の主観性程度を把握するためには、主観性程度を把握できる客観的基準を設定しなければならない。このような基準の問題は前述した第三章の論議でも言及した。本論文は以下に挙げる①～④のような推量用法上の特性に見られる形式間の異同に基づいて、両言語の疑似推量形式の間に見られる主観性程度の問題を考えてみる。

①話者の主観的態度の反映を表す「感じ」「直感」「予感」の補文名詞節での生起可否

「ようだ」が用いられた多くの例文を分析すると、後ろに「～ような感じ/ような気/ような予感」という事柄に対する話し手の直感的態度を表す表現が続く現象が多く見られる。機能的にはこれらも「文末の推量表現」のバリエーションであると考えられる。このような場合に用いられた「ようだ」は以下の例文(140)からも分かるように、外部世界から入手した証拠に基づく話し手の推量判断を表すものではない。本論文は以下に述べる、「感じ」「直感」「気」などを取る補文節内の生起可否のテストが両言語の個別形式の主観介入の程度を測る一つの手がかりになると思われる。例えば、以下の例文(140)のように、「感じや直感」「気」などの名詞は発話時に外部世界から入手した実在的根拠より話し手が事物や事態の表面的印象や感じなどに基づいた判断を表しているため、話し手の主観がより多く反映される可能性が高い。このテストを適用させて見ると、「ようだ」と「것같다」が「らしい」や「모양이다」より相対的に主観介入の程度が高い形式であると捉えることができる。

(140) a. 이상해요. 지금, 제가 아주 나이가 많이 든 여자가 된 것같은/*모양인 느낌이 들어요. (美しい日々) geosgattda/*moyangida

(140) b. おかしいですね、今、私が年を取った女になったような/*らしい感じがする。

上の例文と同様に、以下の例文(141)にも「らしい」「모양이다」は「ようだ」「것같다」と違って、許容度が落ちる。

(141) a. 僕は自分がとても面白い人間でとても面白い人生を送っているような気になった。
*らしい気になった。

(141) b. 나는 내 자신이 아주 재미있는 사람이고, 재미있는 인생을 보내고 있는
것 같은(geosgattda) /*모양인(moyangida) 생각이 들었다.

(142) a. まだ夜は明けていないけど誰かが弾正橋で待っているような予感がした/*らしい
予感がした。

- (142) b. 아직 날이 밝지 않았지만, 누군가가 彈正다리에서 기다리고 있는 것같은 예감
 이 들었다. geosgatttda+予感
 아직 날이 밝지 않았지만, 누군가가 彈正다리에서 기다리고 있는 *모양인
예감이 들었다. moyangida+予感

②話し手の思考内容の構成可否と主観性

この基準は「～と思う」の補文節内の生起可否という点と関連する。「～と思う」は話し手自身の主観的な思考行為を表す認知動詞であり、話し手の主観的態度の介入と関わりを持つと考える。「～と思う」は話者の主観的態度を表す形式であるが、以下の例文(143)のように、韓国語の「것 같다」は「～と思う」の内容節に生起できるのに対し、「ようだ」「らしい」と「모양이다」は「～と思う」の補文節内に生起することができない。

- (143) a. この手紙をもらったのは11月頃だった。私は直感的におもしろい*ようだと思
い/*らしいと思い、少し考えて見ることにした。(若き数学者のアメリカ)
 (143) b. 이 편지를 받은 것은 11월경이었다. 나는 직감적으로 재미 있을 것 같다고
생각해서/*모양이라고 생각해서 조금 더 고려해 보기로 했다.

上の例文(143)は、「것 같다」が最も主観性程度が高い形式であることを示している。このように、判断に対する話者の主観介入の程度は両言語の形式だけではなく、同一言語の個別形式の間にも程度差が見られる。

③伝聞性意味の有無と主観性

前述した通り、伝聞に対する解釈は寺村(1984)の「ある事態について、自分は直接知らないが、他からこう伝え聞いたということを相手に伝える言い方である」とした。また、田野村(1991)も伝聞について推定の根拠となる事柄が表現されず、話者が他人から聞いた情報が根拠となっている場合であると捉えている。伝聞を上記のように捉えると、事態の内容に対する話し手自身による主観介入の余地はほぼないと言える。前述した通り、多くの従来研究では日本語の「らしい」は形式自体が「推定」と「伝聞」の二つの意味用法を持っていると捉えている。一方、韓国語形式は伝聞情報のような間接的情報に基づいた判断に用いることはできるが、既に述べた個別形式の推量意味や用法からも分かるように、「らしい」のように形式自体が伝聞相当の意味を持っていない。このような観点から見ると、「らしい」よりは韓国語の形式の主観性程度が高いと言える。

- (144) a. 噂話によると、我が国の景気は徐々に回復していくらしいが、僕はそう思わない。
 (144) b. ?들리는 소문에 의하면 우리나라의 경기는 점차로 회복할 모양이지만, 나는
 그렇게 생각하지 않아. moyangida

例えば、上の例文(144)のように、「らしい」は話し手の主観が排除された客観性の高い伝聞情報に基づいた判断をすぐさま否定化することができる。それに対し、「모양이다」は「らしい」より相対的に判断に対する話者の主観が反映される形式であるため、伝聞情報に基づいた判断であっても、これをすぐさま否定することができないと考えられる。

④判断根拠の特性と主観性

本論文は推量根拠の性格が内在的かそれとも外在的であるかという問題も主観性程度と関連性があると考え。このような考え方は Palmer(1986)の見方を受容したものである。すなわち、推量判断が話者を排除した間接的根拠や外部的根拠に基づいた推量判断であるほど、話者の主観的態度が関与する余地が少なくなる。これに対し、判断根拠が話し手の直感や印

象などのような内在的根拠に頼って判断を行うほど外部状況から受ける制約が少なくなるため、話者の主観が関与しやすいと考えられる。本論文の考察対象の中で、特に韓国語の「것 같다」は前述したように推量用法においてまったく制約を受けないのに対し、「ようだ」「らしい」「모양이다」などは内的根拠に基づいた判断にはあまり用いられないため、相対的に主観性介入の度合いが弱いと思われる。

その他に、前述した内在的根拠に基づいた判断と関わる現象は「反事実仮想条件文における許容可否」の問題である。前述した通り、両言語の疑似モダリティ形式の中で、韓国語の「것 같다」だけが仮想状況を命題内容として構成することができる。反事実仮想というのは、あくまで話し手だけの思考や想像の中での認識を表すものであるため、判断に対する話者の主観的態度が反映されやすい典型的現象である。これは話し手の直観や印象のような内在的根拠、すなわち、話し手だけが分かっている何らかの情報に基づいた判断に「것 같다」は用いられるのに対し、「ようだ」「らしい」などは用いることができない点とも関わりを持つ。根拠範囲と制約の問題から見ても、「것 같다」が最も主観性程度が高い形式と捉えることができるとと思われる。

以上で述べた①～④の用法上の特性から、両言語の疑似推量形式間に見られる主観性程度をまとめると、以下の通りである。

A. 「ようだ」と「것 같다」の主観性程度の違い

前述した推量意味及び用法上の特性において、「것 같다」はまったく制約を受けない無標性を持つことを述べた。さらに、このような「것 같다」の推量特性は「同一性推量」という形式自体の原型の意味と関わっていることも述べた。このような理由で「것 같다」はその他の形式の用法をすべて包括できると考えられる。それに対し、「ようだ」は基本的に「話し手の思考内容の構成可否」「根拠の範囲(内的根拠に基いた判断の使用可否)」「仮想世界に基づいた判断の使用可否」などの制約を受ける。前述した通り、このような特性は主観性程度を測る基準になるものである。このような現象は「것 같다」が「ようだ」に比べて、判断に対する話者の主観介入の程度が高い形式である点を検証すると考えられる。基本的に上記した主観性程度と関わる多様な用法において、使用上の制約を受けるほど、話し手の主観介入の余地が少なくなることを意味する反面、使用上の制約をまったく受けないという点は話し手の主観介入の余地が多いということの意味すると言える。

B. 「らしい」と「모양이다」の主観性程度

「らしい」と「모양이다」の間にも主観性程度に差異があると思われる。具体的な手掛かりは上記した「伝聞性意味の有無」「内在根拠の使用可否」「様態性の有無」などのような意味及び用法と関連し、両形式は許容度の違いを見せる。つまり、韓国語形式は内的根拠に基づいた判断に用いられる点や形式自体が伝聞性意味を持っていない点、さらに、話者が現場で捉えた外見や印象を述べるということが可能である点などから、基本的に「らしい」に比べて、韓国語の「모양이다」の方が判断に対する話し手の主観的見解がより反映されると把握できるとと思われる。このような意味及び用法における両形式の許容可否は「根拠に基づいた推論性推量」と「外見性推量」という両形式の基本的推量意味の違いと関わっていると思われる。また、「모양이다」は「らしい」の推量用法をすべて包括するほど使用上の範囲が広いが、これは「らしい」が相対的に使用上の制約を受けることを意味する。結果的に、「らしい」と「모양이다」の場合も、「모양이다」が「らしい」に比べて、主観性程度が高いことが確認できた。

5.9. まとめ

本章では日本語の疑似推量形式「ようだ」「らしい」と推量意味及び用法上の特性において、それぞれに最も類似する意味と用法上の特性を見せる韓国語形式「것 같다」「모양이다」を取り上げ、両言語形式の間に見られる推量意味及び用法上の異同を明らかにした。

まず、本論文では「ようだ」「らしい」と最も相応する韓国語形式の異同を明らかにするために、従来のような研究者が作った少数の例文による直観的分析ではなく、できるだけ多くの実例分析及び対応様相の傾向などに基づいて、両言語形式の異同を究明した。

特に、本論文では既存の対照研究で注目されて来なかった両言語の疑似推量形式の間に見られる弁別的意味の究明とそのような違いが生じる理由について考察した。

また、本論文では両言語の弁別的用法に基づいて両言語形式を「主観性程度の問題」と関連させて対照分析を試みた。本論文では基本的に従来の対照研究とは違い、両言語の個別形式が担っている推量意味と用法上の特性が異なるという点を反映し、個別形式の推量意味を以下の①～④ように規定した。前述した通り、以下の各々形式の推量意味の捉え方は当該形式の原型的意味(root meaning)と実際の推量用法上の特性を反映したものである。

- ①「ようだ」－「類似性推量」
- ②「것 같다」－「同一性推量」
- ③「모양이다」－「外見性推量」
- ④「らしい」－「推論性推量」

本章で述べた内容をまとめると概ね以下の通りである。

- (1) 既存の対照研究で両言語形式を括る中心的基準として受容されてきた「根拠依存型」または「証拠性」という単一基準だけでは体系的な対照及び両言語の弁別特性を究明するには限界があるということが明らかになった。すなわち、両言語の弁別特性と対象資料の分析に基づいて、両言語の対応関係は既存研究で述べたような一律的な対応関係を見せることではない点を述べた。
- (2) 対照分析の考察結果、両言語及び個別形式間に以下のような推量判断に関わる多様な意味と用法及び統語的特性において違いを見せることが確認できた。
 - ①「判断根拠の特性及び明示性程度」②「現場根拠の依存度」③「様態性の有無」
 - ④「仮想世界の推量可否」⑤「推論過程の有無」⑥「伝聞性意味の有無」
 - ⑦「話し手の思考内容の構成可否」
- (3) 両言語の疑似推量形式が担当する推量範囲において、全般的に韓国語の使用範囲が広い。両言語形式の推量の使用範囲において、全般的に韓国語が日本語より制約を受けず、広い範囲で用いられることが確認できた。まず、韓国語の「것 같다」はその他の日韓形式すべての用法を包括することが分かった。その理由を「同一性推量」という推量意味と関わっているからであると述べた。また、「らしい」と「모양이다」の対照において、基本的に韓国語の形式が「らしい」が持っている用法を包括しながらも、「外見性推量」「推論性推量」という推量意味の違いから、「様態中心の推量」「現場の知覚事態に対する推量」において違いが見られるという点を述べた。
- (4) 各々の形式の推量意味と用法上の違いは多くの場合、個別形式の原型的意味と関わっている点を述べた。特に、両言語の疑似推量形式「ようだ」「것 같다」「모양이다」の間に見られる推量意味と用法上の異同は、当該形式自体の構成要素である「様(よう)」「같다」「모양(模様)」などの原型的意味と深く関わっているという点に言及した。
- (5) 両言語の疑似推量形式「ようだ」「らしい」と「것 같다」「모양이다」の間に見られる推量の意味と用法上の違いが両言語形式の主観性程度の違いと関わっている点を述べた。

具体的に「話し手の思考内容の構成可否」「判断根拠の範囲や制約性」「形式自体の伝聞性意味」などの現象から両言語形式は主観性程度において程度差を想定することができると言う点を明らかにした。考察の結果、推量意味と用法上の特性において、日本語の「ようだ」に最も類似する振る舞いを見せる韓国語の「것 같다」は、「ようだ」より主観性程度が高いことが確認できた。また、「らしい」と「모양이다」の場合も、「모양이다」が「らしい」に比べて、相対的に主観性程度が高いという点を述べた。

第6章 結論

6.1. 本論文の結論

本論文では日韓対照的観点から、両言語の真正推量形式「だろう」と疑似推量形式「ようだ」「らしい」とそれに最も相応する韓国語の真正推量形式「-겠-(gess)」 「-을것아-(eulgeosi)」及び疑似推量形式「것같다(geosgattda)」 「모양이다(moyangida)」の推量の意味と用法上の異同を究明することに主眼を置いて論議を進めた。本論文で考察対象とした両言語の形式は以下に挙げるものである。

- ①日本語形式： a. 真正推量形式：「だろう」
b. 疑似推量形式：「ようだ」「らしい」
- ②韓国語形式： 真正推量形式： a. 単一形式（先語末語尾）：「-겠(gess)-」
b. 複合形式：「-을것아-(eulgeosi)」
疑似推量形式(複合形式)： 「(-은/는/을) 것같다(geosgattda)」
「(-은/는/을) 모양이다(moyangida)」

本論文でこれらの形式を考察対象とした理由は両言語の先行研究及び対照研究で多様な観点から活発に論議がなされてきたにも関わらず、未だに、残された課題が多く見られるという点を考慮したからである。論文の冒頭でも言及した通り、従来、両言語の推量モダリティ形式を対象とした対照研究は多くの蓄積がある。ところが、従来の対照研究では主に両言語の推量形式を括る意味的基準を設定することに大きな力を注いできたため、各形式の推量特性及び両言語形式間の異同に対する綿密な分析には至っていない。その主な内容をまとめると、以下の通りである。

一つ目は、両言語及び個別形式の推量の意味及び用法に見られる違いを十分に考慮せず、ある特定の用法や意味的基準に基づいて、両言語の対応関係を画一的に捉えてきた点である。

二つ目は、従来の対照研究は両言語形式の間に見られる推量の意味及び用法上の違いの究明とそういった違いが生じる理由や背景については論じていない。

三つ目は、両言語の推量形式を括る意味的基準を設定することに大きな力を注いできたため、体系的かつ綿密な対照研究の結果を得るために必ず前提とされるべき韓国語諸形式の文法的性格及び各形式の推量特性に対する綿密な分析が行われていない。

四つ目は、推量モダリティ体系の中での位置づけの問題については論じていない点が挙げられる。従来の対照研究では日本語推量形式と意味及び用法的に類似する韓国語形式を選定し、両言語を括る共通の意味的基準を設定する点に注目した。そのため、韓国語の諸形式がモダリティ体系の中で、どのように位置づけられるかという点については論じていない。例えば、これまでの韓国語のモダリティ研究においては、純粋な文法形式「-겠-」を除外した「-을것아-」「것같다」「모양이다」などのような複合形式は韓国語の文法研究では未だに文法形式として認定しないという普遍的認識がある。しかし、従来の対照研究では主に意味的な側面を重視し、日本語形式と同様に推量モダリティとして位置づけた。

五つ目は、研究方法と関わる問題であるが、これまでの多くの研究で多様な観点から諸形式の推量意味について分析が行われてきたにも関わらず、論議自体の実証性が保障されない場合が多かった。その理由は研究者が恣意的に作った少数の例文や前後の文脈が排除された

脱文脈の短文を対象とし、諸形式及び形式間の意味と用法上の異同を探る研究方法を取ってきたからである。以上の背景を踏まえ、本論文では当該形式の推量判断に関わる多様な談話語用論的特性を重視し、当該形式の推量意味及び用法上の特性及び形式間の異同を分析した。

本論文は基本的に両言語の推量形式を括るある特定の意味的基準を設定することに注力するのではなく、当該形式の推量判断に関わる多様な特性または用法を詳細に分析し、両言語形式の対照分析を綿密にすることに主眼を置いた。また、推量の意味を表す各々の形式が談話語用論的条件によって、多様な用法上の特性を見せながらも、これらの諸用法の間には深い関連性が見られるという点を述べた。

また、本論文はこれまでの対照研究で論じていない推量形式間の主観性程度の問題について分析を行った。すなわち、両言語形式の推量の意味及び用法上の異同が形式間の主観性程度の違いと深く関わっている点を述べた。

また、本論文は諸形式の推量意味または用法上の特性を分析する際に、できる限り、筆者の直観や恣意的な作例に基づいた分析を排除し、多くの実例分析及び使用上の傾向分析などに基づいた実証的な研究方法を取った。

各章の論議で得られた結論をまとめると、以下の通りである。

第2章では、本論文の考察対象に対する両言語の先行研究及び代表的な対照研究を概観した。特に、従来の対照研究で論じていない残された課題を検討した後、本論文の基本的な立場を述べた。具体的に、従来の対照研究で綿密に分析されて来なかった韓国語諸形式の分析や両言語形式間の意味及び用法上の異同に対する綿密な分析の必要性に言及した。また、各々の形式または両言語形式の間に見られる推量の意味及び用法上の違いの究明と、そういった違いが生じる理由または背景を考える必要性があることを述べた。

第3章では、本論文全体の論議に関わる重要な前提になる基礎的問題に注目した。

一つ目は、当該形式の推量モダリティ体系の中での位置づけの問題について考えてみた。すなわち、両言語の推量モダリティ形式の体系を真正推量と疑似推量に下位区分し、従来、その位置づけが明確に示されて来なかった韓国語形式「-겠-」「-을것아-」を文法範疇としての真正推量モダリティ形式として規定した。特に、「-을것아-」の文法的性格を「-겠-」と類似する先語末語尾の性格を持っている形式として捉えた。また、日本語の「ようだ」「らしい」に最も類似する振る舞いを見せる韓国語形式「것 같다」「모양이다」を「疑似推量形式」に位置づけた、これらの形式の文法的性格をそれぞれ「補助形容詞」「補助名詞」と規定した。これは本論文が当該の推量モダリティ形式を意味範疇よりは文法範疇の枠組みの中で、両言語の対照分析を行うためにも、明確に規定する必要がある。

二つ目は、両言語における推量の捉え方及び認識の違いについて考えてみた。従来の対照研究は主に日本語における推量の概念及び認識、形式の適用範囲などをそのまま韓国語形式に適用させて両言語の対応関係を捉えてきた。事態に対する話し手の不確かな認識を表すというものが推量であるという普遍的認識は同様であるが、推量に対する実際の認識及び適用範囲などにおいて、両言語は違いを見せるという点を論じた。

両言語の推量認識の違いと推量形式の使用可否と関連し、両言語の間に見られる主な特性を分析した結果、概ね、韓国語が日本語に比べて相対的に推量用法上の制約を受けないことが確認できた。また、日本語と韓国語の推量の捉え方と形式の範囲について、韓国語の方が日本語より広く推量を捉えている点を述べた。すなわち、両言語の間には以下のような推量に対する認識の違いがあることを述べた。

①日本語の場合：狭義的推量

基本的に二つの形式によって表現される韓国語の真正推量に比べて、「だろう」一つの形式によって表される日本語の推量範囲が狭い。また、一般的に韓国語では推量として認識さ

れて、推量形式が使用される場合、日本語は推量形式ではない「断言形」のようなその他の形式として実現する場合が多い点を述べた。事態の「不確かさ」に対する認識も日本語が韓国語に比べて相対的に厳格性が落ちる。日本語は「不確かさ」を本質とする推量という心的行為が発生する余地がない状況では推量表現ではなく「断言形」で実現する場合が多い。例えば、日本語は話し手が既得経験や知識などを持っていて、事態の真偽可否に対し、断定できる確信を持っている場合には事態自体の不確かさがあるにも関わらず、推量形式の使用が忌避され、「断言形」で実現する場合が多い。このような点を考慮すると、日本語の推量に対する認識は不確かさという推量概念上の本質に忠実だというよりは事態自体の不確かさの有無に対する話し手の実際の認識を重視し、推量としての認識可否が決定される場合が多いと言える。

②韓国語の場合：広義的推量

全般的に推量の捉え方と形式使用の範囲において、韓国語の方が日本語より広く推量を捉えている。基本的に韓国語は話し手の不確かな認識を表す表現形式が多いという点から、日本語に比べて、推量の使用範囲が広い点を明確にした。このような事実は実際の言語現象にも見られる。一般的に、韓国語は事柄に対する不確かな認識が前提になると、対話状況または非対話状況などの文体的違いや聞き手の存在有無、聞き手への働きかけ性などの条件に影響を受けず、推量の実現される。また、既得知識や経験情報などによって、話し手が事態の真偽に対し、断定できる確信を持っている場合であっても、事態自体に不確かさが存在する場合や確認済みの事態ではない限り、推量形式を使用する場合が多いという点で、「広義的推量」として規定できる。このような点からすると、韓国語は相対的に不確かさの表現という推量の本質をより重視する特性を見せると捉えられる点を述べた。

三つ目は、従来、認識的モダリティの下位類型において、異なる意味類型として位置づけられた推量の「だろう」と証拠性判断の「ようだ」「らしい」の間に見られる意味及び用法上の接近現象に注目してみた。従来の研究では「だろう」と「ようだ」「らしい」は認識モダリティ体系において、「推量」と「証拠性判断」という完全に区分される別の意味類型として捉えられてきたため、「推量」の「だろう」と「証拠性判断」である「ようだ」「らしい」の意味及び用法上の連続性または接点については注目されて来なかった。しかし、本論文では「だろう」と「ようだ」「らしい」三形式すべて、何らかの根拠に基づいて、事態に対する話し手の不確かな認識を表すという意味を共有している点に着目し、両範疇は厳格に区分されるものではなく、互いに意味または用法上の接点または連続性が存在するという点を述べた。

四つ目は、両言語の推量モダリティ形式の主観性程度の問題について考えてみた。本論文は基本的に表現形式に反映される主観性の形式間または言語間の差異を前提としているため、各々の推量形式及び両言語形式に見られる主観性程度の違いを測る一連の基準について述べた。本論文は両言語の推量形式が担っている意味及び用法上の特性において、話し手の主観介入が大きく作用し、各々の形式の推量特性によって判断に対する話し手の主観介入の程度に差異が存在するという点を述べた。

第4章では、両言語の真正推量形式の意味及び用法上の異同について検討した。

まず、従来の研究で考察されていない韓国語形式の文法的性格を明確にした。本論文では未だに文法範疇をめぐって、韓国語研究の間に異見が見られる「-ㄹ-」の文法範疇は時制形式ではない推量の叙法形式である点を明らかにした。そして、従来の韓国語研究及び対照研究で推量の文法形式として認定されて来なかった「-을것이-」を「-ㄹ-」と共に、推量モダリティ体系の中で真正推量形式として位置づけられる点を明らかにした。すなわち、「-을것이-」は「-ㄹ-」と類似する「先語末語尾」の性格を持っている真正推量形式である

点を論じた。また、「-ㄹ-」は推量の意味的観点から見ると、真正推量形式であるが、推量用法上の観点から見ると、「疑似性真正推量形式」として規定できるという点を述べた。また、従来の対照研究とは違い、多くの用例分析及び使用上の傾向分析などに基づいて、両言語の真正推量形式が担っている推量の意味と用法上の異同を実証的に究明しようと試みた。

また、両言語形式の推量意味及び用法上の違いが生じる背景には形式間の主観性程度の違いが深く関わっていることを明らかにした。本章で述べた具体的な内容は以下の通りである。

①「だろう」「-ㄹ-」「-을것이-」の三つの形式は真正推量形式と位置づけられる。

発話時現在の話し手の認識しか表せないという真正推量の意味を充たしている点と事態の真偽に対する話し手自身の主観的判断に中心があるという特性に基づいて、三つの形式は両言語の推量モダリティ体系の中で、真正推量形式として位置づけられる点を述べた。

②三形式は真正推量という本質的意味を共有しながらも、次のような意味と用法上の特性において、弁別される点に言及した。

まず、韓国語の真正推量形式「-ㄹ-」は基本的に「発話時における話し手の認識」と「話者自身の内在的根拠に基づいた主観的判断」という真正推量の意味を持っている点では「だろう」「-을것이-」と類似する。しかし、推量用法上の特性において、「様態性」「証拠依存度」「現在の事態または証拠自体の焦点付与」「発話及び根拠の現場性」などのような疑似推量形式の属性を併せ持っている点で、「だろう」「-을것이-」と異なる振る舞いを見せるという点を論じた。このような「-ㄹ-」の二面性を考慮し、本論文では推量モダリティ体系の中における位置づけにおいて、この形式を「疑似性真正推量形式」と位置づけた。

また、「-을것이-」は推量の意味と用法上の特性から見ると、「だろう」に最も対応する形式である点を論じた。ただ、判断に対する話し手の主観介入の余地がほぼ反映されない「間接的根拠に基づいた判断」と真正推量形式が持っている必須条件に矛盾する「発話時以前の認識」にも使用される点から、「だろう」よりは主観性程度が低い形式である点を述べた。両言語の特徴的な違いは会話文と非会話文という談話類型にも見られる点を述べた。特に、韓国語の真正推量形式は会話状況でも多く用いられるのに対し、「だろう」の推量用法は会話状況での使用が忌避されるという点で違いが見られた。具体的に、談話類型によって「だろう」は対命題モダリティとしての「推量用法」と聞き手モダリティとしての意味の役割分担が明確に区分されるのに対し、韓国語の真正推量形式はそういった点が見られないという点を明らかにした。つまり、韓国語の真正推量形式は文体の違いに関わらず、話し手自身の推量判断である「真正推量」の意味が維持される場合が多いのに対し、日本語の「だろう」は会話状況になると、基本的に「確認要求」や「同意要求」「婉曲的質問用法」「相手へのpoliteness」のような対聞き手モダリティへの意味機能の移行が見られる点を述べた。これは根本的に両言語の推量に対する認識や適用範囲の違いを反映するものであり、両言語形式の意味と用法上の違いと関わっている。

③両言語の推量意味と用法上の特性が各々の推量形式の主観性程度の違いと深く関わっている点を明らかにした。考察の結果、「だろう」が韓国語の真正推量形式より主観性程度が高いという点を述べた。また、韓国語の両形式の間にも主観性程度の違いが見られた。全般的に「だろう」に最も類似する「-을것이-」が真正推量と疑似推量形式の特性をあわせ持っている「-ㄹ-」より主観性程度が高いという点が分かった。結果的に、「だろう」→「-을것이-」→「-ㄹ-」の順に主観性程度が低くなるという点を明らかにした。

④日韓諸形式が持っている多様な推量用法間の関連性について注目した。各々の形式が持っている多様な特性は概ね各形式の基本的推量特性と深く関わっている点を述べた。

第5章では、両言語の疑似推量形式「ようだ」「らしい」と「것 같다」「모양이다」の推量意味と用法上の異同について探ってみた。本章では、従来の韓国語研究と対照研究で触れ

ていない以下のような問題を究明することに注力した。

一つ目は、韓国語の疑似推量形式の文法的性格及び推量モダリティ体系の中での位置づけを明確にした後、多くの用例分析を通して、各形式の推量意味と用法上の特性を分析した。

二つ目は、両言語の各形式の構成要素の原型の意味と中心的な推量用法上の特性などを考慮し、両言語形式の間に見られる相違点の究明とそういった違いが生じる理由について考えてみた。まず、「ようだ」「らしい」の推量の意味と関連し、「ようだ」の場合は「様」という原型の意味(root meaning)の残存が「ようだ」の主な推量用法と深く関わっている点を述べた。また、「らしい」の場合は、根拠に基づいた推論性推量に多く用いられる主な用法上の特性及び使用上の傾向を考慮した。これにより、「ようだ」「らしい」各々の形式の推量意味を「類似性推量」「推論性推量」と規定した。また、これらの形式に最も相応する韓国語の推量形式「것 같다」「모양이다」などの推量の意味も形式自体の原型の意味と主な用法上の特性を考慮し、それぞれ「同一性推量」「外見性推量」と規定できる点を述べた。

三つ目は、両言語の疑似推量形式の対照と関連し、従来の対照研究で論じていない以下のような問題に注目した。

まず、両言語形式の推量の意味及び用法上の弁別の意味をあまり考慮せずに、「ようだ」「らしい」と韓国語形式の対応関係を「根拠前提型」または「根拠依存型」などのようなある特定の一つの意味的基準だけでは、両言語の間に見られる推量意味と用法上の異同を綿密かつ包括的に把握することができない点を明らかにした。また、上記のような意味的基準の設定に注力する研究方法だけでは両言語の体系的な対応関係を捉えることができない点を広範な用例分析を通して明確にした。両言語の対照分析の結果の主な内容は以下の通りである。

①両言語形式は先行研究で述べたように、常に一律的な対応関係を見せるのではなく、推量判断に関わる多様な談話語用論的特性において、相違を見せることを明らかにした。

②両言語の疑似推量形式の対照分析の結果、次のような点が明らかになった。

まず、推量の使用範囲において、全般的に韓国語の疑似推量形式が日本語に比べて、使用上の制約を受けず、広い範囲で用いられる点を明らかにした。例えば、従来「ようだ」に対応させた韓国語の「것 같다」は推量用法においてはほぼ制約を受けず、その他の日韓疑似推量形式の用法をすべて包括する点を明らかにした。本論文はこのような「것 같다」の推量特性をこの形式の原型の意味特性と関連させて説明した。

また、従来の対照研究において、「らしい」と対応関係を見せるとされた韓国語の「모양이다」の推量意味及び用法上の特性を分析した結果、両形式は常に一律的な対応関係を見せるのではなく、「모양이다」は「らしい」が持っている用法をすべて包括する点に言及した。

③両言語形式の間に見られる推量意味及び用法上の違いが生じる理由を上述したような両言語が担っている中心的推量特性の違いと深く関わっている点を述べた。

④日韓諸形式が持っている多様な推量意味または用法上の特性間の関連性について注目した。各々の形式が持っている多様な特性は概ね個別形式の中心的推量特性と密接に関わっている点を明らかにした。

四つ目は、両言語の疑似推量形式に見られる推量の意味と用法上の違いが各形式の主観性程度と深く関わっている点を明らかにした。具体的に「思考内容の構成可否」「判断根拠の範囲及び制約程度」「仮想世界の認識可否」「モダリティ副詞との共起関係」などのような用法上の特性に基づいて、全般的に韓国語の疑似推量形式が日本語形式より主観性程度が相対的に高いという点を明らかにした。

6.2. 今後の課題と展望

本論文では両言語の当該推量形式の意味及び用法上の異同を明らかにするために、推量判

断に関わる多様な談話語用論的特性を考慮し、両言語形式の対照分析を試みた。しかし、未解決の課題も多く見られる。今後の課題として、以下に述べる①～⑦が挙げられる。

①当該形式の推量判断に関わる談話語用論的特性と関わる問題

一つ目は、本論文で両言語の真正推量形式の間に見られる違いの一つとして挙げた「だろう」の「対話忌避性」と関わる問題である。本論文では韓国語形式と違い、推量の「だろう」は対話状況での使用は忌避されるという現象を指摘した。

一般的に、日本語は文体の種類によって、「だろう」と「でしょう」が役割を分担している。すなわち、「でしょう」は聞き手に対する丁寧語として、主に対話状況に用いられるのに対し、「だろう」は非丁寧語として、聞き手の存在が必須ではない話し手自身の主観的判断を表す場合に多く用いられる傾向を見せる点を指摘した。しかし、以下のような言語現象からすると、「だろう」と「でしょう」は単なる文体レベルの違いとして捉えることは再考の余地があると見受けられる。例えば、以下の例文(2)は話し手が経験根拠に基づいて、聞き手に話者の見解を確信を持って発話している場合であり、「だろう」と「でしょう」はすべて許容度が落ちるのに対し、韓国語の真正推量形式「-을것이-」は自然に使える。以下の現象は「だろう」と「でしょう」が単なる文体の違いではなく、推量の意味機能において、何らかの違いが存在することを示唆する現象であると見受けられる。「だろう」推量の本質を明らかにするためにも、今後、「でしょう」も視野に入れて、綿密に検討する必要がある。

(2) (食卓においてあるパンを食べた経験がある人が食べたことがない相手に)

このパン、きっとおいしいよ/おいしいと思う/?だろう/?でしょう。

(식탁에 놓여 있는 빵을 먹어본 경험이 있는 사람이 먹어보지 못한 상대방에게)
이 빵 틀림없이 맛있을 거야(eulgeosi).

上記の現象と関連し、もう一点、考えるべき問題がある。つまり、真正推量形式「だろう」と「-을것이-」の使用領域の範囲と関わる問題である。上の(2)のような談話語用論的状况において、日本語は一般的に、以下の例文(3)のように、「断定形」や「はずだ」「にちがいない」などのような高い確信を表す推量形式を用いる。

(3) (食卓においてあるパンを食べた経験がある人が食べたことがない相手に)

このぱん、きっとおいしいよ/はずだ/にちがいない。

本論文では両形式の真正推量としての意味及び用法にだけ注目したが、上記の現象からすると、「だろう」と違い、韓国語の真正推量形式「-을것이-」は根本的に話し手の純粋な推量の意味を表しながらも、事態成立に対する話し手の確信的判断を表す日本語の「はずだ」「にちがいない」などの疑似推量形式の意味機能を併せ持っていることが出来る。

すなわち、「だろう」と違い、「-을것이-」は真正推量の意味だけではなく、事態に対する確信的態度を表す日本語の疑似推量形式「はずだ」「にちがいない」などが持っている用法への広がりを見せると捉えることができる。このような特性も「だろう」より、「-을것이-」の方が使用範囲が広いことを示している。本論文では現象の指摘に留まるが、上記の現象は今後、綿密に考察を行う必要があると思われる。

二つ目は、本論文では当該形式の推量判断に関わる多様な特性を分析し、各々の特性に見られる両言語及び形式間の異同を探ってみた。しかし、推量判断に関わるすべての談話語用論的特性を考慮したとは言えない。例えば、柴田(1982)や早津(1988)などの先行研究で「ようだ」「らしい」の違いを測る基準として言及されてきた「事態に対する心理的な距離」などの見方は直感的には正しい解釈として感じられる。さらに、韓国語形式「것 같다」「모양이다」の相違とも深く関わっている「心理的距離」という語用論的特性は推量判断における

形式の選択に深く関わる要素である。しかし、未だにこれについて客観的な手がかりや基準に基づいて考察を行った研究は見当たらないため、今後、更なる考察が必要である。

三つ目は、「～によると」「～の話では」などのような伝聞情報に基づいた判断における両言語の真正推量形式の許容可否と関わる問題である。本論文では母語話者の内省に基づいて、日本語の「だろう」の使用は不適切であるのに対し、韓国語の両形式は相対的に許容可能性が高いという現象を指摘した。しかし、日本語の「だろう」も判断根拠になる伝聞情報を話し手がどのように捉えるかによっては、許容できる特定の語用論的条件を想定することも全くないわけではない。また、韓国語形式の場合も不自然であると答えた情報提供者も少なくないため、許容可否の判断に関わる要因や使用可否の具体的な語用論的条件などの諸問題については、今後、更なる考察を行う必要がある。

②両言語の疑似推量形式の用法上の特性と形式自体の構成要素の原型の意味との関連性

本論文で注目した両言語の疑似推量形式である「ようだ」「것 같다」「모양이다」などに見られる推量意味と用法上の特性が形式自体の原型の意味(root meaning)と深く関わっている点を述べた。しかし、当該形式の推量用法を分析すると、原型的な意味と関わらない推量用法も多く見られるので、このような現象の扱いなどについては更なる考察が必要である。

また、これは文法化現象とも関わっているものであるため、このような点も視野に入れて、今後、更なる検討が必要であると思われる。

③主観性程度を測る基準と関わる問題

本論文で述べた両言語及び個別形式の主観性程度の問題と主観性程度を測る手がかりとして援用した多様な基準の適用可能性の妥当性についてより綿密に検討する必要がある。

まず、日本語と関わる現象の中で、従来から真正推量形式の「だろう」が「ようだ」「らしい」などの疑似推量形式よりモダリティ性が高い形式であることを裏付ける根拠として論じられてきた「連体修飾節内の生起不可」という基準についても厳密に検討する必要がある。例えば、「だろう」は多くの例文ではないが、以下の例文のように、書き言葉では「であろう」という形で連体修飾成分となる場合も見られる。本論文では現象の指摘に留めるが、以下の例文(4)～(5)からも分かるように、「だろう」は「一般名詞」「こと」などを修飾する連体修飾成分として機能していることが分かる。以下のような現象と「だろう」の主観性の関わりについて、今後更なる考察が必要である。

(4) 将来必ず来る? だろう/であろう 高齢化社会

(5) 大半が初めての投書 だろう/であろう ことも文面から察せられた。

また、本論文は両言語の真正推量形式の主観性程度の違いを測る基準と関連し、「発話時以前の認識可否」という特性を一つの根拠として提示した。すなわち、使用上の傾向は見られないが、韓国語両形式は「だろう」と違い、発話時以前の客体化された事態に対する話し手自身の認識が可能な場合が存在する点を述べた。しかし、韓国語形式も日常の会話や談話などではあまり使わないため、発話時以前の認識ができる具体的な条件については、今後考察が必要である。

④当該推量形式の多義的意味と推量意味の関連性

本論文では当該形式の推量意味と用法上の特性に限定して考察を行ったが、当該形式の推量意味の本質をより明らかにするためには、これらの形式の推量意味だけではなく、諸形式が持っている多義的意味との関わりも視野に入れて、総合的に考察を行う必要がある。

⑤メタ言語の概念の明確化及び適用可能性の綿密な検討

従来の研究で、推量モダリティ形式の体系化や下位類型化に重要な意味を持つ用語及び概念として使用されてきた「証拠性」「想像・仮想」「推量」などのようなメタ言語の概念の明確化及び適用範囲の妥当性などの問題も今後、必ず検討する必要がある。例えば、本論文でも述べた通り、「証拠性判断」の本質を現実世界に基づいた認識または実在的根拠に基づいた事態認識と捉えるならば、それは「ようだ」「らしい」だけに限られる特徴ではない。すなわち、日本語の推量に関わる多数のモダリティ形式の中で、証拠性という一般性の高い概念は「ようだ」「らしい」などの一部の形式だけに適用可能なものであるのかについて綿密に検討する必要がある。

⑥データの利用及び分析方法の客観性

本論文は当該形式の推量特性を検証するために、諸形式の推量判断に関わる多様な語用論的特性を考慮し、諸特性に見られる両言語形式間の異同を綿密に分析しようと試みた。

また、筆者の内省や主観の介入を最少化するために、できる限り、両言語の小説などの文学作品から抽出した実例と当該形式の推量特性に見られる全般的な傾向の違いを把握するために、多くの用例を集めることができる両言語の書き言葉のコーパスやアンケート調査なども利用した。ところが、上記のようなデータの使用方法や分析方法において、十分に反映できなかった点も多くある。まず、対象資料から引いた実例の挙げ方や利用の仕方において、当該形式が用いられた前後の文脈や状況などの談話語用論的状况の反映をより綿密に反映する必要がある。また、当該形式の推量特性の全般的な傾向を把握するために、使用したコーパスとアンケート調査において、各調査や傾向調査の結果に表れた現象が具体的に何を意味するのかという点については十分に検討することができなかった。すなわち、各々の形式に見られる弁別的推量特性の内実の究明を追求するよりは一つの主な傾向に基づいた分析を重視した場合が多かったため、今後、データの処理や分析方法の内実をより客観的に提示する必要がある。

⑦分析及び考察対象の拡大と教育現場への応用可能性

本論文では考察対象を両言語において最も活発に論議されてきた一部の推量形式のみに限定した。本論文で述べた研究内容の妥当性及び両言語の推量モダリティ体系の全体象を明らかにするためには、今後は考察対象を広げて検討する必要がある。例えば、日本語の場合、本論文で取り上げることができなかった「(し)そうだ」と「ようだ」の意味の違いについて、より綿密な分析をする必要がある。すなわち、本論文で「ようだ」の主な特性としてあげた「様態性用法」は従来の研究で様態の助動詞として規定されてきた「しそうだ」の本質的

特性でもある。そのため、「ようだ」の意味を明らかにするためには、ある事態や事物の様態を表す特性を共有している「しそうだ」も視野に入れて、更なる考察を行う必要がある。

また、対照分析においても、「(し)そうだ」と韓国語形式の対応様相も視野に入れて考察を行う必要がある。本論文では論じていないが、「しそうだ」は従来の対照研究でも言及されたように、様態や現状描写中心の用法において、韓国語形式「-ㄴㄹ-」と類似する振る舞いを見せると把握した形式である。また、推量用法上の特性からすると、疑似推量形式「것 같다」とも対応関係を見せる形式である。両言語の体系的な対照分析をするためには、今後、「しそうだ」と相応する韓国語形式を含め、推量の意味を表すその他の形式も対照分析の視野に入れて、考察を行う必要がある。

最後に対照研究と両言語の教育現場への応用可能性について述べる。日韓対照研究は韓国語母語話者のための日本語教育及び日本語母語話者のための韓国語教育に応用できる。基本的に外国語の学習は母語と目標言語間の違いを習得することであるから、本論文の対照研究も外国語としての日本語や韓国語教育に活用できると期待される。

ただ、本論文は推量判断に関わる多様な語用論的特性を総合的に考察し、多様な特性に見られる両言語の推量形式の意味及び用法上の異同をより綿密かつ包括的に分析した記述的研

究として位置づけられる。そのため、本研究の考察結果をそのまま教育現場に持ち込むことはできないが、本論文で述べた考察結果が両言語の教育現場における応用の素材にはなり得ると見受けられる。以上の①～⑦のような諸問題は今後の課題としたい。

【参考文献】

1. 日本語の文献 (50音順)

- 安達太郎(1999)『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 安達太郎(2002)「質問と疑い」仁田義雄・益岡隆志・田窪行則編『新日本語文法選書4 モダリティ』pp.174-202 くろしお出版
- 池上嘉彦(2006)「〈主観的把握〉とは何かー日本語話者における〈好まれる言い回し〉」『月刊言語』35(5) pp.20-27 大修館書店
- 石神照雄(1993)「推量の認識と構文」『国語学』174, pp.28-41 国語学会
- 尹相實(1999)「現代日本語判断系モダリティの記述的な研究」北海道大学博士学位論文
- 尹相實(2003)「日韓両言語の推量表現の対照研究」『韓国日語日文学研究』46号 pp.143-161 韓国日語日文学会
- 大鹿薫久(1999)「叙法小考」『日本文芸研究』50(4), pp.35-45 関西学院大学
- 大場美恵子(2002)「日本語助動詞「ようだ」と「らしい」の違いについて」『マテシスウニウルサリス』3巻 2号, pp.99-114, 独協大学外国語学部言語文化学科
- 奥田靖雄(1984)「おしはかり(一)」『日本語学』3(12), pp.54-69 明治書院
- 奥田靖雄(1985)「おしはかり(二)」『日本語学』4(2), pp.48-62 明治書院
- 尾上圭介(2001)『文法と意味Ⅰ』くろしお出版
- 景山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 柏岡珠子(1980)「ヨウダとラシイに関する一考察」『日本語教育』41, pp.169-178 日本語教育学会
- 紙谷栄治(1994)「助動詞「ようだ」について」『国文学(関西大学)』71, pp.155-168
- 紙谷栄治(1995)「助動詞「だろう」について」『関西大学文学論集』44, pp.199-213
- 菊地康人(2000a)「「ようだ」と「らしい」ー「そうだ」「だろう」との比較も含めて」『国語学』51, pp.46-60 国語学会
- 菊地康人(2000b)「いわゆる様態の「そうだ」の基本的意味ーあわせて、その否定各形の意味の差についてー」『日本語教育』107, pp.16-25 日本語教育学会
- 北原保雄(1981)『日本語助動詞の研究』大修館書店
- 木下りか(1998a)「ヨウダ・ラシイー真偽判断のモダリティの体系における「推論」ー」『日本語教育』96, pp.154-165 日本語教育学会
- 木下りか(1998b)「「真偽判断」を表す文末形式と「既定性」」『ことばの科学』11, pp.171-182
- 木下りか(2009)「因果関係の逆の成立と原因推論ーダロウの表す推論過程ー」『大手前大学論集』8, pp.125-136
- 木下りか(2013)『認識的モダリティと推論』ひつじ書房
- 金恵娟(2009)「現代日本語の真偽判断にかかわるモダリティ形式の研究ー疑似モダリティ形式を中心にー」筑波大学博士学位論文
- 金水敏(1992)「談話管理理論から見た「だろう」」『神戸大学文学部紀要』19 pp.41-59
- 金東郁(1999)「真偽判断モダリティの日韓対照研究」筑波大学文芸・言語研究科博士学位論文
- 金良宣(2002)「現代日本語における「らしい, ようだ, みたいだ, (し)そうだ, だろう」の純粋な推量表現の比較」『韓国日語日文学研究』44号, pp.21-43
- 金田一春彦(1953a)「不変化助動詞の本質(上)」『国語国文 22-2』pp.1-18 京都大学文学部
- 金田一春彦(1953b)「不変化助動詞の本質(下)」『国語国文 22-3』pp.15-35 京都大学文学部

部

- 工藤浩(1982)「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて」『国立国語研究所報告』71 研究報告集 3』pp. 45-92 秀英出版
- 工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的タイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤 浩編 『日本語の文法 3 モダリティ』pp. 163-234 岩波書店
- 黒滝真理子(2005)『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性—モダリティの日英対照研究』くろしお出版
- 小林典子(1992)「「必ず・確かに・確か・きっと・ぜひ」の意味分析」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』7, pp. 1-17 筑波大学留学生センター
- 坂口和寛(1996)「副詞の語意的意味が統語的現象に与える影響 —働きかけ文での共起関係を中心に—」『日本語教育』91 pp. 1-12
- 阪田雪子・倉持保男(1980)『教師用日本語ハンドブック④ 文法Ⅱ 助動詞を中心にして』凡人社
- 阪田雪子・倉持保男(1993)『教師用日本語教育ハンドブック④文法Ⅱ 助動詞を中心にして(改正版)』凡人社
- 澤田治美(1993)『視点と主観性—日英語助動詞の分析—』ひつじ書房
- 澤田治美(2006)『モダリティ』開拓社
- 澤田治美(2007)「語用論の可能性—モダリティの視点から」『言語』36, pp. 17-31 大修館書店
- 澤田治美(2011)『主観性と主体性』ひつじ書房
- 柴田武(1982)「ようだ・らしい・だろう」『ことばの意味 3 —辞書に書いてないこと—』pp. 87-94 平凡社
- 親屋映子(1989)「文末名詞について」『国語学』159, pp. 1-14 国語学会
- 杉村 泰(2009)『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』、ひつじ書房
- 鈴木泰(1996)「メノマエ性と視点(Ⅱ)—移動動詞の基本形を中心に—」『山口明穂教授還暦記念国語学論集』pp. 133-154 明治書院
- 成昊炫(2010)「「だろう」推量用法と韓国語形式の対照」『応用言語学研究』17
- 成昊炫(2012)「推量モダリティ形式「しそうだ」の考察 —「ようだ」との対比を中心に—」『韓国日語日文学研究』82(1), pp. 335-353 韓国日語日文学会
- 成昊炫(2014)「疑似推量形式の日韓対照研究 —「ようだ」「らしい」と韓国語対応形式を中心に—」『韓国日語日文学研究』91(1), pp. 141-166 韓国日語日文学会
- 田窪行則(2001)「現代日本語における 2 種のモーダル助動詞類について」『梅田博之教授古希記念 韓国語文学論叢』pp. 1003-1025 太学社
- 田野村忠温(1990)「文における判断をめぐって」『アジアの諸言語と一般言語学』pp. 785-795 三省堂
- 田野村忠温(1991)「「らしい」と「ようだ」の意味の相違について」『言語学研究』10 pp. 62-78, 京都大学言語学研究会
- 丹保健一(1999)「「ようだ」の意味をめぐって—様態、推量、伝聞、婉曲を中心に—」『三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学』50, pp. 1-12
- 張根壽(2004)「話し手の認識的態度を表す副詞の研究—推量的な副詞群を中心に—」筑波大学文芸・言語研究科博士学位論文
- 塚本秀樹(2006)「日本語から見た韓国語—対照言語学からのアプローチと文法化」『日本語学』25(3), pp. 16-25, 明治書院
- 塚本秀樹(2012)『形態論と統語論の相互作用』ひつじ書房
- 寺村秀夫(1979)「ムードの形式と意味 (1)—概言的報道の表現—」『文芸言語研究』4 pp. 67-89
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 時枝誠記(1950)『日本文法口語論』岩波書店
- 中右実(1979)「モダリティと命題」『英語と日本語と 林栄一教授還暦記念論文集』
pp. 223-250 くろしお出版
- 中右実(1994)『認知意味論の原理』大修館書店
- 中島孝幸(1990)「不確かな判断ーラシイとヨウダ」『三重大大学日本語文学』1, pp. 25-33
- 中島孝幸(1991)「不確かな様相ーヨウダとソウダ」『三重大大学日本語文学』2, pp. 26-33
- 中島孝幸(1992)「不確かな伝達ーソウダとラシイ」『三重大大学日本語文学』3, pp. 15-24
- 中村亘(2000)「「ようだ」「らしい」「しそうだ」をめぐってー事態の捉え方の違いという視点からー」『早稲田大学日本語研究』8, pp. 13-24 早稲田大学国語学会
- 仁田義雄(1989)「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』pp. 1-56 くろしお出版
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄(1992)「判断から発話・伝達へー伝聞・婉曲の表現を中心に」『日本語教育』77 pp. 1-13 日本語教育学会
- 仁田義雄(1997a)「断定をめぐって」『阪大日本語研究』9, pp. 95-119 大阪大学文学部
- 仁田義雄(1997b)『日本語文法研究序説』くろしお出版
- 仁田義雄(1999)「モダリティを求めて」『言語』28, pp. 34-44
- 仁田義雄(2000)「認識のモダリティとその周辺」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3モダリティ』pp. 81-159 岩波書店
- 日本語記述文法研究会編(2003)「第4章 認識のモダリティ」『現代日本語文法4 第8部モダリティ』pp. 133-188, くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編(2008)「第7章 様態節」『現代日本語文法6 第11部 複文』pp. 239-249 くろしお出版
- 沼田善子(1986)「第2章 とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』pp. 105-225 凡人社
- 沼田善子(1989)「とりたて詞とムード」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』pp. 159-192 くろしお出版
- 野田春美(1997)『の(だ)の機能』くろしお出版
- 野田尚史(1991)『初めての日本語文法』くろしお出版
- 野林靖彦(1999)「類義のモダリティ形式「ヨウダ」「ラシイ」「ソウダ」ー三水準にわたる重層的考察ー」『国語学』197, pp. 89-75 国語学会
- 野村剛史(2003)「モダリティ形式の分類」『国語学』54-1, pp. 17-31 国語学会
- 芳賀綏(1954)「陳述とは何もの?」『国語国文』23-4, pp. 47-61 京都大学国文学会
- 早津恵美子(1988)「ようだ」と「らしい」『日本語学』7巻4号, pp. 46-61 明治書院
- 原田登美(1999)「モダリティ論小考ーモダリティをめぐる日本語研究の2つの動向」『言語と文化』3, pp. 123-136 甲南大学国際言語文化センタ
- 益岡隆志(1987)『命題の文法』くろしお出版
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』pp. 17-123 くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法 ー改正版ー』くろしお出版
- 益岡隆志(1999)「命題との境界をめぐって」『言語』28, pp. 46-52 大修館書店
- 益岡隆志(2000)「真偽判断を表す「ようだ」と「らしい」」第11章『日本語文法の諸相』pp. 135-149 くろしお出版
- 益岡隆志(2002)「判断のモダリティー現実と非現実の対立ー」『日本語学』21-2, pp. 6-16, くろしお出版
- 益岡隆志(2007)『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- 三上章(1959)『続・現代語法序説ー主語廃止論ー』刀江書院.

- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 三宅知宏(1994)「認識的モダリティにおける実証的判断について」『国語国文』63-11, pp. 20-34, 京都大学国語学国文学研究室
- 三宅知宏(1995)「「推量」について」『国語学』183, pp. 86-76 左(1-11) 国語学会
- 三宅知宏(2005)「現代日本語における文法化ー内容語と機能語の連続性をめぐって」『日本語の研究』1-3, pp. 61-76 日本語学会
- 三宅知宏(2006)「実証的判断が表される諸形式ーヨウダ・ラシイをめぐって」『日本語文法の新地平2 ; 文論編』pp. 119-136 くろしお出版
- 三宅知宏(2011)『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版
- 宮崎和人(1993)「～ダロウ」の談話機能について『国語学』175, pp. 左 63-50 国語学会
- 宮崎和人(2002)「第4章 認識のモダリティ」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『モダリティ』pp. 121-171 くろしお出版
- 宮崎和人(2005)「推量の疑問化と「コト」『現代日本語の疑問表現』pp. 37-55 ひつじ書房
- 森田良行(1980)『基礎日本語』2 角川書店
- 森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』『日本語研究叢書』7 くろしお出版
- 森山卓郎(1989)「認識のムードとその周辺」仁田義雄益岡隆志『日本語のモダリティ』pp. 57-74 くろしお出版
- 森山卓郎(1992a)「日本語における『推量』をめぐって」『言語研究』101, pp. 64-83
- 森山卓郎(1992b)「文末思考動詞「思う」をめぐってー文の意味としての主観性と客観性『日本語学』11-9, pp. 105-116 明治書院
- 森山卓郎(1995)「推量・比喩比況例示-「よう／みたい」の多義性をめぐって-」『宮地裕敦子先生古稀記念論集日本語の研究』pp. 493-525, 明治書院
- 森山卓郎(2000)「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法 3 モダリティ』pp. 3-77 岩波書店
- 山田孝雄(1936)『日本語文法学概論』宝文館
- 羅聖榮(1996)「日韓モダリティの対照研究」筑波大学文芸・言語研究科博士学位論文
- 渡辺実(1953)「叙述と陳述ー述語文節の構造ー」『国語学』13-14, pp. 20-34 国語学会
- 渡辺実(1971)『国語構文論』塙書房

2. 韓国語の文献 (가나다 順)

- 강정희(1992)「비교와 가정, 추측, 비유의 인식론적 상관성에 대하여- ‘같다’ 구문을 중심으로-」『한남대학교 인문과학 논문집』22, 한남대학교 pp. 1-12
- 권재일(1992)『한국어 통사론』민음사
- 고광모(2002)「-겠-의 형성과정과 그 의미의 발달」『국어학』39, pp. 27-47 국어학회
- 高永根(1965)「現代国語의 叙法体系에 대한 研究」『国語研究』15
- 고영근(1986)「서법과 양태의 상관관계」『국어학 신연구』탐출판사, pp. 247-263
- 高永根(1989)『国語形態論研究』서울대학교 출판부
- 고영근・남기심(1990)『표준국어문법론』탐출판사
- 고영근(2004)『韓國語의 時制, 叙法』대학사
- 김규철(1988)「모습의 -겠- 과 바탕의 -을것-」『관악어문연구』13, pp. 1-23
- 김동욱(2000)「한국어 추측표현의 의미차이에 대한 연구- ㄴ것같다, 는 가보다, 는 모양이다 의 의미차이를 중심으로」『국어학』35, pp. 171-198 국어학회

- 金敏洙(1971) 『國語文法論』 一潮閣
- 김일웅(1993) 「한국어의 서법」 『우리말 연구』 3, pp. 41-75 우리말연구회
- 김용석(1975) 「한국어 불완전명사 연구」 延世大学大学院碩士學位論文
- 김정혜(1997) 「양태표현의 ‘모양이다’ 구문 연구」 이화여자대학교 석사학위논문
- 김차균(1981) 「을과 겹의 의미」 『한글』 173 · 174, pp. 65-114 한글학회
- 南基心(1983) 『國語の統辞・意味論』 塔出版社
- 南基心(2001) 『현대 국어 통사론』 태학사
- 野間秀樹(1996) 『韓国語の文法論及び語彙論』 東京外国語大学 朝鮮語研究室
- 민현식(1999) 『국어문법연구』 역락
- 박선자(1993) 「한국어 서법연구」 『우리말연구』 3, pp. 77-114 우리말 연구회
- 박승빈(1935) 「조선어학」 경성 『조선어학연구회』 (「역대한국문법체계」 1 부 20 책)
- 박옥숙(1987) 「임의적 불확실성과 화자의 주관적 선택:- 겹-의 화용론」 『한글』 198 pp. 105-130 한글학회
- 박재연(1999) 「국어양태 범주의 확립과 어미의 의미기술: 인식 양태를 중심으로」 『국어학』 34, pp. 199-225. 국어학회
- 박재연(2006) 『한국어 양태어미 연구』 태학사
- 신창순(1972) 「현대한국어의 용언보조어간 「 겹」 의 의의와 용법」 『朝鮮學報』 65
- 신창순(1997) 「用言托의 분석과 양태 범주」 『국어학』 29, pp. 141-170, 국어학회
- 서정수(1977) 「겹에 관하여」 『말』 2, 연세대학교 한국어학당. [서정수(1990b)에 실림, pp. 185-205]
- 서정수(1978) 「ㄴ 겹에 관하여」 『국어학』 6, pp. 85-110 국어학회
- 서정수(1996) 『수정증보 국어문법』 한양대 출판원
- 서정수(2006) 『국어문법』 한세본
- 成耆徹(1979) 「經驗と推定」 『文法研究』 4, 문법연구회, pp. 109-129
- 성광수(1984) 「국어의 추정적 표현」 『한글』 184, pp. 53-80, 한글학회
- 손세모돌(1996) 『국어 보조용언 연구』 한국문화사
- 安明哲(1983) 「現代國語의 樣相研究-인식양상을 중심으로-」 서울대 석사학위 논문
- 안명철(1983) 「現代國語의 樣相研究」 『國語研究』 56
- 안주호(1997) 『한국어 명사의 문법화 현상 연구』 한국문화사
- 이기용(1978) 「言語와 推定」 『국어학』 6, pp. 29-64, 국어학회
- 李崇寧(1961) 『中世國語文法』 乙酉文化社
- 왕문용 · 민현식(1993) 『국어 문법론의 이해』 개문사
- 이기동(1989) 「언어 주관성의 문제」 『한글』 206, pp. 165-196, 한글학회
- 이기종(2001) 『우리말의 인지론적 분석』 역락출판사
- 이남순(1981) 「 겹과 ㄴ 겹」 『관악어문연구』 6, pp. 183-203 서울대학교 국어국문학과
- 이남순(1998) 『시제 · 상 · 서법』 월인
- 이병기(2006) 「- 겹- 과 -었- 의 통합에 대하여」 『국어학』 47, pp. 170-206 국어학회
- 李美惠(2005) 『한국어 문법교육항목의 교육연구』 박이정
- 이선웅(2001) 「국어의 양태체계 확립을 위한 시론」 『관악어문연구』 26, pp. 317-339 서울대학교 국어국문학과
- 이성하(1998) 『문법화의 이해』 한국문화사
- 李崇寧(1961) 『중세국어 문법』 을유문화사
- 이혜용(2003) 「짐작, 추측, 양태 표현의 의미와 화용적 기능」 이화여자대학교 석사학위논문
- 任洪彬(1980) 「- 겹- 과 対象性」 『한글』 170, pp. 231-269 한글학회
- 임동훈(2001) 「- 겹- 의 용법과 역사적 해석」 『국어학』 37, 국어학회, pp. 115-147.
- 임동훈(2003) 「국어 양태 체계의 정립을 위하여」 『한국어의미학』 12, pp. 127-153.

- 임지룡(1997) 『인지의미론』 탐출판사
- 嚴正浩(1990) 「終結語尾와 補助動詞의 綜合構文에 대한 研究」 『成均館大学院』
- 張京姬(1985) 『現代國語의 樣態範疇研究』 塔出版社
- 張京姬(1995) 「국어의 양태범주의 설정과 그 체계」 『언어』 20, pp. 191-205
- 張京姬(1998) 「서법과 양태」, 서태룡 외 편(1998) 『문법연구와 자료(이익섭 선생 회갑 기념 논총)』 태학사, pp. 261-303
- 張英熙(1994) 「접속부사에 대하여」 『어문론집』 4, 숙명여대
- 전혜영(1995) 「한국어 공손현상과 -겠- 의 화용론」 『국어학』 26, pp. 125-146
국어학회
- 정경재(2009) 「선어말어미 배열 순서와 -겠- 의 의미」 『홍종선 외(2009), 국어의 시제, 상, 서법』 박문사 pp. 101-135
- 정인승(1956) 『표준고등말본』 신구문화사
- 조일영(1998) 「국어 선어말어미의 양태적 의미 고찰」 『한국어학』 8, pp. 39-66 한국어학회
- 차현실(1986) 「양상술어(modal predicate)의 통사와 의미 미확인 양상술어를 중심으로」 『梨花語文論集』 第8集 梨花女子大学校韓國語文學研究所 pp. 11-34
- 최동주(1995) 「국어 선어말어미 배열순서의 역사적 변화」 『한국언어학회』 17, pp. 317-335
- 최현배(1971) 『우리말본』 정음문화사
- 한동완(1991) 「국어의 시제연구」 서강대 박사학위논문
- 한동완(1996) 『국어의 시제연구』 태학사
- 허웅(1975) 『우리옛말본:15세기 국어형태론』 샘문화사
- 허웅(1987) 『국어 때때김법의 변천사』 샘문화사
- 홍사만(1993) 『한·일어대조언어학』 탐출판사
- 홍종선 외(2009) 『국어의 시제, 상, 서법』 박문사

3. 英語の文献(アルファベット順)

- Aoki, Haruo (1986). Evidentials in Japanese. Chafe, Wallace & J. Nichols (eds.), Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology, Norwood, New Jersey: Ablex, pp. 223-238.
- Aikhenvald, A. Y. (2004). Evidentiality. Oxford University Press.
- Bybee, J. L., Pagliuca, W. (1985) Cross-linguistic comparison and the development of grammatical meaning. In J. Fisiak, Historical semantics and historical word-formation. Berlin: Mouton pp. 60-83.
- Evans and Green. (2006) Cognitive Linguistics. An introduction. Edinburgh: Edinburgh university Press
- Fillmore (1968) The Case for Case, in Bach and Harms eds, pp. 1-88.
- Lyons, J. (1977) Semantics, vol. 2. Cambridge University Press.
- Lyons, J. (1982) Deixis and Subjectivity: Loquor, ergo sum? In R. Jarvella & K. Wolfgang (Eds.), Speech, Place, and action. Chichester/New York: John Wiley & Sons Ltd. pp. 101-124.
- Langacker, R. W. (2008) Cognitive Grammar: A Basic Introduction. Oxford University Press
- Palmer F. R. (1979) Modality and the English Modals, London & New York: Longman.
- Palmer, F. R. (1986) Mood and Modality. Cambridge University Press.
- Palmer, F. R. (2001). Mood and modality (2nd ed.) Cambridge: Cambridge University Press.

【資料一覧】

1. 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』(1995)

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』(1995)、新潮社（翻訳作品は除く）日本人作家による作品。
以下、作家名・作品名の準で示す。

芥川龍之介 「羅生門」、赤川次郎 「女社長に乾杯！」 安部公房 「砂の女」、井上靖 「あすなろ物語」、川端康成 「雪国」 夏目漱石 「こころ」、藤原 正彦 「若き数学者のアメリカ」、遠藤周 「沈黙」、渡辺淳一 「花埋み」、大岡昇平 「野火」、開高建 「パニック・神の王様」、米澤 穂信 「満願」、大沢在昌 「灰夜」、井上ひさし 「ブンとフン」、立原正秋 「冬の旅」、三浦綾子 「塩狩峠」、村上春樹 「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーラーメン」、曽野綾子 「夫婦の情景」、高野悦子 「二十歳の原点」、三浦哲郎 「忍ぶ川」、島崎藤村 「破戒」、林芙美子 「放浪記」、吉行淳之介 「砂の上の植物群」、安部公房 「他人の顔」、五木寛之 「風に吹かれて」

2. 【日本語の小説】

西欧精神の探究 著：堀米 庸三
女の決闘 著：遠藤周作
一房の葡萄 著：有島武郎
開運の夜 著：斎藤道三
五体不満足 著：乙武洋匡
鳥頭紀行 著：勝谷誠彦
フロイドを読む 著：岸田 秀
世界 著：伊藤元重
容疑者Xの献身 著：東野 圭吾
落差 著：松本清張
ノルウェイの森(上) 著：村上春樹
ハードライフ 著：大澤 正佳
不思議の国のメラネシア 著：田中淳夫
魔女の結婚 著：谷 瑞恵
西欧精神の探究 著：堀米 庸三
沖縄同時代史 1997 著：新崎 盛暉
三国志英雄妖異伝 著：坂口 和澄
私に啓示された福音 著：マリア・ヴァルトルタ 吉向 キエ(訳)
真実 著：入間 真(訳)
行人 著：夏目漱石
少年 著：長谷川四郎
盆土産 著：三浦哲郎
IQ84 Book 1-3 著：村上春樹
ルージュ 著：柳美里

3. 日韓対訳文献(日本語作品)

다락원(ダラグォン)から出版された日韓対訳文献の中で、本論文が参考した日本人作家による作品。以下、作品名と作家名の準で示す。

日本のむかしばなし 著：斎藤明美
 日本のおとぎばなし 著：新井奈美
 熱帯樹 著：三島由紀夫
 マルゲリータの夜 著：阿刀田高
 最後の従業
 ユーモア傑作選
 セロ引きのゴーシュ 著：宮沢賢治
 港の少女 著：壺井栄
 羅生門 著：芥川龍之介
 銀河鉄道の夜 著：宮沢賢治
 坊ちゃん 著：夏目漱石
 小さな王子 著：尾崎達治
 文学のふるさと 著：坂口安吾
 野菊の墓 著：伊藤左千夫
 女生徒 著：太宰治
 食卓のない家 著：円地文子
 日本の高等学校の教科書選
 近代名作短編小説選
 オーヘンリ傑作選
 蠅 著：横光利一
 文鳥 著：夏目漱石
 太陽と黄金の都
 待っている男 著：阿刀田高
 小学校教科書選 著：小川未明
 日本の神話 著：岡智之
 桜桃 著：太宰治
 ビーの話 著：群ようこ
 和解 著：志賀直哉

4. 【韓国語の作品】

「小説類」

(객) 객주(1981) 著：김주영 창작과 비평사
 (美) 美しい日々 著：村岡花子
 (최) 최후의 경전(2010) 著：김진명
 (경) 경성애사 著：이선미
 (대) 대야망 著：고우영
 (러) 러브레터
 (몽) 몽실언니 著：권장생
 (당진) 당진 김씨 (2001) 著：우애령
 (나) 나의 유럽여행.
 (황) 황만근은 이렇게 말했다
 (피) 피리부는 소년 著：이주홍
 (外) 外村場 紀行
 (고) 고압선 著：조선
 (사) 사람의 아들 著：이문열

(서울) 서울로 가는 길 著: 송효순
 (아) 아들의 허상 著: 田玉柱
 (오) 오낭 著: 김재순
 (새) 새의 선물 著: 은희경
 (푸) 푸른수염의 첫번째 아내 著: 하성란
 (시) 시작과 마지막의 만남 著: 宋榮
 (第3) 第3의 情死 著: 金聖鐘
 (창) 창밖의 사람들 著: 이명분
 (별) 별을 담은 배
 (비) 비트
 (하) 하늘이여 땅이여 (2011) 著: 김진명
 (행) 행복이란 이름의 불행 訳: 김난주

【シナリオ・戯曲】

(만) 만주 著: 김지현 『한일대역 창작 시나리오 선집 (2013)』
 (비) 비밀
 (영) 영화진흥위원회 (2001) 제 15 권, 1997 년도 작품, 집문당
 (붉) 붉은섬 (1991) 著: 장일홍 『붉은 섬』 장일홍 희곡 작품집-, 문학과비평, 서울.
 (한현) 한국현대대표희곡선집2 (1999) 한국예술학회, 월인
 (한문) 한국문화예술진흥원, (1993), 93 한국문학작품선,

【論説文・エッセイ】

(한국) 한국종교연구회 (1990), 종교다시읽기, 청년사
 (500년) 500년후의 미래 (1997) 著: 최명희
 (같이) 같이 걷기 (2011) 규장, 著: 이용규
 (덕) 덕 윤리의 현대적 의의 (2012) 著: 황경식 (2012) 아카넷
 (이화) 이화여자대학교 동창 문인회 (2013) 기억의 정원, 개미, 서울.

5. コーパス

① 日本語

『KOTONOA』: 国立国語研究所 『少納言 KOTONOA 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」』

② 韓国語

문화체육 관광부 (文化体育觀光部), 国立国語院 (2011) 『21세기 세종계획 말뭉치 (21世紀世宗計畫 코퍼스)』

6. 辞書類

『広辞苑 第六版』 岩波書店

『日本語教育大辞典』 (1982) 日本語教育学会編 大修館書店

『日本語百科大事典』 大修館書店 (1988)

『日本語文法大辞典』 明治書院編者 (2001)

『日本語学 キーワード事典』 朝倉書店 (1997)

『新版日本語教育事典』 日本語教育学会 (2006) 大修館書店

『연세국어대사전』 연대언어정보개발연구소 두산동아 (2002)

『표준국어대사전』 국립국어연구원 편 두산동아 (1999)

『카리스트』 <http://morph.kaist.ac.kr/kcp/>

【各章と既発表論文との関係】

第1章

新規執筆

第2章

新規執筆

第3章

新規執筆

第4章

成昊炫(2010) 「だろう」推量用法と韓国語形式の対照 『応用言語学研究』17

成昊炫(投稿中) 「日韓真正推量形式「だろう」と「-ㄹ-」の対照研究－推量意味と用法上の違いを中心に－」 『日本韓国語教育学会』

第5章

成昊炫(2012) 推量モダリティ形式[しそうだ]の考察 －「ようだ」との対比を中心に－
『韓国日語日文学研究』82 巻 1 号 pp. 335-353

成昊炫(2014) 疑似推量形式の日韓対照研究 －「「ようだ」「らしい」と韓国語対応形式を中心に－ 『韓国日語日文学研究』91 巻 1 号 pp. 141-166

第6章 結論と今後の課題

新規執筆

【アンケート用紙】

이 양케이트는 「전문정보에 기초한 추량」에 대한 한국어 양형식 「-겠-」 「-을것이-」의 허용가부의 판정에 관한 조사로, 한국어 모어화자의 직관을 묻는 양케이트입니다. 직관적으로 판단해 주세요. (このアンケートは「伝聞情報に基づいた推量」における韓国語両形式「-겠-」「-을것이-」の許容可否の判定に関する調査であり、韓国語母語話者の内省を聞くアンケートです。直観的に判断してください。)

「アンケート調査の概要」

- ① 応答者数 : 82人 応答者の年齢代 : 20~60代の成人男女
- ② 調査方法 : 韓国語の母語話者82人にアンケート用紙を配って、許容度の判定を被調査者に直観的に応答してもらう方法。
- ③ 応答文の数 : a. 「-겠-」 9 文 b. 「-을것이-」 9 文)
- ④ 許容度判定 : 例文の自然さに対する判定は以下のような印に沿って記入してください。
(「○」は許容可能を「×」は許容不可能を、「?」は共起すると不自然であることを示す)

1. 「-겠-」の用例

- (1) 아까 라디오에서 들은 일기예보에 의하면 오겠어.
(さっき、ラジオから聞いた天気予報によると、明日は雨が降る+gess.)
許容度の判定 : (○) -52 (×) -18 (?) -12
- (2) 의사의 말에 의하면 이번 피부병은 식중독 때문이겠어.
(医者の話によると、今度の皮膚病は食虫堂のためだった+gess.)
(○) - 15 (×) -54 (?) -13
- (3) 소문에 의하면, 우리 나라의 경기는 점점 회복해 가겠어.
(噂話によると、我が国の景気は徐々に回復していく+gess.)
(○) - 57 (×) - 14 (?) - 11
- (4) 타로의 말로는, 하나코가 내일은 결석하겠어.
(太郎の話では、花子が明日は欠席する+gess.)
(○) - 20 (×) - 50 (?) - 12
- (5) 취재 기자의 말로는, 이번에는 한국이 이기겠어.
(取材記者の話では、今度は韓国が勝つ+gess.)
(○) - 53 (×) - 19 (?) - 11
- (6) 전문가한테 들은 말로는, 한국도 언젠가는 큰 지진이 일어나겠어.
(専門家から聞いた話では、韓国もいつか大地震が起こる+gess)
(○) - 52 (×) - 15 (?) - 15
- (7) 내가 들은 소문으로는, 그 회사 곧 망하겠어.
(噂話では、あの会社、もうすぐつぶれる+gess.)
(○) - 26 (×) - 51 (?) - 5
- (8) 떠도는 소문으론, 곧 경제위기가 닥쳐오겠어.
(噂では、もうすぐ経済危機が迫ってくる+gess)
(○) - 61 (×) - 13 (?) - 8
- (9) 동네 소문으로는 밤중에 불량배들을 조심해야 하겠어.

(わが町の噂では、夜中に不良人を注意すべき+gess)

(○) - 40 (×) - 29 (?) - 13

2. 「-을것아-」の用例

(1) 아까 라디오에서 들은 일기예보에 의하면 올거야.

(さっき、ラジオから聞いた天気予報によると、明日は雨が降る+eulgeosi.)

許容度の判定: (○) - 62 (×) - 14 (?) - 6

(2) 의사의 말에 의하면 이번 피부병은 식중독 때문일 거야.

(医者の話によると、今度の皮膚病は食虫堂のためだった+eulgeosi)

(○) - 52 (×) - 18 (?) - 12

(3) 소문에 의하면, 우리 나라의 경기는 점점 회복해 갈거야.

(噂話によると、我が国の景気は徐々に回復していく+eulgeosi.)

(○) - 57 (×) - 14 (?) - 11

(4) 타로의 말로는, 하나코가 내일은 결석할거야.

(太郎の話では、花子が明日は欠席する+eulgeosi.)

(○) - 35 (×) - 36 (?) - 11

(5) 취재 기자의 말로는, 이번에는 한국이 이길거야.

(取材記者の話では、今度は韓国が勝つ+eulgeosi.)

(○) - 46 (×) - 18 (?) - 18

(6) 전문가한테 들은 말로는, 한국도 언젠가는 큰 지진이 일어날 거야.

(専門家から聞いた話では、韓国もいつかは大地震が起こる+eulgeosi.)

(○) - 51 (×) - 17 (?) - 14

(7) 내가 들은 소문으로는, 그 회사 곧 망할거야.

(私が聞いた噂では、あの会社、もうすぐ、つぶれる+eulgeosi)

(○) - 53 (×) - 15 (?) - 14

(8) 떠도는 소문으론, 곧 경제위기가 닥쳐올 거야.

(噂では、もうすぐ経済危機が迫ってくる+eulgeosi)

(○) - 63 (×) - 11 (?) - 8

(9) 동네 소문으로는 밤중에 불량배들을 조심해야 할 거야.

(わが町の噂では、夜中に不良人を注意すべき+eulgeosi)

(○) - 39 (×) - 30 (?) - 13

